

---

# イロナキシ-Discolored death-

松ノ山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イロナキシ - Discolored death -

### 【Nコード】

N1713Y

### 【作者名】

松ノ山

### 【あらすじ】

完全自律兵器「プレデター」によって世界は広く荒廃した。全世界における破壊は総称して「大崩壊」と呼ばれた。

人類は精神を同調させるアンドロイドを造り、機械兵に対抗して一時的な勝利を収めたが、同時に多くの負の産物を生み出した。それから数年後、人類は居住区を形成し再興への道を模索していた。

エリア2に住む少年・美鶴は武装したアンドロイド《騎士》の操者として、生計を立てている。幼馴染である少女・由佳里はそのサポートをしていた。

欺瞞だらけの世界で、いつ壊れるかも知れない日常を送る二人。

少年は守りたいものがあるから戦う。

そんな二人の日常に、影が忍び寄る。

近未来てきな感じで書いてるつもりです。はい

## 人狩りと蠅螂（前書き）

初めに言っておきます。気分転換にこの作品始めました。  
はい。

ヘンな部分が数え切れないくらいあるかと思います。すみません  
としか言えません。生理的に受け付けないわー、って部分もあるか  
もしれないです。多分……。

ではでは、本文どうぞ。

## 人狩りと蠅螂

世界は鈍色の空に覆われていた。大地に凝然として生える高層建築は、どれもこれも半壊していた。ビルの剥き出しにされた鉄筋が肋を連想させる。己を支える柱には亀裂が走り、崩潰寸前で維持されている。

蜘蛛の巣の如く巡らされたアスファルトの路はいたるところで断裂し、その役割を放棄していた。錆びが生じ赤褐色に覆われた自動車が遺棄されて、地平まで続く行列を成している。

寂寞とした街、かつては日本の大都市の一つであった。既にその名は人々の記憶から忘れられ、その周辺の土地も含めて『外部居住区関東地区』と呼称されている。

現在に過去の隆盛した街並みは見られず、荒寥とした廢墟が鎮座していた。

それでも、そんな劣悪な環境に人は生活していた。

彼らは生活の場を追われた浮浪者であった。身に纏う衣類は粗悪なシロモノばかり。裸体を隠すだけの布地を服と呼ぶのなら、まさにそれであろう。

垢に塗れ、見るからに汚臭を放っているようなモノもあれば、擦り切れ引きずるほど解れているモノもあった。

彼らが心底、切望すると言えば新調の服と十分な食事だろう。最低限度以下の生活を強いられた彼らには、これまで救いの手が差し伸べられることがなかった。そしてこれからもないのだろう。その認識が人々の常識となって久しい。

代わりに与えられるのは、夥しい鉛の銃弾や冷酷な刀身であった。

『人狩りだ！！ 逃げるッ』

怒声と絶叫が混濁し、廃墟を徘徊していた人々は思い思いに安泰の場所へと疾走する。

人々の背後からは複数、顔面に鉄製の防護面をした巨漢の人間が迫っていた。高さは二メートルになるだろうか。その手には既に突撃銃が構えられている。

死神の行進とも呼ばれ、この廃墟の人間の怨恨の対象の存在。いや、世界中から見てもその存在は嫌悪されていた。

彼らの目的は資源採掘の労働力の蒐集であり、そのためにもその人道から外れた行為も正当化されてしまっていた。

突如、反対から乾いた射撃音が響いた。男達が拳銃の照準を防護面の人間に定めていた。

「くそっ！！ 女子供を優先して逃がすんだ！！ 男手をもっと回せッ」

矢継ぎ早に銃口が火を噴き、放たれた銃弾が標的に見事到達する。不可解にも撃たれた人物は何一つ動ぜず、被弾部を押さえることをせず、手にしたアサルトライフルの引金を引いた。フルオート射撃の雨が男達の存在を掻き消し、壁や地面に赤黒い滲みを残す。

「わあああああああああッ」

一気に瓦解する防衛前線を蹂躪するように銃弾が浴びせられる。撃たれても止まらない死の行進は続いていく。

半壊したビルの頂上で、そんな光景を眼下に見下ろす影像があった。

『どうすんだよ。もう始まっちゃったぞ』

『じゃ急いで！！ 依頼はデッドラインの殲滅及び人々の援護だから。なるべく迅速に行動してよ。あまり悠長にやっていると報酬が減らされるから』

通信越しの会話。少年と少女の声が飛び交う。

『了解。んじゃ、一掃してきますか』

『ちゃんと完遂してよね。前みたいに取りこぼすなんて事がないようにね』

『了解』

少年——そのせ みつる三ノ瀬美鶴は眸を閉じ、大きく深呼吸をした。いや、実際には肉体はこの場にはなかった。あるのは金属の骨格をした、人に似た背丈の無機質な機械だった。アントロイド

騎士——精神のみをそれに設けられた擬似脳に移し、操縦する武ア装機械人形。アンドロイド

美鶴はその操者の一人であつた。アヴィアター

原動機の駆動音が鳴り、美鶴の騎士が稼動を始める。プライムモーター

まるで螭螂を想起させる流麗な形姿。フォルム目を引くのが右腕の肱部分ひじから先、そこに巨大な折りたたみ刃が収まっている。それがこの美鶴専用騎、《鎌錐》かまきりの主兵装、大刀兼大鎌の武器——デスサイズである。

さすがに減給は痛い。美鶴は殺戮を繰り返す人影を視認する。この場所は相手からは死角になっている。手早く相手の数を把握する。

『<sup>ヘヴィアーマー</sup>重武装兵がいるから注意して、騎士の損傷は最小限に止めてよ』

「分かってるよ。てかいちいち話しかけんなよ、由佳里。集中が途切れるだろ」

『<sup>サポーター</sup>なによ、私は君の補助者だよ。逐一、リアルタイムに指示を出すから』

少女——<sup>はしろ ゆかり</sup>羽城由佳里の澄んだ声が脳裏に響く。騎士との精神接続状態時には、操者の体感世界は生身の肉体時と大差ない。

変わるとすれば、敵を捕捉した時のカーソルが視界に表示されることと、熱や冷気を感じないことだろう。不思議にも衝撃などの痛覚は感じる事が出来る。

「んじゃ、任務を始める」

『目標の駆逐及び、人々の援護だからね』

ここで救済といえないのが、歯がゆく思える。今ここで死神の手から救ったとしても、その後に幸せはないのだ。その場しのぎの行動。

だが、それも依頼された任務である以上、私情を挟まず遂行しなければならぬ。

美鶴は一気に跳躍した——自分の肉体を動かすように自然な動作で、鎌錐が宙に躍り出る。美鶴の人間としての肉体は、遙か数十キロ離れた日本の都市の老朽化し寂れたアパートの一室で眠っている。その一室には由佳里が付き添っている。

幼馴染であり、操者と補助者の関係。戦うもの、見守るものの関係である。

眼下に迫る人影に向け、右腕を後ろに引いた。刃が収納されたデスサイズは強力な打撃武器にもなる。風切り音かざきを伴って突き出す、美鶴はデッドラインの一人を地面に叩き潰した。地面が陥没し、視界いっぱい金属片が飛び散る。人間のようであったそれは一体の機械人形アンドロイドであった。

『西の凡庸騎士ね。発声機能も無い粗悪品ばかりで性能面では圧勝ね。ただ銃器には気をつけてよ。相手はやっかいなシロモノを持ち込んでいるみたい。あつ、後ろッ』

由佳里は、リアルタイムで周辺の解析やルート検索などを行う。騎士頭部に備えられたセンサーより随時送信される情報がそれを可能にしている。

美鶴は上半身を捻り、右腕を振った。

鈍い衝撃を伴って、背後の騎士が弾き飛び、自動車のフロントガラスを突き破る。そのまま沈黙。

殲滅依頼は楽だ、難しいことは考えず破壊すればいい。

カーソルが自動探知して敵の位置を知らせる。大口徑機関銃を構える騎士がこちらに照準をあわせていた。すかさず跳躍し、主兵装を展開させる。

黒光りする乱れ刃の刃紋が露になる。大鎌——デスサイズ。完全展開時には一振りの大剣にも変貌する。

死神の鎌で死神を刈るのか、美鶴は可笑しく思った。

銃口炎が瞬き、ライフル弾が吐き出される。その上を跳んで、落下と同時に横薙ぎの一撃を放った。

敵の胴体を裁断し、火花を散らす。地面に転がった騎士の赤い双

眸が、睨んだ錯覚を覚えて踏み潰す。

そうして周囲を見回せば、やけに大きな人影シルエットがあった。距離計レンジファインダーが知らせたのは一五〇メートル。

——あれか、厄介なシロモロは。

『カノン砲よ。あんなものを騎士に装備させるなんて……。完全に人の捕縛目的の利用じゃないね』

美鶴も由佳里に同意見だった。さすがにあれは戦争に向かう戦車さながらだ。

右肩に装備されたカノン砲の砲身から撃ち出されるのは、榴弾を始めとした遠距離射撃用弾であろう。周辺に人がいることを考慮すれば、撃たせるわけにはいかない。

背部の加速機ブースターを起動させる。同時に冷却装置ラジエーターが急稼動を始める。

『あんまり、加速すると熱暴走オーバーヒートするよ』

「下手打たないさ。一瞬で終わらせる」

『うん、分かった』

由佳里との会話を簡便に済ませ、美鶴は敵を見据える。前に踏み込むと同時に、背中に四枚の光翅が生える。そして世界の色が混濁する異様な速度での加速で跳んだ。

擦過しながら距離を詰める。

『注意して、来るよッ』

前方で閃光が走った。美鶴は悪態をついてデスサイズ振り上げる。転瞬、その刀身を通した榴弾が寸分違わず二つに裁断される。それに続く爆発。

「クソヤロ、撃ちやがったッ」

背後からの爆風に押し飛ばされ、体勢を崩しかけながら残り距離を跳ぶ。

残り十メートル。敵が再照準するのが分かった。力任せにデスサイスを振り下ろした。

視線の先で敵騎士の右肩部分が断裂され、その背後のビルのコンクリートが轟音と共に破砕した。デスサイスの一撃が斬撃を飛ばしてみせた。《鎌錐》主兵装、特有機構『引き剥がすもの』<sup>デイスコネクター</sup>、射程距離を有した剣閃である。

視線の先でカノン砲が完全に分離し、重厚な音を響かせ落下する。武器の無い騎士など、ただのマネキン人形に過ぎない。

加速を伴ってそのままか《鎌錐》の逆間接の脚部で敵を踏み倒す——つもりだった。下手を打った。

ものの見事にバランスを崩し、美鶴は相手ごと地面に突っ伏した。

「やつちまった……」

慌てて調べる。損傷軽微。何とかなるだろう。

『……何ともならないけど』

由佳里が心を読んだかの如き応答をする。通信越しでもその表情が強張ったのが分かる。

『何華麗に転倒してんのッ!? あとで修理するの私なんだからね  
!!! 君の寝顔に油性の髭を生やすよ』

どんな嫌がらせだよ。美鶴は呻いた。

由佳里が不機嫌になる訳は重々承知している。彼女はサポーターと同時に、整備士としても尽力してくれている。故に馬鹿な行動で傷つけられることに憤りを覚える性格らしい。<sup>たち</sup>

壊すなら格好良く、度派手にやるのを所望している。こちらとしては度派手に破壊されたくも、したくもないのだが。

「悪かった、次は気をつけるホントにゴメン」

『ペンキにするよ?』

「やめろ!! かぶれるだろッ」

人が仕事してる間に、人の身体に何するつもりだ。

そうこうする間に視界に新たにカーソルが表示され、敵の捕捉を伝える。

やれやれ、ザコばかりだが数がいる。

美鶴は気持ちを切り替え、デスサイズを構えた。もうもうと立ち昇る砂埃、漂う硝煙。その中に機影を濃く、浮かび上がらせていた。

——二〇二五年、世界は戦争によって荒廃し、かつての国家や政府は消滅した。世界の再生計画は企業連合体の分裂により途絶され、世界は今なおその傷跡を残したままにしている。

二〇三四年、自社の利潤を優先した巨大企業は、その発展のために世界中から労働力を掻き集め、終わらない抗争を激化させていた。<sup>デッドゾーン</sup>外部居住区、戦争の爪痕を色濃く残す地域。助けなど望めるはずのない毎日が延々と繰り返される。

その場所は今現在も、戦場に取り残されている。

『終わった。依頼主に報告頼む』  
クライアント

『了解。お疲れ様。五時のタイムサービスの前に帰投してね』

『は？ 俺にお遣い頼むのかよ！？』

『いや、荷物持ちだけど。んじゃ一旦通信切るよ。じゃね』

その言葉で不通を知らせる表示が現れる。

——はあ、随分な扱いだな。

美鶴は憂鬱に曇った空を見上げた。足下にはバラされた騎士が機能を停止している。

見渡せば逃げ惑っていた人々がこちらを窺うようにしている。

子供が数人、手を大きく振りかざしていた。

『ありがとうございますッ』『助かりましたッ』そんな声がいたるところから上がるも、大人達がそれを制する。

『さつさと失せろッ』『俺達を救ってくれッ』『俺達が何をしたっていうんだッ』

彼らは悪くない。残念ながら自分には彼らを本当の意味で助けることなど出来はしない。自己嫌悪に身が振れそうだ。よじ

「俺もまた、救われぬ者だよ」

美鶴は誰にも聞こえないように、由佳里に聞こえないように、そう呟いた。

二〇二五年、その日を人々は忘れることが出来ない。

その年、その時、世界は終わった。『大崩壊』<sup>ブレイクダウン</sup> そう総称される世界戦争が起きた。

二〇三四年、世界は未だ争いが絶えない。  
人々は、欺瞞で溢れる世界に生かされている。

## 夕方五時のタイムサービスと料理

外部居住区の廃墟を進めば、高さ五〇〇メートルを越えるコンクリートの隔離壁が出現する。

旧東京・旧埼玉・旧横浜・旧千葉の四県に跨る地域、首都圏だ。またが エリア2

大崩壊の後、世界中に再形成された可住地域。日本では旧北海道、

旧東京、旧愛知、旧大阪の地域を中心に北州圏、首都圏、中京圏、エリア1 エリア2 エリア3

近畿圏があり、厳格分轄がなされ境界線として隔離壁が建てられた。エリア4

その存在理由は内陸側からの侵入を防ぐことだった。

それぞれは巨大企業が統治しており、多くはその企業の総裁がエリアの統治者として君臨している。

美鶴はその壁の向こうで、高級官職に付く人間に対して憤りを感じ、壁を睨んだ。

彼らは人々の安寧の生活よりも自身の利益を優先した利己主義者だ。エリア内の人間は大崩壊前の生活を取り戻しつつあるが、外部エリアの人間に対しての救済策は講じてこなかった。

いや、確かあったはずだ。だが、結局は彼らの傲慢さが仇となり、摩擦を生じさせ途絶された。

隔離壁を出入りするには馬鹿高い関税が課せられている。どこのエリアでも同じである。

そのために自分のように騎士を用いて稼ぎを行う連中は、非認可通路を開拓または提供されることでその手の出費を押さえていた。

今回の依頼では依頼主が用意してくれた偽造証明書によって、我が物顔で出させてもらった。

警備の騎士の落ち込みようが目につく。彼らは日頃の鬱憤を非合法者に対して向ける。入り口の一つであった門扉方式通路の周囲には、ボロボロの衣類で蹲ったままの人や原型を止めない騎士が無造作にされていた。

さすがにあんなことにはなりたくないな、美鶴はそう零した。

何事もなく門での入圏審査を通過<sup>バス</sup>し、美鶴は隔離壁の中に足を踏み入れた。いきなり出迎えてくれるのは侘しい景色。首都圏<sup>エリア2</sup>の外周には低層階級の人々が生活をしている。

綺麗に敷設された舗装路。道路の脇に並ぶ民家はどれも同じに見える賃貸住宅。

フロントガラスの碎け散った車、錆び付いた金属片、弾痕を残す家の塀。

一〇年近く経った今なお、大崩壊の痕跡が残される地域。

それでも外部居住区の人間と比較されれば、天と地であろう。少なくとも彼らには、非情な仕打ちはないのだから。

美鶴は視線を外周区の奥、エリア中心に向ける。《鎌錐》のカメラアイを通して、その眼に映るのは天を目指すかの如く、生やされた摩天楼の群れ。欲望の棲家である。

美鶴は嘆息して、《鎌錐》の足裏で荒れた大地を蹴り上げた。次々と変わる景色。奥に向かえば向かうほどにその街並みは時代を進む。

既に周囲には整った閑静な住宅街の街並み。我が麗しのボロアパ―トももうすぐだ、美鶴は道を急いだ。

『その騎士！！ 止まりなさい』

ふいな警告に《鎌錐》を踏みとどまらせた。

——くそつ、職質かよ。

視線の先では、仏頂面でひどく丸っこい顔の刑事とそれに同伴する騎士がいた。

「よお、美鶴じゃねえか。今仕事帰りかあゝ精が出るな」

「お久しぶり。津野田さんは見回りなんですね」

「おうよ。てえめえとは違ってこっちは公務員だからな。そろそろ休みが欲しいぜ」

自身で肩を解し、首を鳴らす警察官がげんなりとした表情をみせる。

津野田昌親、首都圏内の治安維持などを目指す治安・法執行機関の捜査課に属す公務員。何かと縁があり親しい仲である。

仕事の関係で、外部の状況などを根掘り葉掘り尋ねてくるのには窮するが……。

『ただいま、五時十分前になりました。タイムサービスが始まりますよ』

突如、そんな言葉が耳元で響いた。

美鶴は視界の不通表示が消えていることを確認して、口を開いた。

「分かった！！ もう行くからッ」

『逝つてらっしゃい』

「悪意が込められた気がすんのは気のせいかな？」

とりあえず由佳里が機嫌を損ねかけていることははっきりした。急いで戻ったほうがいいだろう。

「すみません。津野田さん。由佳里に急かされてるんでいいですか？」

「由佳里ちゃんはいいい子だよなあゝ。別嬪さんだしな。待たせて悪いから行けッ」

「あざっす」

美鶴は津野田と付き添いの騎士の前を跳んで、過ぎ去る。  
後に残された津野田の視線はその後ろ姿を追った。ふいに声がかかる。

『彼とは友人みたいですね』

同伴した騎士から発せられていた。白黒のパトカー色に塗装された形姿。フォーム警察専用の騎士であつた。

「ああ、あいつの事は小学生の頃から知ってる。悲しいほどに不幸な子供さ」ガキ

沈黙する騎士に対して津野田は破顔させて、その硬質な背中を叩いた。

「シケてんと不幸になるからな、後で一杯やるか」

「それじゃ、津野田さんの奢りで」

「おめえもしたたかになつたなあ〜」

津野田は一瞬だけ、その視線をもう見えない機影に向け、反対に歩き出した。

「ゴーストルインツ」

美鶴は急停止ブレーキをかけて止まった。

目の前には色が剥離し黒ずみ、階段は赤褐色に錆びついたオンボロアパート、《白夢荘》。

少なくとも見た目は白い夢を提供してはくれなさそうだ。

美鶴は階段に足をかけず、一気に二階へと跳躍する。《鎌錐》の重さで錆びた階段を踏もうものなら、数秒ともたずに階段が崩壊するだろう。

慣れた動作で二階通路に躍り出ると自室のドアへと走った。傍から見れば滑稽であるだろう。

騎士がアパート二階で全力疾走など滅多に見られる光景じゃない。見ることが出来た者は幸運の持ち主だ。いや、もう幸運を使い果たしたな、ざまーみる。

左手でドアノブを捻る。ガチャリという金属音が鳴り扉が開けば、見慣れた玄関口と奥に続く八畳一間の我が茅屋<sup>ぼうおく</sup>。

「遅いよッ」

叱責が飛ぶ。八畳の部屋の四分の一、二畳分を占める戦闘機の操縦席の如きカプセル容器の隣で、由佳里が腰に手を当て人差し指を向けていた。

——人に指を向けちゃいけないんだぞ。

これ以上、由佳里の機嫌を損ねることは憚<sup>はばか</sup>られたので自重する。

「すぐに逆転送<sup>リバース</sup>してくれ」

代わりにそう言っつて、美鶴はカプセル容器の隣に並んだ。転送装置であるその中には美鶴自身の人間としての肉体が納まっている。

天井から吊り下げられるようにして、幾重にも束ねられた高圧電力ケーブルが延ばされ、この容器と接続されている。由佳里はその中からプラグイン方式ケーブルを見つけ出し、《鎌錐》の首筋の接続部に差し込んだ。そして片手にノートパソコンを持ち、肉体と騎士との精神認証をさせる。

アウイアター

操者と騎士の間での精神移動は安全面からケーブルを介して直接接続されなければならない。非常時、たとえば大破した場合でも緊急機能における精神<sup>リバイバル</sup>回帰によって元の肉体に戻ることは可能とされる。

ただし、その場合は酷い船酔いのような症状、吐き気、頭痛、平衡感覚障害などが生じる。最悪の場合には精神異常、人格の剥離、記憶障害などを引き起こす可能性がある。

つまり騎士の破壊は相手に対して、相応の傷害を与えることになる。それでも美鶴にはそれを躊躇する理由にはならない。

「認証完了。<sup>リバース</sup>逆転送開始、三、二、一」

カウントダウンと共に美鶴の視界は暗転する。徐々に不鮮明な景色しか映らなくなる。

何も見えない、何も聞こえない世界。一瞬だけ虚無になったかのような錯覚を覚える。

すぐに光と音は戻ってきた。

「お疲れさま」

由佳里が容器を開封する。プシューという気の抜ける音が鳴る。

視界を覆う金属製のバイザーを外し、美鶴は眩しそうに目を開き、二度三度しばいた。

やはり自分自身の肉体の方がいい。

美鶴は大きく伸びをした。身体が小気味な音を立てて鳴る。

「よしッ、ただいま!!」

「接続時間よしッ、タイムサービスが始まるよ!! 行くよ」

「ッ!! うわッ、そうだった。しかも荷物持ちとか何だよ、俺は

下僕かッ」

「違うの?」

——おいッ……。

頭痛がしてこめかみを押さえる。嘆息して転送装置から出る。  
そして改めて目の前の少女を見た。

羽城由佳里。

彼女は街中を歩けば人目を引くほど、美麗な容貌の女の子だ。

容姿端麗、その言葉が合致している。

細い眉、大きな眸、<sup>ひとみ</sup>短めに整えられたクセのない明るい暖かな色の髪で、身体のラインは女性らしい際立った曲線をしている。

今日はデニムパンツにベージュの<sup>ジャンプスuits</sup>トレンチコートといった出で立ちだった。いつもは黒の純色の作業服が学生服を着ているために私服姿はなかなか拝見できない。

他に挙げるとすれば時折胸の大きさを自慢している、同性異性に関わらずだ。

美鶴は重量感ある溜め息を吐き、眉を暗くした。対して自分はどうだ。

目にかかる栗色の髪、小顔、身長一六五センチ。

他人に言わせれば、随分と端正な容姿らしい。そして……とても可愛いらしいと。

ちょっと待て、おかしくないか。自分は男だぞ。可愛いなんて言葉が合致しないでもいい。

美鶴は不幸そうに天を仰いで嘆息した。

「なんか間違ってるよ……」

これは余談であるが、美鶴には中学校時代の卒業アルバムで『弟にしたい男子』のNo. 1に輝いた黒歴史がある。それも卒業生だけではなく、学年全体選挙であった。

そこで後輩達からも票数を一身に集め、ぶっちぎりの頂点に立った。

その内訳は全体五六三票の実に四九六票、九割の投票率であった。卒業して二年経った今も学校の伝説として語り継がれている。

「もう、溜め息ばかりだと幸せが逃げるよ」

由佳里が笑って何かを差し出した。

彼女の手にはコンビニでよく見かける棒付きキャンデー。商名は『ペロツキー』。

何とも愛らしい名前である。

美鶴は感謝を口にして受け取ると、包装紙を取り除いて露わになった茶色い飴玉を口に含んだ。

『マツズいなコレツ!!』

途端に吐き出して悶絶した。

慌てて包装紙を拾って確認すると、カエルに近似した可愛いキャラクターの足下に並ぶ死の呪文。

『納豆チヨコレートバナラクリームカスタード味』

「何で最初に納豆をチョイスしたんだよ!!」

これを開発した製菓会社の社員は異星人か、味覚障害者に間違いない。

「奇抜過ぎんだろ。時代を先駆けしてもこれは有り得ない」

しかめつつ由佳里を一瞥する。何故この味を寄越したのだ。視線の先では彼女は平然とキャンデーを咀嚼していた。もしか味覚障害なのかと心配して、捨てられた包装紙を恐る恐る覗いた。

『チョコバナニラ味』

「由佳里、お前腹黒いな……」

「何のことだか分からないなあ。ほら、行くよ」

白い歯を覗かせて由佳里は玄関口へと向かう。後姿に揺れる髪を目で追いながら、美鶴もその後を追った。

外に出れば、騎士では感じられなかった冷気が肌を舐める。

今は曆上、秋なのだが既に冬の冷気を纏っている。

美鶴は翠のパーカーにロングカーゴ姿である。美鶴は右手をポケットに突っ込み、階段を下る。

一歩ごとに軋む音が響く。毎度毎度、下に抜けないか心配になる。

「そついや、オヤっさんは？」

先を歩く由佳里に問いを發した。

「竹ちゃん、委員会有るから、七時過ぎに帰るって」

「ああ、そうなん。分かった」

由佳里に竹ちゃんと呼ばれる人物は、美鶴の整備士である齡五〇を越えるおっさんだ。

たけやま ぶんぞう  
名は竹山文蔵。

顔の造形がいかつい上に、体躯ががっしりしている。

騎士取扱組合に参加しており、騎士の整備士としてもそこそこの名が知られている。

週三のペースで委員会に出向してる。

美鶴の住むアパート《白夢荘》の大家でもある。茶羽織を常に着ていた。

「ほーら、急いでよ」  
「はいはい」

美鶴は駆け足になった由佳里を見失わぬように走り出す。

雲の切れ間から太陽が覗いた。

茜色に染まりだした世界は、幻想的というよりも血に濡れて見えた。

隔離壁に囲まれた日常。人々は外の過酷さを忘れかけている。  
創られた平和はいつまでも続きはしない。

## 過去と現在と野菜炒め（前書き）

美鶴がアヴィアターになった時の年齢を変更。

## 過去と現在と野菜炒め

「大収穫♪ だいぶ安く買えたね。おまけもいっぱい付いたし」

由佳里が嬉々としながら、軽快な足取りで通りを進む。白い吐息が淡く消えていく。

すっかり日の落ちた首都圏<sup>エリア2</sup>。

遠くを見れば航空誘導灯が隔離壁<sup>あか</sup>を朱く縁取っている。

「色気でおじさん口説いただけだろッ」

宣言どおり戦利品を両手に持たされた美鶴は悪態をついた。

「いいじゃん。君も安く買えたんだからさ」

「お前のせいで俺は筋骨隆々な禿頭のおじさん達から敵視されてたんだぞッ」

無言の顔が由佳里に近づくなと示していたのだ。

由佳里が首を傾げ、口元に人差し指を当てた。

「ええー、別に好意を抱いてくれる人もいたじゃん」

「あんな兵<sup>つわもの</sup>は好意の対象外だ！！俺を冥府魔道<sup>いざな</sup>に誘<sup>いざな</sup>つなよ！！」

美鶴は呻いて星の見えない夜空を見上げた。

——あのひよろ長おじさんはゲイバーに入り浸っていてもらいたい。いつそ日の光を見るなッ！！

げんなりする美鶴とは対照的に、由佳里は心地よい笑い声をたてる。

その笑顔に目を奪われそうになり、美鶴は慌てて余所に視線を向けた。

由佳里には笑顔が似合っている。それを自分は失わせたりはしないだろうか。

そんな疑念が浮かんだのを美鶴は緩く頭を振って忘れようとした。たわいのない談笑を続けて二人はアパートに辿り着いた。

「さてさて、今晚はどうしようかな」

軋む階段を駆け上がって、由佳里が合鍵でアパートの色褪せた朱色のドアを開ける。

「お、ありがとう」

由佳里がドアを押さえてくれているうちに、その横を通って美鶴は部屋に入る。

冷え切った部屋の空気に身を震わしつつそのまま、日に焼けた八畳部屋の片隅に鎮座された卓袱台ちゃぶだいの上に二つのビニール袋を載せる。そうして背骨を反らせばポキッ、ポキッと軽快な音が鳴る。

「んじゃ、由佳里の分はこっちな。気をつけて帰れよ」

振り返って見れば無人の玄関へと続く通路。

疑問符が浮かんだ美鶴の背後からふいに声が上がった。

「今日の晩御飯は何だろな」。楽しみだなあ」

「……………作んねえぞ」

「晩御飯、何か作ってよお。わたしの食材使っていいから」

視線を卓袱台に戻せば、行儀良く正座する由佳里がそこにいた。コートを脱いで、長袖のカットソー姿になっていた。

胸を寄せてフェロモンを放出している。

美鶴はそれを極力見ないように努めて、玄関口を指差した。

「ここはお前の家じゃねえ。マンションにか・え・れッ」  
サポーター

「補助者を不当に扱っていいのかなあ？ 《鎌錐》にバニーガールの格好させるよ」

騎士にバニーガールとは何とも背德的過ぎはしないだろうか。

そんな格好で街中に出れば、確実に不審者または欲求不満な変態だ。

美鶴はパーカーの袖から覗く左手で拳を握り締め、齒軋りして、言葉を紡いだ。

「……ご要望は何でございましょうかッ」

「野菜炒めをお願いします」

由佳里は深々とお辞儀をして申し上げた。

美鶴は吐息を漏らして、意外に簡単などが来たことに拍子抜けしながらも了承した。

別に自分自身、料理好きを自称しているだけあって人に腕を振舞うことは好きだ。

ただ由佳里に対しては素直になりたくはないという意地があったりなかったり。

美鶴は水色のエプロンを付け、自分自身の買い物袋からもやし一袋を持ち出す。炊飯器に電源を入れ、米を炊く。

「あれ、自分の使っちゃうの？」

「感謝しろよ」

由佳里は微笑を浮かべて頷いた。そんな動作に扇情的さを感じてしまうのは末期症状か。

「コタツないの、転送装置邪魔だな。狭いなあ。」  
「狭くて悪かったな……」

——確か冷蔵庫にキャベツと人参があつたな。  
冷蔵庫の一番下段を開けて、新聞紙に包まった塊と明るいオレンジの人参を取り出す。

「あとは肉と、ニンニクってところか」

使い込まれたであろう年季ある台所で料理の準備を整えると、ドアが何者かによって開けられた。

「うー寒い。帰ったぞい。なんだ、美鶴もおるのか？」

ここは俺の部屋だ、と叫びたいのを堪える。  
どうやら文蔵が帰って来たらしかった。  
時計を見れば一八時四五分。

美鶴の視界の隅で、角ばった白髪交じり頭にエラの張った顔貌の老人が姿を現し、由佳里と同じようにして席に着く。そうして懷より日本酒、一斗瓶を取り出した。

「おい、何かつまみはないのか？」  
「俺は未成年だッ！！ 自分の部屋から持って来いよ」

文蔵はこの大家であり、騎士の整備士であり、美鶴のお隣さんであつた。

三人も入るだけで非常に狭苦しくなった部屋。

既に部屋の四分の一近くを転送装置に占拠されているので、始めからほとんど人が寄せ集まれる空間はないのだ。

美鶴は後ろ髪を掻き耑つて、料理に意識を集中する。

もやしを茹で、キャベツは雑把に切り、人参は短冊切りにしている。

野菜炒めだけは寂しいので味噌汁もメニューに加える。

気付けば鼻歌を口ずさみながら中華鍋を操っていた。出来た野菜炒めを菜箸で三つの皿によそる。

味噌汁もお碗わんに分けて、文蔵のために冷蔵庫より沢庵たくあんと壺漬けを取り出す。

「はい、どうぞ」

湯気の立ち上る料理を卓袱台に載せて、美鶴も席に着いた。

そうして浮かぶ疑問。何が悲しくって、三人集まって部屋の隅で卓袱台を囲ってなきやいけないんだろうか。

「家政婦さながらだな。儂にも一人ほしいな」

文蔵が顎に手を当てて独り言ちる。

「お持ち帰りしちやえば？」

由佳里がそれに答えた。文蔵はいい考えだと言いたげに手を叩く。

「そうだな。うむ、そうするか」

「断固拒否させてくれッ。てか早く喰えよ」

華やぐ場に久しぶりに賑やかな食事だなと美鶴は思った。

「やっぱり、君の腕は確かだね。私じゃこうはいかないよ」

由佳里が機械的に箸を動かして、野菜炒めを口に運ぶ。

「喋りながら喰うなよ……」

「そうだ、おい美鶴。リモコンはどこだ。ニュースを見なければ」

「ああ、ここ。卓袱台の下」

美鶴は取ったリモコンの電源ボタンを押して、テレビの電源をつける。

人の声が漏れ出すと共に映像が映し出される。キャスターが険しい表情で報道していた。

『伊集院総裁いじゅうこうざいと設楽国家主席しやうしとの会談が来月行われることが決まりました。そこで日本エリアの外部居住区の難民への救済策及び外部環境の改善策が話し合われることが焦点となっています。この会談で一つの復興の兆しが見えるのか、人々の期待が募っています。それでこの会談の――』

「うむ。クロツカと西施せいしの両総裁が会談を行うのか。だが内容あるものになるだろうか。儼げんには形式ばったものにしか見えんな。市民の疑惑を静めるための布石にしか映らん」

文蔵が一杯やりながら、テレビの画面を凝視する。眉はひそめられ、いかがわしげな表情を浮かべている。

美鶴は興味の薄い視線をニュースに向けて、味噌汁すずを啜すすった。

クロヅカ——首都圏《エリア2》において最大規模を誇る企業。家電から騎士開発など多岐に渡った企業運営がなされている。

質実剛健という風土をもっており、作られる騎士は無骨で重厚なものが主流。大崩壊前からの古参である。

また傘下には重工業、軽工業、建設、航空、コンピュータ関係の数多のグループ企業を抱えている。この旧日本地域においてトップに位置する企業と聞かれれば、クロヅカの名が真っ先に挙がるだろう。

対して西施技研産業、一般には単に西施と呼ばれるが、こちらは近畿圏《エリア4》において頂点に君臨する企業だ。大崩壊後に勢力を拡大した新興企業で、エネルギー関係、軍事機器、生体工業系の産業においてトップシェアを誇る。騎士の製造も行っており、ビジュアル面の重視されたものが目立つ。

この両企業の代表がそれぞれのエリアを統治しているため、今回の会談での成果は注目されることは必須だろう。ただ、これをよく思わない連中も多くいることだろう。

美鶴は今日、散々破壊した死神の行進の騎士を思い返した。あれは中京圏エリア3でよく見られる型式であった。企業間でしのぎが削られる現在では、資源確保のための労働力が最も必要とされている。非人道的なことまでして各企業が欲するのがマグネシウム合金、

《パンドラ》だ。

従来の合金よりも軽く、丈夫で衝撃吸収にも優れている。

最近の工業製品にはほとんど原料として使用されており、マグネシウム資源の確保がここ最近激しく争われている。

もちろん騎士の素材にも使われている。

「食べないのなら君の分も貰っちゃうよ。」

『次のニュースです。騎士犯罪の増加に伴い、操者検定組合総連合アヴィアター会は操者採用試験の見直しをする方針を固めました。これに伴い各世界エリアでの現操者の資格所持者は再試験を受ける見通しとなっています』

——メンドくさッ。犯罪増加してんのかよ。ツたく、傍迷惑な話だ。アンドロイド技術は当初、崩壊した世界の復興のために開発された。隔離壁の建造や各エリアの再建はそれらのおかげだ。その後医療現場、身体の不自由な人々のためにも開発が進んだ。残念なことに、企業間の競争が表面化し、企業同士の抗争、利益確保として汎用性と機動性が向上し、武装されたアンドロイド——騎士が生まれた。

美鶴は頬を引きつらせつつも、画面から目を離さなかった。

幸いなことに操者アヴィアターになれるのは、誰しもがという訳ではない。適正試験を受け、筆記試験を受け、実技試験という過程プロセスを経て資格を得られる。

大抵の人は適正試験段階で落とされる。理由は接続酔いと呼ばれる症状だ。

一種の船酔いに似た吐き気や頭痛などを催もよおすもので、擬似脳への精神転送時に起こる。

それと適正試験を受けられるのは満一八歳の青年だ。性別は問わず、健康体である者ならば受けることが出来る。

美鶴は現在一七歳。美鶴の場合、アヴィアターとなったのは例外中の例外、八歳の時であった。

その時、彼の世界は黒く染まった。何もかもが歪よこんでしまった。全てを壊され、全てを失った。

「はあ、ほんとメンドい……………ッておい由佳里。なに人の分まで喰くってんだよッ」

「ほいふいふあったたら（おいしかったから）」

「理由になつてねえ！！」

美鶴は卓袱台を叩いて声を張った。由佳里は今のが解読出来たことに驚愕したらしかった。

「あいかわらず仲がいいな二人とも。儂の入る余地はないな」

文蔵はかわらず一人、猪口ちぶくを片手に漬物をつまみに酒を楽しんでいる。

——入る気ねえーじゃねえか。

美鶴は頬を掻いて、残された野菜炒めを献上した。

## 騎士と姫と赤頭巾（前書き）

かっこいい文章って憧れます。自分には無理ですけど。はい。

## 騎士と姫と赤頭巾

「ごちそうさまでした♪」

「ごちそうさん」

「……ごちそうさま」

三人揃ってお辞儀をした。卓袱台の上に置かれた食器はどれも空になっていた。

料理を作った美鶴としては、清々しい気持ちになる。

真っ先に立ち上がったのは由佳里で、いそいそと食器を運び始めた。

「由佳里、俺が洗うぞ」

「いいって、いいって、君にはご馳走してもらったからね。これくらいしなきゃ」

由佳里は逃げるようにして台所に向かった。

美鶴は浮かせた腰をまた落として、胡坐あぐらをかいた。

横を見れば文蔵が何かものいいたげな表情をしている。

「何だよ、オヤっさん」

「いやなに、由佳里とはあいかわらずだなと思っつてな。取り戻すつもりはないのか？ あやつがお前さんを『君』としか呼ばなくなつて二年近くだろう。そろそろほとぼりは冷めただろ」

文蔵が肘の上に頬を載せて、由佳里に聞こえぬ声で言った。

「オヤっさんが人の心配するなんて珍しいな。明日はノアの大洪水でも起こるかな」

「バーロオー、僕も人だ。心配する感情は持ち合わせとる」

文蔵は眉間に皺を刻んで身を乗り出してきた。酒の酔いでも回りだしただろうか。

「分かつてるさ。別に名前を呼ばなくても困らねえしな。この俺がやらかした罪への罰だと思っておくさ」

文蔵を押し止めて、美鶴は壁に体重を預けてもたれかかった。

由佳里が昔は名前で呼んでくれたのは事実だ。それがあある日を境に失われた日常と化した。

暗澹<sup>あんたん</sup>たる雰囲気<sup>あんたい</sup>が立ち込めた気がして、美鶴は話題を振った。

「そついやさあ、この転送装置つて縮小化できねえの？ だいぶさ……邪魔なんだよね。部屋<sup>へや</sup>の四分の一も持つてかれてんだよ」

「無理だな。各組合でもそのことが議題に上がっておるが、技術開発が進んでおらん。今のところは騎士との安全な接続のためには必要なものだ」

文蔵は苦虫を噛み殺した顔をして、日本酒を一杯煽った。

やはりまだ難しいようだ。

現在の転送装置の大きさの理由は、精神転送の安全強化だと知らされている。また騎士のエネルギー補給も理由に挙がるだろうか。

騎士に搭載されているバッテリーは、大抵のものはニッケル水素蓄電池が利用されている。

そこに蓄積された電力が騎士を稼働させる動力になっている。

現在、世界中で化石燃料は供給量が著しく低下しているため、街を走る自動車も皆、バッテリー搭載型が主流である。

中には安全面を度外視してリチウムイオン蓄電池の利用をする者達もいるのだが。

「ところで、お前さんの身体の調子はどうか？」

「可もなく不可もなくってトコ。自分を使うことなんて滅多にないしな」

美鶴はふうふうと息を吐き出して天井を見上げた。染みが点在する茶色い天井と電灯が視界に映った。木目が人の目玉に見えなくもない。

にしてもボロい部屋である。もう少し家賃は安くならないだろうか。

美鶴の心境を察したように文蔵が「そうだった」と顔を上げた。片方の眉が吊り上がる。

「美鶴、今月分の家賃が払い込まれていないぞ」

「今回の報酬払いで、てかッあと三千円安くしろ!!」

「無理だな。贅沢言うな。八畳で転送装置付きのアパートなど、どこ探しても滅多に見つからんだろうに」

その通りであるので、美鶴は反論に窮して黙り込む。

騎士のリスクには転送時の無防備さが挙げられる。つまり、本体の居場所がバレればそこを攻撃される危険性が考えられるということだ。

そのために最適な拠点を見つけることは、砂漠の中から一カラットのダイヤモンドを探し出す並の難しさだとも言われる。

もしバレた場合、サポーターアヴィアターを守るのが補助者の重要な役割の一つでもある。

ただし美鶴が一室を借りるこのアパート周辺は、騎士組合がアヴィアター操者の安全保障を謳っており、周辺住民も保護意識が強い。こんな地域は非常に珍しかった。

「洗い終わったよ。んじゃ、私はそろそろ帰るよ」

食器洗いを済ませた由佳里がその声を掛けた。時計を見れば二〇時〇五分。

外は真つ暗で一人で帰らせるには、少々心配になってしまふ。美鶴は立ち上がった。

「途中まで送つてく。これからマンションまでちょい遠いだろ」

「おお、紳士だね」

由佳里が大袈裟に驚いてみせたのを無視して、文蔵に一言声を掛けておく。

「オヤっさん、出るときは鍵を閉めといてくれよ」

「わかつとる。ニュースでも言つてたが、最近騎士犯罪が多いからな。気をつけておけよ」

片手を挙げて返事をしておき、玄関に向かった。コートを纏い、厚底ブーツを履いた由佳里が待っている。

美鶴は黒のハイカットスニーカーを履くと、由佳里より先に外に出た。

心地よいよりも刺さる痛さのような冷気が顔に当たる。瞬時に首を竦め、全身に震えが走った。

「もう秋なんだっけ？ 一年は早いな」

「何感傷に浸つてるの。君の頭じゃせいぜい『おお寒いな。早く春が来ないかな』ってのが限界でしょ」

「俺はそこまで単純じゃない!!」

「分かつてるよ」。ほら、騎士<sup>ナイト</sup>様。お姫様のお手を引いてください」

人をおちよくった末に伸ばされる右手。

美鶴は照れて熱くなる顔を反対に背け、左手で由佳里の手をとった。

少女の掌のひらの暖かさ、柔らかさを直に感じて内心ドギマギしてしまふ。

そうして二人は肩を並べて歩いた。美鶴はこの時間が他に変えがたい幸福だと信じた。

「明日も学校か、メンドいなあ。学校なんて無くなっちゃえばいいのに」

「怖い発言すんなよ。確かに億劫おっくうだけどな」

等間隔で立てられた電柱の間を街路灯に伸ばされた影が進む。

脇道を歩いて出た大通りには自動車が増えればかりに行きかっていた。この果てしない流れの終わりはあるのだろうかと思議に感じてしまう。

「由佳里のマンションはこの通りの反対だよな」

「そうそう。向こう側ね」

美鶴と由佳里は横断歩道で信号待ちをする。美鶴は目の前を通り過ぎる車の数を数えたが、多すぎたので断念した。

視界で信号が青に切り替わる。美鶴は由佳里の手を離さず、歩を進めた。

ふと眸みみに反対に向かってくる少女が映った。真っ赤なコートにミニスカート姿。

見た目から想像するにこの時間を一人歩いているのは不思議に思われた。

美鶴は事情ありかな、と思いながら擦れ違おうとした。  
ふいに生じる衝撃。

何故か背筋がぞわりとした。一気に体温が下がる錯覚を覚える。  
と、少女が勢い良く頭を下げた。

「すみません。あたしの不注意でしたッ。本当にごめんなさい」

おもて  
面を上げた少女の顔貌は息を呑むほどに整っていた。暗闇で光を  
発するブロンドの髪、透き通った白の肌。

——なるほど、これは……逸材だ。

など美鶴は一人で首肯した。

「あの、何か……」

「ああ、いや何でもない。気をつけて帰れよ。俺は寛大だから別に  
気に留めねえよ」

「あ、ありがとうございます」

ふた  
二たび、少女は頭を下げてそそくさと横断歩道を渡りきる。  
美鶴はその後ろ姿を目で追ってしまった。不覚にも。

「いたいッ いたいッ、痛いです！！ ホントにッ！！ もげるもげ  
るッ！！」

突然、耳殻を力ずくで引つ張られる。振り向けば膨れっ面の由佳  
里がいた。まなじり 毗が鋭く細められている。

「ほら、赤になっちゃうよ！！ まったく女の子に見とれちゃって  
さ。無意識に手も離すしさ」

口を尖らせる由佳里に引きずられて、美鶴は歩かされた。

美鶴は金輪際、由佳里の前では他の子に色目を使わぬようにしよう  
と決意した。

『キシシッ、脆弱になったな顎。<sup>アギト</sup> すっかり牙を抜かれちまったな』

真っ赤なコートに身を包んだ少女はふと身を翻し、背後の離れて  
小さくなっていく二人の影を凝視した。

夜の街、白すぎる肌を晒し、漆黒の眸を闇夜に光らせた少女。

精巧すぎるその面貌は恐怖を覚えさせるほどだった。まるでフ  
ンス人形とでも例えようか。

観衆のいない夜の舞台で少女は一人、口端を吊り上げた満面の笑  
みを浮かべ仰々しくお辞儀した。

鳴らない拍手、演じられない劇、気付けば少女の姿は闇に溶け込  
んでしまった。

ただ一言、

『お前じゃ誰も守れない。自分自身でさえな』

発せられた警告は夜の闇に捉えられ、誰の鼓膜も揺らさなかった。

## 代われない日常と一杯の牛乳（前書き）

化石燃料って偉大です。

ないと物語に迫力がなくなりそうなので、とりあえず一般家庭にも普及している設定で。

## 代われない日常と一杯の牛乳

湯船に浸かり、その半無重力間、暖かさに身を投げ出した。

美鶴は立ち昇る湯煙を目で追って、息で吹き消した。

由佳里を送って帰ってくる頃にはすっかり身体が冷えていた。まだ暦の上では秋は始まったばかりであるだろうに。

顔を半分沈めて、泡を水面<sup>あぶく</sup>に作る。ブクブクブクブク……。

「……ぷっはッ」

美鶴は苦しくなって慌てて酸素を求めた。浴槽の淵に頭を預け、上を見上げる。

美鶴にはもはや生きた肉親は存在しない。父親と母親ともに大崩壊の時に亡くした。

このアパートには中学生時代から一人暮らしを始めている。両親の形見と言えるものは残されておらず、今ではほとんど親の顔を思い出せなくなっている。

自分は本当にこのままでいいのか、解決法があつたのではないか、答えの見つからない自問自答を繰り返す。次第に息苦しさを覚えて湯船から身を乗り出した。

刹那、目の前が暗転し、直立出来なくなる。立ち眩んだと思ったときには手を壁について座り込んでいた。

「長湯しすぎたかな……」

美鶴は顔を上げて鏡に映る自身を見た。

右肩関節から先にある皮膚を持たない腕、ひどく金属質な見た目、光沢を放つそれはパンドラ製の義腕である。肉体部と擬似神経で接続され、見た目を除けば自然な動きをしてみせる。

美鶴は人工皮膚でその表面を覆うことを考えたこともあったが、人工皮膚に嫌悪感を抱いて遠慮した。

視線をずらせばこれとは別に目を引く傷跡が存在する。

丁度首の後ろ辺りになるだろうか。まるで張り付いた何かを無理やり引き剥がしたような、横長の蚯蚓腫れみみずばのようになっている。

これらはほぼ同時期に美鶴自身の身体に出来たものだ。振り返りたくない過去。忘れられない過去。

美鶴は鏡に息を吐いて白く濁らすと、踵を返して風呂場から出た。タオルを腰に巻いた状態で部屋の冷蔵庫へと向かう。

開けた中から一リットルの牛乳、商名『骨太スーパ』を取り出してコップに注ぎ、腰に手を置いて一気に飲み干す。

自分の見た目に、とりわけ可愛いといわれることにコンプレックスを抱いているため、無性に身長が欲しかった。残念ながら今年の成長率は去年と比較して+0.2センチ。

ほぼ大差がない。美鶴としては身長一七〇は最低でも欲しいところだった。

あと僅か五センチ。……切望すれば人間いつか叶えられるだろう。全身を長袖ジャージに包み、美鶴は五臓六腑に染み渡る牛乳の後味を口内に残して、日に焼けた畳の上に布団を敷き始めた。

転送装置の隣に吊るされたように安置された騎士《鎌錐》の前に畳んだ布団を広げる。

毛布と枕をその上に放る。

「やっぱり狭い」

あとは電動歯ブラシを片手に洗面台へ直行。小刻みな振動で歯を磨き上げる。

口に含んだ水は驚くほど冷たかった。

電灯の紐を二度三度下に引っ張って、段階的に電気を暗くした。明かりを完全に消した部屋。美鶴は布団に潜り込み、明日の学校を休みたいなと思った。

「ふああああ……」

朝の日差しが締め切ったカーテンの隙間から帯状の光を射し込ませる。窓の外では雀がけたたましく朝の挨拶を交わしている。時計を見れば六時四五分。

——学校かあ、めんどいなあ。嫌だな。

布団の中で転がった美鶴は、半眼の顔で洗面台に向かう。取り付けられた鏡を覗き込み、嘆いて顔を洗った。

「一日じゃ顔立ちは変わらねえよな」

何度見直しても変化しない自身の顔を諦めて、美鶴は朝食の準備を始める。

簡単にスクランブルエッグとパンの朝食辺りで構わないだろう。フライパンを火に掛け、卵を溶きだすとドアが開けられた。

「おはようさん。美鶴、依頼完了通知と序列上進通知も来とったぞ」

大家の文蔵が部屋に上がり込んで来た。文蔵は毎朝、美鶴の部屋で食事を共にしている。

理由は簡単。料理が出来ず、美鶴の腕がそこそこであるからだ。

「あっそうなん。それで今、俺の順位は幾つになったんだ？」

美鶴はさして興味のないように訊ねた。

視線は手元のフライパンに向けられたままである。

「前回より三上がって、六千四百二番だ。一つ言っておく。今月だけでもう一〇件も依頼をこなしておるぞ。六千番台でこの数は驚異的と言えん。あまり熱心にやっていると死ぬぞ――」

文蔵は手に持っていた封筒と新聞を卓袱台の上に叩きつけた。

「分かってる。分かってるさ。それでもこれは俺の使命でもあるんだ」

半ば自分自身に言い聞かせるようにして美鶴は言った。

ランカー制度。アヴィアター操者と騎士の二つを一つの評価対象、ランカーとした序列制度。

ライセンス国際ランカー管理機構が規定、管理する評価方法だ。各操者には許可証が配布されている。企業間の抗争を目的に生まれた騎士を管理し、公正な存在にするために造られた制度だ。

その評価基準は世界共通であり、その数字自体がそのランカーの実力とも言われる。

嘆かわしいことに、この制度が出来た当初、高順位ランカーを指してアヴィアター同士の抗争が勃発した。

序列が高ければ高いほど、高額報酬の依頼が舞い込むためだ。比例的にその危険性も高まるのだが。

その頃脅威を誇った集団が現れた。

所属メンバーが皆、百番内という化物じみたランカー。

『ボレアース  
創世の蛇』 『ニースヘッグ  
嘲笑する虐殺者』 『ヨルムガンド  
終焉の大蛇』

この集団が当時その名を世に知らしめていた。

企業一つを潰す為に、その社員全てを虐殺したことや、対兵器武器を対人用として平気で使用したりもしていた。その非情な行動のために、世界は彼らの操り人形にされている、とまで人々に言わせた。

メンバーの多くがライセンスを剥奪されたが、その活動は継続された。

今でも定かではないが、彼らの背後には世界トップクラスの大企業が資金援助や騎士整備などを行っていたと考えられている。

過去に警察や有志ランカーによる大規模な撲滅運動が起こり、現在それら組織は解散、というよりも壊滅されたと考えられている。ただし、現在においても操者と騎士の市場は世界にとってなくてはならないものとなっている。

警察組織では対処不可な依頼を遂行してくれるためだ。

上げれば枚挙に<sup>いとま</sup>違がないが、他企業への妨害、破壊工作や特定ランカーの抹消依頼などもある。

それら違法性の高い依頼に対する禁止法令は毎年のように出されるが、なかなか取り締まりきれないのが現状であった。

「そついや、まだあの名前は残ってんのか？」

美鶴は出来たスクランブルエッグを二皿に分けながら、文蔵に視線を向けた。

「序列六五番、《銀狼》の名は今なお健在。その上の序列に変動はないが、奴の下では入れ替わりが激しい。きつと抜きにかかったランカーを倒すなりしとるんだろ。血生臭い話だ」

重く溜息をついた文蔵が胡坐を掻いて、新聞を広げる。

一面を飾っているのは、昨日のニュースで見た統治者二名の会談の話だった。

ランカー制度の序列公開法によって、操者の名は公にされないが、騎士の名は一般に公開されている。企業は各組合に掛け合い、必要に応じたランカーを求め、組合は各受付人へと仕事を斡旋する。

美鶴の受付、依頼の窓口役となっているのは他でもない文蔵であった。

そして先ほど文蔵の口から出た《銀狼》の名が、美鶴にとって最大の怨敵である騎士銘だ。

「はい、どうぞ。あ、コーヒーでいいか」

「おう。悪いな」

「いつものことだからな。慣れたよ」

美鶴は卓袱台にスクランブルエッグの盛られた平皿と八枚切りの食パン一袋にマグカップ、中身はブラックコーヒーとカフェオレを運んで、文蔵の向かいに座った。

そして文蔵の目の前で砂糖をカフェオレの中に四杯入れる。ちなみに小さじ山盛りである。

「あいかわらずの甘党だな。そろそろ無糖に挑戦してみればいいだろうに」

「苦い、不味い、勿体無い。いただきます」

「まだまだ子供<sup>ガキ</sup>だな。美鶴も……いただきます」

二人で囲む変わらない日常。

美鶴はカフェオレを一口飲んで一息つく。

この日々はいつまでも、いつまでも、変わることはないのだろうかと不安は絶えない。

壊れてしまった過去を持つゆえに、日常の脆さが酷く怖かった。



## 同級生と貧乳

爽快な朝の冷気の中、美鶴はただひたすらに自転車のペダルをこいでいた。

出勤中の背広姿の男や友達と肩を並べて歩く学生達を追い抜いていく。

目指すは西徳大学付属高等学校だ。

首都圏《エリア2》内では、内部分割がなされ、簡単に言えば行政区、居住区、工業区などに分けられ、それぞれが区画整理されている。海岸から順に工業区、行政区、居住区となり、どこも先に来るものから区画番号が小さくなる。

大崩壊の直後は何の区分もなかった。生き残った人々のうち、技術力を有した人間達が企業として再興を図っていった。

隔離壁が造られ、簡単な区画整理がなされた結果、現在に至っている。

美鶴の通う西徳付属は居住区と行政区の丁度境目、居住区第二区画に位置している。

美鶴は自動車の通りのない、人気の少ない道ひとけを自転車に跨って走る。

朝から、それも学校に辿り着く前に憂鬱な気分にならないためだ。理由は美鶴の中学校時代を知れば、言わずもがなである。

残念ながら本日は運が悪かったようだ。今日の牡羊座の運勢は最下位であろう。

「あつ、三ノ瀬君だ。おつはよー！！」「やっぱ、可愛いよね」「弟に欲しいよね」

彼女らは考えを改めてはくれないだろうか。

美鶴は遭遇せずに学校に到達する計画が頓挫したのを悟った。  
既に周囲を女子学生に囲まれている。逃避不可能な防衛網が形成  
されていた。

「ほら、荷物持ってあげるよ」「ほんと可愛いね。弟になってくれない？」

黄色い声が周囲を飛び交っている。

本当に勘弁してもらいたい。美鶴は頭痛がするといったげに頭を押さえた。

「キヤーキヤーうるっせー！！俺に近づくな！！半径五〇メートル以内に入るな！！」

「照れない、照れない」「一緒に学校まで行こうよ」「朝から三ノ瀬君に会うなんてツイてるよ」

全く動じない女子学生に捕まった美鶴は、泣く泣く学校まで女子の集団の中心を歩いた。

今日一日は災難が続くだろうという予感がしていた。

『女の子に囲まれて、いい身分だね。君は』

辿り着いた校門で背筋を凍らすような声色が響いた。

美鶴はぎこちなく首を横に回して、天を仰ぎ見た。

――まじで、最悪な一日になったな。神様、助けてください。

視線の先で由佳里がジト目で華やぐ集団を見ていた。

人々の視線を集める容姿に西徳付属のブレザー制服とネクタイ、赤チエツクのスカート姿。

男子だけでなく女子でさえ、憧れるほどの外見である。

あの冷たい眼差しは自分に向けられたものだ、美鶴は女子の集団の中で身を小さくした。

「ゆかりっち、おはよー!!」「ヤキモチ焼いちゃ駄目だよー」「ほら、美鶴君も挨拶してあげなきゃ」

火に油を注がないでくれ、心の中で必死に懇願し続けた。

「良かった。俺はまだ生きている……」

何とか生きて教室に辿り着くと、美鶴は窓側、前から三番目の自分の机に突っ伏した。

もうアパートに帰りたい。学校に来るだけで、七限まで授業を受けた倦怠感が襲ってきた。

美鶴は高校二年である。由佳里とは隣りクラスであり、こういう時には心底その事実に感謝していた。

「美鶴、死ぬなよ」「羨ましいが、あそこまでだと生き地獄だな」「ドンマイ。可愛いのは事実だ」

席の周りから浴びせられるのは、散々な物言いであった。クラス男子は羨望というよりも、憐れむ視線を向けてくる。

「やめてくれ。そんな可哀想な目で見ないでくれ……」

美鶴は力なく言つて、机に伏せていた。

この学校全体において、操者と補助者の存在は肯定されていると言えるだろうか。

どの生徒も一方的な嫌悪感を抱かず、その人となりから判断してくれる分別を皆、兼ね備えている。

美鶴自身が操者であることも、由佳里が美鶴の補助者であることも周知の事実である。

また美鶴の右腕が義腕であることも、首の傷の存在も皆知っている。

ただ、最近になってこの学校の雰囲気により向上したのも事実であった。

今までどこかよそよそしかったクラスメイトや他クラスの生徒が進んで挨拶してくれるようになったのは最近のことだった。

その立役者を思い返して、美鶴は頭が痛くなった。

この学校最大級の異端児である存在。

「たのもー！！」

教室中に反響する潑刺<sup>はつまつ</sup>した声。

何か道場破りらしき人物が来たようだ。

横目で廊下側を一瞥すれば、シュシュで纏められたツインテールを持った少女が立っていた。

顔の造形レベル、中の上。美鶴はそう評価している。

「プリティーでラブリーな美鶴先輩はいらっしゃるでしょーかッ！？」

いないだろう。そんな可愛さが強調された男子なんて、この世に存在しているわけがない。

美鶴はうつ伏せたまま、その声を無視した。

パコ——ンッ！！ 突然、後頭部をティッシュ箱が強打した。  
全然これっぽっちも痛くはなかった。

「美少女が会いに来てあげたんだぞ！！ 面を上げんか！！」

「うつせーな！！ 何が美少女だッ！！ まずその前にキャラを固定しろよ！！」

「弟キャラが固定してる先輩に言われたくないですよ」

「…… 黙れ貧乳」

美鶴は目の前でティッシュ箱を抱えたふたつ結いの少女を見据えた。

ブレザーで隠された残念な胸に、学年が一つ下である証の翠チエツク柄のスカート。

学校内では密かに人気を集めているらしい。

相良 さがら 瑠璃 るり。

この学校に通う由佳里以外の補助者の一人だ。

補助者採用試験は国家試験並みの難易度を誇っており、不合格者が毎年溢れかえっている。

試験受験者資格は一般的に十五歳以上とされている。

そうして合格した人々は誰もが優れた頭脳の持ち主である。と美鶴は考えていた。

実際由佳里の学力は優れていて毎度の如く、学年トップかその近辺に名が上がる。

操者と補助者は近寄りがたい存在、次元の違う存在、相容れぬ存在だと認識している人は多い。

——それなのに、こんな奴が現れるとは。

補助者であるにもかかわらず、テストの順位は後ろから数えた方が早いといった始末の少女。

明るすぎるにもほどがあるだろうと思わずにいられない、破天荒な性格。

ここまで人々の認識をぶち壊す存在がいれば、さすがに学校の雰囲気は変わるだろう。

「ひどい！！ 差別ですかッ！？ 由佳里先輩のもので目が肥えているからって、うちを貧乳呼ばわりするなんて……」

「事実だろ！！ てか別に目は肥えてねえーよ！！ 俺を変態扱いすんな」

「後輩を貧乳呼ばわりした時点で、変態ですよ？」

こいつをぶつとばして構わないだろうか。美鶴は膝の上で拳を握りしめた。

「冗談はさておいて。先輩、重要な話があります。至急な用事です」

急に態度を改め、自身の制服を整え始める瑠璃の行動に、美鶴も背筋が自然と伸びていた。

瑠璃も補助者である以上、どこかの操者をサポートしている。

実際には会ったことはないが、彼女の操者は随分と高序列のランカーらしい。

これまでに幾度となく、その仕事関係で得た有益な情報を教えられた経験がある。

こついつ時の瑠璃は眼つきが一変する。

相手の心のうちを見透かすような、遠い目をするのだ。

「何だよ。ここでもいいのか？」

「ええ、構いません。公衆の面前でなければ意味がありません」

「はいッ？」

何を言おうとしているのか皆目見当がつかない。仕事の話なら皆の前で話すべきではないだろう。

「先輩、どうか。うちを愛してください……」

「病院に行つて来い!!」

思わず立ち上がって叫んでしまった。美鶴はバツが悪そうに椅子に腰を下ろした。

「先輩は世界の中心で愛を叫ばなければ駄目なんですよ」

「言外に俺を自己中だと言いたいのかッ!」

「はい、あつても由佳里先輩中心とも――」

「何がないのかな」

美鶴はギョツとして振り向いた。いつの間にいたのか由佳里が目の前に立ち尽くしていた。

身体の前で腕を組まれていた。彼女は隣りクラスであるはずだろ  
う何故ここに。

「瑠璃ちゃんの声が聞こえたから顔を覗かせに来たら、君が楽しそうにしてたんだよね。さて何がないのかな」

由佳里と瑠璃はそこそ親しき仲であると美鶴は認識している。

美鶴は視線を逸らして「何でもないな」と小さく言った。

瑠璃は何故、教えてくれなかったのだろうか。

見れば必死に笑いを堪えていた。こいつは嵌めたのだと理解するのに時間はかからなかった。

『キーンコーンカーンコーン』

助け舟を出すようにチャイムが鳴り響いた。

「……………」

後ろ髪を引かれる様子で由佳里は自分のクラスへと戻っていった。目の前の後輩もあれぐらい聞き分けがよければいいのだが。

「早くクラスに戻れよ。ホームルーム始まっちゃったぞ」

「うち、美鶴先輩と授業が受けたいです」

「俺は受けたくないです」

思わず敬語になるが、気にしてられない。

こんな漫才みたいなやり取りをしている間に担任がやって来てしまった。

まだうら若い女性教師だ。

美鶴はこの教師が女子生徒に混じって「美鶴君って可愛いよね」と言っているのを知っている。

「はい、朝のホームルームを始めますがー、美鶴君。まず彼女を送り届けてあげて」

女教師がそう指示を飛ばした。

何を言い出すのだと見れば、クラス中が「行ってらっしゃい」と言いたげに手を振っていた。

「美鶴先輩、うちへのアプローチのチャンスですよ」

「黙れ、チビスケ」

「……先輩も十分、チビスケですね」

「お前よりは高いわッ!!」

美鶴は席を立って、瑠璃の背中を押して教室の外に押し出した。  
瑠璃がすかさず左腕に抱きつく。

「離れるよ……。いや、ホントに離れてくれ。俺の寿命が縮む」  
「ドンマイです」

瑠璃がしがみ付いたまま、美鶴は由佳里のいるクラスの前を通り  
過ぎる。

横目でちらりと見て後悔した。  
由佳里が無表情で固まっていた。

「終わった……」

美鶴は早足で階段まで急いだ。  
階段へと辿り着くと瑠璃はパツと手を放して、美鶴を解放した。

「そう言えば、また序列を上げたらいいですね。小埜崎おのさきさんも目を  
丸くしてましたよ」

「どうやって六千番台のことまで調べんだよ。暇人なのか？」

小埜崎叶望おのさきのんが瑠璃のサポートしている操者の名前だ。

年は二十歳らしい。美鶴自身、実際にお目にかかったことがない  
ため信憑性はない。

「うちらは先輩達のことを密かに応援してますから」  
「ガッツリ応援されてる気が……」

美鶴は気疲れに目頭を押さえ、溜息をついた。

瑠璃はそんな様子を楽しむように笑みを浮かべて、口元に手を当てた。

笑みを殺して、張り詰めた表情に変わる。

「その昔、ナポレオンの皇后ジョセフィーヌは衣装に情熱を注ぎ、軍資金から服のための多くの資金を使いました。その結果フランス軍はジェノバを失いました。事実かは知りませんが」

「いきなりだな。何が言いたいんだよ……」

美鶴は齒軋りして顔を窓側に向けた。言おうとしていることは予想できた。

見えた景色は雲ひとつない晴天であった。

「小笠崎さんも心配してましたが、過ぎた情熱は自身を滅ぼしますよ？　つまり、熱心に序列上げはするなという警告です」

分かっている。そんなことは過去の事実が示している。  
奇しくも文蔵と同じ事を言われ、美鶴は憤りを感じた。

序列を上げることに夢中になったランカーの存在は、気付かぬうちに煙のように消えていった。

序列が上がれば上がるほど、その確率は高まっていった。

それでも美鶴は止まっていられなかった。もはやこれは情熱ではなく悲願とも言えるのではないだろうか。

銀狼と戦うために美鶴は序列を上げているのだ。

「十分注意するさ。絶対、由佳里は巻き込ませない」

「そうですね。そういえば、由佳里先輩と美鶴先輩って付き合っていないんですか？」

「へ？」

藪から棒にきた質問に美鶴は、素っ頓狂な声を出した。

「いやだって、幼馴染で同じ年で同じ学校で操者と補助者の関係なら、出来レースじゃないですかッ」

美鶴は一変して興味深々な目を煌かせて詰め寄ってくる瑠璃に辟<sup>へき</sup>易<sup>えき</sup>した。

「付き合ってねえーよ。その予定もねえーよ。分かったら早く教室に戻れよ！！ もう授業が始まるから！！」

現在時刻、一限授業の二分前。完全にホームルームをさぼってしまっただ。

信じてなさそうな表情を浮かべる瑠璃から逃げるようにして、美鶴は教室まで急いだ。

昔、本気で由佳里に恋焦がれた時期があった。

小学生の頃だったろうか。

今現在もきつと自分は由佳里に引かれているのだと思う。

けれど、その気持ちを肯定する考えはない。

もし由佳里から告白してきたとしても、きつと拒絶してしまうのだらう。

「おかえり〜」「やっと帰ってきた！！」「おっそいよ！！」「あ  
いかわらずだね」

教室に戻った美鶴を出迎えたのは、クラスメイトの野次ばかり。

自分の席に直行して、ドカリと椅子に腰を下ろした。始めの授業は数学か……。

「よッ！ 二股ヤロー！！」

「誰だ！ 今叫んだ奴はッ！？」

幸い、クラスは平和そのもの。明るすぎるこの環境が心地よかった。

先の不安に怯えるよりは、今の平和を堪能していた方が利口者かと思ひ直した。

## 同級生と貧乳（後書き）

こんな後輩がいたら、毎日が飽きないと思います。

## 死神と機械仕掛けの破壊者

「うわッ……」

美鶴はアパートの部屋のドアを開けた瞬間、堪らずそう呟いた。部屋の中に充満する潤滑油の匂い。部屋に上がり奥を覗けば、鎌錐の前に座り込んで何か作業中の広くない背中。

西徳付属の制服であった。こちらに気付いていないのだろうか。

様子を伺っていたれば「瑠璃ちゃんとデレデレしちゃってさ、かまきり螳螂ばったから飛蝗にしちゃうぞ」と独り言まで言い始めた。

飛蝗は精神的にも肉体的にも辛いだろう。少なくとも頭と地面がスレスレだ。

「何、人の部屋でぶつくさ言ってるだよ、由佳里」

美鶴はブレザーを脱いで、ハンガーに掛けた。持っていた学生鞆は部屋の隅に立てかけた。

不機嫌そうな由佳里は「何も言ってるないよ」と答え、美鶴の方を見ようとはしない。

「はあ、お茶でも飲むか？」

美鶴は困り果てた様子で頭を掻いた。部屋の唯一の窓を見れば、既に全開にされていた。

残念なことに風通しが悪いためか部屋中に匂いは籠っている。

「別にいい。冷蔵庫の牛乳をホットミルクにしたから」

「人の身長成長ドリンクを飲んだのか、勝手に……」

「あー、ごめん。でも諦めも肝心だよ？ てか牛乳で身長伸びるっ

け？」

微笑を浮かべながら由佳里が身体を半分、後ろに向けた。

美鶴は内心ホッと胸を撫で下ろした。そこまで気分を害していた訳ではなさそうだった。

「諦めねえーよッ！！　まだまだ俺は成長するんだ！！」

「……………可哀想に」

力んで言ったものの、由佳里の憐れむ視線が突き刺さり、消沈する。

由佳里と美鶴の身長は二センチ、美鶴の方が高い。まだ何とか差がある。

ちなみに去年は四センチの差。由佳里に成長期が来たようだった。それよりも由佳里が何をやってたのかと見れば、鎌錐の脚部の整備中であつた。

取り出されたショックアブソーバーや、カーボンナノチューブの人工筋肉などが青ビニールの上に転がっている。

思い返せばこの前の任務で誤って相手と衝突したのだった。その時の破損がないか、不具合が生じていないかのメンテナンスをしているようだった。

「毎度毎度、悪いな。俺は整備の腕はからつきだからな」

「別にいいよ。私は君の補助者<sup>サポーター</sup>だし。まあ、一人で無理な時は竹ちやんがいるから」

由佳里は別に気にしていないと言いたげに、首を軽く左右に振った。

美鶴は傍に腰を下ろして、リモコンの電源ボタンを押した。流れ出したニュースは今なお、二社の総裁の会談の話で持ちきり

だった。他にあるとすれば増加傾向の騎士犯罪への対策、首都圏の某企業の工場で放火があつたなど。

他に面白い内容の番組がないか探そうと、チャンネルを回す。

「君は、外部居住区がなくなると思う？」

唐突に由佳里が問いかけてきた。横を見れば、作業の手を止めて由佳里が視線を寄越していた。憂いを帯びた濡れた眸が向けられる。その問いに対する答えは簡単に出せる。

「無理だろ。現状では不可能だ」

適当に回された番組では、ブサイクなネズミが痩せ細ったネコとの逃走劇を繰り広げていた。初めて目にするアニメだ。

「でも騎士があるわけだし、希望は無きにしも非ずじゃ——」

「壁の向こうにいるのが、難民と企業に雇われたランカー共なら可能だろ。けど、まだ残ってるだろ。一〇年近く経ったけれど、まだ動いてるだろ」

ディヴィディングライン

隔離壁にはかつて防衛壁と呼ばれていた時代がある。

理由は日本国土の中から侵入されることを防いでいたためだ。

ブレイクダウン

二〇二五年の大崩壊が生んだ負の遺産。完全自律型兵器——プレデターの存在を。

人類は戦争において戦う役目を機械に託した。そして歯止めの利がなくなつた機械兵の破壊活動によって、全てが崩壊した。

企業連合体が世界再生の足掛かりとして、アンドロイドを用いて各国の都市周囲を障壁で囲い、可住地域を形成して久しい。

現在ではその障壁は企業間の抗争のために、本来の防衛という意義を変え、明確な境界線、縄張りの証となっている。

「でも、騎士の機動性もあれば、日本中のランカーが共同でやれば殲滅可能でしょ」

「そう都合良くランカーは動かないだろ。企業と個人契約を交わしている奴らなら特にな。どの企業も自分達の利益にならなそうなことは極力、抱え込んだランカーを動かしてはしないだろ。今回の会談で二つのエリアを代表する企業のトップが、不利益を承知でやるってんなら事情は変わるかも知れねえーけど、いたるところから圧力がかかっていると思うぞ。だから無理だ」

美鶴は無然とした態度で最後まで言うと、テレビに視線を戻した。丁度画面にはネズミがネコに食べられそうなシーンが映された。いや、情け容赦なく食べられた。

いくら下手なアニメーションでも、この時間帯にこれはどうなのだろうか。

「君はこのままでいいと思ってるの？」

由佳里が質問を重ねた。今日の彼女はいったいどうしたのだろうか。

美鶴は首を傾げつつ、顔だけを由佳里に向けた。眸に映った彼女の表情はやはり、どこことなく不安げに見えた。俯きがちになるその表情には翳<sup>かげ</sup>りが伺えた。

「よくないさ。けど俺には何も出来はしない。由佳里、お前も当然」

正直に答えた。実際、どうすることも出来はしない。

高序列のランカーにでもなれば、ある程度政界への影響力も持てるようになる。同時に重い責任や幾分かの制限、金欲が生じる。

今まで外部居住区への対応策に対して、操者が政府に訴えたこと

はない。

多くの者が金欲しさのために、純情なランカーを気取っているか、ライセンス剥奪や抹消という圧力でも掛けられているのだろう。世知辛い世の中だ。

由佳里は肩を落として、整備を再開させる。

「てか、由佳里。制服で大丈夫なのか？　いつも作業服ジャンプスーツだろ」  
「忘れちった」

てヘツと舌を出しておどけた由佳里の姿に美鶴は思わず笑った。  
由佳里も柔らかな笑みを零した。固まった部屋の空気が一瞬で解ほくれたようだった。

この世の中が不安ではないのかと言われれば、不安すぎて夜もオチオチ寝てられないほどだ。

それでも人々は、何ともない日常を創って生きている。

美鶴は左手を天井に向けて伸ばして、空を掴んだ。この手の中には何もなければ、この手で隣りに座って強がる少女を守り抜けるのなら、それが今の最善だと信じよう。

『ヴーヴーヴー』ふいにエルガー作曲の《威風堂々》が鳴り響いた。  
由佳里が慌てて胸ポケットからスマートフォンを取り出して耳に当てた。手は汚れていないのだろうか、と心配になってしまふのは杞憂か。

「——っん、分かった。彼に伝えておくよ、じゃあね」

数分の通信越しの会話を終えた由佳里は携帯を仕舞うと、片手をすくめた。

「三日後に研究所に来てくれだってさー」

「あ、そうなん？ うん了解。オヤっさんにも伝えとく」

美鶴は大きく伸びをした。網戸の窓から風が入り込み始めていた。急速に油の匂いを奪い、共に室内温度を低下させていく。

「てか、ほんとコタツが欲しいな……」

呟く美鶴に由佳里も「同感だね」と相槌を打って笑った。

笑えば笑うほど見えない闇があっても、泣いて明日が見えないよりはいい。

知れば知るほど遠くなる答えだとしても、逃げて出口を見失うよりはいい。  
言葉の数だけ幸せがあるならば、おんなじ数だけ不幸があるのだろう。

それゆえに人は己の幸福を願い、望み、叶えようとする。

「不安だったら俺を頼れよな。由佳里一人ぐらいだったら守ってやるから」

美鶴は照れたように顔を背けて言い切った。少し火照った頬が流れ込む冷気に撫でられ、心地よく感じる。

「……ありがとう」

由佳里ははにかんで頷いた。

## 研究者と童顔な戦士（前書き）

全然、戦闘シーンがないけれども……。  
そのうち入ります。はい。

## 研究者と童顔な戦士

「随分と突然な連絡だったな。いつもだったら一週間ぐらい前に知らせてただろ？」

シルバーメタリックのミニバンの後部座席で美鶴は大人しく外の流れる景色を眺めていた。

どこまで行っても変わり映えない都市の景色が続く。活気溢れるよりも随分と息苦しさを感じてしまう。この時間帯だと通勤ラッシュが終わったためだろう、車の通りが少なく、快調にバンは路を進んでいる。

「そうだね。まあ、お父さんはどこかぬけたところがあるから」

美鶴の隣りでは由佳里が座席にもたれていた。肩が密着していることに美鶴がずっとドキドキしていることを知る由もないだろう。

「誠<sup>まこと</sup>さんも仕事で忙しかったのだろう。親不孝な発言は控えてやったほうがよいぞ」

運転席で文蔵がバックミラー越しに二人の様子を一瞥した。

三人は今現在、首都圏工業区第三区画へと向かっていた。

理由は、操<sup>アワイアター</sup>者としての美鶴の定期身体調査と新型の騎士機構の試験運用といったところ。定期といっても診断施設の都合上、若干不定期であった。

沿岸部に位置する工業区第三区画には、名の知られた首都圏第四位の企業、柴川重工が研究所を構えている。

その開発主任は由佳里の実の父親、羽城誠である。

彼は世界中の他企業が喉から手が出るほどの秀才であろう。美鶴

が把握する限り、一年のほとんどを研究室に籠って実験や開発をしているのではないだろうか。

世間には知られず今現在、彼は柴川重工の研究所で開発主任の座についている。

そんな父親をもったために由佳里自身も、機械などの工業関係に強くなった。

「まあ、時期的にそろそろ診察通知が来ると分かってたけどな」

美鶴はあいかわらずのパーカー姿で、袖の先から覗く義腕を左手で撫でた。

ひんやりとした冷気が伝わる。

右肩関節の接合部には断熱材が入られているため、冷たさは感じず、冬季の凍傷や火傷を防いでいる。

「開発の現場はどこまで進んだ研究をしているのかな」

美鶴の隣りで、由佳里は目を輝かせていた。道中、時折鼻歌を歌っていた。

その服装は上下共に黒の作業服姿。ジャンプスーツ黒とのコントラストで由佳里の肌の白さが一層際立って見える。美鶴はその横顔を盗み見た。長い睫毛、まつげ薄紅の艶やかな唇、思わず見とれてしまい慌てて視線を外した。

由佳里にとって、騎士の整備は半ば趣味とも言えるわけであって、そうした機械関係のことには人一倍関心があった。

美鶴は美人で籠って機械を弄るその将来を想像して、可哀想だなと思った。

ちなみに柴川重工は騎士の開発は行っていないというのが、一般向けた。

だが実際には美鶴達に対して、武器や部品などを提供してくれている。《鎌錐》は柴川重工によるワンオフ品の騎士であった。

操者や補助者は騎士があれば仕事が出来るわけでなく、破損部の修理のための備品提供がなければ、思うような仕事は難しい。

そのために大抵の者は契約を交わし、騎士を開発している企業より支援を受けていた。企業としても、自社の護衛や宣伝などにランカーを使うことで利益を得ている。

柴川重工は表向きは、自動車や輸送船、原材料の生産を行っているが、公にせず騎士の研究もしている。

「この前訊ねたときには、精神回歸システムリバイバルの安全強化について研究していたのう。ある程度のメドは立ったのかもしれない」

文蔵が顎あごを擦りながら言った。

「楽しみだね」

「いや別に……」

意気揚々とする由佳里に対して美鶴は興味の薄い返事をした。バンの車内から見える外の景色は、超高層ビルが道路の両脇に隙間なく建ち並んでいる。行政区の近代化の進められた街並み。

隔離壁の向こう側とは別世界だ。同じ日本国内だとは思えない。

次第に周囲の建造物の背が低くなっていく。工業区が近づいているのだろう。

世界各国の政府が倒れて、新たな指導者として立ち上がったのは大企業の人間達だった。彼らには資金もあり、技術力もあった。

彼らの力なら一〇年以内に日本再建のメドエゴイストが立てられたであろう。それが叶わぬ夢と化したのは単に彼らが利己主義者であったためだろう。再生よりも利益を重視した結果が、今現在の企業間の抗争、

競争だ。

美鶴は座席に深く座り直し、腕を組んだ。窓の外に見覚えのある建物が左手に姿を現していた。

工業区の方に来れば、車の通りはめっきり減るため、見渡しても他に走行中の車両は見受けられない。バンの小刻みな振動に次第に目蓋が重くなる。美鶴は暫しの眠りについた。

その寝顔を覗き込んだ由佳里は、ほくそ笑んだ。

「久しぶりに寝顔を拝見。やっぱり童顔っていうか、女の子顔っていうか。うん、弟顔だよな」

そんな様子を傍観していた文蔵は口元を緩め、優しげな視線を送った。

「よし着くぞ」

美鶴は目を瞬き、首を回した。いつの間にか眠っていたらしい。

文蔵が方向指示灯を点滅させ、ハンドルを左に切る。

入り口には警備員がおり、文蔵は軽い挨拶と共に身分証を提示する。こうした審査はこの企業でも採用されている。簡便な方法であり、もし犯罪者が騎士で堂々と侵入してきた場合どうするのか、美鶴は多少不安にもなる。確か数日前にどこかの企業の工場が放火にあつたな、とニュースで見たのを思い出す。

だたっ広い駐車場にミニバンが停車すると、ドアをスライドさせて美鶴はアスファルトで舗装された地面に足を下ろした。身体を左右に捻り、座りっぱなしで固まった筋肉をほぐす。

「そんじゃ、行くかの。誠さんは騎士機器研究棟のほうにいるだろう」

「ほら、置いてくよー」

先を歩き出す文蔵の後を追って、由佳里も軽やかな足取りで研究所へと向かう。

美鶴も慌ててその背中を追った。

柴川重工の研究所の敷地内には計二〇の実験棟や研究棟が建ち並んでいる。それぞれは大小様々な規模ではあるが、羽城誠のいる騎士機器研究棟は国立病院と見紛うような佇まいだ。

よくもまあこんなデカイ施設を造って世間に騎士の開発をしていることがバレないものだ、と美鶴は感心してしまう。

自動ドアの入り口を入ればすぐに受付が目の前に現れる。といってもこれまで幾度となく訪れているために、既に顔パスだ。「お久しぶり」と快く挨拶までされた。

白が基調の施設内を道なりに進んでいく。道すがら白衣に身を包んだ施設の人々とすれ違う。その誰もが顔見知りの人々だ。

「あッ、美鶴君だ。可愛いわ、息子に欲しいわね」

「不憫な子よね。そうだ私の養子にでもしようかしら」

「あなた子供が三人もいるじゃない」

「そうだったわ。美鶴君欲しさについ忘れちゃった」

そこで笑い声上がる。どうか勘弁してもらいたい。

美鶴は努めてそれら声を無視した。あんな悪魔の言葉に耳を傾けてはいけない。

「奥さま方のアイドルだね。おめでとー」

パチパチと拍手して由佳里が言うのを耳を塞いでガードした。

誠は騎士機器研究棟の地下三階に設けられた特別研究・開発棟と呼ばれる、高校体育館並の広さを持つ施設にいる。

自動で開閉したドアを潜り抜ける。相変わらずの白い部屋。分解された機械や資料が乱雑された作業台。照明が乱反射して美鶴は眩しそうに一瞬目を細めた。研究室では慌ただしく動く研究者達がい

た。

さて、誠はどこにいるだろうか。

「やあ、やっと来たね」

白衣を纏った天然パーマ、メタボ体型の男が、颯爽とこちらに歩み寄ってきた。

彼が由佳里の実の父親である羽城誠だ、と言いたかったが思いとどまる。さて、どちらさまだろうか。

美鶴はこめかみに手を当てて記憶を探ったが、該当した人物はいなかった。

失礼を承知でその顔貌を凝視する。キメ細かな白い顔、おたふく風邪を疑うような頬もあいまってまるで大福に見える。残念ながら美味しくはなさそうだ。

「すみません。どちらさまですか？」

結局美鶴は訊ねた。由佳里が隣りで笑いを堪え、文蔵も苦笑していた。

「僕だよ。誠さんですよー」

首を少し傾げ、餅みたいな頬を両側から指で刺した可愛い子ポーズをとるメタボ。

「……………」

暫しの沈黙の後、美鶴は口を開いた。

「何で、肥満体型の機械人形なんだよ……無駄アンドロイドだろ」

## 童顔と過去形と過去完了形

「僕の愛しのベビーフェイスッ！！ 会いたかったよ」

肥満体型アンドロイドが両腕を伸ばして美鶴に迫り、唇が妖艶ようえんに突き出される。

「いきなり気持ち悪いなッ！！ せめて童顔って言うてくれ！！  
てか自分の娘にいう台詞だろッ」

「私ベビーフェイスじゃないよ」  
「そっちじゃねー！！」

美鶴は心労に目頭を揉んで、嘆息した。ドツと疲れた。

「全く美鶴君はいつも無愛想だね。あ、少し待っててね。人間モ―  
ドに切り替えるから」

キビキビとした足取りで研究室の奥に消えるアンドロイド。本物の人間である体型なら、あそこまでの動きは再現出来ないな。

一分もせずに今度は長躯の男がやってきた。不清潔に伸ばされた茶髪、身長一八二センチの男。黒縁眼鏡の奥に人懐こい眸が覗いた。本物の羽城誠だ。

「いやー、ごめんごめん。アンドロイドで作業していたほうが眠く  
ならなくて、仕事が捗はかどるんだよね。肥満だったのは、ほら僕身長が  
あつて痩せてる体型だからああいうのに憧れちゃって。どうするこ  
とも出来ないよね、僕の身長が高いことは」

「厭味いやみか？」

美鶴は不機嫌そうに誠を見上げた。羨ましいほどの身長だ。五センチ譲ってもらいたい。

「お父さん、長時間の精神転送は危険だよ」

由佳里が腕を前に組み、頬を膨らませてる。心配よりも怒り気味の様子だった。とりあえず怒っているのは分かるが、全く怖くもない。美鶴は逆に可愛らしさを感じてしまった。

「うう、ごめんね由佳里。気をつけるから機嫌を直して」

娘に弱い誠が力なくうな垂れた。

「許す」

由佳里が即答。早いなッ、と美鶴は心で突っ込みを入れた。

「誠さん、んじゃ美鶴をよろしく頼むぞ。儂と由佳里は少し見学でモしたいんじゃないが」

「いいですよ、竹山さん。最近、技術革新がありまして、騎士の安全性が一步前進する技術を発見しました。それと《鎌錐》のデスサイスをより軽量化して、性能を変えないものの試作品も造りましたよ。おーい、ペロツキー、二人に研究結果の説明してあげて」

ペロツキーと呼ばれた中肉中背の冴えない男性研究員が小走りで行ってきた。その口端から棒付きキャンディーの白い柄が覗いている。あれは商名『ペロツキー』だ。

「二人に試作品の精神回帰システムとデスサイスを見せてあげてね。あとこの二人の要望には出来る限り答えてあげてよ。この僕の一人

娘と恩人なんだから」

「あ、はいッ！！ 分かりましたッ」

ビシッと敬礼するペロツキー。一つ気になることがあったために、美鶴は質問した。

「えーっと、ペロツキーさん？」

「はい、何でありますか？」

ビシッと敬礼。足も綺麗に揃えられている。

「えっと、今舐めている味は何ですか？ パツと見、茶色く見えたりんですが……」

「これでありませうかッ、この味は『納豆チョコレートバナナクリームカスタード味』であります」

「そうですかわかりました……」

——宇宙人がここにいたぞ。前代未聞の大発見だ。

「うんじゃ、美鶴君。向こうに行こっか」

誠の指示に美鶴は素直に従って、研究施設の奥へと進む。熱く意見交換を交わす研究員の傍を通り過ぎ、陳列した名の知らない機材の間を縫っていく。そして誠の背中を追って、一つの小部屋に入った。まるで病室のような部屋。一つ違うのは白いベッドの代わりに転送装置が鎮座していたこと。

「それじゃあ、ベッドの上に腰かけてね」

「転送装置なッ」

美鶴が大人しくそこに座ると頭に脳波計を付けられた。広げられたA4サイズの端末に波線が表示され始める。

操者には定期的に脳神経の破損や障害がないかの診断が義務付けられている。

擬似脳への精神転送はある程度の安全が確立されてきているものの、長時間、長期間においての転送で不測の事態が起きないとは断言出来ないためだ。

また、転送には限界転送時間が定められている。人によって多少前後するが、一日六時間以内と決められている。

この診察自体はひどく簡単なもので三〇分程度で終わる。

「美鶴君が操者アヴィアターになってもう一〇年経つんだよね。そして由佳里が君の補助者サポーターになって二年か」

誠が物思いに耽ふけったように翳かげりを浮かべた表情で、端末のディスプレイを眺める。

「そうだな。もう二年にもなるんだな」

美鶴も誠の纏った雰囲気に移ったように感慨深げな顔をした。膝の間で手を交差させる。

「僕は今でも君に感謝してるよ。君のおかげで僕は平和な日常を手に来た。君が僕に対しての憎悪を報復という形にしないでくれたことには万謝してるし、これからも命一杯の技術提供もしていくつもりだよ」

「……あんたは相変わらずだよな。研究に没頭して、熱狂して好き放題やって、後から相手を心配する性分だ」

「返す言葉がないね……」

佯しそうに笑う誠。が、すぐに表情を一変させた。

「そう言えば、君の義腕を人工皮膚で覆い隠す考えはないの？ 今の技術ならカーボンナノチューブの擬似神経が通ったものもあるし

——  
「ない」

にべもなく美鶴は却下する。誠は「君も相変わらずだ」といつて肩を竦めてみせた。

この義腕の設計者は誠だ。美鶴自身がこれを望んで頼み込んだ。美鶴はこの義腕を見るたびに嫌でも過去を思い出している。首の傷は撫でる度にまるで焼けるような痛みを錯覚させる。

誠を含めたごく少数の人間しか知らない過去。由佳里はその過去を知らない。そしてこれまで一度もそのことを訊ねられた覚えはない。クラスメイトに至っても同じだ。

皆、知リたそうな顔をしていたが、さすがに右腕が丸々機械だ。その内容に怖れを抱くのも無理はないだろう。

美鶴は太腿の上に肘を載せ、頭を置いた。

——いつかは話したほうがいいんだろうな。けど、話せば由佳里は俺をどう思うかな。

美鶴は暫し、まどろみかけた。それを誠が妨害する形でふいに訊ねた。

「——由佳里には告白したのかい？」  
「ふおッ」

美鶴はたまらず喉を詰まらせた。咽て空咳を繰り返す。

この男は唐突に何を言い出すのだろう。本人は臆面もなく、興味

津々といった様子だ。

そういえばつい最近にも似たやり取りをした覚えが、ああそうか瑠璃も同じようなことを訊ねてきたな。

「そろそろ進展があってもいい頃合じゃないかい。君が由佳里に気があるのは知ってるし、由佳里も君に好意を抱いてるだろう。何より二人はお似合いだ」

娘のいない所でよくもそんなことが言えたものだ。いや、いた場合は非常にまずいだろう。

美鶴は首を横に素早く振りながら、同時に顔の前で手を左右させた。

「……告白するつもりはねえーよ」

「それはアレかい。自分の見た目にコンプレックスを抱いていて、由佳里と並ぶと姉と弟みたいな図になっちゃうことが嫌なのかい」

「茶々いれんなよッ」

「ごめん、ごめん。でも君は恐いんだろ？ 想いを告げてフラれることよりも、由佳里に知られて怯えられることが。告白する前から、最悪場合のことを考えてしまって、疎んでしまっただろ？ 言葉に出来ないんだろ？ 君が歩んできた道は茨の道だし、これからも似たようなもんかも知れない。だけど、怖れてばっかじゃ、いつか足を元を掬われるよ。立つべき足場さえ失うかもしれないよ」

誠は一息もつけずに最後まで言い切ると、自嘲気味に嗤<sup>わら</sup>った。美鶴は滅多にない誠の雄弁に面喰らった。核心を衝かれて、言葉を見失った。息苦しささえ覚えた。

「だけど……まだ俺は、由佳里に許されてねえよ。あの日から変らないままだ」

美鶴は呟いた。視線の先で誠は悲しそうな顔をしたが、今度は何も言っていないかった。

美鶴は視界を手で覆い隠し、目を閉じた。

「それじゃあ、同調率の検査を始めようか」

美鶴は転送装置に深く収まり、身体力を抜いた。この検査では実際にアンドロイドを操りはず、用意された擬似脳との同調のみを目的とする。

「転送開始、三、二、一」

次第に目蓋が重くのしかかってくる。美鶴は不快な無重力感を感じた。

操者はアンドロイドと視覚、聴覚、痛覚などを同調させることで、シンクロアンドロイドをまるで自分の身体のように感じている。

アンドロイドを通じた世界の鮮明さの度合いは、その同調率の高低で変わる。高ければ高いほど、より正確に世界を認識することが可能だ。同調率の高さもランカーの強さを左右する。

大概の操者は70から80%台だと言われ、90%の壁を越えることは非常に困難だと考えられている。いや、通常の間人間にはその領域は不可能と言われていた。

だが人間は悲しきことに知能を持った生命体だった。

大崩壊直後、世界企業はアンドロイドを生み、世界の再生を目指した。大崩壊の直後は、日本の国土を徘徊するプレデターを抑えこみ、人間の可住区画の確保することが最優先され、アンドロイドが

盛んに開発された。そして世界は完全自律型兵器フレターに対抗しうる、より強い戦士を求め始めた。

替えの利く凡庸アンドロイドを常に強力に扱える存在のために、人類未踏の領域が目指されたのだ。

結果、壁を越えるための技術が生まれた。神の領域に足を踏み入れるための禁断の果実。

だが、その頃企業間の関係に軋轢が生じ、研究プロジェクトは凍結された。多くの研究関係者は各企業に買収されたか、殺害された。

「本当にごめん」

誠はほとんど泣きそうに顔を歪めていた。情報端末に表示された数値は微動だにせず、止まったままにあった。

『同調率96%』

驚異的な数字がそこに表示されていた。

誠は電子カルテを開き、美鶴の診断表を開いた。診断当初から並ぶ90台の数列の最後尾に新たに96を足した。

童顔な戦士と燃える人（前書き）

化石燃料はやはり偉大でした。

## 童顔な戦士と燃える人

「それじゃあ、また不定期になるけど。だいたい一ヶ月後をメドに診察ね」

文蔵と由佳里と再び合流したところで誠が美鶴に伝えた。

「りょーかい。んで、今度来た時は鎌錐も持ち込めばいいんだな」  
「そうそう。常備兵装の交換とかをやりたいからね」

『グウーグウーグウーグウー』

駐車場に戻ろうと誠に背を向けたところで、マナーモードにされた携帯の着信音が鳴った。文蔵が舌打ちをして、懷からスライド式携帯を取り出して耳に当てた。途端その表情が酷く強張った。眉間に皺が刻まれ、歯軋りする。

「バアーロオ！！ 警察は何やつとるんだ！！ 各組合への連絡を済ませてあるのか？ 僕は動けん。ああ、定期健診で出とる。うむ、んじゃな」

鼻息を荒くして文蔵は通話を終えた。携帯をしまうと深く息を吐いた。

「オヤっさん、どうしたんだよ？ 何か事件が起こったのか？」

文蔵の通話中の態度を見る限り、あまり芳しくない事態が起こったようだ。それでも文蔵は「お前さんらには関係ないことだ」といつて黙秘を決め込んで話そうとしない。

こちらを心配させないための配慮なのだろうが、逆に知りたくなる。それでも文蔵の頑固さを知っているが故に、聞き出す努力をすくに放棄した。

「んじゃ、帰るとするか。誠さん、仕事頑張ってください」

そう言っ て文蔵は踵を返した。出口に向かい始めた文蔵を追っ て、美鶴も由佳里も歩き出す。

「お父さん、またね」

由佳里が振り返っ て、誠に手を振っ た。誠が手を振り返してそれに答えっ つつ、美鶴に意味ありげな視線を向けた。当然美鶴は無視した。

「へー、そうなんか……」

生返事を幾度繰り返しただろうか。彼女の社会科見学の感想発表会は、まだ終わりが見えそうになかった。

帰路のミニバンで美鶴は嫌になるほど由佳里から、見学した研究施設の内容を熱く語られていた。

「凄かったな、私もあぁゆう研究とかやりたいなあ。あとね、操者の安全強化のためにバイオフィードバックを応用した技術も試作段階だけ出来てるんだっ て。精神<sup>リバイバル</sup>回帰システムの安全性の向上も目指せるみたいだよ。それにね――」

「分かったから！！ すんごいのはよく分かったから、その感動を

自分の胸の内に仕舞っておいてくれッ」

美鶴は耳を塞いで、顔を窓側に逸らした。行政区に近づいているのだろ。道は大通りになり、既に道路の車両数は数えられないほどに増えている。あの中には企業関係の人間も数多くいるだろ。彼らはやはり今回の二人の総裁の会談を快く思っていないのだろ。うか。

「なあ、オヤツさ——」

美鶴は目の前の運転席に納まった文蔵に訊ねようと、口を開いた。

「な、なんだありや!？」

文蔵が酷く驚いた声を上げた。美鶴は何事かと座席の脇から顔を覗かせた。

美鶴の眸に焰が映る。

突然、目の前を走行する自動車が大きくハンドルを切った。舗装路に黒くスリップ痕が刻まれる。自動車はそのままガードレールに突っ込んだ。耳を劈く金属音と衝突音が響き、ドンツという衝撃波がこちらのバンの窓を叩く。

何事か、と考える前に文蔵が急停止ブレーキをかけた。身体が慣性力で前方に引っ張られる。隣では由佳里が短く悲鳴を上げた。

「くそつたれ、騎士かつ！」

文蔵が悪態をついた。

美鶴の眸は道路のド真ん中で、黒い外套マントに身を包んで立ち尽くす、上背のある禿頭の男を映した。

一目では判別できぬほど人に近似された精巧な容貌。その顔造り

は人そのもの。医療用に開発された頃の名残だ。

騎士である証は、二の腕から先の両腕に装備された火焰放射器のみ。その先から大蛇の舌の如き焰が噴き出していた。

「アレは《紅燕<sup>めいへん</sup>》だ。最近犯罪に使用されて、警察の騎士管理棟に保管されていたシロモロだったが、今日然るべき研究機関に配送される予定だったらしい――」

「そこを奪われたと……」

つまりはそういうことなのだろう。美鶴は合点がいった。

ここでいう然るべき機関とは、クロヅ力などの研究開発部のことだろう。

「オヤっさんが受けた連絡はこのことだったのか？」

「おうよ。注意してくれとの連絡だったが、まさか遭遇するとは……」

文蔵は窓から身を乗り出し、後方を確認しながらバンをバックさせる。

唸りを上げて、バンがバック走する。後方を走る自動車が警笛を鳴らすも、意に返さず後進を続ける。視線の先で紅燕の姿が徐々に小さくなっていく。

「儼らは丸腰だ。生身の人間が騎士とやり合って勝てる見込みはゼロだ」

十分な距離を取るとバンが道端に急停車した。文蔵が携帯を取り出し、電話帳を開く。警察や組合の仲間に連絡をとるつもりだろう。

数百メートル前方では今なお、紅燕が火焰<sup>かえん</sup>を吐き出し続けている。

このままでは死人が出るだろう。ガードレールに衝突した車両の運転手は無事逃げ出せただろうか。

あまりお人好しな人間を演じる気はないのだが、このまま傍観者でいるのは気が進まない。

美鶴は意を決して、バンのドアをスライドさせた。空気の冷たさが肌を撫で、エンジン音が大きく聞こえる。

「君、何やるつもり!？」

由佳里が驚きに目を瞠ったが気にしない。

「おい美鶴、止めておけ! あとで厄介だぞッ」

文蔵も止めに入ってきたが従う気は毛頭ない。美鶴は背中から止める声が追いつがってきたが、振り払うように駆け出す。バンから六〇メートルは離れただろうか、急にカーゴパンツのポケットで振動が起こる。取り出したスマートフォンが文蔵の名を示していた。走りながら耳に当てる。

「何だよ、やめる気は毛頭ねえぞ」

通話越しに文蔵が息を吐き出したのが分かる。と、文蔵が話し始めた内容に美鶴の足が止まった。

「仕方あるまい。そう言うと思って調べてやったぞ。紅燕の兵装は腕に仕込まれた火焰放射器のみだ。そして火焰放射器はクセの強い武器。それゆえに使いこなすのは難しく、隙が出来やすい。が、射程距離は数十メートルある。簡単には近寄れんだろう。それに火焰放射器は焰を吐き出しているのではなく、点火された可燃燃料が噴き出されている。その火焰温度は八〇〇度をゆうに越える。上手く

周辺の車両を使って距離を詰めろとしか言えん」

文蔵が通話越しに指示した。短時間で調べてくれたのだろうか、正直ありがたかった。少なくとも紅燕の武装が火焰放射器だけであることが知れた。腕さえ破壊できれば、勝ちだ。

「オヤっさん、ありがとう」

「使うのは腕だけだぞ。馬鹿なことはするな」  
「了解」

美鶴が通話を終えようとするのを、少女の声が止めた。

「気をつけてよ」

心配そうな由佳里の声が通話越しに聞こえた。文蔵が由佳里に携帯を渡したようだった。

「ああ安心しろよ、俺を誰だと思ってる」  
「弟キャラの高校生男子」

思わずズッコケそうになった。おかしすぎる。今この状況で言われる言葉じゃない。

「おい、由佳里……」  
「冗談」

由佳里が笑ったのが分かった。心地よい音。不思議にもその笑い声で気持ちが軽くなった。

ありがとう、と声に出さず感謝して通話を終えた。携帯を仕舞い、美鶴は前方の騎士を見据えて走り出す。足の裏から伝わるアスファ

ルトの硬さを蹴って、疾駆する。

紅燕に近づくほどに夕立の時に似た、焼けたアスファルトの匂いが強くなる。周囲の運転手のいない乗り捨てられた車両の陰に駆け込んだ。ここまでで紅燕との距離は五〇メートルほど。現在、紅燕はこちらに背を向け、歩道の人々に対して火焰を放出していた。

一般人がビンなどを投げつけ、紅燕に対抗していた。だが、危険すぎる。既に数名が足などに酷い火傷を負っているらしく、悲痛の叫びがここまで聞こえる。

「さつさとやらなきゃ、まずいか」

美鶴は車の陰から飛び出し、別の車両を目指して猛ダッシュをした。かけた。紅燕が盛大に焰を吐き出したおかげか、周辺には乗り捨てられた車両が点在している。その間を縫うようにして、着実に距離を詰める。

「竹ちゃん、彼は大丈夫なのかな？ 騎士に生身の人間が挑んだって敵いつこないよね」

由佳里が不安げな声で文蔵に訊ねた。その手足が震えているのは錯覚ではないだろう。

「ああ、無謀だな。だが、美鶴の場合は、言うなれば一部騎士の状態であろうか」

「一部って、あの右腕のこと？」

由佳里は後部座席から身を乗り出して、運転席に座る文蔵の横顔を食い入るように見た。

「由佳里は知られてないんだったな。美鶴の右腕はパンドラ製の義腕であり、あれが武器になる」

「でも、合金のパンドラは軽くって、打撃には不向きでしょ。殴るにしても威力は望めないよ」

由佳里は理解しがたい様子で首を傾げた。

パンドラを次世代合金として企業がこぞって扱おうとした要因は、その硬度に対する軽量さである。同じ体積で既存金属よりもパンドラの方が半分以下の質量であり、遥かに堅硬だった。

「そうだ。美鶴の右腕は殴るためのものじゃない。アレは切断するためのものだ。それゆえに軽量化が目指された。折り紙つきだぞアレは。稀代の天才、羽城誠が設計したものだからな」

「えッ、お父さんが設計したのッ!？」

由佳里は驚きに言葉を失った。

## 熱いのに秋

「さて、どうすっかな」

美鶴は車体の陰で逡巡<sup>しゆんしゆん</sup>していた。紅燕との距離は残り二五メートルほど、目と鼻の先だ。よく此処まで近寄れたものだ、自分自身を賞賛してしまう。

火焰放射器の射程は目測で五〇メートルにも及んでいるようだった。他の銃器類に比べれば短い、実際は驚異的だ。もうまともに距離を詰めることなど出来ないだろう。

自分は馬鹿なことをしている。焼死した死体になるだけだと、憫<sup>ひん</sup>笑<sup>しょう</sup>する自分がいる。

「はは、ここに来て膝が笑ってる」

美鶴は足の震えを手で抑えつけた。

視線の先では吐き出された火焰が道路の上を跳ねていた。火焰が舐めた場所には消えずに焰の道が残される。燃える可燃燃料が線を描いているのだ。

僅かでも火焰に撫でられれば、数秒でヴェリー・ウェルダンにされるだろう。いや、ただの炭にされることも考え得る。

どうにか懷に潜り込めれば勝機はあるが、不可能ではないだろうか。

紅燕の周囲は紅蓮に囲まれている。美鶴に押し寄せる熱風が髪を焦<sup>あぶ</sup>がし、肌を炙り、喉を焼いていく。

長期化は身体が持たない。周囲に酸素が不足気味になっている。美鶴は視線の先に紅燕をしかと見据えた。紅燕はちょうどこちらに背を向けている。

「ッ！？ くッ、やばいな」

ある異変を美鶴の眸は捉えた。

前方を走り、ガードレールに突っ込んだ車両に人影が見て取れた。気を失っているのか、動く気配がない。救急車が必要だろうが、紅燕のせいで近づくことは出来ないだろう。それに車両周辺が焔に囲まれていた。

人命がかかっているのなら、尚更時間はない。美鶴は足の震えを堪えて疾駆した。

「ソニックブレード  
主兵装展開ッ」

美鶴は裾を捲り、右腕を地面に水平にして広げた。二の腕から先の義手の上側が金属音を伴って展開する。同時に間に収納されていた二枚の鋼の刀身が連結し、一振りの刀を成す。刃渡り五〇センチの小刀。それが手首の先から手を覆うように生える。

美鶴が誠に頼み込み設けてもらった武器。自分の手で皆を、由佳里を守るようにと得た力だ。

小刀は高速振動刃であり、連結した高周波振動発生機によって、一秒間に五千回の振動をしている。金属板でさえ易々寸断してみせる。

一つ問題なのは使用中は劈く悲鳴のような金属音が発せられることだ。これが五月蠅い、耳が痛い、頭に響く。

「うおおおおおおおッ」

美鶴は車体の陰から飛び出し、紅燕との残り距離二五メートルを走り出す。

気付かれる前にあの厄介な腕を切り落とせば勝ちだ。

ふいに紅燕が振り向き、両腕を前に突き出した。美鶴は咄嗟に近

くの車両の陰に飛び込んだ。  
間一髪で、火焰をかわした。振り返れば背後で焰の壁が出来ていた。

「あつぶなッ！！ 殺す気かッ」

堪らず美鶴は悪態をついた。残念ながら紅燕に存在を知られた。状況を打開する策など持ち合わせていない。美鶴は右腕の武器を意味もなく見つめた。

パチ、パチ、と何かが爆ぜる音が突如、鼓膜を揺らし始める。一気に周囲の気温が上がるのを感じた。美鶴の全身に戦慄が走った。美鶴が身を隠した車体のフレームがひしゃげ、色が黒ずみ、フロントガラスが溶解し始めていた。車体が紅燕に集中放火されていた。

「やばいッ！！ 爆発するッ」

美鶴は足が縫れ、体勢を崩しながら、車体から離れる。その瞬間を狙われれば、回避不可能だろうが、今は目先の危険を回避するのに必死だった。

車体の陰から飛び出した途端、背後で轟く爆音が鳴り、熱波が美鶴の身体を吹き飛ばした。

外熱により、燃料が引火したのだ。

美鶴は四肢が投げ出され、ガードレールに叩きつけられる。全身にかかったGによって、肺の空気が一気に押し出された。

「があッ」

痛みに美鶴は呻吟した。疼痛が身体中から発せられ、骨が軋んでいた。意識が朦朧とし、視界が涙で滲んだ。絶体絶命とも言えればいいだろうか。聞こえるのは業火の燃え盛る音と右腕から発せられ

る金属音、周辺の人々のヒステリックな叫び声。

こんなところで死ねないが、身体が言うことを聞かない。

「ぐうッ、やつぱ……」

幻聴だろうか、サイレンの音が聞こえた気がした。

『美鶴ッ！！ 生きてるか！？ 死んでも返事しろッ！！』

拡声器を通して、ふいに胸間声むつまいえが響いた。聞き覚えのある声だった。

幻聴でも幻視でもなく、回転灯を点灯させた一台のパトカーが反対車線からボラードに突っ込み、中央線を越えて紅燕に猛進した。唸りを上げ、紅燕を轢断れきだんしようとするかの如き速度を出している。

その運転席に津野田の姿があるのを美鶴は見つけた。紅燕の視線は完全に乱入してきた白黒パトカーに釘付けにされていた。またとない機会が訪れた。

美鶴は身体の悲鳴を無視して立ち上がった。朦朧とする意識は下唇を血が滲むほどに噛み、覚醒させる。

「うおおおおおおおおおッ」

これが最大の好機であり、最後のチャンスだろう。

猛然と迫るパトカーに対して、紅燕は斜め右に飛びのいてそれかわした。津野田はそれで諦めずハンドルを切り、車体を一八〇度回転させた。そのまま紅燕の火焰放射に臆せず、正面から突っ込んでいく。寸前で紅燕が斜め左に跳躍して避けた。そして美鶴は距離を詰めきった。丁度目の前に紅燕が転がり込む形になる。

「くそッ、ただの人間のガキがこんな近くまでッ！！」

紅燕の操者が舌打ちし、その視界に美鶴の姿を捉える。間近で見  
た紅燕は驚くほど人の形に近似なりされていた。が、両腕とは別に、双  
眸に浮かんでいる幾何学模様が、人ではなくアンドロイドなのだと  
理解させた。

「そろそろ幕引きにしとけよッ」

美鶴は体勢を立て直される前に、逆袈裟に紅燕の右腕を切り上げ  
た。ソニックブレイドによって造作なく寸断された腕が重力に従っ  
て、地面に落下。重厚な金属音をたてる。

「くそッ、くそッ、こいつは人間か！？　なんで紅燕の腕が切断さ  
れんだよッ」

相手操者が狼狽した様子を見せた。同時に紅燕も恐怖に怯えた表  
情をする。ほんとによく造られている。美鶴は矢継ぎ早に袈裟切り  
を左腕に対して放った。火花を散らして、腕が分離する。腕ごと切  
断されたピンシリンダーから燃料が漏れ出るのが見えた。

美鶴は反射的に顔を腕で隠した。目の前で燃料が引火、暴発して  
小さな火の玉が突如誕生し、美鶴は熱風で後ろに倒れこむ。

「あつちーなッ、おいッ」

毛先が焼けてチリチリと縮こまり、熱風が肌を炙あぶった。

紅燕は左腕部がグロテスクにひしゃげ、地面に仰向けに倒れてい  
た。両腕を失ったために上手く立ち上がれないのだらう。必死の形  
相で道路の上でもがいていた。

「くそッ、何だよ。簡単な依頼だと思っただのによッ！！　こんなガ

キに邪魔されるなんてなッ」

「逃がさねえよッ」

美鶴は紅燕の鳩尾みぞおちに右腕の振動刃を突き立てた。アンドロイドの身体を貫通した刃がその下のアスファルトまでも削る絶叫が響いた。刃を引き抜き、美鶴は武装を収納させた。紅燕はもはや行動不能だろう。憎憎しげな双眸がこちらを睨むが意に返さず、放置する。

「津野田さん、車両に気絶している人が取り残されてるんで、手伝ってくださいッ」

「んだと？ おい、早く案内しろッ」

美鶴と津野田は人命の救助へと走った。

「おい、何言ってるんだ？ 美佐子、おいッ。は？ 殺されるってお前——」

その瞬間を例えるならば、身体が次第に溶けていくというべきだろうか。痛みはなく、指先から消えていく。紅燕の操者、くにさだまさはる国定信治は戦慄した。何が起こったのか理解するのに、数秒かった。

——おれの身体が死んだのか。本体が殺されたッ。

国定の怒声も悲鳴も、もはや両腕を失くしたアンドロイドは再現しなかった。無表情に沈黙したままだった。

## 熱いの秋（後書き）

偉大な化石燃料をふんだんに使いました。

ここまで読んでくれた方々に感謝します。はい。

放火と刃物と死んだ蛇（前書き）

はい、登場人物が増えます。

## 放火と刃物と死んだ蛇

箱には災禍が詰まっていた。地上最初の女性パンドラは好奇心に負け、箱を開けてしまう。飛び出した悪に驚きパンドラは蓋を閉じた。そして希望だけが底に残された。

有名なパンドラの箱の話だ。

この世界でマグネシウム合金パンドラは、その希望を夢見て造られたのだらう。

だがきつと、人々は災禍の絶望に恐怖し、希望がある故に争うのだ。

「おいッ、何がどうなってるんだ？」

津野田は理解出来ないといった表情を浮かべていた。

既に周囲には複数のパトカーが止まっている。気絶していた女性は無事、救急車で近辺の病院に移送された。

「どうも操者本体が死んだようですね。完全にこいつはマネキン人形になっておる」

文蔵が眉間に皺を刻み、顎に手を当てて唸った。

現場に文蔵と由佳里が合流していた。美鶴は疲労でアスファルトの上に座り込んでいた。

「騎士って奴は人間側が死んだらおしめえなのか？ 精神が移されてるなら、人間の肉体が使いもんにならなくても、機械側が無事なら人間は死なねえんじゃないのか？」

文蔵は津野田が不可解だと感じた訳を知って、手を叩いた。

「肉体の死は精神の死に直結しています。アンドロイド技術は機械側の擬似脳と人間側の脳を同調させるものです。簡単に言えば、機械と人間との間で無線の情報のやり取りをしているといえればいいでしょうな。そのため人間本体が死ねば情報が送られず、アンドロイド側も動かなくなるんです」

文蔵が簡単に講釈して、津野田は憑き物が落ちたような納得した表情で頷いた。

美鶴は興味がなさそうに空を見上げていた。さきほどの文蔵の話に付け足すとすれば、アンドロイドを操る人間側に必要な処置はないことだ。非侵襲性の技術が発展し、脳にニューロチップを植えつけられない方法が広まった。あの転送装置と両目を覆い隠すバイザーのおかげで、人間はアンドロイドを意のままに操ることが出来る。

「おっと、すまねえ。仕事の電話だ」

津野田が美鶴たちのもとから少し離れた場所へ移動し、携帯を耳に当てた。

「はあ？ 火事だあ？ 居住区第六区画？ おう、分かったすぐ向かう」

離れたにも関わらず、津野田の声はこちらまで聞こえた。そこまでがなるのならば、離れた意味がないだろう。

暫くして津野田がまいったと言いたげな表情で、舞い戻ってきた。

「いや、すまねえ。近くで火事が起こったようで、ちと現場に向かわなきゃならんことになった。おい、美鶴ッ。文蔵さんと由佳里ち

やんに迷惑をかけんなよッ」

「かけねえよ。むしろ感謝されてるよ。……おい、オヤっさんも由佳里も何でそんな目なんだよ。ホントのことだろうッ」

美鶴に盛大にジト目が注がれていた。実際、感謝されてしかるべきだろうに。大家の朝飯を作り、幼馴染の夕飯を作り、操者としてお金を稼いでいるのだ。そんな視線を向けないでほしい。

「そんじゃ、俺は現場に向かうんで失礼する」

「んじやな、頑張れよ公務員」

美鶴は津野田が乗り込んだパトカーの威勢よく去っていく後姿を見送った。日はあと一時間もしないうちに落ちるだろう。空気がだいぶ冷たくなってきた。

「そんなところで座り込んでたら風引くよ」

由佳里が手を伸ばしてきた。美鶴は左手でそれに応じ、節々の痛みを堪えながら立ち上がった。

「ひつでーなこりゃ。この家に住む二人がホトケか……」

居住区第六区画の二階建て住宅に津野田は到着していた。目の前には二階部分がほぼ全焼した建築が存在していた。火は消し止められたばかりのようで、所々燻っていた。

津野田は顔の前で手を合わせ、眸を閉じた。次に開かれた眸には確かな憎悪の炎が燃えていた。

張り巡らされた『Keep Out』の立ち入り禁止テープをくぐり抜け、住宅の玄関へと向かう。

「津野田警部、こちらです。一番被害があつたのは二階の部屋で、ほぼ全焼。ガソリンでも撒かれて放火されたようです」

現場検証が続く二階の一室。鼻の粘膜を刺すオゾンの臭気が立ち込め、壁は焼け落ちていた。鑑識かんしきからの説明を受け、津野田は部屋を改めて見渡した。

まず目に付くのは部屋の真ん中に鎮座された転送装置だ。焼け焦げて見るも無惨な状態になっている。

「被害者ガイシャは二人とも鋭い刃物のような物で殺害されてから、火を放たれたようです。しかも正確に心臓を一突き。昔流行りましたよね」  
「ああ、五年以上も昔の蛇共を嫌でも思い出しちまうな。口封じのために用無しを消す。奴らの常套手段だ」

津野田は苦々しく顔を歪め、現場から離れた。

「俺の思い過ごしであつてくれ……」

懇願するように津野田は言葉を紡いだ。

被害者であつたのは、同棲していた国定信治と野村美沙子の二名。国定信治は過去にランカーライセンスを剥奪され、操者の資格を失っていた。最終序列は二六八九番、当時使用していた騎士は紅燕であつた。

紅燕を奪取したのは照合不明の騎士であるとの話だった。つまりランカーに登録されず、尚且つ企業が造ったシロモノでない可能性が高い。

わざわざ国定信治が愛用した騎士を用意してまで、何が目的なのだろうか。

今回紅燕が事件を起こした道路は、行政区や工業区を繋ぐパイプ

ラインでもある。

簡単に考えれば、再来週に迫る総裁同士の会談への警告だろうが、現場に丁度美鶴達が居合わせた事が消えない不安要素となり、頭を離れなかった。

「はあー、全く使えんかったわー。アイツホントに二千番台の人間？ 弱すぎて話しにならんわ。なに生身の人間に負けてんだか。弱すぎだろッ」

呵々<sup>かが</sup>と笑う声が夜の街に響いた。スクランブル交差点を横断しながら、一人の少年が腹を揺すっていた。全身、白いとしか言いようのない出で立ち。

真っ白い髪に、青白い肌、不健康そうな見た目とは裏腹に少年は快活な笑いを続けた。表情は直視するには恐れ多いほど、酷く歪んだ満面の笑みが張り付いていた。

「骨<sup>オステオ</sup>、変に笑っていると周囲の視線を集めるぞ」

真っ白な少年のすぐ隣りを長躯の男が歩んでいた。金髪の髪をもち、サングラスをかけ、裾の長い黒い外套<sup>マント</sup>を着ている。その容貌のために居るだけで周囲の視線を集めている。

「わあーてるつて。そう五月蠅く言いなさんなよ涙<sup>ウル</sup>。でも思い出すと笑いがとまんねえからッ」

収まらない笑いに心底困り果てているといった様子で、少年——骨<sup>オステオ</sup>は膝を叩いた。涙は呆れ果てたように肩をすくめて首を振った。

「俺達の仕事は別にあるんだ。あまり私情を持ち込むと報酬が減額

されるぞ」

「別に報酬なんてもらう気ねえーくせに。それに依頼主もオレ達に報酬を素直に払うかね？ 尻込みして逃げ出しそうじゃねえ？」

興味の薄い双眸をウルに向けて、オステオはクルクルとその場で旋回する。周囲の人々が不快な視線を向けてくるのも気に留めない。

「知らないが、どうだろうな。さて、血と連絡をとって合流するでしょうか。期限は再来週の会談までだからな」

ウルとオステオは人込みの中へと紛れ込んでいった。

放火と刃物と死んだ蛇（後書き）

自分の文章ってどうなんでしょうか。  
批評してもらえると有り難いです。

騎士同士の戦闘シーンはあと少しで入る予定です。  
戦闘を文字で書くって、難しいです。

## 居眠り男子と落書きと美人な女性

騎士が人に対して火焰放射器を使用した事件は、操者と補助者がアヴィーターサポーターが焼死した遺体となり発見され、幕を下ろした。世間では何かの陰謀だとかナントカ。想像力豊かな政治家や住民達は、それぞれ思いの空想を描いた。

事件から四日が経ち、ニュースで事件が取り扱われ無くなって、代わりに来週に迫った総裁同士の公式会談についての憶測が飛び交い始めた。形式だけのハリボテ、これまでの在り方を根本から覆す歴史の分岐点、牽制行動など千差万別といえるほどに推測が及んだ。どれかが真実かもしれないし、全て嘘かもしれない。ただ、美鶴にとって会談の結果を変えることなど不可能であり、素直にその結果を受け止めるしかなかった。

美鶴は一人、放課後の教室で意味も無く、窓の外に広がる景色を眺めた。日が沈みかけ、薄暗くなった校庭には部活動に励む西徳付属高校の生徒の姿が点在して見える。もちろん美鶴は帰宅部に所属していた。

「来週かー。どうなっかな……。総裁同士の会談かー、てか何で近畿圏では国家主席の肩書きなんだろうーな、不思議だ。それよりも何で瑠璃も残ってるかが不可解だ」

美鶴は目の前の席に馬乗りで座り、後ろを振り返っている後輩に呆れた。とっくに下校の時間を過ぎているのだ。由佳里も既にマンションへ帰宅しているにもかかわらず、この後輩は何故この教室にいるのだ。

「うち今日は仕事があるんで、小埜崎おのけさんが迎えに来るのを待ってるんですよ。あ、そうだ。先輩はまだ実際に小埜崎さんに会ったこ

「とないですよ？ 人生初体験ですよ？」  
「会ったことはないな」

素直に答えてやる。

「それじゃあ、決まりで。……ところで先輩は何で残ってるんですか？ 顔に油性のラクガキを残して何がしたいんですか？」

「……………聞きたいか？」

「遠慮します。どうせ居眠りしていて放置されたんでしょう？ 顔に痕が残ってますよ。落書きの犯人は由佳里先輩ですね。絵心があります」

瑠璃の言うとおり美鶴は七限の授業を睡眠学習し、帰りのホームルームも夢の中でやり過ごしていた。幸いに本日は掃除免除がなされた模様で、美鶴は誰もいない教室に一人残される羽目になっていた。どうして由佳里は起こすという努力をせず、起こさず落書きをするなどという努力をしたのだろうか。

携帯に送られていたメールには「まいったかッ（笑）」と打たれていた。

——落書きしたなら、ついでに起こせよッ！！ てか何で俺は起きなかつたんだッ！！

美鶴は机に突っ伏して呻き声を上げた。そんな美鶴の頬を瑠璃が面白げに連打する。

「いつてーよ。やめてくれ」

「誰にいつも会いたいんですか？ ああ、うちにですか。でもごめんなさい。うち先輩を独り占めしたいのは山々ですけど、さすがに由佳里先輩がいるんで憚はばかられるっていいですか……」

「——お願いだから話を聞き入れてくれよ。日本語が通じてくれよ」

ッ。あいたいじゃなくて、イタイだよッ」

美鶴の様子に堪えきれないといった様子で、瑠璃はこころと笑い声を上げた。

その様子に美鶴は呆れ、黒板の横にかけられた時計に目をやる。

現在時刻、一七時二三分。

かれこれ一〇〇分以上眠っていたようだ。美鶴は立ち上がり、欠伸を噛み殺した。

ピロン、と電子音が鳴る。視線を下げれば、瑠璃が携帯のカメラ機能を使用したところだった。

「ほら、記念の一枚ですよ。コレはもう芸術ですね」

瑠璃が携帯の画面をこちらに向け、撮った画像を見せてくる。そこに映る老人を見て、美鶴は絶句した。

鼻の下に伸びる鋭角的な口髭に、頬に刻まれた無数の皺、目尻の線。一瞬我が目を疑ってしまい、美鶴は慌てて自分の顔に手を当てたが、いたって健康な十代の肌だった。

「ここまで本格的に落書きされるなんて……。怒りよりも驚きが勝りすぎて、何もいえねえ」

「うちだったら、ほっぺに渦巻き模様を描いて、瞼に黒目を入れるのが限界ですよ。あつと、小埜崎が着いたみたいです。ほら、美鶴先輩も行きましょう」

ぐいぐいと瑠璃が美鶴の腕を引っ張り、廊下へと連れ出す。ひと気の無い廊下は静寂に包まれ、生徒が創る喧騒は皆無だった。

「瑠璃、ちよつと手を放してくれ。顔を洗わせてくれないか？」

「何故ですか？ 小埜崎さんもきつと今のままの方が喜びますよ」

「そういう問題じゃねえだろッ！！ 初対面でいきなりこの顔とか、正直きつ過ぎだろッ」

美鶴は瑠璃の手を振りほどいて、水道の方へと向かった。蛇口から吐き出される水の冷たさで、鳥肌が立った。果たして油性のラクガキを落とすことは、この場において可能なことだろうか。美鶴は不安を拭いきれなかった。

「遅いよ瑠璃ッ！！ ちゃっちゃと仕事終わらせて、明日までのレポートを仕上げなきゃならないのよ、あたしはッ」

「すみませんしたッ。姉貴ッ！！」

「……今日はどんな設定？」

「五つのグループを従え、族の総頭に君臨する小埜崎さんに従順な部下です」

「相変わらずね、瑠璃は……」

「いえいえ、それほどでも」

「瑠璃、てめえーは褒められてねえーぞッ！！」

傍観者でいようとした美鶴は思わずツツコミを入れた。何故か「おおッ」「という驚嘆の声が上がった。

美鶴と瑠璃は、小埜崎 叶望<sup>かのん</sup>が待っている学校の東門へとやってきていた。そこに一台の黄色に塗装されたスポーツカーと女性が二人を待っていた。ちなみに努力の甲斐あり、美鶴の顔の落書きはほぼ落としきった。帰ったら風邪を引かぬように温かなミルクを飲もう。うん、そうしよう。

「ところで君は？」

黒のスーツで身を包んだ女性が首を傾げた。見ればすごい美人であつた。すらりとした体軀、肩にかかる漆黒の髪は艶やかで、明るい色のフレームをした眼鏡を掛けている。細く描かれた眉に、キメ細かな肌は透き通る白さだ。

美鶴は驚愕に言葉を失つた。瑠璃のことだから年齢をさば読みしでいたものだろうと考えていたが、なるほど二十歳と聞いても納得がいった。

「小埜崎さん、こちらに御座おわしますのが、かの有名な美鶴先輩です」

どこがどう有名になっているのか疑問であつたが、美鶴は瑠璃にそう紹介されていた。

小埜崎は急に目を輝かせ、美鶴に歩み寄つてきた。

「なるほどー、君が美鶴君かあ。文蔵さんのアパートに住んでる子だよ。うんうん、いいよ。いい素材だよ君はッ」

「ん？ えっと、オヤっさんと顔見知り何ですか？」

「そうだね。あの人には随分とお世話になつたからね。ところで美鶴君」

「——はい？」

「女装してみない？」

美鶴はまばたきを数度繰り返し、脳内で先ほどの言葉を反芻はとずつした。さて、この人は突然何を言い出したのだろう。女装？ ただの変態かッ。

「そんな悪癖は持ち合わせてないですッ」

美鶴は後ろに後ずさり、首を全力で横に振つた。

「もしもし。小埜崎さん、そろそろ仕事に向かいましょうよ。美鶴先輩の女装画像はうちに任せてください。納得のいく仕上がりにしてみせますから期待してください。それじゃあ先輩、また明日」

瑠璃が小埜崎の背中をぐいぐい押して、スポーツカーの方へと去っていく。去り際に怪しい話をしていたことに、美鶴は冷や汗を掻いた。今後の学校生活では細心の注意を払おう。

美鶴も帰宅しようと駐輪場に足を向けた。ふと視界の隅に人影が映りこむ。

「そうそう、美鶴君。ちょうど良かったよ。君にも言うておこうかな」

ふいにUターンしてきた小埜崎が腕を組み、片手を頬に当てて告げた。

「この前の依頼の時にね、依頼人さんクライアントから聞いたんだけど、どうも蛇が出たらしいよ。不確かな情報だけど、警察側にも動きがあるみたい。このこと、文蔵さんにも話しておいてね」

手を振って小埜崎はスポーツカーに乗り込み、颯爽と唸りを上げて走り去っていった。

美鶴は暫く呆然とその場に立ち尽くしていたが、吹き付けた秋の風に身を震わせ、足早に駐輪場を目指した。

自転車を見つけたところで、ふいに思い立ってスマートフォンを取り出し、電話帳に載る相手にかけた。

数回コールが鳴り、相手が出た。

「なんだ、美鶴からかけてくんなんてめっずらしいなッ。どうした？ 事故でも起こしたか」

「いや、津野田さんにちよつと聞きたいことが、主に仕事の話で」  
「何だよ。俺にも守秘義務があるからな。滅多なことは話せねえぞ」

通話越しに津野田が髪を掻き乱す音が紛れた。

「蛇が入り込んだってのは本当ですか？」

沈黙が訪れた。風が吹き抜け、落ち葉を彼方へと運び去る。

美鶴は根気強く、相手の反応を待った。しばらくして呻いた津野田が話を始めた。

「はあ、確定事項じゃねえが、出現したらしい。クロヅカを筆頭に、複数の企業に脅迫めいた手紙が送られたんだ。内容は首都圏<sup>エリア2</sup>の全人命を人質にしている、今回の会談を取り消させろというものだ。その最後に、殻を破って顔を覗かす蛇が描かれていたらしい」

「それじゃあ、創世の蛇ですか……」

「まだ分からんが、俺たちは嚴重な警戒態勢を布<sup>し</sup>かされてる。気をつける美鶴。最悪の場合、向こうが接触してくる可能性がある。お前のことは公に出来てないからな、警察が護衛することは難しい」  
「俺は一人で大丈夫です。とりあえず、こっちも注意は怠らないようにします」

美鶴は通話を終えて、携帯を閉じた。

そして自転車に跨り、夜の街に飛び出した。

「くそッ」

胸焼けのような不快感が消えずに燻っていた。

## 居眠り男子と落書きと美人な女性（後書き）

ここまで読んでくれた方々に。

つまらない、読みづらいなど不満があっても、最後までお付き合いしてもらえたら嬉しいです。つまり完結するまで、読んでもらいたいです。

## 帰ろうにも帰れなくて遭遇

重い足取りで美鶴は自転車を転がしていた。足取りが重いのは、蛇の存在を知らされたからだけでなく、それにあいまって自転車が跳ねたからだった。つまりパンク。

「今日は厄日なのか？ 日頃の行いは悪くなかった筈だ、うん」

美鶴は独り言しながら、街路灯が照らす薄暗い通りを一人で歩いていた。身を凍らすような冷気が風と共に頬を叩く。人通りの少ない路地は酷く閑散としている。

すっかり日は落ちて、空には三日月が浮かんでいるも、辺りは暗闇に飲み込まれたかのようなようだ。あとしばらく歩けば、白夢荘のボロく寂れた姿が見えてくるだろう。文蔵にはすでに、パンクしたために遅れるという主旨のメールを送ってある。

今日の夕飯はどうするかと美鶴は考えを巡らせた。

「夜の道を一人で歩くのはやっぱり怖いもんだよな」

見慣れた道も夜ではその様相を一変させるものだ。美鶴は形容しがたい恐怖を覚えつつ、夜の居住区を進んだ。

野良猫がすぐ目の前を横切り、ビクツと全身に電流が走る。バクバクと心臓の鼓動が早まった。

「驚かせんなよッ。全く」

美鶴はほつと胸を撫で下ろした。

「何でばれたんだ？ 完全に闇に同化していたと思ったのにな」

すぐ近くの電柱の陰から声が上がった。ぎよつとして闇に目を凝らせば、確かに人の輪郭が見て取れた。美鶴は自転車を押す手を止め、数メートル離れた場所で停止した。

明らかに待ち伏せていたらしき人影。自然と警戒心が募る。

「誰だよ、あんた」

「久しぶり、美鶴くん。元気にしてたか？」

街路灯の下に身を晒し、姿を露わにした長躯の男。サングラスを掛けたその表情には笑みが浮かんでいた。長めの金髪、高い鼻が異国人のような印象を与える。

「つくづく厄日だな今日は。……神鳴の外見は、相変わらず、一目を引く形だな。どうして、何でここにいるんだ、涙」

美鶴は目の前の男のことを知っていた。いや、男は人間じゃない、騎士だ。

あのサングラスの下には幾何学模様の浮かんだ双眸がこちらを睨んでいることだろう。

かつて世界から淘汰された筈の存在。神の領域に辿り着いてしまった存在。

『創世の蛇』のメンバー、元ランカー序列四六番の高順位ランカーだ。

「ああ、あと数日後に首都圏が消えるからね。その前に挨拶でもしておこうかと。探すのに手間取ったんだ、感謝しろよ」

「エリア2が消える？」

「言葉通りにね。瓦礫の山、廃墟の群れ、灰色の世界、真っ赤な鮮血がこの一帯を満たすんだ」

大仰に腕を広げ、男は声高に笑った。まるで滅びが確実だと言いたげだ。男の声色には揺るぎない確信が濃く出ていた。

「……やらせない、絶対にさせない」

美鶴は制服の裾を捲くり、右腕を広げた。この場で神鳴を破壊すれば、阻止出来るという淡い期待があった。

「俺を倒しても、既にエリア2には血も骨も来てるんだ、無駄だぞ。それに生身の人間が神鳴に敵うはずがない。紅燕の事件では人間に騎士が負けたが、実際は起こらん奇跡だよ」

「お前ツ、見てたのかッ!？」

「ああ見てたよ。なんてったって、紅燕をあの手者に用意したのは俺たちだからな。地味に面倒だったな、あれは。……美鶴君、君はそんな義手までこしらえて俺達と戦うつもりなのか。その行為は単なる自殺行為だぞ？」

神鳴が頬を掻き、困り果てたように口を嚙んだ。美鶴は自分の非力さを、浅はかさを思い知った。右腕に収納された刃を展開する前に、こちらの息の根は止められるだろう。

「くそッ!！」

美鶴は腕を下ろし、拳を握り締め、神鳴を睨みつけた。それぐらいしか、出来る事が残されていなかった。

「賢明だ。人の勇氣は最も侮蔑すべき感情だ。憤怒、虚栄、強情、興味、愉快の集合体さ。勇氣ある行動は尊敬も崇拜もされない。愚かな行為として処理されるだけさ。そうだ、ところで博士もここに

いるんだろ？ 君のことだ。殺せなかったんだろ？」

「……………」

「黙秘権の行使は、合理的とは限らないよ。君は俺達から多くを奪いすぎたからな。抹殺命令は下されているんだよ。実行するかは別としてね。さてと、それじゃあ御暇おいとまするよ。……そうそう最後に、君に贈り物をしておいたよ。受け取るか、破棄するかは君の好きだ」

人ではありえない身のこなしで、住宅を飛び越えて男は姿を消した。残された美鶴はアパートまで急いだ。ウルが告げた贈り物の正体が気になった。アパートに何か被害がなければいいのだが、杞憂だと思っても不安が募った。

視界に映った白夢荘は平穩無事な日常の中に存在した。見飽きた黒ずんだ壁や錆び付いた赤褐色の階段が出迎えてくれた。

階段を駆け上がり、自室へと向かわず、文蔵の部屋のドアを何度もノックする。「なんじゃあ、どちらさまだ？」と訊ねるくぐもった声が聞こえた。

「美鶴だよ、オヤっさんツ。ちょっと話があるんだツ」

「美鶴かツ、良かった。心配したぞ、お前さんが帰ってこない間にいろいろと大変なことになったんだ」

扉が外側に開けられ、中から頬や鼻先を赤らめた文蔵が顔を覗かせた。

「ほれ、早く中に入れ」

美鶴は指示されたとおりに、部屋に上がりこんだ。転送装置がな

いだけでここまで広さが変わるものなのかと驚愕する。日に焼けた畳の上に置かれたテーブルの上には、広げられたツマミの数々、空のビール缶数本。

「来週に迫った総裁の会談を巡って、各勢力に脅迫文が送られたとニュースになつとる。騎士取扱組合でも緊急連絡があつたのだが、これから一週間は細心の注意を怠らずにとのことだ。そしてな、蛇の生き残りがエリア2に現れたらしい」

「小埜崎さんからその話は聞かされたよ。警察側でも蛇を搜索する動きが出てるらしい。津野田さんから直接聞いた」

「小埜崎叶望に出会つたのか。確か美鶴の後輩が補助者になつとつたな。にしても警察も動くとは……」

文蔵は顎に手を当て、さすつた。

「でだ、美鶴。おぬしに厄介な依頼の相談が来た。依頼主は《血塗れた少女》と名乗つたらしい。そやつがおぬしを指名してきたんだと。肝心の依頼内容は——決闘だそうだ」

帰ろうにも帰れなくて遭遇（後書き）

はい、何だかんだで14話まで来ました。

## 涙と血と寂れた街並み

考えを改める気はないのか。

明らかに危険な行動だ、やめておけ。数日間、そんな台詞が繰り返された。

休日の昼過ぎ、ニュースでは連日のように脅迫文に対する両総裁の対応を取り扱っていた。

エリア2の企業政府は、厳戒態勢をとり、会談に臨むことを表明。反対する組織にはクロヅカ直々に実力行使に出るとした。会談はあさつてに、クロヅカの本社ビルで行われることとなっている。多くのランカーがその護衛任務のために雇われた。さすがに6千番台のランカーなどには声はかからなかった。

ただし、そんな緊迫する情勢とは別の理由で、美鶴達の日常も切迫した様子を見せていた。

「今回の依頼はちとまずいかもしれん。前払い金が既に払い込まれ、指定地は外部居住区だ。依頼内容はそこにいる騎士との戦闘」

文造は危険な匂いがすると警告し、依頼の破棄を迫ってきた。

普段であれば文蔵もここまで頑なに、否定をしてこないのだが。いや、否定は当然か。

「死亡フラグが立ったか？」

「ああ立ったぞ。消されるパターンだ。どこの馬の骨か知らんが、おぬしを危険と見なした人間が抹消しようと考えてる可能性がある」  
「六千番台のランカーを消すとかどんだけ小心者だよ」

美鶴は笑った。表面上に取り繕った笑いだ。どうも文造の目は誤

魔化せなかったようだ。

「茶化すな、美鶴。おぬしは先日、奴らの一人と遭遇したのдар？ 組合側でもその行方を追っているが、未だ手掛かりは見つかっておらん。現状では無闇な行動は慎んだ方がよいぞ。万が一、奴らの手の者ならばどんな手を使うか分らん。ただでさえ会談の脅迫騒ぎで、危険が高まっとるんだ」

「ああ、分かった」

「それじゃあ、依頼は破棄するんでいいな——」

「オヤっさんは由佳里を守ってくれ。由佳里、俺を転送してくれ」

「——なッ、正気か！？ 美鶴ッ」

文造は立ち上がり、肩を震わせた。口角泡を飛ばし、拳を作る。それに対して美鶴は真っ向から向き直った。

「正気だ。ちょっとばかり俺の罪を清算するだけだ」

美鶴は踵を返して、転送装置の中に乗り込む。心配そうな由佳里が覗き込んできた。

「本当にいいの？」

由佳里が問いただした。それに対して美鶴は首を縦に振った。

涙が贈り物だといったものがこの依頼であるならば、その決闘の

相手が創世の蛇のメンバーである可能性が高い。

「ああ、頼む。万が一、蛇が出てくるなら滅多にない機会だ。すぐに終わらせて、ここに戻ってくるさ」

「……やはりおぬしは阿呆だ。ちッ、由佳里もお前さんの身体も任せておけ。出来うる限りの努力はしとこう」

文造が部屋を出て行き、隣りのドアが開けられる音が聞こえた。

「じゃ、精神転送を開始するよ。負けないでね」

「ああ、期待しとけ」

美鶴はバイザーをかけ、座席に後頭部を密着させた。ゆっくり深呼吸をする。

「同調開始、認証完了、精神転送開始ッ。<sup>トランス</sup>三、二、一」

——必ず勝って、守ってみせるさ。

「——零ッ」

開けた視界に飛び込む部屋の様子。鎌錐の身長のおかげで幾分視線が高くなる。

見上げるようにしている由佳里が手を振った。

「行つてらっしゃい」

「ああ、行つてきます」

美鶴は玄関へと向かい外へ出た。当然のように転送時には気温を感じられない。視覚。聴覚や多少の痛覚はあるも、外熱を感じることは出来ない。それでもこの身体を本当の肉体のように感じてしまう錯覚。アンドロイド技術に今更ながらに驚嘆する。  
昼過ぎの陽気な気候だ。

「気張ってけッ、美鶴!!」

不意を突く声に左を向けば、一体のロボットが凝然と立っていた。

身長二メートルはあるだろう。遠隔操作して動かすアンドロイドだ。無骨なロボットの陰から文造が顔を覗かせていた。その手には携帯ゲーム機が握られていた。昔、人気を博したシロモノだ。その画面にはロボットが見ている映像が表示されているだろう。

文蔵が自身の手で作り上げたロボットだ。騎士の整備士としての活動を行う傍ら、そうしたアンドロイドの開発もしている。美鶴の目の前にあるアンドロイドは文蔵と誠が共同制作したものだった。

——名前はなんだったけな。

「遠隔操作型ロボット、アレキサンダーを出してやったぞ。騎士には到底及ばぬが、無いよりはましだろ。さっさと終わらせて戻ってこい」

文蔵がエールを送り、美鶴は鎌錐の左手親指を立てた。

アパートの二階から飛び降りると、上から声が飛んできた。

「今晚はキムチ鍋にしよう！！ 依頼を終わらせて、買出しに行くからね！！」

由佳里が大きく手を振りかざしていた。

由佳里の意見に文蔵も賛成するようにガッツポーズをとる。

買出しといっても、ほとんどこっちは荷物持ちにされんだよ。でも久しぶりに鍋か、いいな。

美鶴は外部居住区を目指して、跳躍した。

外部居住区と隔離壁の中を繋ぐ非認可通路には様々なものがあるが、代表的なものは地下通路だろう。

ただし、居住区に巡らされた下水道設備には、暗視補正カメラが設置され、騎士や違法入国者を監視している。実際、過去に何度も

逮捕者が出ている。どれもこれも監視カメラに見つかり、警備の人間に捕まったためだ。

ただし、完璧なものは存在しない。蜘蛛の巣のように巡らされた下水道の全範囲をカバー出来ることはない。必ず穴が存在している。その場所さえ把握出来れば、監視カメラに捉えられずに外にでも、中にでも自由に通行できる。それ相応の時間や手間がかかり、億劫ではあるのだが。

「やっと出たな。さてと場所はどこだったかな」  
『現在地から北に一キロ地点だよ』

由佳里の声が頭に響いた。

それに従い美鶴は鎌錐を跳躍させる。鎌錐の逆間接脚はとりわけ機動性に優れている。軽く五〇メートルは一度に跳ぶことが可能だ。半壊したビルの間を抜けていく。大崩壊によって朽ちた都市の風景は、殺風景な灰色に染まっていた。当時にプレデターが際限なく破壊活動を行ったためだ。その痕跡は見渡す限りに存在した。

『止まってッ、センサーが反応した。左手のビル一階。人じゃないみたい』

捕捉カーソルが表示されていないことから、危険はないものらしい。

美鶴は常に関きつぱなしの自動ドアをくぐり抜け、一階エントランスホールに踏み込んだ。

十年近く経って、堆積した落ち葉を踏みつけ、進んだ。中の様子は当時の悲惨さを訴えていた。弾痕が無数に残る壁には未だ黒くシミが残っている。大理石の床には何かの足跡状に穴が作られ、その周囲に亀裂が走っている。受付カウンターは見事に粉碎されていた。当時にプレデターの侵入を受けたらしく、手当たり次第に破壊され

ていた。

想像するに、この会社員は皆殺しにあっただろう。そう思うほどの凄惨さが存在した。

突如、鎌錐のカメラアイが崩れた壁の陰に動く物体を捉えた。

錆び付いた胴体からは歪な駆動音が聞こえる。相手もこちらに気づいたらしく、動きを活発化させた。脚部を損傷、損失しているらしく不協和音が続く。

「犬型のプレデターか。久しぶりに見たな」

『プレデターの原動力って、電力だよな。よくまだ動いているよね』

通信越しでも、由佳里が驚愕しているのが分かった。

「奴らは送電線から直接充電出来るからな。それが奴らの恐ろしさだ。燃料は戦地で蒐集し、破壊を続けた。今では外部居住区への電力供給は止められているにも、まだ動けるのがわんさかいる」

『全然見ないけどね』

「地下鉄とかデパ地下とかに入り込めば、嫌でも遭えるさ。電力消費を抑えるために地下に潜って、雨風を防いでるんだ」

美鶴は言いながら、犬型プレデターの胴体を踏み潰した。スパークが散り、痙攣したように身を震わせた後、プレデターは機能を停止させた。

ランカーには課せられた義務が複数ある。

その一つが外部居住区でプレデターに遭遇した場合には、見過ごさず破壊することだ。

何とかプレデターを一掃したいも、企業間の軋轢で思うように作業が難航した結果、この形にされている。

「よし、行くぞ。由佳里、サポートは頼んだ」

『任せてよ——ちゃっちゃと終わらせて戻ってこいッ』

由佳里の澄んだ声が途中からザラついた野太い声に変わる。

『竹ちゃんとの二重態勢で挑むよ』

それは心強い限りだ、美鶴は目的地に急いだ。

## 血塗れた少女と蠅螂のワルツ（前書き）

難しい難しい、戦闘シーン。

読むのが耐え難くても、すみませんとしか言えません。はい。

## 血塗れた少女と蠅螂のワルツ

目的地に指定されたのは、開けたスクランブル交差点。玉突きになった車が乗り捨てられ、根元から折れた信号機や割れた舗装路からは植物が伸びていた。窓ガラスの無くなったビルが見下ろす廃墟と化した大都市。

美鶴は手が汗ばみ、背中に脂汗が滲むような感覚を覚えていた。鎌錐にはそんな機能はないのだが、そう思うほどの事態に陥った。先ほどから美鶴の視界にはセンサーが探知した存在に対してカーソルが表示されていた。その数、およそ四〇。

ここまできるとは予想外だった。視界の大半を赤いカーソルに埋め尽くされている。

『そんな、こんな数の騎士が一度に……気をつけてよッ』

美鶴は答えず、右腕の主兵装デスサイズを展開させる。プライムモーター 原動機の駆動音が大きくなり、鎌錐が戦闘態勢をとったことを知らせる。

「ッ!？」

突如、廃ビルの三階から人影が宙に躍り出た。飛び立とうとするかのように、腕を羽ばたかせて墜ちる。舗装路に落下すると共に地面が揺れ、金属音が響く。同時に視界のカーソルが一つ消失した。あれはデッドラインの騎士だ。企業の騎士が何故ここに。美鶴は素早く周囲を見渡した。そして、この異様な数の敵の正体を理解した。

捕捉したものは皆、既に破壊された騎士だ。

車両に叩きつけられたもの、四肢を無くしたものの、胴体が二つに折れたもの。どれも辛うじて機能出来ている騎士ばかりだった。つ

い先ほどここで戦闘があつたらしく、どれも大破していた。刻一刻とカーソルの数は自然消滅していく。

「何があつたんだ？」

『前方、ビルの三階に反応ありッ』

由佳里の指示に美鶴は身構えた。つい先ほどに騎士が躍り出た場所だ。

その場所に真つ赤なコートの少女が慄然と立っていた。空の蒼と対比し、周囲の灰色から浮き出る色。

二週間前に美鶴とぶつかった少女だった。忘れようにも忘れられないだろう。容姿端麗、眉目秀麗を陳腐な言葉にさせる容貌。

ただしその手には全長三メートルほどのある大振りの斧槍。バルディッシュ いや、

あの斧頭の大きさは三日月斧に似ていた。その姿はまるで鬼神を思わせる偉容を放っている。視界に現れたカーソルが少女が人間ではないことを示した。

つまり彼女アレは騎士だ。

「キシシ、やっと来たか。時間になつてもおめえが来ねえから、暇つぶしに近くの騎士どもを一掃してたんだ。相変わらず、おせーよ顎アギトッ」

『アギト？ てかあの子、君が一目惚れした子じゃんッ——何？』

美鶴が惚れただとッ！？」

「ちよつと待てッ。惚れちやいねえぞ！！ オヤっさんも反応すんなよッ。出来れば指示をくれよッ」

美鶴は急に脱力した。今が依頼の遂行中で、敵が目の前にいることを忘れかける。

にしても一体でこの数を殲滅したのか。待ち合わせは一〇分弱の遅れではあつたが、その時間でこいつらを破壊するなど可能だろう

か。ここに来るまでに剣戟けんげきの音も発砲音も聞こえはしなかったのだ。つまりわずか一〇分もかけずにこれらを一扫したのだろう。あの見た目であっても、油断は禁物であろう。

「何、駄弁だべんつてんだよ。もう戦いを始めて構わないのか？」

「待った、一つ聞きたいことがある。中の精神しんは男か？」

美鶴は不吉な笑みを浮かべた少女に聞いた。別本物が可憐な少女であることを期待したわけではない。決して。

「オレを忘れたか、アギトツ。オレは血ちだよ。性別は男だろッ」

発声器の調整で少女の声色であつたが、少女はその顔立ちからは想像出来ない、粗暴な言葉使いで答えた。手の中で軽々とハルバードを回し、円を描く。ここまで風切り音が聞こえてきた。

そうか、男なのか。美鶴は少なからず落胆した。ブラドと名乗った操者とは面識があつた。

確か無精髭を生やした二〇代後半だつたはず。今は三〇代前半あたりか。

個人の趣味であろうと思うが、些か心配に思う。少女の騎士が、危険な臭いがする。

『ちよつと君、あの子——じゃなくて彼の正体が分かつたよ』

興奮気味に由佳里が通信をしてきた。奴の正体とは何だろうか。気になった。

「なんだよ、その正体って」  
『重度のロリコンッ！！ 病院に通わなくちゃいけない程度の重症だよ』

聞いて損した。美鶴は溜息をついたあと、言葉を紡いだ。

「今此处でいう台詞か？ そんな情報あったって意味ねえーじゃん！ ！ どう活用しろと！？」

『よつ、ロリコンって言えば頭に血が昇って判断ミスするかも？』  
「ありえないな。しかも語尾に疑問符つけたよな、さっきッ」

由佳里の近くで文蔵が盛大に溜息をつく音が通信に紛れる。美鶴も呆れてしまった。

なんとも気の抜けた状態で、敵の騎士を見据える。

「よし、準備は出来たか。おっと、一つ名乗っておこう。オレの騎士であるこの子は、戦猿いんぐりって名だ。イザリンと呼べッ」

「『断固拒否ッ！！』」

美鶴はデスサイスを構え、跳躍した。踏みつけたアスファルトが砕ける。一気に目の前のビル三階まで跳び、袈裟切りを繰り出した。それに伴い『引き剥たいすこネクタがすもの』、射程距離を持つ斬撃を放つ。

少女が立っていたコンクリの床が粉碎し、あたりに石片や粉塵を撒き散らした。

始めから全力でいかなければ、きっと負けるだろう。相手があの血塗れのブラドもつもつなら尚一層のことだ。

視線の先で濛々もつもつと立ちこむ白煙を水平に分断して、ハルバードが横薙よこはぎされた。咄嗟に美鶴はデスサイスで刃を受け止める。右半身に衝撃が走り、鎌錐の機体が左方向に吹き飛ばされる。凄まじいりよく脅力だ。美鶴は空中で態勢を建て直し、壁が崩れ吹き曝しになった廃墟ビル二階に飛び込む。並べられていた机を押しつけ、鎌錐が静止する。

「あの見た目でこんな莫迦力かよ」

既に人目を引く朱い外套コート姿は見当たらない。視界に表示された力  
ーソルはどれも停止したまま身動きをしていない。

『下方より飛翔体接近ッ、構えて』

由佳里が敵の動きを探り、指示を飛ばす。美鶴はそれに従い、デ  
スサイズを構えつつバックステップをとった。途端、寸前まで鎌錐  
が立っていた床が突き破られる。コンクリの破片が吹き飛び、穴か  
ら大破した騎士が飛び出す。

「なッ、こいつらデッドラインの騎士!？」

『後方より高速接近中ッ!! そっちが戦猿いさりだよッ』

こいつらは単なる囃か。にしても動きが早すぎる。敵はこいつら  
を投げ飛ばして、ほぼ同時にビルを跳び上がったきていた。それに  
騎士を打ち上げて、コンクリの床を抜くとは。

改めてその怪力に舌を巻いた。

美鶴は上半身を捻り、右腕を大きく佩いた。デスサイズ紙一重で戦猿は跳躍  
してかわし、天井を蹴り飛ばして跳ね返る。手にはハルバードが握  
られ、槍の穂先が向けられていた。

「脆弱になったなッ、アギトッ!!」

「俺は三ノ瀬 美鶴だ。それは俺の名前じゃないッ!! その名で  
俺を呼ぶんじゃないよ」

美鶴は後ろに跳んだ。目の前でハルバードが床を陥没させ、崩壊  
させた。

ふいに訪れる浮遊感。

「まずッ……飛ぶぞ由佳里ッ」  
『了解ッ』

ブースター  
加速機を起動、背中に四枚の光翅が生え、世界が引き伸ばされた映像になる。落下する瓦礫の中から抜け出し、道路を挟んで反対のビルの前まで飛ぶ。錆びて赤褐色に染まった車両の上に着地し、ぐしゃりと車を押し潰した。

「くそ、捕捉できねえッ。由佳里ッ、奴の居場所は分かるか？」

戦猿の動きの俊敏さに鎌錐の捕捉機能が完全に遅れをとっていた。カーソルが表示されたときにはすぐ目の前に迫られている。このままだと防衛一方になってしまう。

『難しいね。送られてくるデータじゃ後手になっちゃうよ』

由佳里が悔しげに齒軋りした。向こうでも必死に打開策を考えてくれているのだろう。

手っ取り早い解決法なら無きにしも非ずだ。

相手がこちらよりも数段捷い<sup>はや</sup>のなら、こちらは相手よりも手数を増やすだけだ。

「由佳里ッ、副兵装を展開する」

『えッ、使用しちゃうの？——おい美鶴、一つ聞きたい。あやつは蛇か？』

「使わせてくれ。あいつは創世<sup>ボレアース</sup>の蛇の一人、元序列八七番のランカーだ。その頃の異名は《血霧の殺戮人鬼》だった。赤をトレンドカラーにしてた奴だ。昔の愛用の騎士はもっと大人の女性型だったは

ずだけど、趣味が悪化したみたいだ。ちよいと、本気でいかないとヤバそうだ」

『仕方がない。おい由佳里、ロック解除するんだ——了解だよ』

美鶴の視界に施錠解除アンロックの表示が現れ、副兵装の使用が許可される。多くの騎士には主兵装とは別に複数の兵器が常備されている。鎌錐に搭載されているのは、デスサイスとは別に一種類だけ。遠隔思考操作型兵器と呼ばれる小型兵器だ。

「副兵装展開ッ、フアングッ!!」

鎌錐の背部から計八つの小さな漏斗型の金属製飛翔体が射出され、音もなく浮遊し四方八方に展開する。同時に美鶴は陶酔感のような意識が気化する感覚になる。一度に複数の映像や、あらゆる角度から見た敵の状態、位置情報が頭に流れ込んでくる。

思考操作型小型兵器、フアング・ビット。全自動行動ではなく、無線で操者の思考を読み取り、行動をとる。使用には非常に精神面での疲労がある。騎士の擬似脳による脳機能の使用拡張がなければ、思考の処理が追いつかないだろう。尚かつ美鶴の場合は、一度に八機も操作している。その事実是非現実的な数値だろう。

周囲に展開させたフアングが高速で疾駆するブラドを視認する。その位置情報を美鶴に送信する。同時に由佳里側にも情報が送信されている。

『八時の方向、ビル四階だよッ』

由佳里が驚きの色を濃くして声を上げた。当たり前の反応だろう。気付かぬ合間に背後まで回りこまれていた。

「いけッ、フアングッ!!」

ビットの後部にプラズマエンジンを点火させ加速。思考に忠実に飛翔体が滑空していく。その先にはブロンドの髪をなびかせた少女の騎士がいた。

「そんな子供騙しはきかせえーぞッ」

ビットに気付いたブラドが、ハルバードで空間を薙ぎ払う。

それを生き物めいた動きで華麗に回避して、飛翔体は距離を詰める。漏斗型の飛翔体の頭頂部は鋭角な刃が突出している。展開中には高熱を発生し、鋼鉄さえ溶断することが可能だ。

「くそッ、思考遠隔操作かよッ。けどなッ」

ブラドは人間では到底不可能な距離を後ろ向きに跳んだ。あれが騎士であると理解していても、少女の形での所業のために美鶴は違和感を拭いきれない。

まるで本物の人間が戦斧を持って、軽々と飛び回るように見える。そのまま危なげなく道路の上に着地を試みせた。あそこまで自然な動作が出来るには、相当な同調率も必要だ。九〇台前半の数値は叩き出していることだろう。

「シシッ、目障りだよッ!!」

戦猿が上半身を捻り、ハルバードを佩いた。逆巻く風を起こして刃が線を引いた。避けそびれた飛翔体が二つに断割、スパークを撒き散らして撃墜する。

くそ、同時に八つは少し無理があつたか。早くも一つを失った。美鶴は悔しそうに呻くも、気を取り直し集中する。動揺すればフアングの動きが雑になり、格好の標的となってしまう。このまま一

一つ一つ破壊される前に、数で勝っているうちに勝負を決めておきたい。

「君ッ、大丈夫なの？　あまり無理に操作すると戻ったときの反動が大きくなるよ」

「ああ、大丈夫だ。これで終わりにさせる」

美鶴は深呼吸した。実際には出来ないが、不思議と気持ちちが落ち着く。

――1、2、3、4、5、6、7、これで終わってくれッ。

美鶴は残りの七つを同時に操作しながら、鎌錐を跳躍させ一気に戦猿に詰め寄った。

デスサイスを最大まで展開し大剣に変え、戦猿に肉薄する。四方からファングを接近させ、回避不可能な攻撃陣を生む。

「終わりだッ、ブラド!!」

「危ないッ、回避行動を取ってッ!!」

少女の形をした騎士の赤い外套から取り出された球体が、鎌錐との間に転がった。爆発音響閃光弾だ、と理解したときには視界が白濁し、炸裂音が空間を満たした。

「後ろに跳んでッ!!」

悲鳴に近い叫喚が頭に響き、考えるより先に動いた。踏み堪えて無理に慣性力を殺して、後ろ向きに跳躍。直後、右腕に電流が走るような疼痛が発せられた。美鶴は錆び付いた車両の横腹に突っ込み、鎌錐は停止した。

次第に光が消え、世界が灰色に戻る。

ジジッ、と不快な音が上がり、右腕を見れば二の腕から先が見事に消失していた。鋭利な刃で切断された断面は放電を繰り返した。視界に右腕部破損の図示が点滅している。

顔を上げれば、五〇メートル前方にアスファルトに突き刺さる形で、デスサイズが存在していた。その周囲には複数の残骸が乱雑される。

「くそッ、やられた。フアングも全機破壊されたッ」

美鶴は悪態をついて、立ち上がった。状況はかなり切迫していた。鎌錐の主兵装も副兵装も破壊された。

「顎<sup>アギト</sup>、やっぱし脆弱になったなッ！！ カカカツ」

哄笑が響き渡る。閑散とした廃墟の交差点の中央で、真っ赤な少女は踊るように舞う。

「大丈夫？ 君ッ」

由佳里の心配そうな声が響くが、美鶴は大丈夫だと言った。強がったわけじゃない。ここで負けることは許されていない。

「まだ、まだだ。俺は守らなければいけないんだ。それが償いだろ」  
「……………お前さんは莫迦だ」

文蔵が寂しく呟いた。

## 血塗れた少女と蠅のワルツ（後書き）

そろそろ物語は後半、終盤ですね、きつと。  
あんまし伏線を回収出来てないんですけどね。

## 蠟の翼じゃ羽ばたけない

状況は切羽詰っているが、絶体絶命じゃない。まだ、まだ可能性は残されている。

美鶴は軋む鎌錐の機体の体勢を建て直した。幸い加速機は破損せず、熱暴走も起こしていない。視線の先、距離計が戦猿との距離を五〇メートルと示す。

戦猿はデスサイスの周囲を軽やかなステップで舞っていた。ハルバードがアスファルトを切削し、舗装路に円を刻む。

「もう勝負あったろ？ 美鶴、おめえじゃ無理だ。今のお前じゃ俺には勝てねえーよ。もう少し齒ごたえがあると思っただんだがな。やつぱし牙は抜かれたんだな」

ブラドが遊びに飽きたように肩をすくめた。

「まだ鎌錐は死んじやいねえよッ。勝手に勝敗を決めんなよブラドッ」

美鶴は吼えた。残された手段は一つだけだ。主兵装が残されていれば、まだ他にも手札があったのだが。この失敗は許されないだろう。

「由佳里、あとで鎌錐の整備頼むッ」

美鶴は少女に猛進した。少女は眦を大きく開いたが、すぐに嘲笑を浮かべた。すぐさまハルバードを振りかざそうと身構える。

『君は馬鹿なの！？ 無謀だッてッ』

由佳里の警告に従わずに、加速機ブースターを起動させた。空気を震わす羽音が唸り、冷却機ラジエーターの稼働音が大きくなる。美鶴は力強く踏み込んだ。

「うらあああああッ！！」

ブースターによる超加速。瞬時に世界の輪郭がぼやける。不鮮明な世界が後ろに流れていく。

それでも目の前にある少女の顔だけは、はっきりと映った。憐れだとも言いたげな表情をしていた。ふざけるな、自虐になったわけじゃない。

「血迷ったかッ、アギトッ！！」

嘲笑を向けてくる少女に美鶴は止まらずに跳躍した。斜め左から戦斧の刃が振り下ろされるのが視界の隅に映った。避ける動作は採らずに距離を詰める。ハルバードの一撃を受ければ、鎌錐は高確率で大破させられるだろう。だがそれでも。

「――終わりだな、アギトッ。キシッ、ジ・エンドだ」

美鶴は、振り下ろされたハルバードを故意に鎌錐の身体で受け止めた。絶叫のような金属音が響く。金属片と共に火花とスパークが散り、左脇腹に深々と刃が食い込んだ。全身に激甚の衝撃が走る。

騎士の身体での出来事であるにもかかわらず、美鶴は自身の身が挟られたような痛みを感じた。今現在の同調率はきつと限りなく100%に近づいている。より鮮明な世界の認識は、より正確な痛覚の認識も生んだ。

「かはあッ。お………終わりはお前の方だ、ブラドッ。………流石にゼ

口距離は回避できねえよな」

美鶴は背部から二つの飛翔体を射出した。副兵装、遠隔思考操作型兵器。<sup>ビット</sup>これが最後だ。

「くそッ、まだ残してたのかッ」

ブラドが憎々しげに表情を強ばらせた。ハルバードを片手に回避動作を採ったが虚しく、ファングの刃は少女の身体を貫通した。戦猿の手からハルバードが離れ、身体は宙を舞ってビルのコングリの柱に叩きつけられる。柱に亀裂が走り、少女はファングの刃によって、地上六メートルの地点に串刺し状態で静止した。

「キヤキヤキヤ、こいつは一本取られた」

奇声あげてけたたましく笑う少女。

この闘いの勝敗は両者共に戦闘不能の相子<sup>ドロ</sup>であろう。美鶴は現状の確認を急いだ。

戦猿<sup>いざり</sup>はあの状態を見る限り、身動きは取れなさそうだ。鎌錐に至っては全武装を失い、戦う術からない。それに腹部に受けた斬撃による損傷で下半身の動きが不可能だ。

頭上には雲ひとつない晴天が広がっている。同調率が低下しているのか、感覚が鈍くなる。ほとんど痛みを感じることはなくなっている。

とりあえず依頼は終了したことで構わないだろう。さて、どうやって帰還するか。

「牢獄から逃げ出し、太陽を目指したイカロスの話を知っているよな」

突然にブラドが話し始めた。何が言いたいのだろうか。その話なら知っている。蠟で固めた羽で空を飛んだイカロスが太陽の熱で蠟が溶け出し、落下するという話だった。

「イカロスが空を飛んだこと自体、不可能なことさ。人間の胸筋では羽ばたくことは出来ねえだろうが。シッ、それにな、蠟が溶け出す温度だったらイカロスが先に火傷しちゃうだろう。イカロスって奴は莫迦か、超人だな」

「あんたは何が言いたいんだよ」

「——イカロスが飛ぶことを出来たとして、結局は死んだ。じゃあその原因は準備不足か？ 違うだろ。奴の死因は己の慢心だ。愉悦に浸り、空高く飛んだ時点でイカロスは死んだんだよ。つまりだ美鶴。お前は俺を倒せると思っていたんだろうが、残念ながらこの場所に来た時点でお前の負けだ。決闘なんてな、お前を連れ出すための方便さ。まあ楽しかったけどな」

『君ッ……………助け……………騎士が突然……………竹ちゃんが……………きゃあッ……………』

ノイズの音が大きくなった通信越しに、由佳里の悲鳴や切羽詰まった声が漏れた。ガラスが碎ける澄んだ破碎音も混じる。やられた。美鶴の頭の中が一瞬で真っ白になった。

「おい由佳里ッ！！ どうしたんだよ、おいッ」

「そろそろ時間だからな。通信妨碍ジャミング がかかったか」

ブラドがさも愉快そうに笑い、戦猿の口元が歪められる。

「じゃあな、アギト。いや美鶴だったな。カカカツ、これはお前が招いた災厄さ——」

ふいに糸が切れたように戦猿が力無くうなだれた。由佳里との通信が全く繋がらず、痛いほどの静寂が残される。

「強制送還シャットアウトかつ、くそ命知らずの快樂犯がッ」

強制送還の機能は精神帰還よりも危険性が高く使用は禁止されている。現在のほとんどの騎士には使用できない規制がかけられている。美鶴はもはや動かない脚を何とか動かそうと躍起になった。微動だにしない脚部。

焦る気持ちが募っていく。

日が暮れるまでにはまだ時間が残されている。天辺を越えた太陽がじれったく美鶴を照らした。この事態を打開する方法はないのか。

——由佳里ッ。

## 狼は少女を喰らう

美鶴がブラドとの戦闘を終えた丁度その頃。ジャミングがかかる数分前。

遠く離れたボロアパート《白夢荘》で由佳里は、ぐっと伸びをした。

「竹ちゃん、彼を迎えに行かないと駄目みたい。鎌錐が大破しちゃって身動きが取れないみたいだよ」

通信端末に表示された情報が、騎士の破損状況を伝えていた。画面を見ただけで頭痛がする状態だ。修理するには、柴川重工の研究棟に持ち込まないと駄目そうだ。

「やれやれ、厄介だな。もしこのタイミングを狙われたらお仕舞いだろうに」

げんなりした文蔵が重い腰を上げた。文蔵と由佳里と機械は揃って、美鶴の部屋で待機していた。転送装置を挟んで窓際に由佳里が座り、文蔵は卓袱台の傍に腰掛けている。このまま何事もなく終わって欲しい。由佳里はそう願った。

「それじゃあ、どうするか。心配じゃから、組合の連中にも連絡して代わりに行ってもらうか」

「そうだね。そのほうがいいと思うよ。それじゃあその旨を伝えておこ——」

「由佳里ッ、伏せるんだッ!!」

文蔵の怒声が響き突然、由佳里の背後で部屋の窓が粉碎した。細

かなガラスの欠片が飛ぶ。頭上からガラス片が降りかかった。由佳里は悲鳴を上げて、しゃがみ込んだ。由佳里の横を駆け抜けて、アレキサンダーが窓辺に突進した。

由佳里が振り向いた先には一体の騎士がいた。両腕の先から伸びる長剣が目をついた。あれは知っている。あれは命を奪う怪物だ。過去の記憶が蘇る。

由佳里は恐怖に唇を震わせた。身体が固まってしまい動けない。まるで石像にでもなったかのようなだ。

視線の先ではアレキサンダーと侵入者が取っ組み合っている。ふいに腕を強い力で引っ張られた。

「由佳里ッ、お前さんは離れているッ」

文蔵が片手に操作作用携帯ゲーム機を持ち、その背後に由佳里を隠した。

「まーたく、あんた誰？ 俺はさあ、その子に用があるわけだよ。アギトにも言いたいことあるんだけどさ。とりあえず時間がないんだなこれが。というわけでその子、博士の娘である羽城由佳里の身柄を渡してもらおうか」

目の前の騎士がアレキサンダーを振り払い、迫ってきた。どうして目的が美鶴の本体ではないのだろうか。由佳里はずるずると後ずさった。

「由佳里、逃げるんだッ。こやつが目的をおぬしといったんだ。早く逃げるッ」

文蔵がロボットを再起動させ、敵の動きを封じようとした。

『目ざわりだつてッ』

それを軽くあしらい、騎士は距離を縮めてくる。由佳里は懷にあったスパナを力任せに投げつけ、出口に走った。逃げながら美鶴へ通信を入れた。

「君ッ、聞こえる？ 助けてッ騎士が突然やって来たの。竹ちゃんが今、きやあッ……………」

『おい……里ッ！！ どう……んだよ、……ッ』

由佳里の目の前に、もぎ取られた機械の腕が飛翔した。アレキサンダーの右腕部だ。

「由佳里、待てッ。止まるんだッ！！」

由佳里はドアを開け放った。途端、目の前に騎士がいた。両腕から伸びる長剣が首筋に突きつけられる。

『はい、残念でしたッ』

「美鶴助けて……………」

いつぶりだろうか、この口からこの名前が出たのは。同時にある感情が大きくなった。いつしかこの胸の大半を彼が占めていた。今までの日常に甘えて、先延ばしにしていた感情。今更に後悔した。

非情な現実には情け容赦なく、少女の日常を奪う。

## 少年は少女を守るために騎士となった

「どうすればいいんだッ。何か、何か方法は……」

美鶴は闇雲に鎌錐を動かし、ひび割れた舗装路の上でもがいていた。パニックに陥っていたとも言える。事態の解決方法がいつこうに思い浮かばない。今こうしている間にも、由佳里や文蔵は死地に立たされているのかもしれないのだ、早急に駆けつけたいという気持ち之急ぐ。脚部さえ動いてくれたなら、今すぐにも向かうことが出来ただろう。

周囲を廃墟で囲まれた空間。修理の道具など望める筈はなく、美鶴自信その手の技能を身につけてはいなかった。たとえそれらがあっても、直すには相応の時間が必要だろう。ほんの数分では到底修理出来はしない。そして、一つ重大な事実が美鶴をさらに切迫させていた。

『活動限界〃燃料残量低下〃9〃45』

鎌錐が受けた損傷部より電力の漏洩が生じ、騎士の活動限界が近づいていた。視界の隅でカウンタダウンが進んでいる。数値がゼロに達した時、騎士に設けられた生命維持機能が発動し、騎士の活動停止が起こる。言うなれば冬眠状態だ。それが長期に及べば、精神<sup>リバ</sup>回帰<sup>イタル</sup>によって肉体に精神は戻る。だが、それではあまりに遅すぎた。

「どうすればいい、どうすれば。何もないのか、何も……。——いや、あったッ」

そうだ、あるじゃないか。今この場において可能な方法があった。美鶴は残された左腕でアスファルトの上を這った。金切り声を上げる機体、もはや飾りと化した脚部を引きずって数十メートルを進む。その間にも、活動限界タイムミリットが近づいている。

何とか目的に到達すれば、残り5”<sup>デスサイズ</sup>12。

十分だ。美鶴は目の前で蒼天を指す大剣を見つめ、その周囲に散らばったフアングの残骸に視線を落とした。その中から適したものを見繕う。生命維持機能が作動する前に精神を戻せばいい、それが最も最良の方法ではないか。副作用など気にしない。美鶴は鎌錐の左手を操り、しかとその手にフアングを握った。

そして、ままよと切り開かれた左脇腹に突き立てた。それで終わらず、引き抜いては突き刺し、引き抜いては突き刺す動作を連続的に繰り返す。

——残り時間、1”25。

突き刺したフアングの基底を何度も叩いた。お願いだ、美鶴は渾身の一撃を加えた。ドンツと全身に衝撃が走り、けたたましくアラートが叫喚した。警報はバッテリーの破損を知らせていた。著しい電力の漏洩が発生し、騎士は緊急機能を作動させる。美鶴は自身の身体が一気に引き伸ばされ、螺旋を描くような不快感に投げ出された。目の前の景色が灰色一色の不鮮明な存在になり、自分自身の認識が曖昧になる。グチャグチャに混ぜ合わさる世界。

少年は虚無の中をもがいた。高速で回転する世界は、転じて真つ暗闇に染まった。

——ここはどこだ。俺は誰だ？

同時刻、込み上げてくる吐き気で一人の少年は飛び起きた。頭部をカプセルの蓋に強打し、痛みに呻吟しながら何とか中から這い出る。世界が歪んでいた。その場に直立出来ず、壁に倒れ込む。まるで酷く泥酔したかのようだ。視界に映る情景は常に揺れ、蠢いていた。少年はその場にうずくまり、吐き気を嘔下しようとして身悶えた。頭痛が酷い、頭が割れそうだ。

そこで少年は気づいた。部屋に散乱するこれは何だ。細かい硝子ガラス片が畳を覆っていた。口元を押さえ、喉の奥の酸味を堪えて部屋を見渡せば、眸に映った惨状。

想像するに此処の住人は死んだか、連れ去られたのだろう。窓枠は内側にひしゃげ、何者かの侵入を示していた。散らばる機械の部品が戦闘を物語っていた。

……ッ。

少年は突如、強烈な既視感デジャヴを覚えた。知っている。この部屋を自分分は知っている。

何故、何故何故何故何故、——ああそうだ。

「ここは……俺の部屋だ」

美鶴は思い出した。よろめき、足がもつれながらもドアを目指した。そうだ、こんなところにいるべきじゃない。酔っ払いのようにおぼつかない足取りで急いだ。途中、たたらを踏んで転ぶ。それでも痛みを堪え、すぐに立ち上がり壁伝いに進んだ。ドアの前までたどり着き、転がされている機械の腕を跨いだ。

——俺は誰だ？ 俺は三ノ瀬美鶴だ。1 + 1 = 2。高校二年。一七歳。何をしようとしていた？ 幼なじみを、由佳里を助けるんだろ。

だから此処にいるんだろッ。

恐ろしかった。危うく、目的を忘れるところだった。由佳里を忘れるところだった。

美鶴は勢い良くドアを開け放ち、外に飛び出した。視界いっぱい  
に広がった街並み。頬を撫でる冷気を含んだ風。休日のアパートに  
は他の住人は戻っておらず、周辺にも人通りがない。それが幸いし  
てか怪我人はいなそうだ。でも二人はどうなったのか。

——どこに行つたんだよ。由佳里、オヤっさんッ。

外気に触れて次第に意識が鮮明になり、美鶴は周囲を見渡した。  
どこにいるんだよ、どこに。部屋の惨状を思い返せば、血が引いて  
しまう。最悪の場合を考えてしまう。

アパート二階から見下ろした通りには、幸いにも舗装路の上に点  
在する金属片がその行方を示していた。

「向こうかッ。二人とも無事でいてくれッ」

美鶴は階段を転げるように降り、その方向へと走った。

相変わらず人通りのない、路が続いていた。いつもと変らない街  
並みで、美鶴の視線はある一点に釘付けにされた。

一〇〇メートル近く離れた場所に何かがいた。住宅街の通りで太  
陽に照らされて濃くなるシルエット。美鶴は戦慄し、鳥肌が立った。  
遠目からでも分かる。あれは奴だ、——銀狼。

右腕部が根刮ぎもがれ、腹部に貫通した穴があいたアレキサンダ  
ーが決死の攻防をみせていた。銀狼に掴みかかり、その動きを抑え  
ようとしている。そして文蔵の背後に守られるように由佳里がアス  
ファルトの上に座り込んでいた。良かった、無事だったのか。どう

かこのまま間に合ってくれ、と祈った。

美鶴は走りながら右腕の主兵装ソニックブレードを展開させる。空気を震わす金属音が響き始める。

由佳里が音に気づき、振り返った。その顔が酷く怯えた色に染まっていた。かつて薄紅色であったろう唇は青紫に変わり、双眸が恐怖に見開かれている。

——やっぱり、由佳里はまだ忘れられてないんだな。

美鶴は腹の底が急に冷たくなった気がした。それでも足は一層速めた。自分がしなければならぬことは、由佳里を守ることだ。だから止まるな、怖れるなと自分自身を無理やり鼓舞した。

美鶴の姿を視認した由佳里は安堵したように、表情を和らげた。くしゃつと顔を歪め、殆ど泣いている顔になる。文蔵が驚愕に目を瞠った。美鶴は一息で一〇〇メートル近くを疾走した。

「消えろッ、銀狼ッ!!」

美鶴は一気に跳躍して、アレキサンダーの脇から潜り込む形で乱入し、右腕を水平に薙ぎ払った。銀狼はそれを後ろに跳んでかわした。手応えなくヒュオンと風切り音が鳴る。銀狼の顔造りは言うならば犬。鋭く長大な犬歯が刃の如く剥き出され、両腕は手の代わりに長剣が生えている。身に纏う衣類はなく、晒された金属フォームが鋭利な刃物のようである。全長は一八〇センチ程度だろう。

あれが銀狼、美鶴の怨敵であり、過去の柵しがらみだ。

「んだよ、ひつで一面だなアギト。一度死んだみてえじゃん。そんなにでないしよ」と考えてんの？」

銀狼から嘲りの言葉が漏れる。この操者はやはり蛇か。

「守り通すだけだ。まさか骨が操者なんてな。何でここにいる。何故、アパートに来たんだよ」

『ここが廃墟になる前に博士を攫って行く計画何だけどな。あの人は地下に潜ってるだろ？ 手っ取り早く娘を人質にすればいいかな、なんてな。てかその爺さんといい、お前といい、いい加減目障りだから消えろよ。邪魔すんなよ』

「……なるほどな。残念だけどな、お前らの思惑通りに運ばせない。由佳里は連れて行かせない」

美鶴は刃先を銀狼に向けて構えた。リーチの長さは劣るが、切断力は上回っている筈だ。両者の間を風が吹き抜ける。この場に役者は揃った。

美鶴は鼓動が早鐘を打ち、ドツと脂汗が溢れていた。

『これだから最近の子供はゆとりだって言われんだよ。学校で習わなかったか？ 命は無駄にするなって。なあ、アギト』

オステオがクツクツと押し殺した笑いを零した。銀狼の口端がツリ上がり、不吉な形相を作った。

「オヤっさん、由佳里を連れて離れる。こいつは、俺が破壊する」

「無茶しおつて、莫迦が。だが助かった。おぬしがあと僅かでも遅ければ、守りきれなかった。由佳里のことは任せろ」

文造が由佳里を立ち上がらせた。由佳里は見るからに崩れそうだが、どうか無事に逃げ果せてほしい。美鶴は視線を銀狼に戻した。どう銀狼に攻めれば効果的だろうか。失敗は許されない、失敗は死に直結する。

突如、逡巡する美鶴の横を風を纏って、アレキサンダーが果敢に

銀狼に猛進した。よくもまあ動けるものだ、空回り気味のモーター音が後に残される。振り向けば文造が時間片手でコントローラーを操っていた。

「アレキサンドーの最期は勝利で飾らせるッ、美鶴」

文造の声に背を押され、美鶴も死にかけのアンドロイドの広い背中を追う。

『雑魚がいくら集まっても……意味がないってッ』

銀狼が両腕を交差して振り上げ、一気に振り下ろした。交叉した斬撃が線を描き、アンドロイドの体を砕いて火花を飛び散らせた。その光に一瞬目が眩む。

美鶴は前のめりに倒れたアレキサンドーの背後から飛び出した。絶好の死角から右腕を前に突き出した。銀狼は咄嗟に身を捻り、刃を避けた。驚異の反射神経だ。美鶴はさぁーと頭の血が引く感覚がした。

世界が酷く遅く流れる。

銀狼が醜く顔を歪めた。狂気に満ちた表情、破壊の快楽に溺れた顔。

袈裟の一撃が迫る。美鶴は咄嗟に右腕を身体との間に割り込んだ。スパークが飛び、火花が跳ねる。バキッと破碎音が響き、視線の先で右腕がひしゃげる。関節がありえない方向に曲がった。ソニックブレイドの振動が止まり、美鶴の右腕はグロテスクなアートのような状態になった。衝撃に耐え切れず、美鶴はその場に倒れ伏す。万事休すだ、そう思っただけで疑われない状況だった。銀狼の容赦ない一撃が美鶴へと繰り出されようとした。

『せんぱいから、離れてくださいッ！！』

聞き覚えある少女の声が大音響で空気を震わした。オステオもふいを突かれたのか、銀狼の動きが止まる。その隙に美鶴は地面を転がって、距離を採った。丁度入れ替わるように、美鶴のいた場所に一体の騎士が降り立った。両手に抜き放った太刀を握り、銀狼に振りかざす二刀流の騎士。銀狼はそれを剣で受け止め、鏢迫り合いになる。

銀狼と対峙する騎士。その頭部は爬虫類のようであり、軀は中世の甲冑を纏っているような気品ある形状だ。相反するように背中に龍の一字が豪然と描かれていた。

「龍王ということは、おのざきか。ナイスタイミングだな」

『全く、とんだ拾いもんね。ちよつと文蔵さんに挨拶して行こうかと立ち寄ったら、何この状況？』

どこかで聞いた覚えのある声であった。おのざきとはまさか、小埜崎か。

『先輩ッ、大丈夫ですか！？』

外部スピーカーより突如流れた声で氷解した。確かに瑠璃の声だった。

つまりこの騎士が小埜崎叶望<sup>おのざき かのん</sup>の専用騎か。そして名を龍王。

「小埜崎さん、助かりました」

美鶴は立ち上がり、右腕を肉体との連結部から切り離した。落下して金属音が響く。もはや使い物にならないため、あっても邪魔にしかない。多少、平衡感覚にズレが生じるが時間の問題だろう。

『この状況だと、知らなそうだね』

小埜崎が銀狼と凌ぎ合いを続けながら、話し出した。

『今現在、首都圏《エリア2》全ランカーに緊急事態宣言が出されてる。エリア2にプレデターが大量に侵入し、外周区は壊滅的被害既に侵入したのは一〇〇機以上。第一門扉方式通路は常に開門された状態で、常になだれ込んでいるみたい。ジャミングによって他のエリアとの通信が途絶されて救援は望めず、首都圏内のランカーに要請がかかり、あたしにもお呼びがあつた訳だけど、既に到達したランカーは多くが大破したみたい』

「なんじゃと！？ プレデターが侵入？ だが奴らには満足な武器が残っておるのか。まさか騎士が十年近くの遺物に負けているのかッ」

文蔵の驚きもつともだ。この一〇年近くを無事に生き残っているプレデターは、多くが人にとっては依然脅威を誇るが、騎士の機動性は遥かにそれを凌駕したはずだ。何故、先遣したランカーが壊滅させられたのか。

『んなの、決まってんじゃん。どこぞの骨かも知れないランカーが、ウルに敵うはずがないだろ。依頼が完了するまで、ゲートは封鎖させないって』

銀狼が龍王の軀体<sup>くたい</sup>を弾いた。ザザアアツ、と足裏を路面に擦過させて龍王は踏みとどまった。すぐさま太刀を構え直し、臨戦態勢をとる。

——ウルといったのか。では神鳴がゲートを守っているのか。どおりで先遣したランカーがやられたわけだ。

『邪魔くせーから。全員ぶっ壊すしかねえよな。あんま時間がないんだわ、こっちは』

『なんつうーか莫迦力だね。まさか龍王が単純に力負けするなんてね』

おのざきが驚愕の声を上げ、オステオは猛々しく剣を掲げた。

戦局はオステオに有利に動いている。誰の顔にも敗色が濃く見える。それでも負けることは許されていない。

「オステオッ、銀狼の兵装には手を加えてないのか？」

美鶴の問いかけに氣勢を削がれて舌打ちするオステオ。銀狼が忌々しげに睨みを利かせる。

『そうだなあ。ロック解除は出来ねえから、使いもんにならねえし、取り外すのも一筋縄じゃいかねえからな』

「つまり、昔のままか」

由佳里を守ろうと誓ったのは二年前だった。このままでは銀狼を倒せず、首都圏はプレデターによって壊滅し、由佳里を守れはしないだろう。ゲート封鎖を妨害しているのが神鳴ならば、接近出来はしない。ゲートに近づけない訳がある。必要なのは強力な遠距離用武器だ。大切な人を守りたいと思う。たとえ相手に恐れられていても、それでもなお守りたい。

——だから。

『何が言いたいんだよアギトッ。延命措置のつもりか？ 俺の気を逸らすつもりか？』

「オステオ——」

「ッ！？ 美鶴よせッ。やめろッ！——」

文造が慌てふためく。美鶴は一心に銀狼を凝視した。陶醉感が忍び寄る。ちりちりと肌が焼けていく感覚。きつと今の眸の色は漆黒から琥珀に変わっているだろう。

『まさか、まさか、お前ッ』

「——その場所を俺に譲れッ」

オーバーダイフシステム  
精神直接転送機構。

美鶴を含めた数名、世界中でも一〇人に満たないだろう能力。転送装置なしで騎士に精神を移す方法だ。脳に埋め込まれたニューロチップを媒介としてやり取りを行う技術である。

美鶴はまるで肉体ごと銀狼に吸い込まれるような恐怖を感じた。秒速で近づく銀狼の頭部の擬似脳に飛び込んだ。二つの相反する精神が緋い交ぜになる。

『馬鹿だろお前ッ。首輪無しでどうやって奪うつもりだよ』

『オステオ、調子に乗るなよ。俺とあんたじゃ出来が違うだろ。首輪はあくまで安全装置だ。個々の能力には関係ない』

『あははははッ、死ぬ気かよ。ほんっと莫迦だよアギトッ。みすみす命を散らすなんて——』

美鶴の中から、オステオの存在が消える。強制的に相手の精神をリバーッさせたのだ。今頃、先ほど美鶴が味わったような吐き気を味わっていることだろう。

美鶴は完全に銀狼を支配下においた。

『懐かしい感じだ。久しぶりだな』

目の前には由佳里に抱き止められている自分がいた。気を失って

いるようにぐったりしている。由佳里は何が起きたか理解出来ずに目を白黒させていた。おのざきも判断に困ったようで、太刀の剣先を泳がせている。文造は苦虫を噛んだ苦渋に歪めた表情をしていた。

『中の人<sup>ナニタチノヒト</sup>は美鶴君なのかな？——先輩なんですか！？』

おどろおどろしくおのざきが、度肝を抜かれたように瑠璃が尋ねた。

『三ノ瀬美鶴です。俺が完全に銀狼を支配下に置きました』

『君はいつたい何者なんだい？ さっきまでの操者は？』

美鶴は少し時間をおいた。これを言えば、終わりがかもしれないな。

『先ほどもでの操者だったのは、創世の蛇のメンバーの一人です。<sup>ボレアース</sup>  
強制的にリバースさせました。そして、——元創世の蛇の執行者<sup>アギト</sup>、それが俺です』

少年は少女を守るために騎士となった（後書き）

気分転換に始めたこっちに専念しているような……。  
まあ、気ままな更新で頑張ります。はい。

## グッバイ、ナイト

『それが銀狼で、どうして操者が蛇だったのかな。確か蛇は皆、ライセンスを剥奪された筈じゃなかったかな？』

「違うぞ小埜崎。確かにライセンスを剥奪された者もいたが、全員というわけでもなかった。問題視され、危険だと判断されたランカーの多くが蛇であったというだけで、当時は警察側も国際ランカー管理機構も蛇のメンバーを把握出来てはあなかった。

過去の殲滅作戦において確認された騎士、捕縛した操者よりメンバーを割り出していったんだ。つまり、その場になかった騎士、居なかった操者については未だに把握出来ていないものもあるんだ。実際、死者、捕縛者、確認出来た者を含めても、全メンバーの過半数程度。ごく少数だが、逃れたのもいるんだ」

文蔵が小埜崎の質問に答えた。

『それが銀狼とその操者ってわけですか』

美鶴は龍王から視線をずらし、座り込んでいる由佳里を見た。だいぶ顔色は良くなっているようだ。しっかりとその腕に美鶴の肉体を抱きかかえていた。言いたいことはたくさんある。もしかすれば、二度と言えなくなる言葉がある。

こんな状況になっても、美鶴はどうしようもなく小心者だった。臆病な自分に負けた。

『オヤっさん、俺の身体は任せた。小埜崎さん、急いでゲートに行こうッ』

『でもいいのかな？ 君は彼女と話し合いたそうだけど。あたしとしても、わだかまりがないようにしてほしい——そうですよ先輩』

『いや、いいんです。時間がないのなら、急いでいきましょう』

後ろ髪を引かれつつ、美鶴は踵を返して外周区へと走り出す。銀狼の脚部が路面を切削し、その体躯を前へ前へと運ぶ。その後ろを龍王が追い始める。次第に暮れなずむ空が眼前に広がる街並みから、隔離壁へと向かう。

「由佳里、お前さんは別に美鶴のことを憎んではいないだろ。恐れでもないだろ」

文造が由佳里の傍らに立って見下ろす形で尋ねた。確信めいた口調。由佳里は弱々しく微笑んだ。無意識に髪を耳にかける仕草を繰り返す。

「うん、そうだね。私は美鶴を許してた」

いつの間にか抵抗なく、由佳里は美鶴の名を声に出していた。

「なのに美鶴の奴はいつまでも、由佳里に償おうとして一人抱え込んだんだ。そんな終わりでもいいのか美鶴……」

文造の言葉の最期の方は声が震え、殆ど掠れて消え入りそうになる。

「でも美鶴が戻ったら、私はちゃんと彼を許すよ。直接、告げるから」

「もしかすれば、もう美鶴は——」

文造の表情に翳りが生まれる。

言い難い不安が押し寄せ、由佳里は既に小さくなった機影に手を伸ばした。

端から赤紫が塗り重ねられていく青空が視界いっぱい広がっている。集まり始めた人混みの奥の機影。

届くことのない手は、代わりに彼の姿を隠した。

「帰ってきてよ、美鶴」

## 生まれ変わった破壊者

隔離壁に近づくほどに周囲に黒煙が立ち込め始める。人々の悲鳴が痛々しい。前方から絶え間なく、人々がエリア2の中央に向かって逃げていく。

外周区に存在した住宅地は火の手が上がり、燻っている様相だった。まさに阿鼻叫喚の図であろう。崩れた石塀や倒れた電柱を飛び越えて、二体の騎士は先を急いだ。

「美鶴君、どうするつもりだい。得た情報だと、先遣したランカーのどれもがゲートまでたどり着けてないらしい。行く手を阻む騎士がいるって話だったね」

「神鳴ですね。俺に打開策があります。ただし、小埜崎さんには少し無理してもらうかもしれないです」

「じゃんじゃん頼ってよ」

「そうですね。こちらは先輩のファン何ですよ。例えば火の中、水の中、宇宙にだってついていく所存ですよ。先輩に添い寝だって出来ます」

「最後のは何だ。添い寝は火、水、宇宙！？ に並ぶほど大変なものか？」

美鶴はとんでもないことを言い出す後輩に苦笑いした。こんな状況でも瑠璃は相変わらずだった。

「いや、先輩が心を許すなら簡単になります。でも先輩を攻略するのは難易度が高いですね。レベル百ですよ。——ちなみに最高レベルは一万です」

「たっかッ。俺どんだけ簡単だよ。百で考えたらレベル1じゃねーかッ。高く持ち上げて、叩き落とすなよ」

スピーカーから少女の笑い声が上がった。

『にしても、先輩が蛇の一人だったなんて。どおりでうちのセンサーが反応したわけですね』

どんなセンサーだよ、美鶴は苦笑した。にしても蛇であったと聴いて、この後輩には畏怖する感情が芽生えていないのだろうか。それが少し拍子抜けでもあった。

『一つ聴きたいんですけど。当時の先輩ってランカー序列いくつだったんですか？』

——やっぱ、気になるのか。はあ、言っているもんかね。

「当時の俺は序列四八番だったはずだ」

『四八ッ！？ 小埜崎さんでも一五七番ですよッ』

なんと小埜崎は一〇〇番台のランカーだったのか。その事実在美鶴は驚愕した。相当の騎士の使い手だ。どうやって瑠璃はそのサポーターに抜擢されたのだろうか。

「ほら瑠璃。仕事する、仕事。美鶴君も気を引き締めて」

『「了解です」』

そうこうするうちに視界にカーソルが表示される。敵だ。美鶴の目の前に蛇型プレデターが鎌首をもたげていた。

「美鶴君ッ、こっから先はプレデターもわんさか徘徊してるよ。常に周囲に気を配って」

小埜崎が美鶴から離れ、二方向よりプレデターを挟撃する。小埜崎の騎士、龍王が腰の鞘より太刀を抜き去り、二刀流の構えを採る。美鶴は銀狼の剣を突き出して猛進した。龍王の一振りが蜷局とくろくを巻いた体軀を切断し、銀狼の突きが頭部を穿うがいた。蛇型プレデターは抵抗なく、その場に崩れた。

――何かがおかしい。

美鶴は違和感を覚えた。しかしこの場において、その疑問の正体は分からなかった。

「容易いもんだね。騎士の機動性の方が断然勝ってるんだ。いくらプレデターが複雑なプログラムを組まれていようが、簡単に凌駕出来るよ」

小埜崎が足元で沈黙をする蛇型プレデターを太刀の切っ先で小突いた。

「それでも数がいると厄介ですよ。早くゲートを封鎖しないとまずいですね」

美鶴は視界に現れた複数のカーソルの対象を視認して悪態をついた。大きさがまばら、モデルタイプの異なるプレデターがいた。その数は一二体に及ぶ。向こうは既にこちらを敵として認識しているようだった。犬型が機械であるにもかかわらず唸り声を上げ、先陣を切ってくる。

「仕方ない、プレデターの群れを突っ切っていこうか。瑠璃、最短ルートを割り出して」

『了解ですッ』

「それじゃあ美鶴君。とりあえず、目の前にいる奴らは一掃しよう。」

これ以上、侵攻を許す訳にはいかないからね  
「分かりました」

美鶴は跳躍して小埜崎よりも前に飛び出し、まず一体。果敢に迫ってきた犬型の胴体に銀狼の右手長剣を衝き立てた。その状態のまま前方に右腕を振る。百キロ近くはあるだろう軀体くたいを投げ飛ばした。後方で様子を伺っていたプレデターのうち、二体を巻き込んで石堀に激突して粉塵を上げる。この時点でカーソルの表示が六箇所減る。いつの間にか、美鶴を追い越した龍王が両手の刀で複数のプレデターの頭部を切り落としていた。その足元に転がる残骸は既に沈黙している。

「残り、六ッ」

『小埜崎さんッ、住民がいます。近くに三人、逃げ遅れた人がいます』

切迫した様子で瑠璃からの通信が入った。龍王の外部スピーカーより瑠璃の声が響く。

「美鶴君、まだ非難出来てない人がいる。あたしが救助に向かうから、残りは任せていい？」

「いいですよ。こいつらは任せてくださいッ」

美鶴は小埜崎と入れ違うようにプレデターに接近した。横目で龍王が黒煙の奥に消えるのを確認する。

美鶴は上半身を捻り、両腕を斜め左下に向かって振り抜いた。長剣が捉えた犬型プレデターを切断せず、破砕する。

銀狼の主兵装の両腕の剣は、切れ味に優れていない。ほとんど刃は潰された形になっている。元来、銀狼は斬るではなく、穿つことを目的に造られた。

そのコンセプトは『立ち塞がる障壁を突き破り、突破すること。』

美鶴は両腕を前に突き出し、同時に二体のプレデターを串刺しにした。人型の機械兵がその胸を貫かれて痙攣する。美鶴は両腕を左右に振って剣を引き抜いた。そして、瞬時に後ろ向きに跳んだ。さきほどまで銀狼がいた路面に弾痕が複数生まれる。残った人型一体、蛇型二体からの集中砲火だった。ドラム式弾倉の自動小銃が火を噴く。

——やっぱり、おかしい。こいつらは……最近造られた兵器だ。

美鶴はここにきて、先ほど感じた疑問の正体を知った。思えば当然の疑問だった。

プレデターは一〇年近くも昔に造られたシロモノだ。弾薬などとうの昔に使い果たしているだろう。それに破壊した奴らはどれも、見た目は汚れているが、中身はやけに真新しかった。

外側はそのままに、中身だけが入れ替えられていた。

「つまり、ボレアースに協力する莫迦な企業がいるわけだ」

どうしようもなく救われない世界だ。今回の事件を起こすために、再び大崩壊を起こすつもりなのか。美鶴は高々と飛び上がり、三角形に展開するプレデターの間に着地。すかさずその場で右回りに回転し、敵を薙ぎ払った。左からの衝撃にフレームが歪み、擦過音を上げて吹き飛ぶプレデター。路面を転がってその表面を削り、線を描いた。それで機能を停止させない機械兵は、軋む躯体を動かしてこちらに照準を合わせようとした。

「無意味だよ」

屈折した銃身で銃弾が爆ぜる。美鶴の周囲で三体のプレデターは、銃が暴発して自滅した。爆発で原型を失った残骸が散らばる。周囲を硝煙が包み、視界が霞んだ。

「さて、小埜崎さんに合流しよう」

美鶴は小埜崎が消えていった方角に向かって、銀狼を急がせた。幸い小埜崎の騎士である龍王の姿はすぐに発見した。ちょうど住民の避難に一段落がついたらしく、手を振って離れていく子供達を見送っていた。

「あの子達の命は奪わせないよ」

小埜崎の声には静かな焰が燃え上がっていた。それは怒りであった。

「急ぎましょう。小埜崎さん」

「そうだね、美鶴君。最優先は、これ以上の侵入を防ぐことだね」

『第一門扉方式通路への最短ルートは、そのまま正面に見える隔離壁へ向かったほうがいいですね。情報だと、ゲートを中心に半径2百メートル地点で多くの騎士が破壊されてます。ゲートが見えたら、細心の注意をお願いします』

「了解ッ」

「そろそろ、別のランカーが来る頃か。オステオの方の首尾はどうなったもんか」

「くそッ、化モンがッ——」

グシャッ、金髪の男が片足で、悪態をついていた騎士の頭部を踏み潰した。その周囲には既に騎士の残骸が折り重なっている。数は五〇近くになるだろうか。四肢を失ったものや、腹部に穴が開いたもの。焦げ付いたものなど、さまざまであるが、不可解なことに破損していない騎士でさえ斃<sup>たお</sup>れていた。

男からは常にジジッ、ジジッ、という雑音が響いている。男の背後からは絶え間なく、完全自律型兵器が圏内に侵入を続けていた。この時点で、二〇〇近くが侵入していた。

「エリアーの企業さんらは、えらく気前が良かったな。前払い金とプレデター五〇〇機を用意してくれるなんてな。まあ、彼らとしてはプレデターの危険性を再認識させるための必要悪らしいが、こいつは既に極悪行為だ」

五〇〇機のプレデターが侵入完了すれば、首都圏<sup>エリア2</sup>は文字通り消えるだろう。プレデターの装備は最新式に一新されていた。機動性に劣っても、数がいれば敵はいない。立ち塞がるものを鉛の雨が洗い流すのだろう。

「タイムミリットは近づいているぞ。どうするエリア2の諸君」

## 暴食の怪人と少女の涙

周囲に全壊した住宅が続く景色。舗装路はいたるところで亀裂が走り、電柱は根元から折れていた。全壊した建物が連なり、周囲で立ち昇る煙が棚引いている。時折、目にする石塀や瓦礫に飛散した血は生々しかった。動かない人影が影を濃くし、血溜まりは赤々と怪しげに映る。一言に悲惨な状況だった。

『反応ありッ、二人とも止まってください』

瑠璃の警告に急停止した、美鶴と小埜崎は緊張して周囲を見渡した。すでに隔離壁の入り口が前方に視認出来ていた。ゲートに到達して、門を下ろせば作戦成功になる。だが、そうするためには半径二〇〇メートル地点での難題が待っていた。

「瑠璃、敵と思しき騎士は視認できてる。こっちには気が付いていなそうだよ。騎士との距離は一三〇ってとこだね。龍王ならこれぐらいの距離は無いに等しいでしょ」

「いや、小埜崎さん。一旦、止まったほうがいいですよ」

美鶴は、構わず前に進もうとした小埜崎の龍王を右腕で制した。銀狼のカメラアイが、筒状の金属体を捉えていた。あれは、誘雷針だ。ほかにもゲートを囲むように点在している。

まるで地雷原のような危険地帯が形成されていた。

そのほぼ中央で佇む、金髪を風になびかせる騎士。身に纏う裾の長い漆黒のコートがはためいている。ふと徐にこちらに顔を向けた。顔全体を覆う金属製の仮面が表情を隠していた。その仮面の奥で敵が笑ったように美鶴は思った。悪寒が走り、不安な気持ちが膨れ上がる。奴に勝てるのか、そう弱腰になる自分を心の中で叱責した。

勝たなければいけないのだ、絶対。

「気付かれたね。どうする美鶴君ッ。君はアレを知ってるんだよね」  
「はい。小笠崎さん、アレが神鳴です。操者はボレアースの一人。  
元ランカー序列四六番の人間です。あれの兵装は雷です。誘雷針に  
注意してください」

「四六番！？　はあ、次元の違う人間だね。そんな超超高序列ラン  
カーと戦闘行為をしたことがないけど、あたしには負けが許され  
てないんだよね。全く、にしても誘雷針か。全然気付かなかったよ」

やっと、瑠璃の警告の意味を理解した小笠崎は首肯して止まった。  
美鶴の視線の先、視界に映る全壊した住宅の瓦屋根に黒い影が降  
り立つ。神鳴、かつてボレアースが誇った最凶の騎士の一体。蛇の  
一員であつた頃的美鶴ですら、足元に及ばなかった存在だ。

——そんな敵と戦わなきゃいけないなんてな。それも絶対に負けら  
れないときてる。

美鶴は恨めしく思いながら、目の前の騎士を睨んだ。神鳴の周囲  
を時折、青白い線が走っている。既に敵は臨戦態勢だ。

「どうして銀狼がこの場所にいるんだい？　もしかすれば、今の銀  
狼の操者は美鶴クンかい？」

仮面の下から、多少くぐもつた声が発せられた。

「ああそつだ。オステオにはどいてもらった。ウル、あんたにも去  
ってもらつ」

美鶴は銀狼の両腕剣を構えた。小笠崎も同じように龍王を臨戦状  
態にする。

「なら、君の本気を見せてくれ。俺を退かしたければ力を示してみろ。にしても、君が銀狼を使う日がまた来るなんてな。暴食の怪人の復活だ」

美鶴のすぐ後ろで小埜崎が驚きの声を洩らした。

「竹ちゃん、美鶴が戻らないってどういうこと？」

プレデターの侵入の非常事態宣言が一般市民にも知れ渡り、人々が混乱する居住区で由佳里と文蔵は未だに銀狼との戦闘の現場にいた。

美鶴の肉体に膝枕する状態で由佳里は文蔵に問いを發した。

「あくまで騎士が大破してリバーズが起きた時、精神が肉体に戻れないということだ。美鶴が使った力は特殊なんだ。由佳里、お前さんは美鶴の首の後ろにある傷痕を見たことがあるだろ。本来、あの場所には安全装置があつたんだ」

文蔵は腕を組み、低く唸った。

「それがないと、戻れないってこと？」

「目を覚ます確率は酷く低下するだろう。1%にも満たないかもしれない」

由佳里は目を睜り、その事実には戦慄した。それが本当なら、ここにある美鶴の身体はどうなるのか。二度と彼の声を聞くことが出来なくなるのだろうか。恐い、恐い、恐い。

当たり前前の日常が失われる恐怖が由佳里の心臓を鷲掴みにした。

「竹ちゃんツ、私、美鶴に言わなきゃならないことがあるんだよ。今すぐ美鶴の後を追おうよツ」

「待て由佳里。プレデターが大量になだれ込んでいるなら、外周に近づけないだろ。それにまだ、由佳里に話しておかなければいけないことがある。これを聞いてまだ、美鶴と話したいのなら、考えよう」

「こうしている間にも、美鶴が――」

「しっかりせいツ、由佳里。お前さんは美鶴の補助者じゃったろう。あいつの実力を誰よりも理解しとるだろう。あいつは易々と死にはせんだろ？ 心配する気持ちは分かるが、信じてやれ」

一喝した文蔵の顔にも翳りは相変わらず浮かんでいた。文蔵も不安なのだろう。不安で、心配でしかたないのだろう。それでも勇気づけるために、虚勢を張っているのだ。

「ごめんなさい。そうだよ。美鶴は戻ってくるよね」

「ああ戻ってくるさ。さて時間が惜しい。――まず、最初に話しておくことは誠さんのことからだな。前から話そうと思っていたらしいんだが、言い出せなかったようだ。由佳里、同調率が90%を越えようとした研究は知っているな？」

「聞いたことはあるけど、それがお父さんに関係が？ そのプロジェクトは凍結されて、成功していないんじゃないかなかった？」

「全く違う。実験は成功していた。誠さんはプロジェクトの関係者で研究の立案者の一人だったんだ。そしてその後、プロジェクトが凍結された後は創世の蛇の研究員になった」

「そんな、じゃあ美鶴とは――」

「美鶴は小学生時代をとある施設で過ごした。幼児期に両親を亡く

した美鶴を誠さんが連れて行っただ。そのおかげで由佳里との交流は絶えなかったのだが。施設での美鶴の日々は辛くもあつただろう。施設では、騎士を用いた戦闘訓練や投薬実験、人体改造などが行われていたらしい。誠さんは美鶴の人体実験に立ち会いもした。だが、彼を憎むな由佳里。誠さんも生きるためだったんだ。闇に葬られた事実だが、プロジェクトの凍結時に多くの関係者は殺害された。企業間の抗争に巻き込まれたんだ。当然、プロジェクトは失敗と報道され、関係者についても情報に規制がかけられた。どこを調べても事実抹消されている」

「……………」

由佳里は押し黙って、文蔵の話を聴いていた。確かに一概に誠が悪いとは言いがたい。かといって、全く被害者でもない。美鶴に対して、彼は完全な加害者だ。

由佳里はかつての出来事を思い返し、胸が締め付けられた。由佳里はその日を契機に美鶴を『君』と、名前で呼ばなくなった。いや、呼べなくなった。その真相を知って、激しい後悔が押し寄せた。

「そして、美鶴の話になるんだが。由佳里は『暴食の怪人』を知っているか？」

ここからが美鶴の話だというのか。先ほどまでの話で、多くの事実を知った。

由佳里は更なる悔恨の情に駆られる覚悟を決めた。

「……知ってるよ。一時期、世間を騒がせていたよね。たった一体の騎士が企業間の抗争の真っ只中に現れ、騎士総勢八〇騎を大破させたって」

ボレアース 『創世の蛇』 ニーズヘッグ 『嘲笑する虐殺者』 ヨルムガンド 『終焉の大蛇』 の存在が世界を

震え上がらせていた頃の話だ。七年近く前になるだろう。エリア2における過去最大級の事件の一つだ。エリア2トップのクロヅカがその抗争に参加したことが、より大きな話題とした。

暴食の怪人の名は、その一体の騎士の戦闘行為をどこかの批評家が、『まるで癒えない飢えを満たそうとするかのような』と言ったことからついた。

「そうだ。そしてその字あざなを持つ操者の正体が、美鶴だ。あやつは自分自身の力を破壊のためでなく、抑止力のために使おうとした。自分の存在を世界の平穏を保つためのものに仕立てようとしたんだ。だが結局は叶わず、美鶴がいた施設が、警察と有志のランカーによって構成された大規模な討伐隊の攻撃を受けた。後は由佳里が知るように、美鶴は誠を連れて施設を離脱。蛇を脱退した。その後は美鶴は世界の平穏を守れない代わりに、幼馴染の平和を守ろうとしていた。相手に憎まれている、怖れられていると心の底では怯えながらもだ」

由佳里の頬を雫が伝い、線を描いた。手で触れれば、涙だった。無意識に泣いていた。拭っても拭っても、拭いきれない涙が道路にシミを作った。横たわる少年の顔を濡らした。

「馬鹿だったのは私の方だよ。……竹ちゃん、私は美鶴と話したい。この思いを告げたい」

「……分かった。ここで待っておれッ。すぐに小型ロボットを取ってくる」

駆け足で離れていく文蔵の背中が次第に小さくなる。人々が慌ただしく、駆け回る通り。

一人の少女は死んだように眠る少年の頭を優しく撫でた。

## 暴食の怪人と少女の涙（後書き）

あと少しで終わりになりますね。この話。

こうしたほうがいいなど、助言をしてもらえるとありがたかった  
ります。

ここまで読んでいて、面白かったですか？

退屈だったなら、すみません。それしかいえません。はい。

**暴風を切り裂く雷光（前書き）**

いろいろ、直しました。はい。

主に文の構成や、フリガナなどです。

## 暴風を切り裂く雷光

「美鶴君！！ 打開策があるんだったねッ」

小埜崎が瓦礫の合間を縫って声を張った。その背後を三体のプレデターが追尾している。その背中に誘雷針が設置されているのが目を引いた。

美鶴は肉薄するモデル・ライオンのプレデターを剣で突き上げた。瞬時に掃って、後ろに飛びずさる。電光が走り、機械兵が暴発した。轟く大地、震える大気。神鳴からの後方攻撃だ。

「はいッ。ただ、三分程度の準備時間が必要で、その間、掩護<sup>えんご</sup>してほしいです。その時間、銀狼は行動が出来ないんでッ」

鳴動する大地の轟音に負けぬよう、声を限りに美鶴は叫んだ。どうやら小埜崎に声は届いたようだ、龍王が右手を上げて答える。美鶴が用意した打開策には、使用までに時間の曲折があった。そして行動に制限が生まれる。その間の無防備さを守ってもらう必要がある。ただしそれを考慮しなくともその策が完全無欠、十全な方法とは言い難い。

神鳴との戦闘を開始して、既に五分が経過。美鶴にはとうに二分は経過したように感じられた。ほとんど攻めに転じられず、防衛一方の戦い。じりじりと精神が磨り減り、焦りが募る。しかし接近戦は不粹<sup>ぶいき</sup>であった。というよりも『自ら死に行く』に同義である。神鳴の周囲はあけすけに誘雷針がばら撒かれていた。

あの一帯は完全に向こうの土俵だ。踏み込めば容赦なく電撃に打たれるだろう。

『小埜崎さん、使用許可しましたよ。全力でいきましょうッ！！』

瑠璃の声が荒ましき爆音が響く中、よく通った。その言葉を待っていたかのように、小埜崎の龍王が美鶴の銀狼のすぐ隣りに、足元の瓦礫を粉碎して跳躍した。

「美鶴君ッ。あたしに掩護は任せて。君は準備を整えて」

龍王の曲麗な背部が、美鶴の視界に立ち塞がった。二本の太刀をしかとその手に握り締め、周囲のプレデターとその奥の神鳴に顔を向けた。――そして口火を切った。

「最終兵装展開、素戔嗚尊<sup>スサノオ</sup>」

途端に、龍王が持つ太刀が朱く輝きを発しだす。刀身の周りで空気が揺らめく。龍王の背部がまるで両翼のように展開し、排熱していく。龍王全身が熱を吐いて、揺らめく陽炎と化す。美鶴は、灼熱の焦土に君臨する竜、存在すれば間違いなく生物の頂点にいたであろう生命体の王者を幻視した。

周囲で様子を伺っていたプレデターが堪えきれずに銃撃を始めた。乾いた発砲音が響く。落ち着いた様子で、龍王は両腕で空を薙ぎ払った。空間に引かれる線、飛翔する鉛の雨を宙で弾き、朱い剣閃が周囲のプレデターに喰らいついた。斬撃が飛んだ、というより刀身が伸びたように見えた。瞬く間に、プレデター達の金属の軀<sup>からだ</sup>が二つに分離した。切断面は真紅に変わり、それが溶断されたことを示した。

これが序列一〇〇台の騎士なのか。美鶴は想像を遥かに凌駕した結果に瞠目した。

怖ろしく強いではないか、龍王。その操者である小埜崎叶望もまた然り。

「時間は稼ぐよ、美鶴君」

「感謝します。小埜崎さん」

美鶴は左腕の長剣を地面に深々と突き立てた。銀狼の躯体をその場に固定する。今度はこちらの番である。失敗は許されない。神鳴はこちらの奮闘を愉しむかのように、安全地帯に留まっている。時折、走らせる電光がその脅威を誇示した。

インプット  
オープンラストウェポン  
「入力開始、最終兵装展開」

美鶴の視界にパスワード入力欄が出現する。自嘲気味になりつつも、すぐさま美鶴はその解除キーである言葉を続けた。

——あの頃の自分はこうして、こんな長いパスワードを作ったかな……。

「破壊の忠実なる僕として立ちふさがる全てを砕くもの。生きとし生けるものを刈り取るものとして、その存在を知らしめよ」

アンロック  
視界に施錠解除の表示が現れる。最終兵装——展開。

銀狼の右腕が上下に展開し、その間を紫電が行き交い始める。長剣を伝導体として撃ち出す超電磁<sup>EM</sup>投射砲だ。亜光速で射出される弾丸を回避することは皆無である。神鳴に近付かず、倒すにはこれしかない。今頃、由佳里は何を思い、何をしている頃だろうか。唐突にそんな疑問が湧いた。ああ、会ってきちんと話し合いたい。美鶴は怯えに勝り始めたこの感情に、強い当惑を感じた。やっぱり自分彼女のことを——。

『エネルギー装填率、38%』

視界に新たに表示される数字が知らせた。これが90%を越えれば発射可能だ。美鶴は雑念を捨てて、敵に集中を向けた。

「レールガンかつ。ついに解禁したか、最終兵装。だが撃たせん」

美鶴に向かって投擲<sup>とうてき</sup>される誘雷針。すかさず龍王が太刀を振って、宙で破壊する。優れた操作技術だ。美鶴はその動きに目を奪われた。

「ちッ、厄介な騎士だ。まずはキミから消さなければならぬようだ」

神鳴が再度、誘雷針を投擲する。空を滑空して、迫る金属飛翔<sup>いこう</sup>体。神鳴も戦猿<sup>いくさる</sup>と同様に優れた臂力<sup>りよりよく</sup>を持ち合わせていた。高度を下げずに、水平移動する誘雷針が接近する。

「学習しないねッ」

小埜崎が勇んで、太刀を佩いた。

「――詰みだ」

神鳴が指を鳴らした。その周囲にスパークが飛び散る。

同時に誘雷針が龍王を巻き込んで炸裂した。衝撃波が地面を削り、瓦礫を吹き飛ばす。神鳴が戦い方を変え、飛翔させた誘雷針をミサイルの如く使用してきた。龍王のものであったろう折れた太刀の刀身が飛翔し、美鶴のすぐ脇で地面を穿いた。

「小埜崎さんッ」

濃煙が薄れて、龍王の姿が現れる。その場に膝をついていたが、

精神は無事であるようだ。それに引き換え、雷撃を受けたらしい右腕部は蒸気が立ち昇っていた。中の回線は焼き切れていることだろう。装飾と化した右腕は力なくぶら下がっていた。

『先輩ッ！！ 急いで下さいッ』

瑠璃の悲痛の叫び声。美鶴はこの状況になっても冷静沈着だった。エネルギー装填率100%、フルチャージ完了。

右腕のレールガンの発射口を神鳴に向けた。カーソルが神鳴を離さず捉えている。

「消えろッ、ウルッ」

美鶴の視界が青白く染まる。酷く耳鳴りがした。

——これで終わってくれッ！！

轟然たる爆音を響かせ、銀狼を中心に粉塵が舞った。プラズマの尾を引いて、長剣が射出される。刹那、空間に紫電の線を描いて、神鳴の足元に着弾。一帯のアスファルトを砕き、地割れを起こし、盛大に砂塵が舞い上がる。激甚の一撃。吹き荒む突風<sup>すこ</sup>。波打つ大地。これで終わった。勝敗は決したと、美鶴は思った。

しかし、そう簡単に事が運ばないのが現実か。

次第に薄れていった砂埃の中、凝然として立つ人影があった。未だカーソルは健在。敵は斃<sup>たお</sup>れていない。

「嘘だろッ。外したのか……、今の一撃を」

美鶴は絶望した。銀狼には、これ以上の兵装がない。最終兵装も一発限り。美鶴はこの戦いの敗北を確信した。静まる戦場に、重々

しい空気が蔓延<sup>はうつ</sup>った。

「俺の負けだよ、美鶴くん。俺の負けだ。こちらの切り札<sup>カード</sup>を切る前に、決着をつけられるなんてな。……ほら、先に行け。まだ戦いは残ってるだろ」

ウルが沈黙を破った。神鳴が指を鳴らしたのに端を発して、一帯の誘雷針が誘爆するように爆ぜていく。

美鶴は神鳴の腹部を貫く金属片を確認した。銀狼の長剣が砕けてなお、敵に喰らいついていた。上半身を不規則に揺らして神鳴が仰向けに転がる。最凶の戦士は崩潰<sup>ほうかい</sup>した大地に崩れた。

「……周辺のプレデターも一掃した。あとはゲートを閉じるだけだ。君に幸あることを祈ろう」

「敵に塩を送るなよ。んでも、感謝するよ、ウル。小埜崎さん、急ぎましようッ」

神鳴の横を通過して、美鶴と小埜崎は先を急いだ。あとはゲート封鎖のみ。ウルが言ったとおり、周囲のプレデターはどれも蒸気を揚げて、稼動停止していた。

「本当に勝ったのかな？ あの腹部の損傷具合じゃ、まだ致命には至らないんじゃない」

ゲートを目前にして、小埜崎が不安げな声を出した。

「きっと、燃料部が破損してます。だから、アレは終わりです——」

ドッオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！

美鶴が答えると同時に、背後で地響きのような、重い爆音が鳴った。周囲の瓦礫が盛大に崩れて、視界が烟る。美鶴の隣りで龍王が勢いよく振り返った。

「なッ、何!？」

『急に、巨大な熱源反応が出現!？ な、何があったんですかッ』

泡を食ったように、小埜崎が慌てた。瑠璃も龍王のセンサーから送られた情報に対して、愕然としたように声を荒げた。

「小埜崎さん、慌てなくて平気ですよ。単に神鳴が自爆しただけです」

視線の先で巨大なクレーターが出現していた。直径五〇メートルほどの、奇麗にくり貫かれたようにして開いた穴。その中央に倒れていたはずの騎士の姿はもう見られない。跡形も失くなった。

「自爆って、どうして」

「ボレアースでは、使用した騎士の技術を奪われないように、扱う騎士に自爆装置が備えられていたんです。それ一体で世界の企業が喉から手を出してまで欲するような、最先端技術の塊ですから。騎士の破損が一定に達した場合や奪取された場合に作動するように、プログラムされた爆弾が仕掛けられてるんです」

「それじゃ、君の銀狼にもアレと同じようなのが？」

「はい。常備されてますね。でも、あくまで破損が酷い場合です。例えば燃料電池が損傷して、電力の漏洩が著しい、といったみたい。さて、ゲートはすぐそこです。急ぎましょう」

だが幸福の女神とやらは、最後の最後に人々を見捨てたようだ。

「バッドエンドだね」

小埜崎が力無く言い放つ。美鶴もただただ空虚に天を見上げた。映る光景が変えられない現実を提示した。幅二〇〇、高さ一〇〇の通路。勇んで突入した第一門扉方式通路内で、両者は絶望に打ちひしがれていた。

「ゲートが破壊されてる」

完全自律型兵器は例外なく、自らが歩んだ一帯を破壊し尽くしていた。ゲートの可動部であるローラーの片側が無残に破壊され、その役割を放棄していた。片側だけが吊り上げられた門は、急な傾斜となっている。無理な力が加わったせいか、横二〇〇メートルある金属製の門の途中が歪んで曲線を描いていた。

『どうするんですか、このままじゃ封鎖出来ませんよ』

切迫した様子の後輩の声が通路に反響した。

その通りだ。ゲートは上下に開閉する仕組みを採っていた。そのせいで、片側が破壊されたゲートは傾いて歪んでしまった。だが、上下の開閉ならまだ、解決策があった。つまり、片側が未だ吊り上げられているのなら、そちらを破壊すればいいのではないか。そのためには、相当量の爆薬が必要になるだろう。しかし、今現在の状況下で集まるか、美鶴は心配になった。

——こうしている間にも、プレデターの侵入を許してるんだ。一刻

の猶予もない。

「小埜崎さん、もう片側を爆破してゲートを落としましょう。そうすれば封鎖できます」

「でも、爆破って言っても、爆薬を用意するのは困難でしょ。集まるまでに時間もかかれば、更にプレデターが圏内に侵入するよ」

「何か、手っ取り早く解決する方法がないのかよ。くそッ、せめてゲートを破壊できるものがあれば………破壊？ 爆発？」

「どうしたの美鶴君？」

「小埜崎さん、ありましたッ。この場にもう、破壊するに事足りる爆発物がありますよ。これを使いましょう。——銀狼の自爆装置を」

## 死にゆく騎士に手向ける告白（前書き）

時間的齟齬が発生したので、多少変更あり。

主に由佳里が美鶴を『君』と呼ぶようになった事件の時に、由佳里は小学生だった。みたいな変更。

## 死にゆく騎士に手向ける告白

美鶴の言葉に暫し、肅然とした通路。美鶴は落ち着かない気分になった。自分が今言った言葉を二人はどう捉えたか。彼らは素直に言葉を受け取っただろうか。そうであって欲しい。そうでなければ決意が揺らいでしまいそうだった。最初に声を出したのは瑠璃だった。

『そっか、それがありましたね。さすが先輩です。それじゃあ、今すぐにでも――』

美鶴は胸を撫で下ろして、悲愴感を大きくした。

「待つて」

『どうしたんですか、小埜崎さん？ 今のところプレデターの反応は遠いですよ。今のうちにゲートを封鎖しましょうよ』

「少し美鶴君に聞きたいことがあるの。ねえ、美鶴君。気になっていたんだけど、君が使って見せたその力は何？ その力の代償はなの？ 騎士が大破した場合、転送装置を使用しないで無事に肉体に精神が戻れるの？」

龍王が正面から美鶴を見据える。美鶴はそのカメラアイの奥に、艶やかな黒髪の女性、小埜崎叶望の心配そうな顔が見えたように思った。それでもまだ、この決意は揺らぎはしない。

「この力は、俺がボレアースの入って受けた人体改造によるもので、転送装置なしに騎士との精神のやり取りをする技術です。この力の代償は無いですよ。転送装置がなくても肉体に戻るようになってます。だから心配は無用です」

「——嘘ね。あたしには君が今、どんな表情<sup>カオ</sup>をしているか分かるよ。すごく哀しい顔をしてる。正直に話して欲しい。もし、仮にその技術が精神を戻すことまで可能だったとして、今の君にもそれが可能なの？ 君の肉体側にあつた首の傷は何か関係がないの？」

鋭い観察眼だ、美鶴は騙すのを諦めた。正直に言おう。後腐れのないようにしよう、と思いなおした。

「分かりました……正直に言います。精神が肉体に戻る可能性は極めて低いです。小笠崎さんが気になった通り、首の傷は本来あつた安全装置の取り除いた傷跡です。リバー스를起こした場合、安全装置がなければ、転送装置なしに精神を戻すのは不可能に近いですね」  
「……………」

「そんな、先輩。もしかしたら死んじやうんですかッ！？ うちに愛の告白をしないで、墓場に埋まる気ですかッ。そんなの、そんなのってありえないですよッ！！」  
「俺がお前に告白するほうがありえねえーよッ」

美鶴は吼えて、銀狼の残つた左手の長剣で石畳の床を叩いた。酷く硬く、冷涼な金属音が鳴る。何というか、折角のしんみりとした情感<sup>ジョウモク</sup>が尽く破壊された気がした。瑠璃は言葉を続けた。

「それじゃ分かりました。先輩の告白は由佳里先輩に譲ります。代わりにうちは先輩のキスをもらいます。これで手を打ちましょう」  
「遠慮する。なんだよキスをもらうって、絶対にやんねえからな。いつから交渉の話になつたんだよ」

「うわ、由佳里先輩への告白は否定しないんですか！？ この浮気者ッ」

「だから何だよッ。誰とも付き合っていない時点で、浮気じゃないだろ」

美鶴は呻いて、嘆息した。この後輩は、やはり補助者<sup>サポーター</sup>として異質だ。

——てか、瑠璃と会話する場合は必然的に龍王に向かって話さなきゃなんだよな。つまり、小埜崎さんに対しても話をしているようなもので。

「なるほど。美鶴君は由佳里ちゃんに惚れてるわけだ。どおりで何か言いたそうな雰囲気だったわけだね。あたしは君の要求は呑めないよ。そんな未練を残して、死なせるわけにはいかないよ」

さきほどまで、押し黙っていた小埜崎が口を開いた。

やはりそうなるのか。美鶴は必死に、この場から逃げようとする気持ちを押さえつけた。死の恐怖が追い<sup>すが</sup>詰ってくるのに堪えた。

「絶対に死ぬわけじゃないですよ。最悪、死亡するだろうって話だけで、肉体に戻る可能性はゼロじゃないです。もう余り時間は残されてないですよ。彼我の戦力を考慮すれば、悩む時間も惜しいですよ。それに、エリア2の全人命、数千万人の命とたった一人の人間の命を同じ天秤で較べるまでもない……でしょ、う」

言葉の最後の方は震えてしまった。恐怖が美鶴の首を締め上げる。一度、揺らぎかけた決意を固めなおす。つかの間の静寂のあと、小埜崎が答えた。

「そうだね。あたし達には命を選択する権利はないよね。美鶴君、ゴメン。どうかあたしを怨んでほしい。あたしは最後の最後で無力だ」

龍王が左手で腰の鞘から、太刀を抜いた。冷気を発する、冷酷な刀身が露になる。小埜崎は迷いを断ち切るように、その刀身を凝視した。

『小埜崎さん……。うちのことも怨んでください先輩。もし、もし戻れたら――』

「キスはいらねえーぞ」

『なんでですかー！？ 女の子とキスしたくないんですか？』

「いや、したいけどさ……。なんていうか……」

美鶴はたまらず言いよどむ。

『なんていうか？』

「お前じゃ嫌だ」

『うわひつどッ』

美鶴は腹をよじって笑った。精神体である故に、いつまで笑っても腹が痛くはならなかった。こんなやり取りが出来なくなるかもしれない、そんな恐怖を一時<sup>いつとき</sup>忘れられた。

「美鶴君、それじゃ行こう。破壊すべきはゲートの片側だよ。急ごうッ」

小埜崎の龍王が先導して、通路を進む。美鶴はその後ろを追って、銀狼を走らせた。

第一門扉方式通路は首都圏で最大規模のゲートの一つであろう。高さ一〇〇メートルの入り口は、横二〇〇メートルに渡って長々と

続いている。かつてこのゲートは重工業機械の搬入、搬出、または工業用アンドロイドの移動のために使用されていた。しかし大崩壊後、居住可能地域が形成されるにつれ、開門する機会がめっきり減った。人々はもう二度と使用されることは無いと信じて疑わなかっただろう。まさかこんな形で、ゲートが開門することになるなど、誰が想像したか。目の前にある、生き残ったゲートの可動部を見ながら美鶴は思った。これを破壊すれば皆を、由佳里を守るのだ。

「主兵装展開、素戔鳴尊」  
スサノオ

龍王の左手の中で太刀の刀身が紅く輝き、美鶴の目の前に顕現する絶対強者。

美鶴は通路の壁に背を向けて、龍王に向き直った。

『先輩、絶対に死なないください。目を覚ましてくださいよ。キスは諦めます。だから、代わりに由佳里先輩を悲しませないください。由佳里先輩に告白してください。絶対戻ってください先輩。ぜ、ぜったい……いやで……すから。もどつて、きて……ください』

途中から言葉に少女の嗚咽が織り交ざる。

——戻って告白かよ。もし玉砕したら、立ち直れねえよ。……でも、そうだな。目を覚ませたら、想いを告げよう。由佳里に拒否されたらそれまでだ。諦めようか。

美鶴は無言で少女の泣声を聴き、どこかの部屋で目を赤く腫らしている後輩の姿を想い、胸を痛めた。わるい、ごめん。

「安心しろよ。俺はぜってー戻ってくるからさ。代わらない日常に戻ってくるから。首を長くして待ってる」

美鶴は銀狼の腕を広げた。

「小埜崎さん、お願いします」

「ほんとにゴメン。美鶴君」

微かな声音で小埜崎が呟くように言った。そして、龍王はその手に握る灼熱の刀を銀狼の胸に衝き立てた。火花を散らして、刀身が背中に見える。全身を駆ける疼痛、美鶴の視界に激しくノイズが走る。乱れる世界。目の前にいる龍王でさえ、形が定かでなくなる。

二たび盛大に火花を散らし、刀身が引き抜かれる。

「離れてください。爆発に巻き込まれないうちに」

美鶴の言葉に首肯して、小埜崎が離れていく。後ろ髪を引かれるように、何度も何度も後ろを顧みながら離れていった。

「——あと、数分ってとこかな」

一人寂しく美鶴は呟く。イギリスの学者、ロバート・バートンの言葉を思い出していた。『死の恐怖は死よりも恐ろしい』その通りだと思った。次第に迫るカウントダウン。迫りくる恐怖が美鶴を掴まえて離そうとしない。

「嫌だ、死にたくないッ。死にたくないッ、死にたくないッ、死にたくない。怖い、怖いコワイコワイコワイッ」

唐突に誰かの咽び声がした。少年の声だった。美鶴が振り向けば、通路の薄汚れた壁の代わりに映る光景。白衣を真っ赤に染めた男数名、その前に佇む騎士。そうだ、これは。

過去の出来事がフラッシュバックしていく。走馬燈のように思い出が去来する。

「美鶴君、どうか娘の顔を一目で構わない。見させてくれ。そして僕は殺されて構わないから。お願いだ、由佳里の顔を見させてくれッ」

目の前で土下座する男がいた。白衣を纏った長躯が二つに折られ、顔は床に擦り付けられている。美鶴はその様子を見下ろしていた。自分には研究員の始末が命じられている。とある研究プロジェクト関係者の抹殺だ。つい先日、蛇狩が決行され、美鶴がいる施設にも警察やランカーが迫っていた。

そのために施設を引き払い、避難することとなった。研究員は一人残さず排除しろとお達しだった。その命に逆らえば、美鶴自身が反逆者扱いにされて処罰を受ける。残念ながら彼らは美鶴を含めた数人をモルモットにしていた連中だ、殺すことに躊躇する理由がない。しかし美鶴は行動に移れなかった。ここに来るまでに何人を手にかけただろうか。両手の剣は血に濡れ、妖しく光を放っている。しかし美鶴は動くことが出来なかった。どの研究員も自分の命を奪うなど、その尊さ、価値を訴えた。自己中心的利己主義者だった。

だから何故、此処まで自分の命より娘の事を優先するのか不可解だった。だから美鶴は返事の代わりに振り上げた手を下げていた。腕の先に存在した剣が研究室の床を穿つ。

男は安堵した表情をした。眼鏡の奥の人懐こい眸が細められる。果たして、この男が願いを叶えた時、自分はその命を奪えるだろうか。この男は大人しく死を受け入れるだろうか。

「じゃあさ、先生。俺の身体を運んでくれない？」  
「ああ、いいよ。僕に任せてくれ」

男はぐったりした少年の身体を背負った。二人の逃走劇が始まった。

時間は巡り、鬱蒼とした森に場面は変わる。樹冠が空を隠し、陰鬱な雰囲気を作っていた。美鶴の後を追って、男は走る。息を絶え絶えにしながらも、弱音を吐かず疾駆していた。

「急げ先生ッ。奴らは血眼になって俺達を捜してる。止まると殺されるぞッ。娘に会うんだろ、あんたを由佳里は待ってるぞッ」

「はあ、そうだね……。僕は足を止めちゃ駄目だ。はあ、はあ……」

数百メートル後方では、天を焦がす焰が上がっていた。美鶴が施設を破壊し尽くした結果だ。創世の蛇の本拠地『アンダーヘル』、地獄の下の地獄だ。

『顎ッ、止まれ。お前は処罰を受けなければならない。今すぐ止まり、博士と共に投降しろ』

——くそッ、追いつかれた。

「先生、先に行けッ。こいつらは俺が足留めする」

目の前に臨戦態勢をとる騎士、総勢三体。どれもこれも厄介極まりないランカーだ。創世の蛇の執行者。

「キシシッ、おおそれたことをしでかしたなアギト。こりゃ、死んで詫びるしかねえーんじゃね」

「ブラド、あんたはどうしてそう野蛮な思考なのかな？ うちらは生きて連れ戻せて命を受けたっしょッ」

「うつせーよ頬。<sup>チーク</sup>んなの分かってんだよ。何本気にしてんだよ」

頬と<sup>チーク</sup>呼ばれた、鳥類に近似した顔立ちの細身の騎士は腰に手を当て、隣の赤マントが目を引く女性型騎士を指差した。

「うつさいッ、さつさと反抗期少年を連れ戻すよ。そうだ涙、<sup>ウル</sup>骨は<sup>オステオ</sup>どうしたの？ 他のメンバーは？」

「オステオは騎士が大破し、出撃不可。あとの奴らは重傷または死亡。随分と暴れてくれたもんだよアギト」

金髪の男がサングラスを外した。出現した幾何学模様。何度見ても驚かされる。

外見が他のどの騎士よりも人に近似された騎士、神鳴だ。

「悪いね。俺は捕まるつもりはないから。あんたらを薙ぎ倒して先に行かせてもらう」

「調子に乗んなよッ、アギト」

肉薄する深紅な騎士を冷たく見据え、銀狼は剣を佩いた。

——世界は駆け足に進む。

「どうして僕を庇ったんだい……。ごほお、君の肉体の方が大切だろくに。どうして……ごほ、ごほ」

黒煙に気管を詰まらせる男は、眸に涙を溜めて言った。彼の言うとおりだ。

視線をズラせば、右上半身が赤黒く染まった少年が倒れていた。一目で致死の傷だと知れる。何故、自分は彼を守った？

周囲は警察やランカーが取り囲み、包囲網を造りつつあった。無

慈悲な爆撃が一带を呑み込んでいた。

これは七年近く前の記憶だ。

美鶴がアギトの名を捨て、右腕を無くした記憶。

——世界は収束に向かう。これはおよそ二年前の出来事の布石だ。

「ありがとう美鶴君。君のおかげで僕は由佳里の顔が見れた。感謝してもし足りないよ。妻を亡くした僕には由佳里しかいなかったんだ。もう思い残すことはないよ」

「駄目ッ、美鶴やめてッ!!」

可憐な少女が白衣の男と機械の間に割り込んだ。両腕を命一杯広げていた。両目に溢れんばかりの涙を溜めて、口を固く噤くづんでいる。

「莫迦だな俺は。ただ単に温かな家庭に憧れを抱いていたんだな。自分みたいな子供を増やしたくなかったんだな」

銀狼はその心臓目掛け、剣を突き立てなかった。力無くその場に膝をつくと、美鶴の精神が肉体に帰還する。

激甚な痛みが走る。嗚咽が漏れ、視界が滲む。どうしようもなく吐き気が込み上げた。鉄の味が味蕾したに刺さる。濃い血臭が鼻腔に満ちる。止血処置がなされ、美鶴の出血死はなんとか免れていた。

「先生ッ、俺を置いて……いけッ」

痛みに意識が途切れる。次に目を開けた時、美鶴の目の前に見知らぬ天井があった。ここはどこだ。

真っ白い部屋の扉が前触れ無くスライドされて開いた。

仏頂面の少女が現れた。美鶴の幼馴染の羽城由佳里だった。真っ赤なランドセルを背負っていた。可愛いワンピース姿。水色の服は、背中の鞆の赤と相反した。この時、由佳里は小学五年であった。

「私は『君』のサポーターになるから。お父さんを傷つけさせないからッ。いい？」

こうして由佳里はサポーターを目指した。

目の前に汚れた壁の様子が戻った。足元に崩れ落ちたコンクリ片が散らばっている。

未だ貫かれた銀狼の胸は真っ赤に染まり、熱を発していた。そろそろ時間だろう。最期まで守り抜くと決意したのに、結局は途中退場か。美鶴は壁にもたれて、ずり落ちる様に座り込んだ。

後悔が募った。次第に視界が白光に染まる。耳鳴りがして、視界が酷く歪んだ。

「ごめんみんな。ごめん由佳里。さよなら」

本当にごめんなさい。

美鶴は状況が許せば泣いただろう。この場にあるのが生身の肉体であつたなら、顔はすでに涙で濡れていただろう。断腸の思いだ。力なく、その場に座り込んだまま、最後の時を待った。突然、羽音が聞こえた。視界に一匹の蜻蛉とんぼがゲートの圈内側から滑空して映りこむ。珍しいな、隔離壁で囲まれたエリア2ではほとんど見ないのに。

美鶴はその蜻蛉の姿を追った。蜻蛉は不可解にも、銀狼の傍に近

寄り、宙で静止した。しきりに羽を振動させていた。

『美鶴、戻って来てよッ。君が居なきやだよッ。私は美鶴のことが好きだからッ！！ 愛してるからッ』

懐かしい声が、好きな人の声が響いた。声の発信源は目の前の蜻蛉だった。美鶴は瞬時に理解した。これは文蔵の小型ロボットだ。では、さっきの声はやはり由佳里のものか。美鶴は先ほどの言葉を反芻した。我が耳を、銀狼の集音機能を疑った。  
はんずつ

——好きだって言ったのか。俺のことを愛してると……。

ああ、なんだ。怯えることはなかったじゃないか。そう簡単に壊れる日常じゃなかったじゃないか。俺は莫迦だ。美鶴は銀狼の左腕を蜻蛉に伸ばした。

「俺も由佳里のことが好きでした」

普段であれば面と向かっていえないだろう台詞。このときばかりは、臆せず言えた。

完全に美鶴の視界が白く塗りつぶされた。蜻蛉の姿が消え、何も見えなくなる、何も聞こえなくなる。

——ブツリッ……。

ここで美鶴の世界は閉じた。何も感じない、何もない。

銀狼の自爆装置が起動、爆せて周囲を呑み込んだ。ゲートが急落下し、その下のプレデターを襲う。大地が揺れて、粉塵がゲート周囲を覆い隠した。

『先輩ッ、先輩ッ』

一人の少女が嗚咽を漏らした。

一体の騎士は放心したように、塞がったゲートを見つめていた。

首都圏はその存在の消滅を回避した。

人々は歡喜に満ち溢れ、涙を流した。

しかし、一人の少年の勇姿を知るものは少ない。

寒空の下の灯火（前書き）

誤字など訂正。

他にあれば、教えてください。

## 寒空の下の灯火

この世界における死は酷く色褪せ、現実味を失くした。騎士を介した殺戮は罪の意識を鈍らせ、操者は自らの死を恐れることを忘れ、己を過信する。隔離壁に囲まれた結果、外の世界での悲惨さを人々は忘れた。思い出と化した過去に鮮明さはない。薄れ、霞み、褪せた。

プレデターの強襲から一週間が経過した。世間は未だに慌ただしく巡り、休まるところを知らない。今回の事件を起こした蛇に援助行為をしたとして、エリア1の複数の企業の経営責任者が身柄を拘束された。別の話題としては、日本国内のプレデターに対して、半年以内の殲滅作戦決行が決まったことだろう。文造は酷く驚いて腰を抜かしていた。

由佳里はブレザーの下にカーディガンを着込んで、慣れた通学路で自転車を漕いでいた。もうすっかり冬だ。由佳里が通り過ぎた後に白い吐息が棚引く。目の前に登校中の学生の姿が大きくなる。同じ西徳大学付属高等学校の生徒達だ。

「ゆかりっち、おはよー」「先輩おはようございます」「一緒に登校しよッ」

明るい声が寒空の下に光を灯した。由佳里は片手を離して、彼らに手を振った。「おはよう、みんな」負けないぐらいの明るい声を出した。

辿り着いた学校、予鈴にはまだ時間に余裕がある。見慣れた校門を抜け、駐輪場に自転車を置いて教室に向かった。生徒が各々の教室へと向かう流れに紛れて歩く。

由佳里は2・1の教室の扉に辿り着き、開けようとドアに手を掛けた。ふと視界の隅で、見覚えある姿が映った。隣のクラスの前の廊下に二つ結いの少女が立っていた。可愛い顔立ちをしている少女だった。身長は由佳里よりも幾分か小さい。一五〇センチ後半辺りだろう。いつもその表情を占めていた明るい笑顔は消え、重苦しげにくすんでいた。窓際に背を預け、思い詰めた表情をしている。

「瑠璃ちゃん、おはよ」

由佳里は近寄って、その横に肩を並べた。隣の少女は一瞬、驚いたような表情を浮かべ、すぐに申し訳なさそうに俯いた。ここ最近はいつもこの調子だった。そうなるのも無理はないだろう。だが、彼女が萎しおれていると学校全体も暗く沈んでいるように感じられた。

「元氣だしてよ瑠璃ちゃん。別に瑠璃ちゃんのせいじゃないんだよ。もちろん小埜崎さんのせいでもない。……美鶴が自分勝手に、残された人の気持ちを考えずに決心したことだから、気に病まないでよ。瑠璃ちゃんが暗いと学校全体も暗くなっちゃうよ」

「……そうですね。美鶴先輩の分まで明るさを供給しないとですよ。由佳里先輩、ありがとうございます。少し気がラクになりました」

瑠璃は笑顔を取り繕って、階段に向かう。彼女が見せたのは無理に笑おうとした、固い笑みだった。由佳里はその小さく萎縮した背中を目で追った。やはり引きずっているようだ。由佳里は瑠璃の後姿から視線を外し、すぐ前の教室を見た。

開いた扉から見えた机の列。奥の前から三番目の無人の机。

一週間前からその主は戻らない。

咽喉のどの奥から込み上げてくる感情。咽喉が渴くような情動。由佳里は踵を返して、自身の教室に向かった。逃げるようにして、足早

に自分のクラスに滑り込む。失った日常を目の当たりにすれば、胸に穴が開いたような喪失感で息が詰まりそうになる。

自分の机に辿り着いて、手に持っていた鞆をその上に置いた。時計が午前八時二五分を指した教室には、未だ三分の二近くのクラスメイトがいなかった。

由佳里は椅子に腰を下ろし、何とはなしに窓側に顔を向けた。窓の外、硝子越しに見た景色には透き通った空の蒼が一面に広がっている。何故か無性に甘いものが食べたかった。

「あ、そうだ」

ふと思いついた。放課後に彼が好きなモンブランを買って帰ろう。彼は食べてはくれない。笑顔を向けてもくれなければ、話もしてくれない。

それでも地球は巡り、現在を過去にしていく。

由佳里は両腕を天に伸ばし、背筋をぐっと伸ばした。今日もまた変らない一日だ。

## 寒空の下の灯火（後書き）

モンブランが無性に食べたくなったので、モンブラン起用。  
はい。

## あいるびーばっく

『人は先人に学び、同じ後悔を繰り返す』

「莫迦な人間だったから、弱い人間だったから。人は恐怖心が皮を被った生き物だ。その性質が火を生み、村を形成し、国を創った。武器を造り、他人を恐れ、争いを絶やさなかった。人の勇氣はこれっぽっちも美徳な感情ではない。恐怖心を隠すための虚勢だ」

真っ白な世界に少年は一人、茫然自失な状態で立ち尽くしていた。周囲には白骨化した死体が無造作に積み重ねられていた。

ああ、この白さは白骨化した色か。

どの頭蓋も空っぽの眼窩で、無い双眸で睨んでいるような、息苦しいほどの圧迫感に少年は手に汗をかいた。

ここにいる白骨化死体は、皆自分が手にかけて人間か。見覚えある白衣が屍の山よりはみ出している。

『『『カカカツ、やっとここまで来たか。お前も俺達の仲間入りだな』』』

不意に複数の骸骨が歯を鳴らして喋り出した。カラカラと乾いた音が響き渡り、木霊する。

彼らは何を言い出すのだ。既に人としての形質を骨だけにした者達を、少年は睨みつけた。

そして少年は自分は生きていると叫び、腕を広げた。そこで恐怖に悲鳴を上げた。

少年のパーカーから覗く手は、肉が削げ落ち、真っ白な骨を晒していた。周囲と同じ、日に晒されたような、漂白されたような白、目を背けたくなる色。

慌てて自分の顔を触る少年は絶句した。二の句を告げることが出来なかった。

頬の無い口、目玉も存在せず眼窩が広がっていた。少年はその場に崩れ落ち、流せぬ涙の代わりに嗚咽を漏らした。無常な世界に少年であつた骸骨はうずくまる。

『人の価値は死んで墓に眠った時に決まる』

『人の死はどこまでも不鮮明だ』

けれども自分自身の命の尊さを何よりも信じたいのが人間だ。その価値を誰よりも信じたいのが人間だ。もしその価値を、尊さを他人が理解してくれたならその時、人はどう思うのか。  
やはりそうだろうと愉悦に浸るだろうか、それとも他人の価値を理解するのだろうか。

『……戻って来てよッ。君が居なきゃだよッ……』

少女の声が閑散とした世界に響き渡った。積み重なった骸骨が崩れ、己の骨の行方を見失う。少年は面を上げて、振り返った。眸のない眼窩が捉えたのは、ぼやけた少女の姿だった。

ああ、知っている。彼女を知っている。

どうかこの場所から連れ出して欲しい。少年は骨しかない細い手を伸ばした。途端に視界が歪み、擦れ、不鮮明になった。

——見知らぬ天井が目の前にあつた。

酷く真つ白な空間だった。鼻の粘膜を刺す薬品の臭いがする。窓から差し込む日差しが柔らかく、室内を照らした。

じっとしていられず少年は身体を動かした。まるで鉛のようだ。重たく、動くのが辛い。それでも身体を起こそうとして右腕を動かした。……何も起こらない。いや、右腕がある感覚がしない。慌てて顔を向ければ、あるべき腕が存在していなかった。

少年は悲鳴を上げそうになるのをグツと堪えた。ああそうだ、右腕は無くしたのだ。男の平和を守るために、犠牲にしたのだ。

枕元には各種バイタルが表示された機器が置かれ、電極や針で少年は繋がれていた。

何が起きたのだったか、確か自分は死んだ筈ではないか。だがあまりに現実味ある世界が目の前に広がっていた。

少年は悲鳴を上げる身体を無視して、体を起こした。かすかな衣擦れの音を立てて、左手で顔を撫でれば確かな頬の感触があった。ほっと安堵する。

扉の向こうでは不特定多数の人間の声がしていた。扉の前を通り過ぎる足音がしきりに聞こえる。少年は扉から目を外して、今の時刻を確かめようと時計を探した。正方形の時計が壁に掛けられているのを見つければ、時刻は午後四時四二分であった。では日付はいくつだろうか。いったい自分はどれほどの間、眠っていたのだろうか。

「……会いたいな」

唐突にそう呟いていた。久しぶりの声は、枯れたようなしわがれたものだ。言葉にしてみれば、止め処なく感情が溢れてきた。咽喉の奥から上がってきた情感を飲み込んで、少年は眸を閉じた。目蓋の裏に映る少女の姿が色褪せている。不鮮明な顔で笑っていた。

——会いたい。会って話をしたい。笑いあいたい。

少年は持て余した感情のやり場を探し、窓の外に視線を向けた。二階に位置するらしい病室からの景色は、樹の枝と暮れなずみ始めた空だった。寂しい景色だ、と少年は思った。終わりゆく一日の、季節の景色だ。

コン、コン、と病室の扉が前触れなくノックされた。どうも来訪者が来たらしい。少年は身体を強張らせ、扉の向こうにいる人間に對して考えをめぐらした。

少年が考えをまとめる前にドアがスライドされて、閉鎖的空間が開け放たれる。姿を現したのは、見覚えある制服姿の女子高生。その手に包装された箱を吊るし、その顔に驚愕に似た表情を浮かべていた。扉の向こうにいたのは、少年が会いたかったその人。

『——美鶴ッ！！』

由佳里が片手に持った袋をその場に落とし、美鶴に駆け寄った。その目に涙が浮かぶのを美鶴は見た。由佳里が美鶴に抱きつき、その<sup>まなしり</sup>眦から滴を零した。

美鶴は戸惑いながらも、少女の背中に残った腕を回して抱き止めた。優しい香りが肺を満たす。本当に生きて戻ってこれたのだと理解した。

「ただいま、由佳里」

かけがえのない日常は、近すぎるが故にその性格を見失わせる。失くして初めて気付かされることが多い。美鶴は取り戻せた日常を、代える事の出来ない日常を守ろうと決意を固めた。

不安だらけの世界も、由佳里が傍にいてくれるなら、そんなに悪いもんじゃないと思い直した。

「うわッ、グツチャグチャ……」

美鶴の目の前に差し出された、原型を止めていないモンブラン。目元を赤くした由佳里は、申し訳なさそうに顔を曇らせた。

「いやいや、形が悪くたって味は変わんねえよ」

由佳里の手からモンブランを取り、スプーンで一口分を掬って口に運んだ。啗内に広がった甘味はまるで身体中に染み渡るようだった。

了

## あいるびーばっく（後書き）

自分よく頑張った。何とか話の一つ区切りをつけました。

どうでしたか？ 面白かったですか？

誤字やら脱字やらが沢山あると思います。すみません。

自分、まだ一生懸命、学生やってるんで、いろいろ至らない点があると思います。ご指摘してもらえるとありがたいです。

とりあえず、この話の続きは未定で。最初、書き始めたときは続編は無しのつもりで始めたので……。とりあえず、一ヶ月考えます。面白かったと思うてくれた人は、評価してください。はい。

それじゃあ最後に一言。

「童顔だって、いいことあるッ」  
ありがとうございました。

## 少女と少年と冬の蟠螂（前書き）

一ヶ月経ってないですね。とりあえず、続きを書いてしまいました。

色々と設定を細かくもざっぱに決めました。

とりあえず、この物語のキャラで夏祭りの出来事的なモノを書きたくなったので、頑張ります。ちなみにこの物語では季節は冬です。夏は遠いーなあ。

嘘と獣は手が進まないの、結構放置になっているんですがスミマセン。（たまに覗いてくれる人に言いました）

つたない文章ですが、すみません。はい。

誤字脱字は目を瞑ってスルーで。

## 少女と少年と冬の蟻螂

薄暗い通路が延々と続いていた。

カビ臭い、濁ったような空気が漂う。淀んだ空気は器官に絡まり、息苦しさを感ぜさせる。

天井を這うダクトを辿るように、一人分の人影が早足に進んでいた。人影が足を動かすたびにカッン、カッン、と硬質な音が響いた。人影が止まったのは通路の途中に存在した非常口の<sup>しふじゆう</sup>前。深緑の照明が周囲を気味悪く照らしていた。人影は暫し逡巡する素振りを<sup>しふじゆう</sup>見せ、扉を開け放った。同時に通路に風が吹き込み、淀んだ空気を彼方へ運ぶ。光が入り込み、人影を白日の下に晒した。

『うつわ、まッぶし……』

発せられたのは少年のような明るい声。声を発した人物は、一目でその性別が女だと知れた。エアリーカールの明るい茶髪は肩までかかり、吹き抜ける風に揺れている。どこか育ちのよいお嬢様のようであった。見た目から判断すれば、彼女はまだ学生を続けているような少女でもあった。

しかし不可解であるのは、彼女の服装であろう。

はたため裾の長い黒のローブを纏い、その下にはタイトなブレスト。肩と腹部が剥き出しにされた格好は、異性であれば赤面して直視出来ないほどであった。およそ、この時代には彼女と同じ格好の同性はいないのではと思われる。

少女はそのことに気を止める様子もなく、吹き抜ける風の冷たさに身を震わすことなく、非常口の先に続いた階段に足をかけた。彼女が履くのは、漆黒のブーツ。再びカッン、カッン、と硬質な音を鳴らして少女は下り始める。

階段の途中、未だ眼下には小さな景色が広がる高さで、少女の身

体から音楽が流れ出した。オルゴールの音のような、静かであつて優美なメロディーであつた。

少女がローブの裾に手を伸ばし、取り出したのは白に塗装されたスマートフォン。おもむろに耳に当てて、少女は口を開いた。

「もしもし、何の用？ ん？ うちが今どこにいるのかつて？ ご想像にお任せします。ってうっさいよッ。耳元で大声出さないでよ、ウル。——じゃあね」

少女は電話を切り、乱暴に携帯をしまった。そして今更ながらに気付いたように身震いした。「もう冬じゃん。さっむ」と独り言ちて、歩みを再開させる。

「さてと、うちもさつさと仕事を終わらせないとだね。エリア2かあ、アギトに会えるかなー」

少女は、ふと眼下を見下ろして言った。ああ、アギトの名を持っていた者は確か……。

少女は微笑を浮かべた。遠くに見える隔離壁を見て、思いを馳せた。

高層ビルの非常階段で、少女は一人、降<sup>くだ</sup>っていく。その後ろ姿を見たものは、疑問に首を傾けただろうか。少女の首には、例えるならば首輪のような金属物が張り付いていた。

「くはあ、はあ……。はあ、はあ……。はあ。ふあ、くふあッ。はあ……はあ……」

激しい運動の後のような、荒い呼吸音が響く。瓦礫を踏みつける

不愉快な音がそれに伴った。走り続ける人は年端も行かぬ少年だった。額に流す汗を飛ばし、必死に肺に酸素を供給しようと空気を吸い込む。

少年は生きること**に**必死であつた。何故、どうしてこうなつたのか。後悔が募り、自然と目頭が熱くなる。母の顔や父の顔、妹の顔が代わる代わる浮かぶ。

少年の名は、榎原稔<sup>えのはら みのる</sup>といつた。

稔はたった一人、外部居住区の廃墟を疾走していた。たった一人この場所に**いる**のは自分一人である状況は、一言に最悪の事態であつた。助けが望める余地は限りなくゼロであろう。

稔の背後、ほんの二〇メートル後方で白煙が上がつた。コンクリ片を巻き上げ、粉塵が盛大に立ち昇る。間を開けずに、その煙の中から飛び出してきたのは錆びた金属物。まるで意思をもっているような、生き物めいた動きで迫ってくる。狼のような鋭さをもつ見た目。しかし、酷く金属質な躯体である。

——プレデター  
完全自立型兵器だ。まさか、こんなところにいるなんて。

稔は悪態をついて、脇目もふらずに走つた。意味もなく先を急いだ。どうかプレデターを撒けばいい。少年は吹き曝しにされた住宅の瓦礫を通り抜け、ひび割れた舗装路の路を走つた。

稔が現在の事態に陥つた理由は、ほんの数時間前に遡る。稔の両親が隔離壁の内側への移住を決意したことに起因する。

首都圏<sup>エリア2</sup>と近畿圏<sup>エリア4</sup>の両総裁が同意した結果、残つた二つのエリアの企業総裁も続いて同意を表明。日本完全解放に向けて領内のプレデター掃討に先駆け、各エリアにおいて外部居住区<sup>デッドゾーン</sup>の人々の受け入れが開始された。掃討作戦で想定される戦闘における人的被害を最小限に抑えるために、各エリアへの移住、エリア周辺での安全圏の形成が急がれていた。

しかし、それに対する外部圏の人々の反応は賛否に割れた。

それは仕方のないことであつただろう。これまでまともな救援策がなかったのだ、疑心暗鬼になり、素直にその決定を呑み込む人間は少ないだろう。稔もまた同様だった。

両親が決定したにもかかわらず、その意思に反発し、単身で外部居住区の奥へと出奔した。嫌だったのではない、恐かったのだ。本当に圈内の人間が自分たちを受け入れてくれるのか、信じることが出来なかったのだ。だから、気付けば逃げていた。頭の片隅でかすかに、両親が呼び止めようとして上げた怒声が余韻として残っていた。あの時、足を止めていれば。そう悔やむも時既に遅く、プレデターに追い立てられている。

「かはあッ……はあ。はあ、はあ……」

目に付いた崩れかけのビル、五階建てであつたろうソレは既に四階分の高さしかない。その入り口部分は崩れ落ちた壁で大半が塞がり、人一人分、それも子供が何とか潜<sup>く</sup>れるほどの広さしか穴が開いていなかった。

稔は藁にも縋る思いで走った。すぐ背後に迫る気配を背中を感じ、恐怖で早鐘をうつ鼓動が耳元で聞こえるようであつた。

無事に辿り着けた半壊したビルを前に稔は四つん這いになり、小さな穴を潜った。通り抜けると同時に背後で瓦礫が軋み、砂埃が舞う。プレデターが崩れた壁の、厚さ数一〇センチのコンクリの向こうで、悔しげに引つかきまわす騒然たる音が続いた。

どうにか間に合った。稔はほっと胸を撫で下ろし、乱れた呼吸を整えようと深呼吸をした。

次第に落ち着きを取り戻した稔は、これからどうするべきか辺りを見渡した。

「ここも酷い。みんな壊されてる……」

稔の眸に映ったのは、脚の折れた椅子や二つに割れた作業台らしき机。切削された壁は壁紙が無惨に引き裂かれ、所々に亀裂が走っていた。天井の一部が落下して、床に散乱していた。

他にも黄ばんだ書類が束で転がり、ページがバラけた書籍が散見される。

外部居住区では日常的な光景であった。プレデターが行ったのは、無差別な破壊活動であった。何故、大崩壊が起ることになったのだったか。その話を昔、父親に聞いた記憶があったが忘れてしまった。それよりも今は現状を打開しなければならぬ。いつまでもここに籠城するわけにもいかない。第一、稔には食料がなかった。

「どうすればいいのかな。帰りたいよ……。父さん、母さん。由愛……」

稔は妹である由愛の屈託のない笑顔を思い返し、胸が痛くなった。もっと兄らしいことをしておけばよかったと、心苦しく思った。ふと気付いた。

——音が止んでいる？

あの狼のようなプレデターは諦めてくれたのだろうか。機械にも諦めという思考は備わっているのだろうか。そうであってほしいと稔は強く願った。

が。やはり相手は機械であった。融通の利かない、機械仕掛けの破壊者であった。

ドンッ、という衝撃がビル全体に走り、稔の頭上から砂埃が降りかかり、新たに床に落下した天井が増えた。白濁する視界に、入り口とは別の方角から眩い光が差し込んでいた。

「壁に穴を開ける気だッ」

稔は血の気が失せ、蒼白する顔でうろたえた。このままでは本当にまずい。自分は死ぬかもしれないという恐怖に、足の震えが止まらなくなる。二たび走る衝撃にたたらを踏み、意を決して稔は入り口の隙間から飛び出して、太陽の下に影を濃くした。

ドンッ、三度目の衝撃がビル全体を振動させ、コンクリが砕ける破砕音が鳴り響いた。ビルの入り口から白煙が噴出し、ビルが一階部分の壁を残して倒壊する。あのまま居たら死んでいただろう。逃げ出しておいて正解だった。しかし、現状は未だ最悪である。死を先延ばしにただけであつた。

「誰かつ、誰かつ。助けてッ」

助けは望めないだろうと分かっているながらも、助けを求めてしまうのが人間の弱さか。

稔はひび割れたアスファルトに足をとられた。体勢を崩して、両手について転んだ。擦り剥いた掌が熱を発し、血が線状に滲む。しかし痛みを気にしている場合ではなかった。

稔のすぐ背後で重量ある物質が跳躍して、地面を揺らした。ドスンッ、と重い落下音を響かせ、プレデターが稔の目と鼻の先に着地した。

終わった、短い人生だった。良いことない、誇れることのない人生だった。稔は自分自身の一三年という人生の終わりを確信した。目の前でプレデターが今にも跳びかかろうと身構える。

「ごめんなさい……」

稔の呟きを掻き消すように、プレデターが地面を削って跳んだ。稔は両目を固く閉じ、最期を待った。

『ギイイイイイインッ!!』

凄まじい金属音が絶叫して、空気を震わした。稔はたまらず両耳を塞ぎ、目を開いた。跳びかかって来たプレデターが、宙で躯体を二つに裁断され、あらぬ方向へと吹き飛ばされるのが眸に映った。何が起こったのか、判断がつかなかった。慌てて周囲を見渡した稔は悲鳴を上げそうになった。

数メートル離れた全壊した住宅の屋根の上に浮かび上がる機影。その右腕部分が巨大な鎌の形状を採っている。遠目から見ても、それはまるで螳螂のような姿であった。戦闘用アンドロイド、騎士。遠くでプレデターが地面に激突した衝撃が此処まで伝わった。稔は心を蝕み始めた恐怖から、再び逃走しようとした。腰が抜けたのか、足に力が入らずアスファルトの上でもがくことしか出来なかった。

そうこうする間に、騎士が跳躍して稔の目の前に着地する。近くで見た騎士は、遠目で見たとおり、螳螂を連想させた。逆関節の二本の脚部を持ち、白が基調の躯体に、ライトグリーンの塗装が線を描いていた。右腕の鎌がまるで死神の大鎌のように見えてしまう。言い難い恐怖を植えつける得物であった。

稔は自分自身の身を案じた。騎士は人間が操っているものだ。プレデターであれば、ただ『殺す』という動作を実行するのみであるうが、騎士の場合は人間の意志が加えられるのだ。その動作にも『いたぶる』など、多様な過程が加わる可能性があった。稔にとって騎士の存在は、プレデターと同義であった。殺戮者、破壊者。

企業が労働力の蒐集にランカーを用いた結果、外部居住区の間人は騎士に対しても恐怖と憎しみを募らせていた。

「殺さないでください……」

懇願するように稔は言い、額をアスファルトに擦り付けるように土下座した。騎士を人間が操っているのなら、もしかすれば自分の言葉を聞き分けてくれるのではと想っての行動だった。

『えーっと……。いや、殺す気ないけど』

騎士から発せられたのは、少し高めの少年の声だった。どうも困惑しているようだった。思いついたように右腕の刃を収納して、再び声が発せられた。

『お前の名前は？』

「僕の……名前は、榎原、稔です……」

『えのはら、みのる……。ね。よっし、見つけたなッ』

見つけた、という言葉に稔は過剰に反応してビクッと身体を痙攣させた。身を守るように縮こまり、自分の肩を抱いて騎士を見上げた。

『何で怯えんのッ！？ 俺、何かしたか？——ってうるせえよ由佳里ッ！！ 頭にガンガン響いてるからッ』

拳動不審に、目の前の螭螂に似た騎士が左手で頭を押さえる仕草をした。暫し苦悶した様子を見せた後、再び騎士から声が発せられた。今度は耳に心地よい女の子の声であった。

『あーあー。聞こえてますかー』

『うるさいから由佳里』

どうも少年の声と少女の声は別の場所から発せられているようだ

った。少年の声が頭部辺りから聞こえ、少女の声は腹部辺りから聞こえた。

『これぐらい耐えなよ美鶴。……んで君が稔君だね。君のお父さんとお母さんと、妹さんが依頼してきたんだよ。君を搜索して欲しいってね。だから安心してよ。私達は怪しい人間、君に危害を加えるような人じゃないから』

少女の言葉に稔は安堵した。彼らを信じる理由が出来たことに、安堵していた。心のどこかでは、助けてもらいたいと願っていたのだ。その気持ちを素直に受け入れる理由を探していたのだ。

「良かった……。本当にありがとうございます」

稔はよろめきながらも立ち上がり、感謝を口にした。

ランカーの中にも、心優しい者はいるのだろうと、考えを改めた瞬間でもあった。こんな辺鄙な場所まで搜索しに来てくれたのだ。いくら依頼と言っても、どれほどの労力があつたのだろうか、稔は申し訳なく思った。

これからは親孝行、由愛に何かしてあげようと決心した。

『んじゃ、戻ろつか。ほら美鶴、急がないと日が暮れちゃうよ』

『了解。んじゃ、どうする？ 鎌錐で抱えて運ぶか？』

『君は馬鹿なの？！』

『うつせーよッ！！ 夕飯作ってやんねえーぞ』

『奪わないで、私のポトフとポテトサラダと——』

『ポトフだけだろッ』

ぐうぐうぐう、と腹の音が響いた。稔は赤面してお腹を抱えるようにした。外部居住区では、人権団体が週に一度ほどに配布

する食料以外に食べ物があった。まして、この一帯はかつて都市であつたために、農作が難航していた。最近まともな食事をしていなかった稔は、常に空腹であつた。

『美鶴、稔君もお腹が空いてるんだって。彼の分も作つてあげなきゃ。これはもう、ポテトサラダとドリアと――』

『ポトフだけな。んじゃ、稔君だっけか、どうする？ 歩いて戻るか、騎士に運ばれたいか』

早く会いたい。家族に会いたい。その思いが強く、稔の胸を焦がした。

「すぐに家族に会いたいです。出来れば、運んでもらいたいです」  
『了解』

『途中で落つことしちや駄目だからね』  
『しないからなッ。恐いこと言うなよ。稔君が怯えるだろッ』

稔は、伸ばされた騎士の左腕に抱きかかえられるようにされた。意外にも安定した。

『うんじゃ、行くぞッ』

蟪蛄に似た騎士が姿勢を屈んで、踏み込んだ。ふいに稔の全身にかかるG。景色が高速で後方に流されていく。

騎士に運ばれる行為を例えるならば、そう。ジャットコースターであつた。

騎士が飛び去つた後に、声変わりがすんでいない少年の悲鳴が残された。

少女と少年と冬の蟬螂（後書き）

うーん。

これから物語をどうしようか……。

## ポトフが食べたい（前書き）

ポトフとは言わずとも、冬には暖かいものが食べたいですね。  
目指せッ、夏！！ で頑張ってます。きっと。

## ポトフが食べたい

『うーみーはーひろいーなー、おおーきーいーなー。わーたーしーかなづーちー、およげーなーいー』』

「いきなり哀しくなったなッ。てか今の季節に入るのは自殺行為だかな」

一体の騎士が、砂浜で暮れなずみ始めて茜に染まる海原を、果てしなく遠い水平線を見つめていた。右腕の武装が目を引くフォルム。

「てゆうか、由佳里はカナヅチだったのか？」

『文句ありますか？』

微妙に喧嘩腰なのは気のせいだろうか。何故か敬語で話された。はあ、と美鶴は溜息をついた。ちなみに騎士である鎌錐には、溜息をつく機能はない。すべて美鶴の精神体上の動作である。

「いや別に。由佳里が勉強が出来て、スポーツも出来る万能さんってわけじゃなくて、出来ないこともあるんだなって知れて得した」

ついでに言えば、容姿も優れているのが由佳里だろう。最近、肩にまで伸びた赤茶がかった髪を鬱陶しそうにしているのを思い出す。しかし、美鶴としては今の髪型も捨て難い。

『何か馬鹿にされた気がするけど』

不服そうな由佳里の声を無視して、美鶴は砂浜に鎌錐の足跡を残して歩いた。つい先ほど、依頼を達成してきたところだった。外部居住区の人々の人間不信は根強いのが現状だ。あの少年は少しばか

りは圈内の人間を信じれるようになっただろうか。そうであっても  
らいたい。

押し寄せるさざ波が砂浜を絶えず濡らす。

久しぶりの海だった。かつて、大崩壊が起こる以前に海に行った  
記憶があるが、その後の隔離壁に囲まれた後には海水浴をすること  
は出来なくなった。圈内の海岸沿いは工業地帯が広がり、砂浜は姿  
を消しているのだ。圏外は圏外で、未だに安全が確保されておらず、  
海水浴を楽しむ人間はいないだろう。プレデター、その存在が全て  
を破壊した。

しかし、日本は恵まれている。降水量の多い国であり、周囲を海  
に囲まれているのだ。機械兵器であるプレデターの躯体の侵食は早  
く、だいたいその危険性は薄まっていると言えた。あいかわらず、人  
間に対しては脅威の存在であるが、ランカーによる掃討作戦は無事  
に成功するだろう。

日本がもし、内陸国であったなら、降水量の乏しい国であったな  
らば作業の難航が続いたかもしれない。実際、一部外国では難航し  
ているらしい。日本国土解放に向けた動きに同調して、外国の可住  
地域でもプレデター掃討作戦が計画された。しかし、想像を上回り、  
活発な活動が続けるプレデターの抵抗を受けているらしい。

「日本での掃討作戦は再来週だよな」

『そうだね。それが成功すれば、外部居住区の整備も大幅に進めら  
れるよね。美鶴も参加するんだから、がんばってね』

「りょーかい」

近い未来に、この美しく輝く海が人で賑わう日が来るだろう。人  
間がない環境は、名状し難い感動を与えるが、やはり寂しさが漂  
った。人間の社会で生きる者は、耳が痛くなるほどの喧騒を恋しが  
る。

『さてと、そろそろ散歩も終わりにしてさ。料理だよー、夕食の準備だよー。ポトフだよー』

「はいはい」

美鶴は苦笑して、小さな子供をあやすように言つて、鎌錐のカメラアイを海岸線の先に現れる巨大な壁に向けた。ディヴィディングライン隔離壁だ。いつかあの姿を拝むことが出来なくなる日もくるのだろうか。来て欲しいとは思ふ。そして騎士という存在もまた、いつかは消えなくてはならない。今でこそ、プレデターの排除、各エリアの防衛といった大義名分を掲げていられるが、その必要がなくなる日は遠くない。

柔らかい浜辺の砂を蹴り上げて、鎌錐を跳躍させる。右手に見える海の景観を横目で見やりつつ、美鶴はボロいアパートの一室でポトフを待ち侘びる幼馴染、もとい恋人のために急いだ。

「てか、何でポトフなんだよ」

『食べたくなつたから。美鶴の料理のレパートリーが増えるから、お腹も満たせて一石二鳥でしょ』

「さようですか……」

食材があつたかな、今月食費が足りるかなと思いつつも、美鶴は自分の帰りを待つていてくれる存在を嬉しく思った。自分は恵まれていると信じた。

外部居住区の住人の受け入れのために、多くの人々に許可証パスポートが発行され、通過料なしでゲートを通り抜けることが出来るようになった。その代わり、増加すると想定された強盗などの犯罪行為防止のための対策は数多となった。しかし、法だけが整備されるのではなく、外部の人々に対する救援として仮設住宅が建設され、給付金や

風呂場、衣類に食料なども提供された。

外周区での開発地域では、今もなお仮設住宅の建設が続き、多くの人々がいた。かつて出迎えた景色の寂しさを微塵も感じさせない活気に溢れていた。少なくとも、移住を決意した人々は幸せそうな表情をしていた。屈託のない笑顔を浮かべる子供達の姿に、美鶴はほっと安堵した。計画当初から懸念された圈内住人との衝突もなく、円滑に計画は進んでいるようだ。

その人々の中に見覚えある少年の姿を見つけ、美鶴は微笑んだ。鎌錐のカメラアイが捉えたのは、複数の人々と談笑をかわし笑顔を浮かべる稔の姿だった。心配は杞憂だったようだ。彼は無事に幸福の中にいた。

美鶴は踵を返して、アパートに向かった。さて、これから料理か。稔の家族構成は四人だったなど、考えながら市街地を進んだ。しばらく舗装路を走ると、途中で脇道に折れ、入り組んだ路地を急ぐ。

『食料は確保出来たから、安心してね』

唐突に由佳里から通信が入る。仕事中にどこかに買出しに行ってきたのかと思った。が、違った。

『はあ、はあ……。人使いが荒いぞ……。何故、儂の自腹なんだ』

由佳里の声の後に、息が荒い、しわがれた声が続いた。どうやら由佳里が文蔵に買出しを頼んだらしい。

「オヤっさん、どんまい」

『家賃を上げててもよいか?』

「やめてくれッ!」

白のペンキが剥離したオンボロアパート、《白夢荘》の姿が視界

に映る。美鶴は大腿で近寄り、踏み込んで二階に飛び上がった。改装も修繕もされていないこのアパートの階段は、未だに赤錆に覆われている。近い将来に崩壊しないか、不安である。

美鶴は急いで、鎌錐の左手で部屋のドアを開けた。玄関に並べられた二人分の靴。一足は女性モノらしい褐色のブーツ、もう片方は下駄。かなり寒そうだ。

美鶴は鎌錐の脚の土を落として、奥の居間へと上がった。

「ただいまッ」

美鶴を出迎えたのは、微笑を浮かべる恋人と、しかめ面のおっさんだった。

「鍋に収まりきってないけど。ちゃんと蓋が出来てないよ」

「煮てるうちに、野菜の嵩かさが減るから大丈夫」

「感心感心。ちゃんと勉強してるね」

「おかげさまでな……」

美鶴はスマートフォンを片手に、ポトフ作りに励んでいた。しかも七人前。一つの鍋では駄目だったために、二つ鍋を並べて並行して料理をしている。既に料理はほぼ仕上がりを迎え、中火弱でじっくりと煮込んでいる段階だった。熱気が押し寄せ、暑さに美鶴はパーカーを脱いで腕捲うでまくりをしていた。

「あと何分ぐらいで完成？」

由佳里が待ちきれないといった様子で訊ねてくる。

「だいたい、三五分煮て完成だつてさ」

美鶴は時計を見ながら答えた。現在午後六時一五分。七時までに完成するだろう。

「あと三五分!? うっわー、時間がかかるね」

由佳里が大袈裟に呻いた。頭に手を当て、天を仰ぎ見る。

「んじゃ、由佳里はオヤツさんの部屋を整理整頓しといてくれ。さすがにこの部屋に七人は無理だろ」

「そうだね、こっちじゃ狭いもんねー。んじゃ、私は片付けに派遣されてきます」

ビシッと敬礼して、美鶴の脇を通って由佳里が部屋を出て行く。間をあげず、すぐ隣の部屋のドアが開く音が聞こえた。

——にしても。

ふいに抱いた疑問。美鶴は思わず苦笑した。

——恋人の関係になっても、恋人になる以前と大差ないっていうか。全く変り映えしないっていうか。

別に以前から恋人みたいな関係だった、のだと自慢する気はない。拍子抜けしていたとでも言うべきか。単に二人の関係が『幼馴染』から『恋人』という名前に変わったただけな日常。

だからといって、落胆してはいない。他に代えることは出来ない日常、愛おしく、守りたい生活だ。

美鶴は身体を左右に捻り、筋肉を伸ばす動作をした。長い息を吐

き出して、目の前で白い湯気を噴出している鍋を眺めた。

ガチャリツ、と美鶴の部屋のドアが開けられる音が鳴った。「そろそろ、稔とやらの家族を呼んでこい」としわがれた野太い声が玄関から響いた。文蔵が来たらしい。

「んでも、まだポトフが完成してないんだよな。あと三〇分ってとこなんだけど」

「ポトフとはまた、洒落たもんじゃない」

「つつても、ポトフはフランスの家庭料理だけだな」

文蔵が美鶴の隣りに肩を並べた。二人の身長は大体互角。僅差で文蔵に軍配が上がった。

「もうほとんど完成しとるじゃないか」

「あと三〇分、煮込んでいれば完成な」と美鶴が答えれば、文蔵が任せると厚い胸板を叩いた。どうやら、吹き零れのないように見張り番をしてくれるらしい。美鶴はその厚意に感謝して、台所を文蔵に譲った。

「んじゃ、呼んでくるから」

美鶴は部屋を出る前に、炊飯器の予約をセットして、自室をあとにする。部屋を出たところで丁度、右隣りの部屋のドアも開く。そして、中から由佳里が姿を現した。クリーム色をした、裏地が赤のチェック柄のコートを着ている。

「あれ？　どっかに行くの？」

首を傾げる由佳里に美鶴は「稔君の家族を呼んでくる」と告げて、背を向けた。すっかり日の落ちて、暗く染まった街並みに明かりが

灯っているのが見受けられる。今日は風がなく、冷たくも辛くはない冬の夜だった。軋む階段に足をかけ、降り<sup>くだ</sup>終えて暫く歩くと、背後から近づく足音。「待ってよー」と呼び止める声がした。立ち止まって、首を捻って後ろをみれば、由佳里が走って近づいてくるどころだった。

「どうしたんだよ。由佳里も来るのか？」

「そうそう。美鶴一人だと稔君がまた怯えかねないからね」

「この顔で怯えられたら、救われないうって……」

美鶴は自分の童顔を思い浮かべ、短く息を吐いた。

「童顔だって言いことあるよ」

「そうだな。いいこと、あるよな」

——あつて欲しいな。

美鶴の左手が唐突に握られる。柔らかく、暖かい少女の手の感触が伝わる。美鶴の心臓が早鐘を打って暴れた。

「あつたでしょ。私は美鶴のカノジョさんになったんだよ。これがいいことじゃなければ、なんなの？」

そうだ。自分は十分すぎるほど、幸福の中にいる。美鶴は少女の手を軽く握り返した。

——こんな幸福なことは他にないだろう。

美鶴は赤面して火照った顔を反対に背けて、「そうだな」と呟いた。

「おッ、照れたね」

上機嫌である様子の由佳里に手を引かれるようにして、路を進む。目指すは外周区の仮設住宅だ。頭上には透明な空が広がっている。星が見えない夜の空だ。

目の前に広がる街の照明が、代わりに光ってやっているのだと威張っているような夜の情景だった。

ポトフが食べたい（後書き）

気ままに更新していきます。  
目指せ夏！！ 夏祭り！！

## ポトフと家族の暖かさ

夜の外周区に辿り着くと、美鶴は教えられた番号の仮設住宅のドアを数度ノックした。

「……………」

扉の向こうから返事は返ってこなかった。美鶴と由佳里は互いに顔を見合わせた。仮設住宅に備えられた窓からは照明の明かりが漏れている。中に誰かがいるとみて間違いがなさそうだが。まさか、急な来訪者を警戒しているのだろうか。いや、たしか稔の家族に食事の誘いをしてあるはずだ。美鶴は逡巡して、もう一度ノックしようとして手を伸ばした。

「いやー、すみません。もしかして、美鶴君と由佳里さんでしょうか？」

ハスキーな声が背後から発せられ、美鶴と由佳里は反射的に後ろを振り返った。

目の前に立っていたのは、人の良さそうな中年男性。

「ほんとに申し訳ない。久しぶりに風呂に入って、時間を忘れてました。すぐに戻るつもりで電気は消さずにおいたんですが、失敗しました」

申し訳なさそうに後ろ頭を押さえる男性。そう言われればと美鶴は思った。新調された服を着る男性は清潔感が漂っていた。およそ外部居住区の人間とは思えない。

「改めてはじめまして。稔えのほらの父の榎原幸雄ゆきおです」

軽く会釈する幸雄に美鶴と由佳里も「こちらこそ、初めまして」と言って返した。

幸雄とは騎士越しに会話をしたのみであって、生身で会うのは初めてだった。

「いやー、稔が言ってた通り、由佳里さんは美人ですね。学校でもモテてるでしょう」

お世辞ともとれる言葉を幸雄は口に出した。由佳里の場合、それは事実であるが。

「そんなことないですよー」

由佳里はまんざらでもないと言いたげに、微笑んだ。

『あッ、もしかして由佳里さんですか？』

聞き覚えある少年の声。稔が人込みの中から姿を現し、駆け寄ってくる。何故、由佳里だけ？ という疑問を美鶴はひとまず飲み込んだ。

「やつほー、稔君。初めまして。私が由佳里だよ」

由佳里が手を振って、稔に笑顔に向けた。少年の顔が一瞬、赤く染まる。慌てて視線をズラした稔と美鶴の視線がぶつかった。

「……………」

「おい、何か言ってくれ……………」

「もしかして……、美鶴さん？　ですか」  
「もしかしくなくても、美鶴さんだ」

稔が複雑な表情を浮かべ、こくりと頷いた。

「……初めまして」

「さっきの間は何だったんだよッ。おい、稔君。ついさっき哀れんだよな？」

「いや、別にそんなことはないですよ。姉弟だと思ったりなんてしてないですよ。ただ想像していたのと違っていたっていうか」  
「うっわ……」

美鶴は絶句した。心に突き刺さった稔の一言に、放心状態になる。頭の中で『姉弟』の文字が復唱されていた。

「まあ、美鶴は女の子顔だからね。仕方ないよ」  
「うッ」

由佳里の励ましは、美鶴にトドメをさした。最近になって諦めの気持ちが強くなり、童顔という現実を受け入れようとしていたのだ。まさか、出会って一日も経っていない少年から、遠回しに指摘されようとは思ってもよらなかった。美鶴の衝撃はなかなか大きなものだった。

「あゝあ。美鶴が壊れちゃった……」

由佳里が面白げに美鶴の顔の前で手を振った。それに反応する気力さえ、美鶴には残されていなかった。

「おにーちゃんッ」

突然、威勢のいい女の子の声が響いた。稔が弾かれたように飛び上がり、首を回した。稔の背後数メートル先で年少な少女が駆けていた。稔の様子を見る限り、彼女が彼の妹の由愛であるのだろう。身長の高さは美鶴の腰ほど。小学校低学年ぐらいだろうと思われた。

「なんだよ由愛。ほら、この人たちが僕を助けてくれた人たちだよ」  
「そうなのッ？ おねえーちゃん、二人ともありがとッ」

「………？」「」

複数の頭に疑問符が浮かんだ。由佳里が美鶴の顔を覗きこみ、したり顔になった。

「いやいや、おねえーちゃんたちは人助けが仕事だから」

「本当にありがとうございました。ほら、稔も改めて感謝しなさい」  
「お二人とも、どうもありがとうございました」

「誰でもいいから、由愛ちゃんの誤解を解いてくれ……」

美鶴は懇願するように声を絞り出した。わきあいあいとした雰囲気は非常に好ましいのだが、どうか人をダシにしないでもらいたい。げんなりとする美鶴を横目で見た由佳里が腹を揺すった。この場が華やいでいると、稔の母親も輪に加わり、一層明るさが増した。「そろそろ行こうか」という美鶴の言葉に一同は、ボロく寂れたアパートに向かって歩き始めた。

ふいに美鶴の携帯が震えた。とりだしてディスプレイをみれば文蔵だった。

「もしもし、オヤっさんどうしたん？」

ポトフを盛大にぶちまけた、などという最悪の事態を予想したが見事に外れた。

「歩いて来てもらっくんじゃ申し訳ないじゃろ。んで、もう外周区に車を止めておるんじやが、お前さんたちはいまだどこにおる？」

なんともいいタイミングであつた。まるで計算されたかのようだ。

「丁度帰ろうとしてるとこ、んじやさ——」

五分も待たずして、見覚えあるミニバンが視界に現れる。そういえば、七人も乗れるだろうか。その不安は見事に適中した。

アパートに辿り着くと、美鶴は此処まで走ったために乱れた呼吸を整えた。呼吸が安定すると、朱色のドアをゆっくり開いた。一足先早く戻った由佳里達が部屋の準備を整えていてくれるはずだ。開けた文蔵の部屋の扉の向こうから、漂ってくる匂いによだれが出てくる。

帰ったぞ、と部屋の奥に声をかければ「はい」と明るい返事が返ってきた。

既に玄関は六人分の外靴で埋まっている。美鶴は適当に置き場所を作つて、部屋に上がった。ヒーターが稼働中なのか、部屋が暖まっている。居間に顔を覗かせれば、大き目の座卓を囲っている六人の姿があつた。座卓の上には小皿や箸が用意されている。ジュースや清涼飲料などの飲み物も置かれていた。

「おつかれー」

由佳里がねぎらいの言葉をかけてくる。美鶴は座卓の空いている場所に腰を下ろした。由佳里と稔に挟まれるようにして座る。

稔とその家族が一瞬目を瞠った。美鶴は首を傾げ、視線を右手に落として理解した。屋外ではずっとパーカーのポケットに右手を突っ込んでいたために、義腕は人目についていなかったのだ。

「俺の右手は幼いときに失くしたんですよ。だから義手なんです」

美鶴はパーカーの袖をたくしあげ、パンドラ製の義腕を照明の下に曝け出した。光沢ある機械の腕が眩く光る。稔たちはお気の毒にと言いたげに口を噤んだが、稔の妹である由愛は「かつこいい」と言っではしゃいだ。幸雄が慌てて叱責しようとするのを制して、美鶴は「かつこいいだろ」と笑った。

「そういや、オヤっさん。肝心なポトフが置いてないんだけど」  
「今、ポトフとやはらは火にかけなおしておるとこだ。……そろそろいいじやろ」

文蔵が腰を浮かせた。ポトフは完成したまでにはいいが、美鶴達が来るまでに冷めてしまったらしい。のそりと立ち上がった文蔵を追って、美鶴も台所へと向かった。

台所からずしりと重たい鍋を両手で持ってくると、コルクの鍋敷きの上に据えた。待ってましたとばかりに由佳里や由愛が手を叩く。

「本当に招いてもらってありがとう」

人の良さそうな稔の父親が軽くお辞儀をした。それに続く形でその左隣りに座る稔の母親も頭を下げる。「おねーちゃんたち、ありがとー」と稔の妹である由愛は嬌声を上げた。

「俺はおにーちゃん、な……。男だから」

理解したのか、曖昧な返事が少女から返ってくる。どうも漂ってきた料理の匂いで浮き足立っているようだった。隣りに腰掛けている少年も心なしか、ウキウキとして見える。

「料理は殆ど美鶴がやったんで、みんな彼に感謝してあげてください」

「美鶴さん、料理出来るんですか!？」

美鶴の右隣で稔が酷く驚愕した声を上げた。そうして羨望の眼差しを向けてくる。

「ふっふっふ、凄いだろ。憧れてもいいぞ」

「君は何様のつもり？」

ここで笑い声上がる。稔を含めた彼の家族と文蔵が破顔していた。こんな大所帯での賑やかな食事は初めてかもしれない、と美鶴は思った。美鶴は横目で、家族と笑みをかわす稔の様子を窺った。家族がいる稔に嫉妬を感じていたのかもしれない。

自分の両親を幼少期に亡くし、ほとんど風化した思い出では両親の顔さえも不鮮明でしかない。今なお両親との日々を過ごしている稔を羨ましく思うのは必然ではないか。

「そんじゃあ、早く喰おうぜ」

美鶴は陰気な気持ちを掻き消すように明るい声を出して、鍋の蓋をおもむろに外した。部屋に充満する匂いにたまらなくなる。

「……………いただきます」

皆で唱和し、七人分の声が部屋に響いた。

「意外においしいッ」

と、声を上げたのは由佳里。つい今しがたジャガイモを口に含んだところだった。

「意外につて、お前が所望したんだろ。自信がなかったのかよ」

「美鶴が作るんだから美味しいと分かってただけどさ。何か見た目が地味というか」

と言いながら、由佳里は輪切りにされた人参を口に運んだ。

今回のポトフの具材は、人参、じゃがいも、玉ねぎ、大根、キャベツ、ベーコン、ウインナーだ。人参ぐらいしか鮮やか色をしていないために、確かに地味かもしれない。しかし、その評価基準でいくと、由佳里が好きな野菜炒めもまた地味なのではと思う。美鶴は皿によそった大根を口に入れた。よく味が滲みこんでいた。噛むほどに汁が溢れ出てくる。美味い。

「ぶしつけない質問なんですけど、もしや由佳里さんと美鶴君はお付き合いしているんですか？」

唐突に稔の父、幸雄が訊ねてきた。不意打ちの質問に美鶴はのけぞった。ごほおッ、と咽<sup>むせ</sup>て咳き込む。

「はいッ。お付き合いしてます」

由佳里は全く臆した素振りを見せずに答えた。言ってから、由佳

里ははにかんで笑った。

「あつつあつじゃな。ふぉッ、このジャガイモもあつつあつッ」

文蔵が慌ててコップのジュースを干した。

「舌を火傷すんなよ……」

美鶴は次は何を食べようか、思いあぐねた。

「ん？」

パーカーの裾が引つ張られる感覚がして、右に首を回せば稔が何やら思案顔だった。言い出そうか、言い出さまいか悩んでいるようだった。決心がついたのか、美鶴の耳元に近づいて手で筒をつくって話しかけてきた。

（料理が出来る人って、モテるんですか？）

美鶴はたまらず苦笑いした。

「出来るとポイントは高いぞ。例え、童顔でもな」

「出来れば、その……料理を教えてもらいたいです」

まごまごしながらも稔が言った。視線が座卓の鍋と美鶴の顔を行ったり来たりする。

「いいぞ。近いうちに教えてやるよ」

美鶴の言葉にパツと表情を明るくした稔。美鶴はその様子に苦笑して、まだあどけなさが残る少年の髪をグシャグシャと掻き乱した。

『人間にとって最大の贅沢とは、人間関係における贅沢である』

由佳里が人差し指を立てて、美鶴を指差した。

「それは、お前の言葉じゃないな」

「サン」テグジュペリの名言ですね」と稔が口を開いた。意外に博識らしい。

しかしなるほど、人間の贅沢は人間関係か。では、今の自分の現実には贅沢すぎる生活を送れている。

「新しく稔君の家族との交流が出来たんだからさ。人との繋がりは大切にしようってことで」

由佳里が全員を見渡して、大様に頷いた。

——いつまでも大切にか。

美鶴は由佳里との関係がいつまでも壊れないことを切に願った。

ポトフと家族の暖かさ（後書き）

## 食事＋少女＝恐怖（前書き）

とりあえず、登場キャラの多くは既に出たことある人たちです。  
言うなれば亜種？　ですかね。

## 食事＋少女＝恐怖

「やっと着いたー」

美鶴は朝の包囲網を掻い潜り、駐輪場に自転車を止めて一息ついた。前カゴに入れた鞆を取り出すと、二年用の玄関に続く階段に向かった。

美鶴は高二であるため、教室は二階にある。西徳付属では年功序列とも言つべきか、学年が上がるほどに教室の階が下がる。学年が上がるほどに楽になるのだ。そして三年は一階に玄関があり、二年と一年用玄関は二階になる。校舎に入る前に、まず外の階段を上らなければならない。

階段を上りきると、目の前に現れる手動の扉を引いて、美鶴は校舎内に足を踏み入れた。

「おはようございます、先輩ッ!!」

元気潑刺とした少女の声が空気を震わした。声の主は二年の玄関で待ち伏せていた。左右で揺れる二つ結いの髪が朝日を吸収しているように黒く輝く。

「うう、寒い、寒い。早く教室にいこ……」

美鶴は努めて無視すると、その横を通り抜けようとした。がしっ、と左腕が固くホールドされる。それでも動じず、ズルズルと美鶴は相手を引きずるようにして歩いた。その様子を見て笑うクラスメイトや他クラスの生徒が次々と二人を追い抜いていく。

「重いからな……。早く離れてくれ」

「女の子に重いつて言っちゃ駄目ですよッ」

瑠璃が頬を膨らまして、眉をひそめた。美鶴は長々と溜息をつくと、足を止めた。

「オモイオモイオモイオモイオモイオモイオモイオモイオモイオモイッ」

美鶴は舌を噛みそうになりながらも『オモイ』を連呼した。

「キャ——ッ」

瑠璃が美鶴を解放し、両耳を塞いだ。恨めしそうに美鶴を見てくる。その背後に般若のオーラが錯視できた気がした。なんだ、この状況は。

美鶴は頭に疑問符を浮かべて、目の前の後輩を凝視した。これと違って身体に異常は起きていなそうだ。

『女の子の気持ちを理解できない人はキライだよ。ねえー瑠璃ちゃん』

美鶴の首筋を逆撫でするような声が背後から聞こえた。美鶴はぎこちなく首を回した。思ったとおり、声の主は由佳里だった。

「そうですよ。サイテーですよ美鶴先輩。うつわーサイテー」  
「サイテー」

瑠璃と由佳里からの野次が、事態を把握できていない美鶴の胸に、何故か深々と突き刺さった。意気消沈する美鶴を放って、瑠璃と由佳里が顔を寄せ合い、何やら相談事を始めた。

「……で、何キロ？」 「実は——」 「——まだ平気だよ。私なんて……」

「——ダイエットしなきゃですかね」 「運動すれば平気だよ……きつと」

残念ながら、相談の一部始終が聞こえてしまった。とりあえず美鶴は事態を呑み込んだ。つまり彼女たちは体重が増えたことを気にしているらしい。

最近、由佳里は食い意地が張ってたからなあ。

「気にしてたら美味しい料理も不味くなっちゃうよ。たくさん食べても動いて脂肪を燃やせばいいんだよ。ねえ、美鶴」

ここで自分に振ってくるのか、と美鶴は多少面食らいつつ「そうだな」と首肯した。

「そういえば……」

由佳里の隣りで瑠璃が心機一転、眸を輝かせた。美鶴は嫌な予感がした。

「ウフフなお二人に質問です。恋人になるってどんな感じですか？」

「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
えッ？！  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「  
「

「  
」  
」  
」

何人分の驚きがあっただろうか。ちなみに、美鶴と由佳里の声は含まれていない。二年用玄関にいた見知った生徒達が目を瞠っていた。

「えつとー、あれ？ 他の皆さんは知らなかったんですか？」

瑠璃がきよとした表情を浮かべ、すぐに苦笑いになった。あはは、と乾いた笑い声を上げる。そんな後輩の姿は、すぐさま見えなくなった。問いただそうと詰め寄ってきた生徒の波に飲み込まれてしまった。

「おい美鶴ッ。いつからだよッ！！」「この裏切り者ー！！」「リア充は学校に来んなー」

「ゆかりっち、おめでとー！！」「やつとだねー。友達として応援してきた甲斐があったよ」

美鶴と由佳里に対する周囲の対応は千種万様であったが、美鶴に対する視線には若干非難めいたものが含まれていた。由佳里に恋心を抱いていた者や、勝手に恋人いない同盟を結んでいたらしい者から、美鶴は途端に敵視された。

「あとで話すからッ！！」

美鶴は由佳里の手を引いて、人込みから抜け出した。そのまま止まらずに教室へと向かう。

背後から女子の黄色い声と男子の罵声が追い縋ってきたが、振り返ることはしなかった。

隣りでは由佳里が面白おかしそくに吹き出していた。

「ふあゝ、ねつむ」

三限の授業は現国の授業であつた。美鶴は教科書を眺めながら、手の平で口元を隠して大欠伸をした。目尻に泪がじんわりと浮かぶ。顔を左に向ければ、窓の向こうに見えるのは真つ青な空。雲のない晴天だ。

美鶴は再び視線を教科書に落とし、掲載された文章を、つい先ほど読んだ文を読み返した。

その文章の内容は『ユートピア平和な場所』についてだつた。

——平和かあ。

その文章によれば、ユートピアの語源であるギリシャ語での意味は『どこにもない場所』つまり『存在しない場所』らしい。無い物ねだりの人間は現代においても、平和を創ろうと試行錯誤している。想像するのは楽だが、創造するのは遥かに難しい。

たとえ創れたとしても人間の性質上、ペニンシュラユートピアはすぐに荒れ果ててしまつたろう、と考えるのは悲観主義者すぎるだろうか。しかし人間の歴史上、争いのなかった時があつただろうか。なかったのではないかと思う。

『んじゃ、三ノ瀬。一四五ページから一五三ページまでを音読して』

出し抜けに国語の教師から指示される。美鶴は教科書を持ち上げて、口を開きかけて止とどまつた。

「先生……読む範囲が広すぎないですか？　なんで八ページも」

八ページということは、教科書に載るこの文章を最初から最後まで

で読め、ということだ。それは辛い<sup>つら</sup>い。

『いやなに、三ノ瀬がとても暇そうな顔をしてたからな。ほれ、つべこべ言わずに読め。あと五分で授業は終わりだからな』

「五分で読めないですよッ」

『……読め』

「はい……」

美鶴の僅かな反骨精神は、筋骨隆々の体育系国語教師の前には数秒ともたなかった。

放課後。

美鶴は由佳里とともに人でごった返した商店街を歩いていた。主だった用事は食料品を買うこと。お得意先である八百屋のおかみさんと熾烈な交渉を繰り広げた結果、美鶴の両手は重量感ある買い物袋で塞がっていた。タイムセールにどうにか間に合い、今回もそこそこ手応えある収穫であった。隣りで由佳里が片手に持った買い物袋を前後に揺らしながら、上機嫌に鼻歌を口ずさんでいた。

美鶴としても、禿頭<sup>とくとう</sup>のおっさん達とのエンカウントが少なかっただけあって、気分はすこぶる好調だ。しかし、もし二人が恋人関係になったと発覚すれば、学校のようなことにはならず、血を見る羽目になりそうで怖い。美鶴は昼休みに押しかけてきた男子達を思い返した。彼らは未練がましい表情を浮かべつつも、最後は現実を受け止めてくれた。

「そついえばさ、この前のキムチ鍋を食べ損ねたじゃん」

「——知らねえーよッ。俺は一週間昏睡だったんだよ。てか、結局食べなかったのかよ」

「そうだよ。全く、美鶴が戻ってこなかったせいで、私はキムチ鍋を食べてるところじゃなかったんだよッ」

「そ、そっか。でも逆に俺が戻ってこなくて、平然とキムチ鍋を食べてたら嫌だったな。精神的に立ち直れないかもな」

由佳里と談笑をかわし、美鶴は由佳里の住むマンションへと向かった。アパートに帰るのはそれからだ。五時過ぎであるにもかかわらず、辺りは日が落ちて暗い。冬になると途端に日が短くなる。電柱の間を、街路灯に照らされた路を二人は歩いた。吐いた息が白い煙と化して、後ろに棚引いて消える。

ふと眸に反対に向かつてくる人影が映った。薄暗闇の中に溶け込むような人影。そのシルエットは下方が扇状に広がっていた。まるで外套を羽織っているような人物が早足に近づいてくる。美鶴は警戒心を募らせ、由佳里よりも一歩先を歩き、その背後に彼女を隠すようにした。かつてのブラドとの遭遇に類似したものを感じ取ったのかもしれない。

しかし、美鶴の心配は気苦労に終わったようだ。

美鶴たちを見向きもせず、人影はすれ違っただけ。まるでお嬢様のような少女だった。美鶴と由佳里は互いに顔を見合わせ、首を傾げた。少女の出で立ちが異質であったためだ。

少女は漆黒のローブを纏っていた。その下に着ていたのは、露出度の高い服。およそ冬の夜を過ごす格好ではない。少女自身もそれは重々理解していたようで「チヨ―寒いッ」と愚痴っていた。

美鶴はもう一度、後ろを振り返ってみた。

――ッ?!

目の錯覚だろうか。美鶴は少女の首筋に光沢を放つシロモノを見たような気がした。いや、気のせいだろう。きっと、あのローブの装飾だろう。

——第一、知らない人間だった。

薄暗かったが、あの少女の顔に見覚えある形質は見受けられなかった。それに少女の口元から白い煙が出ていたため、騎士である可能性はないだろう。

「由佳里、寒いから早く帰ろう。風邪引くって」

「うん、そうだね。あの子の格好を見たら、こっちまで寒くなっちゃった……」

美鶴と由佳里はそろって身震いをする、帰路を急いだ。

「あゝー寒かったッ」

午後六時二〇分。居住区に構えたファミレスに、現代に相応しくない装いの少女が現れた。美鶴と由佳里が路ですれ違った人物だ。ローブを纏ったその出で立ちに、店内の客が度肝を抜かれたように、目の前の皿から視線を外して顔を一斉に上げた。

「お客様は……一名でよろしいでしょうか？」

店員がその顔に引き攣った笑みをつくる。いきなり時代錯誤したような客が来たのだ、しかも季節が冬だと思わせないような露出度が高い服装である。店員の驚きは至極当然であっただろう。不審者ではないかと疑うことも許されるであろう。

「いや、連れがいるはずなんだけどー。全身ジャージでいかにも非

行少女みたいな客は来てない？ 髪留めで七三分けにしてるブスな  
んだけど——」

「……いい度胸してるじゃない、悠月<sup>ゆうつき</sup>」

聞いた者の背筋を凍らせるような声色で、少女の声が店内に響いた。片手にドリンクを持った少女が近づいてくる。身長は一五〇あるか、ないかといったところ。全身をくたびれた赤ジャージで固めてあり、セミロングの髪は星の装飾が付いた髪留めで奇麗に七三分けにされていた。

ブスと呼ばれたわりに、整った顔立ちであった。

「おひさー、萌黄<sup>もえぎ</sup>。そんな不機嫌そうな顔してどったの？ 何か悪いものでも食べた？」

萌黄と呼ばれた少女がキツと、ローブの少女を睨みつけ、その袖を力ずくで引つ張った。

「ちょっと、ちょ、待ってよ」

見た目が寒すぎる少女——悠月が慌てた様子で待ったをかけるも、萌黄は無視してぐいぐいと引きずるように歩き、席に辿り着く。萌黄はどかりと席に腰を下ろすと、幸福を全て吐き出すような盛大な溜息をついた。

「ねえ、悠月。その格好は何？ とっても目立ってるから。——何がおかしいか分からないみたいなのをしないでよッ。とりあえず、今の季節は冬だから。常識ってモンを考えてよ、その服装は寒すぎるでしょッ！！ てか、よく平気だったね」

「いや、さすがに寒かったよ。うちはマジで凍え死ぬかと思ったもん。てかあれだね。夜に出歩くべきじゃないよ。うち、夜目がきか

ないからさ、道が全く分からなかったし」

ジャージ姿の女子、浪瀬萌黄なみせ もえぎは心労に目頭を揉んだ。向き合う形で座る少女、朴澤悠月ほおさわ ゆづきに店のメニューを渡して、温かい料理でも頼むよう告げた。しかし、少女は萌黄の意に反して、メニュー裏のデザート一覧に視線を落とした。

「んじゃ、このデンジャラスパフェにしようかな」

悠月が指差したのは、二人前はあるような巨大パフェの写真。バナナとチョコとストロベリーのアイスクリームが贅沢に盛られ、その上に生クリームが蜷局とくろをまいている。

「あんま甘いものばっか食べてると、昔みたいに太るよ」

悠月が睨みを利かせて「物騒なことを言うなッ」と齒軋りする。

結局、悠月は大事をとって、一サイズ小さめのチョコレートパフェを注文した。

結局パフェなんだ、と萌黄は心でツツコミをいれた。

ご注文の品が届くまで手持ち無沙汰になった悠月は、大きく伸びをした。ポキ、ポキ、と小気味のいい音が鳴る。七時前にかかわらず、店内の席はどこも客で埋まっていた。

「それで、悠月。調査はどうだったの？」

萌黄が一変して深刻そうな表情を浮かべて、問いを發した。眉間に深く皺を刻み、肱ひじの上に顎を載せるようにした。

「とりあえず、誤作動を起こしたみたいだね。格納庫から脱走していて中は空っぽだった。現在は目下搜索中」

「型式は？」

「乙式、重力操作」  
グラビティ

萌黄はますます眉間の皺を濃くした。そうして、縋るような視線を悠月に向けた。

「てことは、禍眼カメか……。大体の居所の目星はついてるの？」

「とりあえずは、ね。ただ、エリア2から結構近いところ。そのうちココに被害が出るかもよ。先月の依頼のときに博士を拉致っておけばよかったものを。そうしとけば今頃、慌ただしくなくて済んだのに」

「博士がいても、肝心の禍眼かさなりがなければ意味がない。とりあえず早々に解決しよう。私も鳴鳴かさなりが整備完了したから、出張るよ」

萌黄はグラスに残った炭酸飲料を飲み干した。短く息を吐き出して、グラスをテーブルに戻す。

「おお、頼もしいじゃん。てかさ、海外の支部からは援助とかないの？」

「あつちは、日本の拠点が消滅して、メンバーは全員死んだと考えるから。絶対にありえないね。こっちからあつちへの連絡手段も無いしね」

そうこう話すうちに、店員がトレイを手の平に載せて近づいてきた。

『ご注文の品をお持ちしました』

うら若い女性店員が運んできたのは、パフェと白い湯気上げるドリア。当たり前のように、パフェを萌黄の前に置こうとした。

「店員さんそれ、うちの」

店員がぎょつとした表情を浮かべる。「すみません」と言いつつ、訝しげにパフェと悠月の服装を見較べる。恐る恐るパフェを悠月の前、ドリアを萌黄の前に置くと「ご注文は以上でしょうか？」と訊ねてきた。萌黄が頷き返すと、ほつとした様子で店員は去っていった。

「そっぴやさー、他の二人はどうしてんの？ 二年近く会ってない気がするんだけど」

「千景は邪龍の動向を探りに行ってる。最近、彼らが活発に活動を始めたみたいだから。宗一郎は優秀な研究員を捜してる。とりあえず企業へ働きかけを強めてみたいけど」

「なんだか物騒なことになってきたじゃん。そろそろ全面戦争でも始めんの？」

「こつちから仕掛ける気はないよ。あくまで向こうへの牽制って段階。それにまだ災厄への手掛かりはゼロだから、向こうも攻めては来ないと思う」

萌黄はスプーンでドリアをひとすくいして、口に運んだ。ドリアの熱気が内から身体を温めてくれる。対して悠月は「さむッ、つめたッ」と引つ切り無しに言っ、生クリームの小山を削っていく。

瞬く間に消えていくパフェは、萌黄がドリアを食べ終わる五分前にその姿を消した。

「んじゃ、来週までに片をつけちゃおう。何かあったら、うちに電

話して」

悠月がそそくさと、帰り支度を始める。

「会計は私がつから。ほら、これを付けていきなよ。別に首輪は見えてないけど、寒すぎるから」

萌黄が渡したのは、赤と黒のチェック柄をしたマフラー。

「ありがとう」

悠月はすぐさま首にマフラーを巻いた。一瞬、髪が掻き上げられて露になったうなじに金属の物体が覗く。

「そっぴやさー、アギトもここにいるんだよね」

「何か期待してるなら、残念だけど。彼、彼女が出来たよ」

「嘘だッ。第一、何でそんなこと知ってんの?!」

「最近、私はこっちに移住したから。しかも彼の近所に。残念だったね、悠月」

「……………」

この世の終わりを見てきたような、絶望にうちひしがれた表情を浮かべる悠月に萌黄は追い討ちをかけた。

「しかも、カノジョはとっても美人で幼馴染」

「うっわ——ッ!!」

耳を塞いで、店内から飛び出す悠月。萌黄は苦笑して、その背中を見送った。

『——俺も怠けてばかりいられないな』

髪留めで髪が分けられた顔に、哀愁を浮かべた少女はレジに向かった。肩にかかるその髪の奥、首の後ろに僅かに光沢が覗いていた。

## 食事＋少女Ⅱ恐怖（後書き）

高望みをすると、文章が書けなくなりますよね。なんていうか、苦痛になってしまふみたいな。

というわけで、やる気維持のために、ちょっくら自分なりに面白げな日常を書きました。

目指せ、夏休みツ！！　ちなみにこの作品に対するやる気ゲージはまだまだ溜まってます。

たまに覗きに来てくれる人に感謝します。

科学者と童顔な少年（前書き）

読み難いかも……。はい。すみません。  
一章で放置していた伏せんを拾おうとしたら、疲れました。

## 科学者と童顔な少年

真っ白い通路は、潔癖さを強調しているようであった。白衣を纏った人々が軽く挨拶をしては後方に歩き去っていく。照明を反射してきらめく通路を美鶴と由佳里と文蔵は歩き続けていた。文蔵が先頭を歩き、そのすぐ後ろで美鶴と由佳里は肩を並べている。美鶴はいつもと変わらずパーカーとロングカーゴ姿。私服をあまり所持していないのだ。由佳里もまた変わらず、全身作業服姿だ。こちらはただ単に、私服が汚れないようにという配慮である。

本日は、美鶴の定期診断の日であった。平日であるため、学校は午前で早退した。由佳里も補助者であるため一緒に早退した。

ちなみにランカーとしての仕事の場合、学校を休んでもは公欠扱いになる。ランカーという存在は一つの生業なりわいとして社会一般に認識されているためだ。ただし、診断日であるという理由での欠席は通常欠席扱いにされる。一般生徒よりも授業出席数が少ない美鶴たちは、出来るだけ欠席を避けなければならない。そのため不承不承に登校して、嬉々として下校した。

しかし、つい先日美鶴と由佳里の付き合いが発覚した学校で、クラスメイトたちがどんな想像をしているか、考えるに忍びない。

「なあ、オヤっさん。質問なんだけどさ」

「なんだ？」

後ろを顧みながら歩く文蔵。美鶴はその広い背中に向けて言葉を続けた。

「誠さんつてもしかして、いつも研究棟に籠かごってるのか？ 外に出ているところを見たことがないんだけど。由佳里に聞いても知らないって言うし」

「私が小学生の頃は、竹ちゃんにお世話になってたもん。マンションではお父さんからの仕送りもあって一人暮らしだったから」

美鶴の隣りで由佳里が首をすくめる。だが、事の真偽を確かめたいという欲求があるらしく、興味津々な視線を文蔵に向けた。

「ああそうか。お前さんたちは知らなかったな。言うなれば、誠さんは柴川重工の地下施設に軟禁されとるんだ。開発主任という肩書きではあるが、その権限も制限されておる」

「はあ?!」

「えッ?!」

美鶴と由佳里は驚愕して、文蔵の顔を食い入るように見つめた。

「その訳はな。誠さんは、同調率90%の壁を越える技術の提唱者の一人であり、ボレアースの――」

「ッ!! ちよつと待ったオヤっさん。由佳里がいる」

「知ってるよ美鶴。私はお父さんのことを竹ちゃんから聞かされてるから」

「そうなのか?」

「うん」

どこか哀しげな表情を浮かべつつも、由佳里は頷きを返した。美鶴は渋々、文蔵に視線を戻した。

「まあーなんじゃ。神の領域へと辿り着くための研究の発案者であり、ボレアースの研究員でもあった誠さんにどんな処遇を与えるべきか、警察側と連合組合側で延々ともいえた協議が行われたんだ。その結果、最も適した場所として柴川重工に白羽の矢が立ったんだ。ここは非公式に騎士の開発をすることが認められておったからな。」

誠さんの存在を公にせず、その才能を廃すたらせない配慮で柴川重工は選ばれたんだ。ここの社長も快く誠さんを受け入れてくれた。  
儂らは誠さんに感謝しとる。軟禁状態であつても、不平、不満を言わないでいてくれとるからのお。――だが美鶴。お前さんも人のことを言えた義理じゃないぞ」

突然、文蔵から鋭い視線を向けられ、美鶴はたじろいだ。ゴクリ、と生唾を飲み込む。

「津野田さんがもし見逃してくれていなければ、今頃お前さんは少年院かどこかの研究施設に閉じ込められていたかもしれないぞ。今でこそ連合組合の厳重な保護下にあり、経過観察対象として自由の身になっておるがな」

そうであつた。美鶴は思い出して苦笑いした。美鶴がボレアースのメンバーであつたことを警察側は把握していない。七年ほど昔、美鶴が組織を抜けた時、血塗ちまみれつのだの美鶴と誠を発見して病院まで届けたのは津野田であつた。津野田昌親、捜査課に属す主任刑事だ。

美鶴は後から聞かされたのだが、津野田は事情を聞いたうえで、組合の知人であつた文蔵に連絡をとつたらしい。彼は首都圏の治安を守る警察としてではなく、一人の人間として判断を下した。美鶴の未来が出来るだけ明るいものになるよう、最善を尽くしてくれた。それゆえ美鶴は今現在、自由を享受できている。

そして津野田が真つ先に文蔵に連絡をとつたことは、誠にも幸いした。

連合組合側が身柄を保護したことで、警察も不用意に誠を扱うことが出来なくなった。その結果が今なのだろう。しかし、銀狼だけは蛇に奪われてしまった。津野田が現場に戻った時には銀狼の姿は消えていたらしい。

「つてことは、誠さんは此処に住んでんのか？」

軟禁されて外に出ることが許されていないぐらいだ。生活環境が整えられているのだろっ、と美鶴は考えた。

「そうだ。まあ、何一つ不自由ないぐらいに環境は整備されとるらしいからな。衛生面なら問題ない」

文蔵が腕を組んで頷いた。

自動ドアの入り口が近づいていた。美鶴たちは白い通路の先に連なった変わり映えしない純白の部屋に入った。書類やらマグカップやら機械の一部が乱雑された作業台が眸に映る。その周囲では目の下に青痣をつくった研究者たちが慌ただしげに動いていた。

どことなく場に張り詰めた空気が漂っていた。美鶴は無性に、換気して空気を入れ替えたく思った。

「なんか張り詰めてないか？」

美鶴は目の前の文蔵に声をかけた。文蔵は顎をさすり、低く唸った。

「どうも、そのようじゃな……。誠さんはどこにおるだろうか」

文蔵は目を凝らして、誠の長躯が誠愛用アンドロイドのよく肥えた姿を探した。ふと、こちらに気付いた白衣の男性が小走りで近づいてくるのが視界に映る。愛称『ペロツキー』こと……中肉中背の冴えない研究員だ。相変わらず、口端からキャンディーの白い棒が覗いていた。

「お久しぶりでありますッ」

ビシッ、と敬礼するペロツキー。その目元にも隈が出来ていた。全体的にやつれた様子であり、冴えなさに磨きがかかっている。

「ペロツキーさんだったかな」

文蔵が気圧されながらも、口を開いた。

「はい、であります」

「誠さんから連絡を受けて、美鶴の定期診断に来たんじゃが。どうも忙しそうだな」

ははは、と乾いた笑いをして、ペロツキーが後ろ頭を掻いた。

「最近実験ばかりだったもので。でも安心してください。試作段階ですが、今日完成しましたから」

と言うペロツキーの後方では、研究者たちが互いにあいつの言葉を交わしていた。ではこの場に未だに漂っている張り詰めた空気は何なのだ、と美鶴は首を傾げた。

「ただ、主任の方がまだ実験中なんですね。あの人は凄いですよ、ホント。僕たちじゃ全く理解出来ない図面を描いてましたし、開発速度も僕らが一〇人の開発チームを組んだよりも早いんですから」

ペロツキーが今はこの場にいない誠に対して、羨望の眼差しを向けた。

なるほど、この空気は彼らの開発主任の実験の動向を知りたい故のものらしい。成功を祈る気持ちが空気を張り詰めさせていた。

「それじゃあ、出直した方がよいかの」

「——いや、主任が連絡をとったなら、平気であります。きっと、完成のメドが立っていたのだと思います」

深く頷くペロツキー。ここまでの一連の会話で、彼が誠を非常に尊敬しているのだと知れた。誠はとても恵まれた環境にいるようだ。

「ところで誠さんは何の実験をしとるんですか？」

文蔵の質問に対して、ペロツキーから返って来た返事は、

「想念技術の一種らしいんですが……。想念技術っていうのはですね、人の脳波で機械を直接操作する技術の総称なんですが、確かオーバーダイブが何とかと言っていたです」

というものだった。ペロツキーはその言葉が初耳なのか領解りょうかいしない表情をして、首を傾げた。

美鶴と文蔵と由佳里は、途端に複雑な表情を浮かべた。

三人ともオーバーダイブの名を知っていた。その技術の内容も概おおむね把握していた。何か良くないことが起こる、三人はそんな前兆を感じた。

「——先生、これ何？」

凶兆だと思っていた美鶴は、誠（肥満体型アンドロイドモード）から手渡されたソレを見て眉を寄せた。隣から由佳里もそれを覗き込み、こめかみに手を当てた。

「ブレスレット？」

由佳里の言葉に美鶴も賛同したかった。見た目自体はクロムメッキのブレスレットであった。しかし、材質が何で出来てるのかと思うほどに、ずしりと重たい。二人の困惑する様子に不敵な笑みを浮かべる誠（肥満体型アンドロイドモード）。

「何と、それはあッ」

「それは？」

「オーバーダイブシステムの安全装置と見たがどうじゃ？」

文蔵の言葉に誠は豊満な頬を膨らませた。誠が精神転送トランスしているこのアンドロイドの造りは人に酷似されている。騎士の多くが眸に幾何学模様を浮かべているのに対し、これは瞳孔といった細部まで造り込まれており、人目では機械だと判別できない。

「どうして先に言っちゃうんですかッ、竹山さんッ」

誠が頭を抱えて大袈裟に苦悶する。美鶴たちはそれをみて苦笑するしかなかった。

「なるほどー。こいつを嵌めとけばオーバーダイブをしても、精神リハ回帰イバルが無事に起こるってわけか」

美鶴は試しに手をその輪に通した。しかし、この重さは気になる。

「まだ試作段階だけだね。とりあえず、首輪だった頃の安全装置を真似してみたから、今の段階で50%の成功率ぐらいにはなってる

と思う。さすがに肉体との直接接続じゃないと成功率は下がっちゃうね。あッ、実際に試さなくていいよ。失敗したら困るから」

誠が慌てて、視線を美鶴と由佳里に通わせる。ふくよかな顔の目元が緩み、優しい笑みを浮かべていた。

「いやー、ベストカップルだね。由佳里、おめでとう。お父さんは鼻が高いよ」

「ありがと、お父さん」

「おーい、先生。さつさと診察を終えちゃおう。俺たちは明日も学校なんだよ。今日は早退したけどな」

美鶴は誠をじろりと一瞥した。誠が頬を掻いて、申し訳なげな顔をする。診断日と重なって、学校を早退または欠席したのは今日に限ったことじゃない。美鶴としては、学校を休めるいい口実となるのだが、あまりに休みが多いと進級のための追試験を受けさせられるハメになる。

今学期はまだ出席数は足りている、はずだ。

「それじゃあ、診療室にいこっか美鶴君。っとその前に、人間モードに戻らなきゃだ」

「そっちの方が似合ってるよ」

美鶴は、背を向けてそそくさと離れていく肥満体型アンドロイドの恰幅のいい後ろ姿に向かって言葉を投げかけた。「ありがとー」と返事が返ってきたのに、思わず失笑した。

どこかの病室かと思紛うような部屋の様子が視界を埋める。明ら

かにそうじゃないと理解させるのは、部屋に据えられた転送装置の存在だ。美鶴のために用意された診察室。美鶴は転送装置の中に納まると、力を抜いて全身を預けた。

「そうそう、鎌錐式式の調子はどんなもんだい？」

まめに散髪されていないクセのある茶髪をした誠がA4サイズの情報端末のディスプレイを見ながら訊ねてきた。横顔であっても、その頬が痩けているのが分かる。研究のために自分を酷使した証拠だ。

ちなみに鎌錐式式とは、前回のブラド操る戦猿いくじとの戦闘で大破した鎌錐の後継機だ。形姿にはほとんど変化はないが、性能面が飛躍的に上昇している。

「快調だよ。『引き剥がすもの』の飛距離も伸びたしな。それよりも先生。自分の調子はどうなんだよ。随分と痩せやこけてるし、目元の隈も酷いぞ」

美鶴は自分でも驚いてしまうほど、誠を心配した。

「最近はホントに研究漬けだったからね」

誠が目頭を揉んで、首を回す。足を組み直し、自分で肩をほぐすようにする。随分と疲労困憊ひつうこんぱいの様子だ。

「まさか、転送時間で六時間を越えた日はないよな？」

転送には転送限界時間が定められているのだ。人によって多少前後するが、一日六時間以内と決められている。それを越えた場合には、肉体に戻ったときに揺り戻しとも呼ばれる、吐き気や平衡障害

などの反動が大きくなる。一種の接続酔いだ。誠の様子を観察するかぎり、この揺り戻しの症状が現れていた。命に別状はないだろうが、十分な休息が必要であろう。

「ここ最近は一、三日それが続いたかな……。ふあゝねむい」

「由佳里が心配するから無理すんなよ」

「おっ、彼氏として、彼女のお父さんを心配してくれるのかい？」

「茶々入れんなッ」

美鶴は短く嘆息して、転送装置に深く埋まると、視界から誠の姿を消した。この調子なら心配することもないだろう。

「……かつての君と較べられれば、僕なんてまだまだだよ。ああそうだ、さっき渡した安全装置は常に身に付けておいてね。半径三〇センチの範囲に君がいれば機能するから。万が一ってこともあるからね。まだ彼らの行方は分からないわけだし、エリア内に侵入しているかもしれないからね。前みたいに、昏睡して由佳里に哀しい思いをさせないでもらいたいから」

誠の声が転送装置内に反響する。美鶴は眸を閉じて、返事は返さなかった。

かつて、施設にいた頃の美鶴の騎士との最長接続時間は二四時間を越える。ボレアースが作った投薬の成果だ。日本の施設が廃墟と化した現在では、そんな薬物は日本に存在してはいないだろう。そう、日本には。

日本のボレアースの本拠点であった『アンダーヘル』は、過去に美鶴が再生不可能なほどに破壊し尽した。多くの執行者を排除し、研究資料も抹消した。しかしそれは日本の中だけの話だ。ボレアースの組織としての本部は外国にある。しかし外国でも排斥運動が強まっていたため、今も存在しているかは分からない。第一、美鶴は

本部の所在地を知らない。誠なら何か知っているかもしれないが、それを聞く気にはなれなかった。聞いたところでどうすることも出来なければ、日本と同じように破壊しようとも思わない。

美鶴としては、世界から脅威となる存在を無くすことよりも、由佳里との日常を守ることの方が大切だった。

## 科学者と童顔な少年（後書き）

美鶴と由佳里の恋人らしいシーンみたいなのが書きたいなあー。  
と思う今日この頃。

夏祭りや夏休みを迎える前に、そんな場面を書ければいいなと考  
えています。

恋人×彼氏≠マンション（前書き）

サブタイトルは気にしないでください。思いつかなかっただけです。

とりあえず、文蔵には退場してもらいました。  
はい、恋人同士の日常、パート1です。

## 恋人×彼氏≠マンション

診察を終えて帰路につく美鶴たちは、すっかり日が落ちて暗くなった国道をミニバンで走行していた。周囲ではヘッドライトを点けた車がそれぞれの目的地に向かって、流れるように走っている。

「そうじゃ美鶴。僕は今晚、組合での集会があるんだ。じゃから夕飯はいらんからな。ふう、にしても今晚は冷え込むな……」

文蔵がバンを運転しながら、後部座席に座る美鶴に話しかけ、顔を前方に向けたままで左手を伸ばして暖房の温度調整を行う。間をあげず、ゴオオツ、という音が大きくなり温風が強く吹き始める。

文蔵が所属する騎士取扱組合は、騎士関係の技術開発などを企業と協同して行っている。それなりに著名な団体である。連合組合を構成する主要な組織の一つでもある。

「いつの間にか、オヤっさんの夕飯作りも日課になってんな。まあ、了解。それじゃあ俺は勝手にメシを喰うから——」

「じゃあ美鶴。今晚は私の夕飯担当で。ハイ決定♪」

由佳里が美鶴のパーカーの袖を二、三度引っ張って、弾ませた声で主張。美鶴の返事を待たずに由佳里は決定事項とした。そしてその勢いであれやこれやと料理名を上げてくる。そんな様子の彼女を落胆させたくないという気持ちで、美鶴の中で強くなった。後ろ頭を掻くと「仕方ないな。簡単なもんでいいよな」と言って承諾した。

「それじゃあさ。家<sup>うち</sup>にくる？ 美鶴って、いつもマンションまで送ってくれるけどさ。部屋に入ったことないよね？」

由佳里が窓から差し込む街の照明を反射させた、煌めいた双眸きつを向けてきた。口元に人差し指を当て、首を傾げて「どう？」と訊ねてくる。

美鶴はそんな仕草一つ一つを目で追ってしまい、慌てて顔を車両前方に向けた。バックミラーに映る文蔵の口元に笑みが浮かんだ気がした。

「えっと、いいのか？ 何ていうか……」

——年頃の男女が二人つきりになるんだぞ。しかも恋人同士……。

別に何も期待はしていない、と美鶴は拳動不審に首を全力で左右に振った。

「いいじゃないか。——若気の至りで、ハメを外さなければな」

文蔵が美鶴の背中を押すも、きちんと釘をさした。

「はい、マンションに到着ッ。それじゃあ、部屋に早くいこッ」

由佳里がスキップするような、軽やかな足取りでエレベーターに向かう。由佳里が住んでいるのは高さ二〇〇メートルを超す、六〇階建ての超高層マンションだ。大崩壊後、隔離壁内の人口に対するキャパシティを増やすために、この類の高層建築は多く建設された。しかし、企業間の抗争などにより、外部居住区住人の受け入れが難航し、どこも空き部屋が多い。今回の各エリアでの外部圏住人の受け入れでは、そうした空き部屋も宛がわれている。仮設住宅を建てられる土地が限られているためでもある。

「んじやな、オヤっさん」

美鶴はバンの運転席に納まったままの文蔵に手を振った。文蔵はそのエラの張ったいかつい顔に笑みを浮かべ、軽く手を上げると走り去っていった。

「ほーらー美鶴。早く、早くッ。エレベーターが来ちゃったよ」

「分かったから大声出すなよ。近所迷惑になるって」

美鶴はほとんど駆け足で、由佳里のもとに向かった。自然と高揚する感情が表情に出ないように、必死に抑えつけてエレベーターに乗り込んだ。

由佳里の部屋はマンションの五二階にあった。聞いたところによると、街の夜景が奇麗に見渡せるらしい。しかも2LDKの部屋だ。一人暮らしには広すぎるような空間に、美鶴はリビングに踏み込んで固まった。玄関を見ただけでも清潔感や高級感に溢れていたが、目の前に広がるブラックウォールナットのフローリングが照明を反射し、シックな家具が完璧と言えるほどに整頓された部屋に、美鶴は戦慄さえ覚えた。

——別世界だっつてッ!!

由佳里はそんな美鶴の様子を見て微笑を浮かべた。リビングの設置された黒のソファを指差して「楽にしていよいよ」と言っつて別室に姿を消した。が、美鶴にはそんな厚かましい態度をとる気が起こせなかった。完全に気圧されていた。

数分もせずに、何事もなかったかのように由佳里がリビングに戻ってきた。しかし、服装が作業着からパステルカラーの可愛いルームウェアに変わっていた。由佳里は佇立していた美鶴を見るなり、吹き出して腹を抱えた。

「ほーら、ここに座っていいからッ」

由佳里がソファに埋まるように腰かけ、自分の隣りをバシバシッと叩いて指示を飛ばす。

美鶴は渋々ながらもその隣りに座った。座り心地のいいソファに美鶴の身体が沈む。

「すんごく、高そうな部屋だな……、——ッ!!」

不意に由佳里が肩に頭を預けてきて、美鶴の心拍数は急上昇した。服越しでも否応なく伝わってくる体温。少しずつ首を傾げると、由佳里の顔がすぐ目の前にあった。整った顔立ち、薄紅色の唇、艶やかな髪。広く露出した首元に見える美しい鎖骨のラインを美鶴は目で辿った。部屋着越しにでも分かる胸の膨らみに視線が行きそうになり、慌てて視線を上げれば上目遣いの由佳里と目が合った。

「なんかこうしてると、恋人同士なんだって実感するね」

幸せそうに笑い漏らす由佳里。美鶴は気恥ずかしくなりながら頷いた。

「——よっし、由佳里。夕飯作りだろ。何にする？」

「今まで食べたことがなくて、美味しいものがないなあ」

「……冷蔵庫にある食材を使っちゃっていいよな」

「どーぞ、どーぞ」

美鶴は名残惜しくもソファから立ち上がり、キッチンに向かった。うん、台所も凄く綺麗で、広い。自分が住むアパートとの違いに、驚愕と嫉妬と敗北感が緬い交ぜになったような感情が込み上げる。冷蔵庫を物色した美鶴は、由佳里のリクエストに副う料理を決定した。壁に掛けられた時計を見れば、午後六時四五分。

美鶴は両手を天井に向けて、身体を左右に伸ばした。両手を洗って清潔にすると、手際よく調理を始める。途中、手持ち無沙汰だった由佳里も参加して、終始和氣藹々とした雰囂氣で料理は進んだ。

「でさー、この料理の名前はなに？」

料理を作り終え、リビング中央に置かれたリビングテーブルに料理運び終えると、由佳里が目の中の、白く湯氣を上げる料理を示した。

「ん？ これはピカタって料理」

美鶴はテーブルの前に腰を下ろした。その隣りに由佳里も並んで座る。

テーブルの上に置かれた皿に盛られた料理からは、香ばしい匂いが漂ってくる。美鶴が作ったのは、ピカタというイタリア料理。味付けした鶏肉に小麦粉を塗し、溶き卵にくぐらせてソテーにしたものだ。

「へえー、初めて聞く料理。うん、すごく美味しそう。早く食べようよ、美鶴」

由佳里が美鶴を催促する。

「それじゃあ――」

「いただきます」

少年と少女の声がシンクロして、部屋に響き渡った。

「ほんと、美味しいッ――！」

由佳里が感極まった声を上げる。美鶴もピカタを口に運び、咀嚼そしゃくする。外側はサクツとしながらも、フワツとした食感。上々の出来だ。文蔵がいればここで一杯やるだろうなと思いつつ、美鶴は隣りで嬉々とした様子の由佳里に顔を向けた。幼馴染であり、恋人である少女の幸せそうな表情カオを見ると、美鶴の心も幸福感に満たされた。

「はいッ、あーん」

由佳里がピカタの盛られた皿に添えられていたミニトマトを箸で上手に掴んで、美鶴の口元に運んできた。

ああ、そうだった。由佳里はトマトが苦手だった。

「……拒否権は？」

「なしッ」

「……………」

美鶴は致し方なく、生鮮な赤い野菜を受け入れた。

恋人×彼氏≠マンション（後書き）

そろそろ、戦闘シーンに入りたいと思います。

梟と少年と亀（前書き）

はい。

どうぞ。

## 梟と少年と亀

「ねえ、どうすんの？ 涙」

倦怠感を募らせた少女の声が、闇で黒く塗り潰された廃墟に響く。同時に地響きが鳴り、半壊したビルのシルエツトが崩れた。その周囲でドミノ倒しの如く、連なった建築物が倒壊していく。濛々<sup>もつもつ</sup>と立ち昇る粉塵がさらに視界を奪う。

「ほんと、最悪だつて。うちは夜目が利かないんだつて、マジでッ」

「だから、頼<sup>チク</sup>の専用騎士は暗視特化仕様なんだろ？ 少なくとも、俺の方が断然、分が悪い」

声変わりのしていない少年の声が答えた。月明かりの下に姿を晒した人影は、小柄な少年そのものであった。その隣りに鳥類のような翼を背中に生やした人影が並ぶ。

「にしても、いい趣味してるね……ウル。まさか、あんたがそんな騎士を使うとは思わなかったわー」

「うちに残った開発チームに任せたらこうなったんだ。俺の意思は一欠片も入っていない」

不服そうな声を上げた少年は、月明かりを反射する金髪を持つていた。口元はマスクで覆われ、目元には黒く稲妻が描かれている。目を引くのは背中に生える武骨な金属棒、その先端には球体が付いていた。それら人間ではない証を除けば、かなり幼い顔造りの男子でしかない。

その隣りで少女の笑い声をたてるのは、まるで梟に近似した面貌

の武装アンドロイドである。四肢とは別に、背中に金属板が連結したような光沢のある翼を生やしていた。

「へー、ほんとかなー。まあ、それは置いて……性能は向上されてるんでしょ？」

「ああ、この見た目でもな。こいつは後継騎でもあるんだ、期待してくれてもいい。だが、禍眼<sup>カメ</sup>とは少々、相性が悪いな」

「あれと相性がいい奴っている？ 重力操作とかマジでチートじゃん」

「チートってなんだい？」

「へ？ えーっと、とにかくセコいってことッ！！ ほら、来るよッ」

二体の騎士が跳躍して、二手に分かれる。転瞬、二体が寸前まで立っていた場所に巨大な影が落下。破砕音を伴って舗装路を砕き、一帯の廃墟を崩落させて瓦礫の山へと変える。影の大きさは、高さ六メートル、横一〇メートルほどはあるだろう。山のような形状をしていた。闇より濃いシルエットは音なくその場で旋回し、頭部らしき部位を梟<sup>フクロ</sup>の騎士に向けた。

「うわッ、狙われた。最悪だー。お願いだから、自滅しちゃってよ」

少女の悪態を掻き消すように、爆裂音が轟いた。山のようなシルエットに閃光が走る。翼をもった騎士は慌てて、地面を蹴ると滑空するように跳躍した。途端、その後方でアスファルトに覆われた地面が深く抉<sup>えぐ</sup>られた。

「ったく、こっちから攻撃が当たらないのに、向こうは余裕綽々<sup>ぜいじやくせきせき</sup>に遠距離攻撃って……卑怯だッ」

「にしても、このままじゃ埒<sup>らち</sup>が明かない。奴を囲むように出来てい

る重力場をどう攻略するか。チーク、しばらく掩護しろ」

「仕方ないなー。ここにうちとメディアンがいなかったらどうするつもりだったんだか」

チークは同調する騎士——メディアンメディアンの背中に装着された翼、《ツァデー・バインダー》の片翼の末端部を分離した。本体から離れた翼の一部は二つに割れ、瞬時に転変して二本の太刀と化す。それをチークは両手に握った。

「便利なもんだな。翼自体が主兵装になってるのか」

少年の形の騎士なりと同調した、ウルが驚嘆の声を上げた。

「展開すれば簡易的な盾にもなるんだよ。まあ、全部で十八枚しかないし、分離するほどに守備範囲が狭くなるけどさ」

チークは両手の太刀を構えて、廃墟が見下ろす広い通りの奥に鎮座するシルエットを見据えた。月光が照らし出したその姿は、陸棲種のカメのようであった。複数の金属パネルを繋ぎ合わせたような背甲はこうが大きなドーム上に盛り上がっている。甲羅から伸びる頭部はこちらを凝視するように微動だにしない。鋭い嘴くちばしをもった顎、口端からは白煙が棚引いている。咽喉に装備された砲身が放熱しているのだろつ。あれが、チークの追っていた機械兵、禍眼だ。

ここまでの戦闘で、ウルとチークが攻撃を当てることは出来ていない。僅かに掠らせることも皆無だ。禍眼に刀身が届く前に、見えない壁のようなものに弾かれるか、地面に叩きつけられてしまった。それらは全て、禍眼の重力操作能力によるものらしい。そして、禍眼自身、自らの重力を小さくすることで俊敏な動きを体現していた。

「奴の重力場フィールドがどのような性質を持っているか、見極めさせてもら

う」

ウルが地面に膝をついて、左腕を前に突き出した。

「そういえばさ、かきなり鳴鳴の機能って、かみなり神鳴のものを引き継いでるんだよね」

「ああ。まあ、見ている」

ウルとチークの目の前で、鳴鳴の左腕が展開を開始する。渦を描くように、糸が解れるようにして騎士の腕が展開して変形していく。その過程は造形美とも呼べるかもしれない。

チークは完成した鳴鳴の兵装を見て、言葉を失った。明らかに左腕だけの容積では造形不可であろうルールガンモジュールが、その照準を禍眼に向けて顕現していた。

「ルールガン？」

「ああ、美鶴クンの銀狼からヒントをもらったものだ。彼の場合、これが最終兵装だったが、俺の場合はこれが主兵装だ。性能面は折紙付きだ」

ウルは右手で左腕を支えて、狙いを禍眼に定めた。ルールガンに連結した弾倉から弾丸が装填そうてんされる。鳴鳴の背中に伸びる金属棒の間を、紫電が行き交い始める。数十秒ほどの間をおいて、ウルは狙いを定めて射出した。

紫電の線が空間を切り裂く。瞬く間もなく、禍眼を巻き込んで爆煙が上り、大地が鳴動した。

「すっご。もしかして、あっさり終了？」

「いや、奴の目の前で弾道が曲げられた。次だ」

ウルが再び弾丸を装填して、禍眼に再照準する。今度は禍眼を狙うのではなく、その僅かに上。本来であれば掠りはしないだろう場所に狙いを定めた。

視界の先で、薄れた白煙より巨大な亀が何事もなかったように現れる。粉碎して地割れを起こした舗装路とは対照的な無傷の装甲。まるで歯が立たない。

「どうやってあれを止めればいいんだか。まったく、あれを造った人が責任もって処理してよ」

「もう死んでいる人に言っただって無駄だぞ」  
「分かってるって」

チークは懺然とした態度で返事を返した。

「こいつでラストだ」

鳴鳴の背中で、金属棒が再度電流を纏い始める。そして、闇夜に電光が走った。

「あーらら……駄目じゃん」

間をあけて、少女の落胆の声が闇夜に響いた。

過去と今と封筒（前書き）

昨日の皆既月食を見逃しました。はい。  
次は三年後……。また忘れそうです。

とりあえず、大崩壊の説明などが主ですかね、今回は。

## 過去と今と封筒

「てか冬ぐらいさ、オヤっさんの部屋でもいいだろ。なんで俺の部屋なんだよ」

美鶴はいつから日課になったか分からない大家への朝食作りを終えて、卓袱台に舞い戻った。今日の朝食は焼鮭と味噌汁と白米だ。居間では文蔵が相変わらず新聞の一面に視線を落としていた。

「今更変えると、俺の朝の計画が狂う」

面を上げず、新聞に視線を落としながら文蔵が答える。

「どんな計画だよ」

「ふむ。朝、起床したならば、朝食が出来るまで布団から出ずにいる。俺の部屋を使わないなら布団を片付けなくてすむからな」

「そんな計画はすぐに改正しろッ」

卓袱台の前に腰を下ろすと、美鶴はリモコンを取ってテレビの電源を入れた。音とともに映像が流れ始める。美鶴はめばしい番組を探すように、チャンネルを回した。

『——昨夜、日本全エリアの総裁による会談が行われました。今回の会談では、今後の基本方針や資源問題について討議されたと見られています——』

興奮気味の女性の声が流れ、美鶴はテレビの画面に視線を注いだ。

文蔵も新聞を卓袱台の上に置いて、顔を上げる。画面には女性アナウンサーの姿が映しだされていた。ふいに映像が切り替わり、代わりに真摯さ、利発さが滲み出ているような、黒のブランドスーツに身を包んだ男性の姿が映し出される。彼こそが首都圏の最王手企業クロツカの若き社長、伊集院雷だ。

日本最大規模の企業のトップであり、エリア2における政治家の最高権力的地位にもいる、三〇代前半という若きクロツカの社長。歴代クロツカの経営責任者はさすが日本最王手とも言われるだけあり、豪傑揃いであつたが彼もまた辣腕に優れており、かなりの手腕をこれまで発揮してきている。

『——今後の基本方針として伊集院総裁は、世界的に枯渇している資源への対策の検討をしていくと説明しました。また、そのために会議において、各エリア総裁と目指す目標への認識を一致させたと語りました』

ここで再び画面が切り替わり、スタジオに女性アナウンサーがいる映像が流れる。

『かつて、大崩壊、ブレイクダウンと総称される戦争が起こった原因は、慢性的な資源枯渇問題によるものでした。中東で発生した戦争を発端に、世界各地で紛争が起こりました——』

女性アナウンサーの背後にあつたスクリーンにメルカトル図法の世界地図が拡大表示される。その大陸地図に複数の赤い点が描かれていた。それらがかつて起こった紛争の場所を示している。

大崩壊。プレデターによる無差別的な破壊活動によって、世界が際限なく破壊され尽した戦争の総称だ。その発端は、当時から深刻であつた資源の枯渇が引き金となり、化石燃料などのエネルギー資

源の確保のために中東で戦争が起こったことに起因する。そして戦争は泥沼化して世界中に飛び火した。その結果、拡大の阻止のため、早期解決のために、当時世界中で反対の声が強かった完全自律型兵器の戦場への投入が決定された。

プレデターは米国と欧州諸国が協働し、開発を進めていたものであり、その投入決定は、安保理で決議された。

——そして、事故が起きた。

戦場に投入された機械兵が一斉に暴走し、その活動範囲を世界規模に広げたのだ。プレデターの中に飛行可能型が存在したことが拍車をかけ、既存の兵器をもつてした人類の抵抗も虚しく、一年も経たずに世界は破壊され尽した。

日本の外部居住区の問題が解決したとして、その後の発展のためには、資源問題が障壁となることは必至だろう。資源問題は今なお深刻な状況にある。例えば、パンドラ合金の原料となっているマグネシウムは、日本では豊富に採掘出来ているものの、世界規模で見れば枯渇してきている。パンドラ自体を輸入している国は珍しい。

しかし、世界再生が絶望的というわけではない。外部居住区に放置された車両やプレデターに使われている金属は廃墟の埋蔵金とも呼ばれている。それらを再利用することで、重工業用資源の確保は十分に可能であるだろうし、自然エネルギーや再生エネルギー技術もかなり発展を遂げてきている。

「よっし、食べようか」

「そうじゃな」

変り映えしない平常の朝食。

美鶴と文蔵はテレビから視線を外し、卓袱台に置かれた箸に手を伸ばした。

「右腕の調子はどうじゃ、美鶴」

文蔵が箸をお碗の上に置くと、美鶴に尋ねた。美鶴は上目遣いで文蔵に視線を向けた。文蔵に用意した朝食は早々と完食され、皿は洗われるのを待っていた。

「好調好調。動作に支障はねえよ。ありがとな」

美鶴は文蔵の目の前で、自分の右手でグーとパーをつくる。それを見て満足そうに頷いた文蔵は腰を浮かせて皿を台所に運び始める。美鶴はしばらく一人で、自身の右腕を眺めていた。ついこの間の事件で、オステオの同調する銀狼に義腕を破壊され、先日まで美鶴は隻腕であった。文蔵が造り直したこの義腕は、誠が再設計し直したもので、常備された兵装の騒音低減などが図られているらしい。人工皮膚に覆われていない光沢のあるこの腕の役目は、今の日常を、由佳里を守ることだ。

「そろそろ、学校に行く準備しなきゃかな……」

学校に行くことを考えただけで憂鬱になってしまふ。クラスメイトから質問攻めにあうことは回避できないだろう。気が重い。

——昨日の今日だからなあ。

美鶴は昨日、初めて由佳里の部屋に入ったことを思い出した。

「にしても、俺の部屋……ボロいなあ」

以前は文蔵が使っていたという部屋を見回して苦笑した。そろそろ改築、いやせめて改装してもらいたい。

『次のニュースです。早朝五時頃、エリア2近辺の外部居住区で巨大な機械兵を見た、警察側に通報がありました。これを受け、警察は大型プレデターの可能性があると、当初計画されていた《日本解放作戦》の決行日を一週間早めることを決定しました。なおこの決定は既に有志ランカーに通達されているということです』

「……………おい、オヤっさん」

「なんじゃ」

文蔵の声が台所の方から響いてくる。

「何か俺宛ての通知みたいなの来てないか？」

「……………あ。そうじゃった、忘れとった。ほれ、プレデター排除の決行日繰り上げの知らせだ」

文蔵が懷から取り出した薄い黄緑色をした封筒を卓袱台の上に抛<sup>ほう</sup>った。

自分に対する大家の対応がぞんざいな気がして、美鶴は嘆息した。朝食を作り、夕食を作って、それでもかというくらい文蔵に尽くしているはずだ。

この扱われ方は早急に改善してもらいたい。が、文蔵に言っても無駄なのは分かりきったことであるため、口には出さなかった。代

わりにもう一つ溜息を零した。

「んじゃ、行ってきます。鍵をよろしくな」

「了解だ。ちゃんと閉めておく」

美鶴の背後でドアが閉まる。朝の空気は肌に突き刺さる冷気を纏っていた。手の平を擦り合わせて、息を吐きかける。

「さつむ。チャリ漕いでれば、暖まるかな」

階段を軋ませて下りると、自転車の元へ向かった。辿り着くと、愛車のロックを外し、前カゴに学生鞆を入れようとした。ふとカゴの中に何かが入れられているのを見つけて止めた。

「なんだ？」

美鶴はカゴに入れられていたものを手にとった。それは宛名の書かれていない長形クラフト封筒であった。中に何か同封されているらしく厚みがある。興味本位に中身を取り出してみて、言葉を失った。

手紙に同封された写真には、金属光沢のある硬質な物体が映されていた。その周囲に並ぶ半壊した建築物と較べれば、その大きさがよく分かる。一般に知られているプレデターよりも巨大な機影だった。そして、最も美鶴の目を奪ったのは、写真ではなく手紙のほうだった。行頭に『かつての同僚へ』と始まっていた文章の最後、そこに卵の殻を突き破って顔を覗かせる蛇が描かれていた。

「ボレアース……」

美鶴は怖気が走り、左右に視線を向けて周囲を見渡した。しかし周囲には人通りが少なく、朝の日課らしきランニングをして離れていく赤ジャージ姿や、同級生と肩を並べて登校している学生ぐらいしかない。こちらの様子を窺っているらしき人影は見受けられなかった。

美鶴は手元の手紙に視線を戻し、書かれた内容を読んだ。読み終えると元のように封筒に戻し、鞆の中へと大事にしまった。

「……よっし、いくか」

美鶴は自転車に跨り、ペダルを漕ぎ始めた。途中、スマートフォンで時間を調べれば、遅刻ギリギリであった。

「ヤッバツ!!」

美鶴は必死にペダルを漕ぎ、通学路を爆走した。度肝を抜かれた歩行者の罵声を意に返さず、学校を目指した。

美鶴が受け取った手紙の内容は簡単に言えば、とある機械の誤作動を誠に知らせてもらいたい、というものだった。誤作動を起こした機械というのは、同封された写真に写る機影なのだろう。しかし、美鶴はそれについて記憶していなかった。釈然としない気持ちが強かったものの、ボレアースからの知らせの内容について興味があった。そのため、すぐに手紙は破棄せず、誠に話をしてみるだけしてみようと思った。

——放課後にでも、先生がいる柴川の研究施設に顔を出してみよう。

「美鶴クンはちゃんと気付いたみたいだね」

小さくなる後姿を見送って、ジャージ姿の少女は呟き、頬を伝う汗を首に掛けていたタオルで拭った。久しぶりの運動はやはり身体に報える。<sup>こた</sup>

「さてと、掃討作戦に合わせて、こつちも行動しないとか。悠月の方は禍眼の行方を辿れたかな」

少女は中断していたランニングを再開させた。上気した頬を撫でる冷気は心地よかった。こんな場所にいると本当に世界は平和なのではと錯覚してしまう。しかし――

「それでも世界は欺瞞だらけだ」

『災厄』と自分たちが呼んでいる存在を知らないで、生きている人間はどれほどいるだろうか。知っていても、信じていない人間も大勢いるだろう。

けれども、自分はその存在を否定しない。その否定は、自分自身の存在意義の否定と同義だ。

『災厄』、その存在こそが全ての始まりだった。

小学生ですか？　いいえ、高校生です。

——もしかすれば、朝のニュースでやってた巨大な機械ってのは。

四限目の現国の授業。美鶴は黒板のほうに視線は向けず、顔を左に向けて窓の外を眺めていた。念頭にあるのは、今朝見つけた茶封筒の中身についてだった。手紙の内容から察するに、ボレアースが誠の助けを求めていることは確実だろう。でなければ、わざわざこちらに接触してくるわけがない。

美鶴は事の真相を推し量ろうとしていた。その代わりに授業を半ば放棄していた。気付けば授業は四限目。まったく授業を受けた記憶がないのは問題だろう。

『よーし、三ノ瀬。授業に参加しような、んじゃ一四五ページから一五三ページまで音読だ。ほら立て』

「またですか……」

美鶴は黒板の前に立つ教師に顔を向けた。見慣れたとはいえ、彼が体育教師でないという事実は未だに信じられない。

『授業をそつちのけで物思いに耽ってるほうが悪い。なんだ？　もしかして彼女にフラれそうになってるのか？』

「いやいや、そんなんじゃないですよッ。——ってか何で先生が知って」

『学校の教師の情報網を舐めるなよ。ほれ、さっさと読む』

周囲で笑い声上がる。見渡せば、クラスメイト達が笑みを浮かべた顔を向けていた。美鶴は致し方なく起立すると、両手で持ち上げた教科書の文章を声に出す。内容は前回と同じ。美鶴の日常は今

日も見栄えせず、見劣りしない、小さなユートピアであった。

——もう帰りたい。

美鶴の音読大会は、チャイムとともに終わった。この一時間で美鶴は、授業四時間分の疲労感を得た。

「少し外の風に当たってくるか」

昼休みを向かえ、美鶴は購買で簡単に昼食を済ませると、屋上に向かった。封筒の中身について、思考が堂々巡りしていた。途中、廊下に設置された自動販売機でホットココアを購入して、階段を駆け足に上った。

西徳付属は一般生徒の屋上への出入りが禁止されていない。首都圏内の教育関連施設の多くでは、屋上の立ち入りが禁じられている。しかしこの学校では屋上をフェンスで囲い、落下防止の対策がなされ、一般生徒に開放されていた。

「つめったッ」

屋上に出ると、冷気を含んだ風が頬を撫でた。昼過ぎであるにもかかわらず、早朝のような爽気の漂う外気が清々しい。頭上には雲ひとつない冬の蒼穹ネビュラが広がっていた。

今の時期に屋上にやってくる生徒はいないだろうと考えていたが、美鶴の予想は外れた。既に一人の生徒が先客としていた。学年が一つ上である証、碧のチェック柄のスカートを履いた女子高生が、美鶴から見て右手、屋上の隅でフェンス越しに周囲の景色を眺めていた。遠目から見て分かるほど、随分と小柄な少女であった。こちら

からはその表情を窺い知ることは出来なかったが、その背中に拭いきれない憂いを纏っているように見えなくもなかった。

美鶴は何気ない様子で、少し離れたフェンスに歩み寄り、手にしたホットココアの缶のプルタブを立てた。カシユツ、と気の抜ける音が立つ。仄かに立ち昇る力カオの香りにほろ酔い気分になる。至高のひとときであった。徐に口元に缶を運び、ココアを口に含む。温かさと優美な甘味が広がった。ほっと一息ついて、美鶴はフェンスに背中を預けた。

ふと視線を感じた。ねっとり粘度ある視線だ。

美鶴は顔を横に向けた。案の定と言うべきか、先客であった女子高生がこちらを凝視していた。先輩と思うには申し訳ないほど小柄な少女。その面立ちは精巧であった。身動きしなければ、人形と見紛うような容姿、二つの大きな黒の髪留めをした薄い茶髪の髪を風に揺らし、何か面白いものを見つけたような、好奇に溢れた表情をしていた。

ふいに少女が口をひらいた。

『どうして、小学生がいるの？』

「ッッ……………」

美鶴は缶を取り落としそうになり、たたらをその場で踏んだ。何とか中身を零さずに、手の中に缶を収めた。にしても、今なんと言ったのだ、この先輩は。小学生と言わなかったか、せめて――

「こんな小学生は流石にいないでしょッ。せめて中学生にしてくださいッ……」

「あら、童顔は認めるのね、意外」

淡々と会話をする先輩を美鶴は見据えた。感情の隆起に乏しい声だ。

美鶴に歩み寄った少女は、見上げるようにして首を傾げた。

「女の子じゃないの？」

「なんでッ!？」

「男の子なのね。ふッ、ご愁傷様」

「なんで鼻で笑ったんですかッ」

「童顔すぎると苦労しそうですね。可哀想に」

「……………アンタだってチビじゃん」

美鶴は思わず呟いた。人のことを散々な呼ばわりしているが、目の前の先輩もまた『苦労しそうな類の人間』であることは間違いない。いや、この手の需要はあるのか。

「……………君は中学何年生？ 名前は？」

「……………高校二年、三ノ瀬美鶴です」

「んじゃキミはわたしの後輩なのね。ふーん、さっきタメ口をきいて、わたしをチビ呼ばわりして、小学生からやり直せって言ったわね。後輩の分際で。これは赦されざる反抗姿勢ね。すぐに幼稚園からやり直すべきよ」

「いやだッ!! てか別に小学生からやり直せって言っただけだし。

……………てか聞こえてたんだ」

美鶴は小さな先輩を見下ろして言った。なんと言いつても表すべきか。ここまで身長差があると何とも言い難い愉悦に浸ってしまう。日頃から『弟キャラ』扱いされる美鶴としては、自分よりも身長の高い存在はありがたかった。色々と安心できた。

「私の身長の低さを馬鹿にしてるわね。君の視線が、テストで赤点を取った生徒に向けられる先生の視線と同じだった」  
「赤点を取ったことあるんですか？」

美鶴の疑問を軽く無視して、先輩は相変わらずの感情の希薄な表情で続けた。

「——または、恋人の目の前で美少女とイチャつく彼氏に向けられる視線」  
「はひいッ？」

美鶴は背筋を駆け上がった悪寒に身を震わした。背中に脂汗が滲む。恐る恐る振り向けば、眸に鋭い視線が突き刺さった。

屋上の入り口で、ドアの隙間から顔を覗かせる由佳里がいた。こちらに何も言わずにドアの向こうに姿を消す。

これはやばい。非常にマズイ。

「お姉さん？」  
「違うッ！！——先輩、さよならッ」

美鶴は踵を返して、由佳里の背中を追った。何といって誤解を解けばいいのだろう。美鶴は狼狽した。

屋上のドアを開けて、その先に続く階段に足をかけた時に気が付いた。そう言えば、あの小柄な先輩の名前を訊いていなかった。だが、同じ学校の生徒であるのだ、また逢う機会もあるだろう。今度はもう少しまともな会話が成り立つことを期待したい。

「わお、わたしの美少女宣言を軽くスルー。にしても……本当に恋人だったの？ 彼もなかなか隅におけないわね」

能面のような顔に驚きに似た感情を浮かべた少女。しかし、すぐに感情を一切取り払って、無表情になった。少女は再びフェンスに視線を向けた。少女から発せられる鼻歌が風に運ばれていった。

「ホントにたまたま話してただけだってッ」

どれだけ弁解していることになるだろう。昼休みも残り僅かという時間で、美鶴はひたすら由佳里に頭を下げていた。

「結構楽しそうだったのに？」

「全く楽しくなかったからッ」

訝しげに由佳里は眉をひそめ、美鶴を見据えた。盛大にジト目が向けられている美鶴は、閉口してしまう。

「ねえ、知ってる？ 人間の男女の愛は四年で終わるのが自然なんだって」

——これは本当にまずいかもしれない。まだ付き合って、二ヶ月ぐらいなのに。

「人は恋に陥るとPEA、別名『恋愛ホルモン』っていう脳内物質が大量に分泌されて、客観的に物事を考えられず、相手のことしか目に見えなくなるんだって。だけど、二、三年で分泌量が減って、だんだん相手のことが嫌になってきちゃうんだってさ。相手の悪いところばかり目につくようになるんだって」

由佳里が腰に手を当てて、美鶴を見下ろした。ちなみに美鶴たちは階段で会話をしている。美鶴が一番下段、由佳里がそれより三段上に立っている。

美鶴は何とか由佳里の誤解を解こうと苦悩した。手当たり次第、詫言<sup>わひこと</sup>を言おうと口を開いたのを制して、由佳里が話を続けた。

「——だけど。P E Aが分泌されなくなると、代わりにセロトニンっていうホルモンが分泌されるようになるんだって。それは人に安心感とか幸福感を与える作用があつて、長く相手と付き合っている相手と一緒にいるほど分泌が高まるんだってさ」

由佳里が跳んで、美鶴のすぐ隣りに並んだ。

「もう美鶴とは、恋人になる以前から長い付き合いだったんだよ。今更、悪いところばかり目につくわけないよ。あゝあ、美鶴の慌てた顔を写真に撮って、竹ちゃんに見せたかったなあ」

あはは、と小気味よく笑い声を上げる由佳里。美鶴は呆然とその様子を見ていた。あまりのことに思考が追いつかなかった。つい先ほどまで、破局の危機に瀕していた筈だ。

「ほゝら、授業が始まっちゃうよ」

「怒ってないのかよ」

「……あ。怒ってるよ、すごく怒ってる。だから、また夕飯を作りに来てよ。じゃないと機嫌を直さないから」  
「……………」

美鶴は後ろ頭を掻いた。「分かったよ」と返事を返せば、由佳里は表情を輝かせた。今度はパスタがいい、と言って由佳里が背を向ける。丁度、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

「——よかった」

美鶴は由佳里に聞こえないように、呟いた。大切な日常がこんなことで壊れなくて本当に良かったと、安堵した。美鶴は胸を撫で下ろすと由佳里の背中を追って、自分の教室に向かった。

「羽城さん、めっちゃ健気じゃん」

「くそー、三ノ瀬が幼馴染じゃなかったら、隣に立っていたのは俺だったのに」

「まじで感動した」

六名ほどの男子クラスメイト達が、美鶴が教室に戻るなり囲んできた。どうも彼らは先ほどのやり取りを盗み聞きしていたらしい。この様子が気になった他のクラスメイトも集まってくる。

『おい、授業を始めるぞ』

野太い声がして、黒板のほうを見れば、まさかの体育系国語教師がいた。

『授業変更だろ。知らなかったのか。それでお前らは隅に集まって何、話してんだ?』

「先生、じつわですねー」

「やめてくれッ!」

この日、美鶴の黒歴史に新たなページが加わった。  
どういうわけか、話に尾ひれがついて『浮気性的美鶴を由佳里が

改心させ、再び繕<sup>よ</sup>りを戻した』という内容になっていた。人の噂も七五日とは言うが、それまで美鶴は耐えられる自信がなかった。

## カメはカメでも食べれないカメ

放課後、美鶴は電車を乗り継いで首都圏、工業区第三区画へ向かった。白煙を上げる工場の姿が車窓から見えるようになって駅に降り立つと、その先の足がないために徒歩で、誠のいる柴川重工の研究所を目指した。午後五時を過ぎた空は、透明な夜の色をしていた。肌を刺す空気の冷たさに首を竦めて身を震わすと、自然と早足になった。

三〇分ほど歩けば、国立病院のような佇まいの建造物が見えてくる。誠のいる柴川重工研究所の騎士機器研究棟だ。やはり、この規模は瞠目に値するだろう。

敷地に入るために、入り口にいた警備員に学生証を提示すると、向こうはこちらを覚えていくれたらしく、何事もなく通過できた。そのまま真っ直ぐ、誠のいる特別研究・開発棟に向かう。自動ドアの入り口をくぐり、階段を利用して地下三階に辿り着くと通路の奥に連なった開発棟へと急いだ。

美鶴を出迎えた潔癖すぎる部屋では、相変わらず研究者たちが忙しなく動いていた。美鶴はその中に、珍しく人間モードの誠の姿を見つけた。

「先生、突然の訪問で悪いけど、少し時間をもらえるか？」

「あれ？ 美鶴君にそっくりな小学生が見える。これは幻覚かな？」

「……怒っていいか？」

「もう怒ってるよね。恐いよ美鶴君ッ。とりあえず冗談だから、右手で拳を作るのをやめてッ」

美鶴は誠のすぐ隣まで近づいた。近づくほどに誠を見上げなければならなくなるのは悔しい。しかし、とりあえず身長の方は置いて

おこつ。

「先生に渡すよう頼まれたもんがあるんだよ」

「とうとう僕にもモテ期が到来したかな」

「いや、さすがにもう来ないんじゃないの？」

「美鶴君はたまに人の心を深く抉ってくるよね。他人の気持ちを考えられないようじゃ、いつまで経っても身長は伸びないよ」

「かんけーなッ。そんなんで身長が伸びたら苦労しねえよ」

美鶴は学生鞆の中から、例の茶封筒を取り出して、誠の鼻先に突き出した。

「これを僕に？」

誠は恐る恐るその中身を取り出して、顔をしかめた。温和な性格の誠が明らかな嫌悪感を表情に表すのは珍しかった。「どうしてこれが……」そんな声が聞こえた気がした。誠はしばらく思い悩む素振りを見せた後、手元の封筒から視線を外して美鶴を見た。

「美鶴君、ちょっと場所を移そうか」

「分かった」

美鶴は誠の背中を追いかけた。辿り着いた場所は見慣れた診察室だった。

美鶴は転送装置の縁に腰かけて誠と向かい合った。誠は革張りのオフィスチェアに収まり、デスクに封筒を置くと重量感ある溜息を一つ溢した。

「んで、先生に質問があるんだけど」

「この写真に写ってる機影についてだよね」

「先生は知ってるのか？」

「……知ってるよ。少なくとも、これは現代に動いてはいけなものだよ」

誠が写真を一枚取り出して、美鶴に見せた。巨大な機影が写りこんでいる。夜に撮ったものであるらしく、酷く不鮮明ではあるが、その輪郭などは見て取れる。

「これはかつてボレアースが開発した自律行動型マシンだ。来たるべき災厄への対抗手段として、操者育成と並行して進められていた機械兵の完成体の一つだよ」

「災厄って、その存在はボレアースの存在を正当化するためのものだろ？ どうしてそんな存在のために」

美鶴は身を乗り出して、誠を凝視した。その言葉の真意を知ろうとした。

「じゃあ、美鶴君の身体に施された手術の理由は？ 対ランカー仕様と考えるには、少し過剰すぎるとは思わなかったかい？」

美鶴は無意識にうなじの傷跡に左手を運んだ。左腕に嵌めていたブレスレットが視界の隅に映りこむ。

「……いや、何も考えなかったな。あの頃の俺は、盲目的に災厄の存在を認めてた。じゃなきゃ、自分の存在を否定されそうで恐かったんだと思う」

「そっか……うん、確かにみんな当時は盲目的だった。だけど、存在が不確かな存在に対して研究を続けるには財源も人員も、当時の日本本部『アンダーヘル』には足りてなかったんだよ。なのに、上からの決定は『災厄対策』の推進だったんだ」

「それって、ボレアースは本当に災厄の存在を肯定していたってことか？」

「ほぼ確証していたと言えるね。それなりに判断材料はあったんだ。例えば――」

『ヴーヴーヴー』ふいにエルガー作曲の《威風堂々》が鳴り響いた。確かこの曲は由佳里の携帯の着メロだった筈である。

「あつと、ごめん。――はい、どうしたんだい由佳里」

誠がスマートフォンを白衣の胸ポケットから取り出して耳に当てた。どうやら相手は由佳里であつたらしい。美鶴は手持ち無沙汰になって、簡素な白い部屋の天井に視線を這わせた。

「……由佳里、食欲旺盛なのは健康的だけど、食べ過ぎは良くないよ」

『ちっがうつッ！！』

「ッ！！」

由佳里の声が大音量で響いた。不意打ちを受ける形になった美鶴は、肝を潰して転送装置に後ろ向きに倒れた。ドサッ、と鈍い音が鳴る。

「美鶴君、大丈夫かい！？ えッ？ そうだった、美鶴君はココに来てるよ。僕が恋しくなったんだって。いやいや、本当だって……いやごめん、嘘だつてッ。美鶴君は細くて美人の由佳里にゾッコンだからッ。ちよつと、機嫌直してよ由佳里。あ……切られた」

誠は携帯をしまった。少しばかり顔色が悪くなったようにも見える。由佳里にキライとでも言われたのかもしれない。会話の途中に

色々と、気になることを口走っていた気がするが、よしとしよう。

「俺に何か用があるって？」

「どうも今夜、キムチ鍋にすることに決定したから即時帰宅せよ、だって。場所はアパートで文蔵さんの部屋みたいだよ。文蔵さんも待ってるって。これは早く帰った方がいいね」

誠が楽しげに椅子をクルクルと回す。

にしてもどうして誠に電話が来たのだろうか。美鶴は自分の携帯を取り出して合点した。

「俺の充電切れじゃん……」

どおりで連絡が来なかったわけだ。しかし、誠の場所を訪れることを知らせてこなかった筈だ。よく分かったものだと感じた。いや、もしかすれば手当たり次第に連絡を取ったという可能性も無きにしも非ずだろう。はやく帰ろう。

「んじゃ、仕方ないか。先生、また今度、話を聞かせてくれ。とりあえずプレデター殲滅作戦が今週末にあるから、その後にでも顔を出すよ」

美鶴は誠の脇を通って、部屋から出て行こうとした。ドアノブに手をかけたところで誠が声をかけてきた。

「そうだ、美鶴君。僕としては、この写真に写るロボットの件を放っておきたくはない。というわけで、美鶴君に依頼するにはいくぐらい掛かるのかな？」

研究所をあとにした美鶴は、帰路を急いだ。背中に学生鞆を背負って、駆け足で最寄の駅へと向かう。

始めの頃、冷気が骨の髄まで沁みるように感じていたが、途中からは上気した肌に心地よく感じるようになった。人通りのない歩道のすぐ脇を車が耳の痛くなるような騒音を残し、彼方へと走り去っていく。星の见えない街の空。眩い地上の星。欺瞞だらけの世界が視界いっぱいに広がっている。

「はあ……はあ……つ、つかれた」

美鶴は息を途切れさせ、足を止めた。手を膝について、荒く呼吸をした。日頃の運動不足がこんなところで仇となった。

「やつぱ……つかれた。体力がもたないって」

美鶴は走るのを少し休憩して、路を歩いた。車のヘッドライトが近づいては離れていく。携帯の充電が切れたために現在時刻を把握できない。制服は動きづらく、着替えてから来れば良かったと少しばかり後悔した。

「今週末か……」

プレデターの殲滅作戦決行は目前まで迫っていた。これが無事に完了すれば、外部居住区にも現エリアのような街並みが形成されるのだろう。悲劇の痕は払拭され、人々の記憶は色褪せていく。そして、平和を当たり前のように享受するようになる。

「平和か」

首都圏内で送る日常は、既にかつてのような喧騒を取り戻している。崩壊する前の世界。大崩壊が起きたのが嘘のような街並み。此処にいと、全てが元通りになっているのではと錯覚してしまう。

美鶴は学生鞆を背負いなおし、走りを再開した。三〇〇メートルほど進むと十字路にぶつかり、ちょうど信号待ちになる。急いでいるほど信号が長く感じてしまう。ひどくじれったい。

「早く変われよ、早く」

美鶴はその場で足踏みをして、青に切り替わるのを待ち望んだ。

『おい、美鶴君。こんな時間にどしてこんな方にいるのかな？』

聞き覚えのある凜とした女性の声。美鶴は声がした方角に顔を向けた。眸に映ったのは、黄色の蛍光色カラーに塗装されたスーパーカー。かつての記憶が想起された。あれは小埜崎おのさきの車だ。マフラーが低く唸り声を上げている。

車両の運転席から一人の女性が顔を覗かせ、こちらに手を振っていた。高級そうなスーツで身を包んだ美人。肌の白さが暗闇に浮かび上がる。美鶴の後輩である相良瑠璃さがらるりが補助者サポーターとして務める相手、小埜崎叶望おのさき かのんであった。

「野暮用です。今は由佳里に急かされて、帰路を急いでるところです」  
『何なら、あたしが送るっか？　ここから最寄の駅までまだ少し距離があるでしょ。ほら、助手席に乗りなよ』

小埜崎の言葉に美鶴は正直、感謝した。自分自身の体力的に、無事にマンションに辿り着けるか不安だった。駆け足で近づくと、スーパーカーの助手席に乗り込んだ。車高の低い車に違和感を禁じえなかった。乗る車種と言えば、ミニバンくらいだ。両者のギャップ

に美鶴は緊張を強いられていた。

「それじゃあ行くよ。シートベルトはちゃんとしておいてね」

「あ、してあります——って、うわ」

小埜崎が軽くアクセルを踏んだだけで、重たい車体が急発進する。ぐっと全身にかかるGに美鶴は辟易した。車窓から見える景色が、目に止まらぬほど速く後方に流れていく。

その速度は恐怖を感じさせるに十分足るものだった。

「そういえば、週末の作戦は同じ地域を担当だったね」

前方を見ながら小埜崎が訊ねた。美鶴は少しだけ顔を左に向けて小埜崎の横顔を見た。美しい曲線を描く鼻筋が視界に映る。

「そうですね。他にもランカーが二〇ほど担当になってるみたいですね」

美鶴は大雑把にしか確認していない書類の内容を思い出しながら答えた。

「まあ、警察の現場担当さんらを抜けば、全員がボランティアみたいだからね。当日に全員が集まるとは限らないね」

小埜崎がウィンカーを点灯させ、十字路で車を左に急カーブさせた。全身にかかる横Gで美鶴はドアに押し付けられた。どうかもう少し安全運転を心がけてもらいたい。

「美鶴君は朝のニュースを見た？ 巨大な機械を見たって奴」

「ああ、見ました。その関係で今回の作戦の決行が早まったんですね」

「そうそう。結構噂になってるよ、ソレ。どこかの企業がまた造ったんじゃないか、とかね」

小埜崎は馬鹿らしいと言いたげに、鼻で笑った。

美鶴は二ヶ月近く前に起きた事件を思い返した。エリア1の企業数社がボレアースにプレデターと資金を提供し、エリア2を襲撃させた事件だ。ボレアース側にはどうも誠を拉致したいという目論みがあったらしいが、失敗に終わっている。どうかこのまま大人しくしていてくれ、と願っていたのだが、今回の封筒だ。誠が言うに、写真に写る機影はボレアースが開発した機械兵であるらしい。

災厄。その存在を確信していたというボレアースの上層部。

美鶴は実体の分からない暗澹あんたんたるものが霽もやのように、将来の見通しを悪くしている気がした。近い将来に何かが起こる、そんな予感めいたものを感じた。

「はい、到着ッ」

小埜崎の声に周囲を見渡すと、既に見慣れた景色が広がっていた。あつという間に辿り着いていた。呆然とした様子の美鶴を見て、小埜崎が苦笑した。

「最初の頃の瑠璃も同じ顔してたね。慣れれば普通だよ」

——いや、慣れたくないって。

例えるならば、ジェットコースター。終始スリル満点の乗り物に搭乗していたようなものだ。

「……ありがとう、ございました」

美鶴は車から降りて、大地に降り立った。足元がおぼつかず、前後左右にフラフラとよろめく。

「それじゃあ、週末に」

手を振りながらそんな一言を告げ、小埜崎は再び唸り声を上げる車を急発進させた。瞬く間に小さくなる車体。美鶴は暫しその方角を眺めた後、しっかりとした足取りでアパート大家の部屋に向かった。

ガチャリと鳴って開いたドアの向こうから、熱気が漏れてくる。同時に空腹感を増幅させるような匂いが鼻腔を満たした。

「やっと帰ってきた。おつそいよ美鶴ッ」

由佳里が居間から玄関の方に顔を覗かせた。珍しく私服姿だった。

「あー、ごめん」

美鶴は靴を揃えると、急いで居間に向かった。居間ではコタツを囲む由佳里と文蔵の姿があった。文蔵はいつのまにコタツを出したのだろうか。これがあるなら毎朝こっちの部屋で構わないのではないか。

「よーし、美鶴が来たことだしな。そんじゃ、鍋の火を強めとこ

うか」

文蔵がコタツの上に載せられたコンロの火の強さを調整する。すぐにグツグツと煮え立つ音が鍋から上がり始める。

「なあ、オヤっさん。コタツがあるなら明日からは、こっちの部屋でよくねえ？」

「お前さんの部屋に行くのが日課になってるからな。却下だ」

「いやいや、そういうんじゃない。寒いから。朝はコタツがないと寒いし、ヒーターだと灯油の消費が激しいからな。灯油は18リットルで五〇〇円以上すんだよッ。資源の枯渇で高騰してんだよ。俺の部屋ばっかだと、消費が激しいからッ。コタツを使えば、電気代で済むだろ」

「働いて何とかやりくりしろ。儂が手頃な依頼は探してやるからな」

文蔵はまるで聞く耳を持たない。

確かに文蔵は依頼を提供してくれているのだが、些か軽めのものばかりな気がする。つまり報酬額が数千円程度。万単位のもの滅多にない。あっても片方の指で数えられるくらいだろう。それも仕方のないことであるので美鶴は諦めてはいるのだが。

本来のランカーは企業との契約をするか、個人の請負業社などに所属している。そうした方が仕事の量は多くなるためだ。高額報酬の依頼も舞い込んでくる確率も低くない。しかし——美鶴の場合がかつてボレアースに所属していたという事実を公にしてはいけないうために、あまり名を売るようなことが出来なかった。

国際ランカー管理機構が規定したランカー制度では、公に公開されているのは騎士の名だけだ。操者の名前、住所、生年月日などは厳重に管理され、知ることは出来ない。それは警察にとっては捜査の妨げになるのだろうが、美鶴にとっては隠れ蓑になった。

週末の作戦では、ボランティアという扱いであるために、詳しく名乗る必要がない。それゆえに美鶴は参加を決意した。由佳里も文蔵もこころよく承してくれた。

しかし、無名のランカーは仕事を得られない、それは周知の事実である。

これから先も、ギリギリの生活を強いられるのかと考えると、美鶴はほとんど肉体的な頭痛がするのを感じた。

カメはカメでも食べれないカメ（後書き）

そろそろ戦闘シーン。のはず。

ただ、このまま行くと、めっさ迫力がない……かも。はい。  
頑張ります。

週末になりました。

「よっし、来たね。それじゃ、奥の部屋に行こうか。由佳里と文蔵さんも奥へ」

先頭を歩く誠を追って、美鶴たちは進んだ。今日が作戦の決行当日だ。今朝のニュースではこのことで持ちきりだった。この結果によつて、今後の日本の将来が左右される。

いまだかつて、国内のプレデター排除を成し得た国は存在していない。いち早く国内を平定させた国の企業は、積極的に海外への事業を展開できる。行く行くは世界の中で、日本がリーダーシップをとれるようになる。そんな思惑が透けて見えるようだと、美鶴は思った。それを暗に示すように、警察の実行部隊や企業から大勢のランカーが今回、参加することとなっている。だが、この前流れたニュースで報じられた、巨大ロボット。それを警戒してという意向もあるのかもしれない。美鶴は今日、自分が柴川重工の研究施設にやってきた理由を思い出して嘆息した。

数日前、研究棟を訪ねた美鶴に対して、誠が放った言葉のせいだ。

『——美鶴君に依頼するにはいくらぐらい掛かるのかな？』

簡単に言ってしまうえば、ボレアースが開発したという巨大ロボットの破壊の依頼だった。絶対遂行ではなく、もしも遭遇したらという条件であったが、美鶴としては下手に目立つ可能性が考えられたために、遠慮したかった。しかし——

誠が提示した報酬金額は魅力的だった。いつも文蔵が持ち込んでくる依頼の数倍、いや数十倍の額になるかもしれない。成功報酬だけでなく、前払い金もあったために美鶴は無下に首を横に振ることが出来なかった。金欲に眩んだ美鶴の思考は既に拒否することを放

棄していたのかもしれない。

途中で階段を下り、おそらく地下四階に位置するであろう扉の目の前で誠は止まった。辿り着いた部屋には見覚えがなかった。重厚な金属の扉を開け放つ誠。その背後から中を覗き込んだ美鶴は驚愕に息を呑んだ。まず目に止まったのは巨大なE-Lパネル。そして、空間の中央に円形に並んだ転送装置、五台。その脇にそれぞれ騎士が控え、円の中央にデスクが設置させていた。異様な雰囲気が漂う部屋だった。

研究というよりは、精神転送<sup>トランス</sup>のために用意されたようだ。何のための部屋なのだろうか。美鶴の疑問を誠が氷解させた。

「ここは避難場所<sup>シェルター</sup>だよ、美鶴君。万が一に研究所が襲撃にあった場合に、ここに逃げ込むんだ。だから、操者<sup>アヴィアター</sup>と補助者の援助のための設備が完備されてるんだよ。この五台の転送装置、モニタリングによるリアルタイムでの索敵、解析。どれをとっても最先端技術だよ。それに、ここは核弾頭による攻撃にも耐えうる耐久度があるんだ」

どこか誇らしげな誠は美鶴たちを中に入るよう手招いた。美鶴は恐る恐る中に足を踏み入れた。あとに続く由佳里と文蔵。文蔵は力<sup>フツ</sup>トで運んできた鎌錐式を壁際に安置した。

「それじゃ、竹山さん。この転送装置の一台を使用してください——あつと、由佳里にはモニタリングを覚えておくよ。ほら、このデスクに備わってる情報端末での映像や解析データが壁のE-Lパネルに反映されるんだよ」

手際よく進められる作業。作戦開始まで、あと二時間ほどある。

美鶴を含めた有志ランカー達の多くは、エリア周辺での活動となる。それ以外の地域では、警察や企業が担当している。一日六時間以内と定められた限界転送時間を超過しないために、各地に格納庫<sup>シールド</sup>

が設けられ、彼らはそこからトランスすることになっているらしい。しかしプレデターの活動が確認出来る地域は、各エリア周辺が多い。それは一〇年近く経過した現在<sup>いま</sup>も、機械兵が己の使命を、破壊という役目を果たそうとしてのことなのかもしれない。

美鶴は近くに置かれた椅子に腰かけて、背もたれに体重を預けた。目の前では大体の準備が整ったらしい誠が端末を操作して、E.L.P.A.N.E.Lに図面をアップさせた。見たところ、外部居住区の縮小図であるようだ。

「それじゃ、説明するよ。僕からの依頼内容は先日のニュースで報じられた、巨大機械の搜索。美鶴君には、ビットを複数展開させて広域探索を行ってほしい。万が一、発見したならば、即座に破壊に向かってもらいたい」

「じゃが誠さん。発見の可能性はかなり低いだろう。そんな依頼に高額報酬というのは浪費じゃないか？　いくらその機械がボレアースの開発したものだと言っても、警察などの協力を請うべきだ」

文蔵が作業の手を止めて、誠に向き直る。美鶴は文蔵に簡単に今回の依頼について話をしてあった。

「全くその通りなんですけど、僕としてはあまり公にすべきではないと考えてます。プレデターを完全に排除したもつかの間、今度はボレアースとなれば、日本中が混乱状態になる危険性も考えられるでしょう。——それに、きっと遭遇します。先日、美鶴君が僕を訪ねてきた時に、手紙を持ってきてくれたんです。差出人はボレアースのメンバーでした。彼らが接触を試みて、協力を申し出たんです。きっと、彼らは美鶴君が担当になっている地域に現れる筈です」

ジ——。

文蔵がそんな話は初めて聞いた、と言いたげに美鶴に睨みを利か

せた。美鶴は努めて、素知らぬ顔を造った。こういう時は知らないふりをした方がいい。ただし、あとで文蔵から難癖を付けられることは避けられそうにない。

「ごっほん。それでもし、美鶴君が巨大ロボット、名称を禍眼<sup>カメ</sup>、に遭遇出来たならば、美鶴君には鎌錐の飛行ユニットを展開してほしい」

誠が再び、端末を操作して、新たに鎌錐の機体の立体図に切り替えた。Eパネル上の画像を誠が回転させ、鎌錐の後部を表示する。そうして、鎌錐の臀部<sup>でんぶ</sup>から伸びる装備をペンライトで射した。

「鎌錐のテールスタビライザーに内臓された飛行ユニットで鎌錐式は数十分の飛行が可能になってるんだよ」

「何で飛行する必要があるんだよ」

美鶴は道理に適った疑問を口に出した。禍眼というロボットを破壊するためなら、単純に攻撃を加えればいい筈だ。わざわざ飛ぶ工程を加える必要性が解らない。

誠は画面をみたび切り替えた。次に現れたのは、亀の絵。それを中心として、漏斗状に柱が描かれている。

「美鶴君に破壊してもらいたい禍眼には、重力操作という能力が備わってるんだ」

「何だよ、重力操作って」

「簡単に言えば、禍眼自身の重力を弱めて、身軽に駆動したり、周囲に重力場を生成して相手の動きを封じ込めたりする能力だね。他にも反重力を生むことも出来るみたいだよ。反重力っていうのは、斥力とも呼ばれる、反発力つまり相手を弾く力。この双方を駆使してくる禍眼の攻略にはコレしかない」

誠は漏斗状の柱の天辺を指し示した。例えるならば、台風の目のような空洞がその下に続いている。

「禍眼はもともと、拠点防衛、戦況の維持のための機械なんだ。主だった兵装は備え付けられてなく、まるで台風の目のように重力場が働かない場所が存在してる。ここが唯一の禍眼の弱点であって、ここを攻めるには上空五〇〇メートルほどの高度から、ほぼ垂直に降下しなきゃならない。だから、鎌錐の飛行ユニットが必要になるんだ——ただし、問題点がある。鎌錐の飛行ユニットを展開すると、飛行能力向上のために装甲が一部、分離するんだ。大幅な耐久性の低下は避けられないね。もし、展開したならば、それから先で攻撃を受けることは厳禁だよ、美鶴君」

誠が忠告してくる。しかし、その眼差しはどこかスがるように見えた。美鶴はこくりと頷きを返し、椅子から腰を上げた。

「任せろよ、先生。俺を誰だと思ってる」

「弟キャラの高校生でしょ」

「おい……」

先ほどから壁の花と化していた由佳里をじろりと睨んだ。やっと会話に参加してきたかと思えば、そんな一言。美鶴は言葉を続けた。

「今度、由佳里はパスタがイイって言ってたよな。んじゃ、ナポリタンにしよっか」

「残念でした。私はそのままのトマトは苦手だけど、火が加えられたのなら大丈夫だから。はっはっはっはッ」

「何だよその笑い方」

美鶴は苦笑を漏らした。そういえばこの前由佳里の部屋を訪れたとき、冷蔵庫にトマトがあったのだ。ついでにケチャップも。トマトが嫌いな由佳里には考えられないことだ。

「ちゃんと頑張つてよね美鶴。私がちゃんとサポートしてあげるから」

「りょーかい」

美鶴は文蔵が準備を整えた転送装置に向かった。乗り込むときに、無防備に晒された背中を文蔵がバシッと叩き、激励した。かなり痛い。ヒリヒリと痛む背中に涙目になる。もう少し労わりの気持ちを込めてほしい。何とか痛みを食いしばり、バイザーを下ろすと装置に深く収まった。

「トランス開始ッ。三、二、一……零」

全ての光と音が消え、意識が飛翔した。

「よし来たな。待つてたぞ、暇人」

胸間声が閑散とした廃墟に響く。時間ギリギリで辿りついた集合地点で、思いがけない人物が待つていた。

「何で津野田さんがいるんですか」

美鶴は驚いて、目の前で腰に手を当てている刑事を見下ろした。

この場所は外部居住区であり、プレデターが未だに蔓延っているのだ。生身の人間が無防備にいい場所とはいえない。それに津野田は、捜査課の人間だ。証拠の捜査や犯人の搜索などを行う類の人間ではないだろうか。

「ここらで騎士を見たっつー報告があつたんだ。現場で指揮をとれる人間で、騎士犯罪に免疫がある奴ってことで俺が来たんだよ。てか警察の実行部隊はどこも出張ってたんで、残ってたのが俺ぐらいだっただけだな。くそ、今日は貴重な休暇だと思ってたのによ」

津野田は苦々しく吐き捨て、煙草を口に加えてライターで火を付けた。白煙が棚引いて淡く霧散する。

「仕事中にくわえ煙草は止めて下さいよ」

美鶴はすぐ隣から聞こえた声で、反射的に顔を横に向けた。そこに居たのは白黒カラーリングの警察専用の騎士だった。最小限の武装のみを施された機体だ。確か日本の警察で使用する騎士はどれもクロツカ製品だった筈だ。

「煙草を吸わなきゃ戦も出来ぬって言うだろが。なあ、浅沼」

「言わないですよ」

「お堅い奴だな、相変わらず可愛くねえな。美鶴の方が1・5倍くらい可愛いがあんど」

津野田が鼻を鳴らす。浅沼と呼ばれた騎士は「そうだった」と何やら思い出した様子を見せた。

「私は浅沼諒だ。今日一日宜しく頼むぞ、三ノ瀬美鶴君」

「何で俺の名前を――」

「先輩がちゅくちゅく、引き合いに出してきたもんでな」

美鶴は津野田に盛大にジト目を注いだ。あまり警察関係者に自分の素性がバレるようなことをしないでもらいたい。

「おい、今ジト目で俺を見てんのか？ 鎌錐に表情がないから分かりづれーな」

美鶴の心境が全く解っていないように、快活に笑う津野田。美鶴は短く嘆息した。どうか平穏な日々が続きますように、そう願うしかないらしい。

「浅沼さん、こちらこそ宜しくお願いします」

「ああ、よろしく」

鎌錐同様、表情を浮かべない騎士から返事が返った。調整されていない、限りなく本人の肉声に近い声が真摯さを感じさせる。

『いい人そうだね』

由佳里の声が頭に響く。美鶴は短く「だな」と答えて、気づいた。

「そう言えば、小笠崎さんはまだ来てないんですか？」

津野田は頬を掻いて、参ったと言いたげに顔をしかめた。口から煙草を抜くと白煙を吐き出した。

「寸前で依頼が入ったらしくてな。こっちはパスだそうだ。高序列ランカーさんが来てくれるなら早く作戦が終わるかと期待したんだがな」

津野田が周囲を見渡した。この場には美鶴を含め、有志ランカーが既に二〇名ほど集っている。その中には著名なランカーの姿も確認出来た。既に十分すぎる戦力であろう。

「俺じゃ役不足ですか？ 先輩」

浅沼が多少、怪訝そうな声を出す。津野田は両腕をすくめた後、首を横に振った。

「まあ、頑張ってくれや。おめえさんらの働き次第では、俺の休暇が戻ってくるからな。いや、どうせなら何かドデカい事件でも起きてもらいてえな。……てか浅沼、何で今日も律儀に凡庸騎士のジャスティスなんだよ。こういう時はもつと実戦的な騎士か、重武装してこいよ」

美鶴も津野田に同意見だった。浅沼が同調する騎士——ジャスティスは、無骨で簡素な設計のアンドロイドだ。デザイン性が重視されていない、実用性を追求されたフォルム。クロツカの騎士の特徴だ。見たところ武装が両手に握られた旋棍トンファーしかなかった。およそ九〇センチメートルの長さ、通常の倍近くのそれらは、本来刀を持つ敵と戦うために作られた、攻防一体の武器である。

棒の片方の端近くに、握りになるよう垂直に短い棒が付けられている。空手の要領で相手の攻撃を受けたり、そのまま突き出したりして攻撃することが可能で、逆に長い部位を相手の方に向けて棍棒のように扱う事が出来る。

しかし、いかにプレデター相手といっても、打撃武器しかないのは少々心許ない。もし万が一、イレギュラーな事象が発生した場合にはどう対処するつもりなのだろう。

「さすがにプレデター相手にそこまでする必要性は感じられなかったですよ。それに俺は今までこのスタイルで一貫してますから。過去に相手に後れをとったことはないですし」

「さすがエリア2の警察が誇る天才操者だな。言うことが違うな。」

『このスタイルで一貫してます』だ？ 生意気なこと言ってるんじゃないぞ。不測の事態に備えてこそその警察だろが。いちいち後手に回ってたら、面目まる潰れだろ」

「説教は後で、酒の席にでも聞きますから。ここはこらえてください。それに不測の事態が起こる可能性は極めて低いでしょう。照合不可能な騎士が確認され、既にうちの実行部隊が早くから捜査をしていますし、報告された巨大機械についても周辺を警邏していますよ」「んなのは分かっている。ただな、俺の休暇を奪って平穩無事に終わるのは、気に食わねえな」

「まだ言いますか。その発言は不謹慎ですよ。平穩無事でいいじゃないですか」

浅沼はやれやれと首を振った。

「そろそろ作戦開始としましょう。だいたい三時間をメドに、この辺りの建築内部を精査しましょう」

浅沼の催促に頷く津野田は、拡声器を右手に声を張り上げた。深く息を吸い込んで、津野田は言葉を発した。

『そんじゃ、有志ランカーの諸君に期待する。各自、担当地域の調査を時間内に完了させてくれ。――では、これより作戦開始だ』

胴間声が廃墟中に反響した。ランカー達は己を鼓舞するように喊<sup>かん</sup>声を上げる。ついにプレデター殲滅という大業を成すための作戦が決行した。美鶴は鎌錐を一旦、跳躍させて少し離れた瓦礫の上に着地する。

『美鶴君、もし例の機影を確認したらその破壊を最優先してくれ。僕たちも可能な限り索敵を続けるよ』  
「了解」

美鶴は耳元で聞こえた誠の言葉に頷いた。鎌錐の背部からファング・ビットを四つ展開し、周辺の監視に向かわせる。

「がんばって」

由佳里が続いて声援を飛ばす。

「サポートよろしくな」

瓦礫を蹴り上げ、再度跳躍。担当となっている地区へと向かう。その後ろ姿を津野田は遠くから見送った。その表情には、感謝の意が浮かんでいた。

## 戦慄と戦闘（前書き）

はい、やっとここが戦闘シーンです。

まあ、色々と変なところとかあると思います。すみません。  
では、どうぞ。

浅沼VSチーク

## 戦慄と戦闘

「なあ先生。気になったんだけど、禍眼は対災厄仕様なんだろう？  
それなら此処にまで誘導してくるのは無理なんじゃ……」

美鶴はこの場にはいない誠に対して問いかけた。研究所では自信あり気に誠は言い放ったが、段々その言葉の信憑性を怪しく想い始めていた。名を忘れられた街並みの間を縫うように先を急ぐ。同時進行に頭に別の地点のリアルタイムでの情報が流れ込んでくる。風向き、風の強さ、各ランカーの現在地、それらに対し情報処理が追いつかずパンク状態になっていないのは、同調するのが美鶴だからである。並の操者では完全に身動きがとれなくなっているだろう。一步前に踏み出すことさえ困難であるかもしれない。情報量の多寡で言ってしまうと、一般ランカーの倍以上。それはビットの展開数によつてはさらに上昇する。

『確かにそうだけど、禍眼に組まれているプログラムには、最重要目標の変更が組み込まれてるはずなんだ。僕が把握している限りでは、禍眼は一定以上の攻撃を受けた場合、その相手を記憶して再度遭遇した時には優先的に排除を行うはずだよ』

なるほど、初耳だ。必要な情報は出来れば早めに、余さず教えてもらいたい。下手をすればそれが命取りに繋がる。

美鶴はひび割れた道路を塞いだ車両を飛び越えた。既に津野田がいた集合地点からは遠く離れている。ボレアースからの手紙には待ち合わせ地点などについては触れられておらず、逢うためにはこちらから見つけなければならぬ。過去の同僚たちは、そうしたこともでも考慮したうえで、あの手紙を出したのであるのか。

作戦開始から早二〇分が経過した。この時点で美鶴は計二体のプ

レデターを破壊していた。どちらも錆び付いた身体で、動くことさえ満足にいかない様子だった。手間をかけず破壊することが出来た。しかし、未だにビットからは明るい報せ、いやこの場合は暗いかもしれない、が送られてこない。ボレアースの所有物である騎士、ランカーは他には見られないオーラを纏っている。決して計ることは出来ないが、確かに滲み出る強者の色。

『そういえば、美鶴以外のメンバーって年齢としっていくつなの？』

由佳里が唐突に思いついたかのように、言葉を発する。

「確か、当時の俺が七歳ぐらいだったからー、今だと……三〇歳みそじを超えてるとか、二〇歳はたちに満たないのも数人だったかな。同い年の奴もいたはず。年齢が全く判らない奴もいたな。まあ、今生きてる奴は俺を含めて六人ぐらいだけど」

美鶴は、過去の罪を思い出してしまった。己の手を仲間であった者達の血で濡らした日。鼓膜を揺らす悲鳴、妖しく光る血溜り、恐怖に染まった蒼白の顔、怒声と罵声と泪。

『美鶴、同調率が落ちてる。何か暗いこと考えた？　ねえ、元気出してよ。ほら、元気があれば何かが出来るッ！！　ていうじゃん』  
「えらく消極的だな……」

美鶴は笑った。ただただ笑った。笑っていれば、一瞬だけかもしれないが悩みも後悔も忘れられた。胸を過ぎる一抹の不安、今の日常が崩壊してしまうのではないかという恐怖は頭の片隅に引っ込んだ。

『無理に積極的になる必要性はない。妥協することが人生の円滑油』

である、ばい由佳里』

「……………はぁー」

『何？ その溜息。私、イイコト言ったと思うんだけど』

「うん、すごくよかった。ちょーカンドー」

『うわ、何か投げやり』

『——ちよつと由佳里いいかい？ その画面に映ってる反応を探れる？』

会話に割り込んだ誠の声はどことなく深刻さを纏っている。

『えーつと……………美鶴がいる場所からだいぶ離れてるところに、騎士の反応が二つ？』

由佳里の語尾に疑問符がついた。無理からぬ疑問であろう。なぜなら、今回の作戦でランカーは、担当地域に各一名ずつの配備とされていたからだ。

美鶴は至急、近辺を警邏させていたビットを現場に向かわせる。ビットが得てくる情報は由佳里たちにも送信されていた。そうした情報の精査は、ほとんど由佳里たちに任せてある。いちいち情報を詳しく解析しては、騎士との同調率の低下を促してしまう。

『美鶴、今いる場所からおよそ一〇キロ離れた地点に向かって。位置情報を記載した地図を送るよ』

と由佳里の声が頭に響いたかと思えば、すぐさま視界の左隅に円形のレーダーがポップアップされる。向かうべき方角が赤矢印で示されていた。

悩んでいる暇はない。美鶴は自分の担当区域を脱するために大きく跳躍した。止まることなく先を急ぐ。

ちよつと、ビットが現場に急行し、騎士の映像を送ってきた。翼

をもった黒い機体。光沢をもたない躯体は、そこだけ闇そのものであるかのようなだった。鳥のような面貌だけが金色こんじきの光を宿していた。

騎士と同調している間、自分が力そのものになっていくような気がした。何物にも束縛されない、自由な存在。何物にも屈しない、脅威の存在。だからか、と浅沼は思った。だからこそ、肉体から離れて機械の身体にいる方が心安らぐのか。いや、それだけではないのだろう。やはり自分は過去を克服できていないのだ。自分自身の生身の肉体に恐怖しているのだ。だからこそ、肉体から逃避して、トンファー旋棍を己の身体の一部のように、騎士を肉体同然に扱おうと自己鍛錬を積み重ねてきた。気付けば警察組織の五指に入るランカーと呼ばれるようになっていた。弱い筈の自分は最強という役を演じていた。出来ることなら、何事もなく無事に作戦が終わってほしい。だが、何か大きな事件が起きてほしい、と願う自分もいる。並ならぬ強者との戦い。そんな機会があれば、もしかすれば過去を克服できる気がした。それしか方法はないと思っていた。

そんな自分を理解してくれる存在などいるのだろうか。全てを奪い、守れきれなかった気持ちを知るものがあるだろうか。もしいたとして、その者は過去の闇に囚われずに日々を遅れているのだろうか。知りたいと思う。教えて欲しいと願う。

視界に赤色で円形のロックカーソルが出現。前方に連なるビル群の上で静止した。サーモグラフィ熱線暗視装置を起動させ、位置の精査を始める。放置された車両が入り口を塞ぐ半壊したビル内に熱源反応があった。すぐさま背中の加速装置ブースターで、白煙を上げて接近する。錆び付いた車両を押し分け、建物の入り口を露にした。ほぼ同時に奥から飛び出してきた金属塊、浅沼は冷静沈着に両腕のトンファーでソレを地面

に叩きつけた。地鳴りが起こり、粉塵が上がる。飛び出してきたのはタイプ・ラビットのプレデターであった。数度、苦しげにもがいた機械兵は最後にスパークを撒き散らし、完全な眠りについた。

機械を破壊することには、全く躊躇はない。これらは命のない機械でしかない。いくら精巧な動きを実現しても、金属の塊でしかないのだ。風食したビル内部には、他にプレデターの反応はなかった。休んでいる時間はない。配分された地域を余すところなく搜索しなければならぬ。吹き曝しのエントランスから日の下に身を晒した騎士のアイカメラが虹彩の変わりに光量を調節し、瞬時に明暗順応する。

突然、浅沼の視界にカーソルが現れた。つい先ほど、探索を終えたばかりの方角だった。プレデターである筈がなく、この地域は自分以外の担当者はいないはずでもあった。そもそも、各ランカーは基本単独で行動することとなっていた。互いに機械が相手を敵と認識し、カーソルが無闇に表示されるのを避けるためだ。

不審に思い、その方角を向いて、今にも崩れそうに傾斜している廃ビルを見上げた。太陽を背に浮かび上がるシルエットがそこにあった。記憶が瞬時に呼び覚まされる。自分はアレを知っている。

強烈な既視感が浅沼を襲った。遡る記憶、駆け巡る思考。そして思い出した。

アレはボレアースの――

「あーあ、よりによって警察と出くわすなんて」

シルエットの正体。鼻に近似した面貌の騎士は心底落胆したように呻いた。全身青黛色に染められ、仮面のような顔の部分だけが黄金色。まるで闇に浮かぶ月であるかのよう。騎士は背中に生える翼

を左右に広げて、眼下の相手に視線を固定した。

それに対峙して構えをとるのは、モノクロに塗装された軽装備の騎士が一体。無骨にすぎるフォームがかえって、荒々しさを際立たせているようである。

その騎士の操者である浅沼は、翼をもった騎士を見据えて、驚きを押し殺した声で言った。

「その姿に見覚えがあるぞ。過去の事件の資料に確か似たものがあった。――ボレアースが所有した騎士、名を夜の眷属<sup>メディアン</sup>。確か操者は<sup>チーク</sup>頬と呼ばれていた」

浅沼は両腕の旋棍<sup>トンファー</sup>をその手の中で回した。使い込んだ、数多の騎士を破壊してきた銀色の得物が空気をかき混ぜ、弧を描いた。こんなところで思わぬ相手と遭遇したものだ。まさか蛇と出くわすとは僥倖とでも言うべきか。浅沼は己の奥深くから込み上げる感情に、自分自身驚愕した。

浅沼は過去の蛇狩りに参加していない。作戦の内容も後から津野田に聞き、可能な範囲で調査して知った。

警察と有志ランカー協同行われた蛇狩り。日本に拠点をおいていたボレアース、ニースヘッグの双方に対し、武力行使による排除を目的とした作戦であつたらしい。

各地で熾烈な戦闘な展開され、討伐隊では騎士の大破が相次ぎ、蛇側には多数の死傷者が出た。そのこと自体は浅沼の想像の域を出なかった。しかし――

当時、最も激しい戦闘が予想された一つ、ボレアースの拠点<sup>アンダーヘル</sup>が討伐隊が到達した時には既に黒煙を上げていたというのだ。内部抗争、主要メンバーの一人が反旗を翻した、というのが警察の見解だ。浅沼はこれを知り、強い興味が湧いた。ボレアースの主要メンバーと言えば、最強であり従順の戦士だと、考えられていた。九〇%を超える同調率を叩き出す怪物には、強靱な首輪が嵌められていたのだ。

それに抗うなど到底考えられなかった。その認識を覆したボレアーの執行者に、浅沼は聞きたいことがあった。

何が抗う力となったのか、己の手を同胞の血で濡らしてまで手に入れたものは幸せだったのか。過去の罪を後悔はしていないのか。

その答えに近づける機会が目の前に存在していた。答えを急いて高まる感情を抑え、あくまで冷静に相手との距離を測った。

「はあ、よく覚えてるね。そうだよ、うちが<sup>チーク</sup>頬。創世の蛇の執行者であつて、《夜の舞姫》と呼ばれてた。あんたは並のランカーよりも数段上手みたいだね。けど、うちはあんたと剣を交えるつもりはないよ。こっちは顎に<sup>アギト</sup>逢わなきゃだし。こんなところで油を売ってる場合じゃないから」

チークは左手をヒラヒラと振って、背を向けた。廃墟の向こう側へとその機影が消えようとする。

——アギトだと。まさか、この場にいるのか。

浅沼は地面を大きく蹴った。警察専用騎<sup>ジャステイス</sup>の機体が宙を駆けける。逃がすわけにはいかない。蛇のメンバーは国際的犯罪者だ。それをみすみす見逃すなど言語道断。だが、それ以上にボレアーのメンバーに聞きたいことがあった。渴望して止まない答え、それを知りたかった。一気に傾斜したビルの側面を駆け上がった。

「悪いが逃がさん。お前に訊ねたいことがあるんだ」

手首を返してトンファーを瞬時に半回転させ、上段に振り上げる。まさか壁を駆け上がるとは思ってもよらなかったのだろう、行動が遅れたチークは慌ててバックステップで距離をとった。しかし想定内だ。バックパックに備わったブースターを起動させた。グツ、と全身にかかるG。急速に肉迫するチークのメディアンを視界に捉え、渾身の一撃を生むトンファーを両腕ごと振り下ろした。

『ガキイイイインツ』

耳を劈く金属音が空気を震わした。廃ビル全体が振動し、新たに壁に亀裂が生まれる。土埃がおぼろげに昇り、微かに視界を霞ませる。

「なツ」

浅沼は驚きの声を漏らした。

浅沼のジャステイスが繰り出したトンファーによる二連撃が、完全に防がれていた。全く想定していない事態。メディアンの両翼がまるで壁のように、堅牢な守りを形成していた。と、瞬時にメディアンの翼が横に展開。ジャステイスの躯体が後方に飛ばされる。ピルの頂上から後ろ向きに落下する。時間が酷く緩やかに、スローモーションで流れる。攻撃を見事に防がれ、こちらは宙で無防備の状態で。この機会を逃す相手ではないだろう。こちらを見下ろすメディアンが口元がつり上がった気がした。

メデイアンの片翼の翼端が分離し、二振りの刀身へと変じる。チークはその場で旋回すると、地面に落下する前に両手に刀を収めた。まばたく間の出来事。

さすがボレアースの執行者といったところか。騎士を完全に自分の肉体同然に扱い、全く体勢を整える時間を与えてくれない。しかしこちらにも意地がある。

「勝ちにいかせてもらうよ」

チークが跳躍し、両手の刀を交差させた。浅沼目掛けて急落下してくる。二重の風切り音をとまって白銀の円弧が描かれる。空中で両者がぶつかった。

『ギイイイイインッ』

盛大に火花が散り、光芒を描いて消えた。

「うつそ……」

次に驚愕したのはチークであった。確実に浅沼のジャスティスを捉えた筈の刀身が、浅くジャスティスの装甲を抉っただけに止まったのだ。当然の驚きであろう。浅沼は後ろ向きに着地すると、ひび割れた路面を擦過して静止した。視線の先でメデイアンがアスファルトを吹き飛ばし、地面を抉って着地する。チークは信じられないといった様子で、手元を見下ろした。

「あんたが異例なのは分かったよ。まさかあの距離で防がれるなんてね」

「私を、警察を舐めるな」

しかし、危ないところだった。浅沼は謙遜ではなく、本当に奇跡的だったと思った。ジャステイスの兵装が旋棍でなければ、防ぎきれなかった。激突の寸前で、無理やりに突き上げたトンファーが肩口より振り下ろされた刃の進行を妨げた。ほとんど腕と一体化するトンファーの機動性がなければ、間に合わなかった。

両者の間の距離はわずかだ。騎士の脚力であれば、一度に詰められる程度の距離。しかし、安易に踏み込めば容易くやられる。

浅沼は仕切りなおすために、再度構えをとった。

「うちには時間があんなにないんだよ。邪魔しないでほしいんだって」

チークが苛立ちを募らせ、声を荒げた。その背後に可視できないが、異様なオーラが発せられるのを浅沼は感じ取った。ここからが正念場だ。90%という領域へと踏み入れた者が本気を見せようとしている。

浅沼の同調率は最盛時には83%程度。それでも天才操者と呼ばれた。では、それを遥かに上回る怪物はどんな戦いを見せるのだろうか。頬、<sup>チーク</sup>《夜の舞姫》、ボレアースの執行者。その名だけでは知ることの出来ない、本気でぶつかることで知れるその実力。前触れもなく、まるでバネ仕掛けの人形のような唐突な跳躍で、チークのメディアンが肉迫してきた。挟撃せんとする刃が描く白銀の軌道。

浅沼は咄嗟に腕を胸の前で交差した。直後に走る衝撃を地面に逃がしきれず、ジャステイスの身体が絶叫を上げる。恐ろしく重たい一撃だった。想像以上の臂力である。それに加え、左右とも精確に振るわれる刀の太刀筋は、緩急つけた不測の動きをとまっている。先ほどもとは別格。近接状態に持ち込まなければ攻撃を与えないが、持ち込んだ場合、負けるのは必至であるような気がしてならない。

「防戦一方じゃつまらないよッ。ほら、攻めてきなよ」

チークは嘲笑して、右手に収まった刀の切っ先を向けてくる。まるで戦いを愉しむような口調に戦慄を禁じ得ない。逃げ腰になる自分を心の中で叱責して、浅沼は軋む身体を動かして前方に猛進した。メデイアンの手前で高々と飛び上がり両腕を振り上げると、ジャステイスの重量を加算したトンファアの双撃を放った。相手を出し抜くような器用な真似は出来そうにない。ならば正面からぶつかるまでだ。

「ヒュ——」

チークが口笛を吹いたらしい。視線の先で、チークが回避動作をとらずにその場で時計回りに回転した。慣性に乗せた斬撃が左下から振り上げられる。力の大小では、騎士の重量が加算されているこちらが上手、勝利はもらった。

両者の一撃が互いに相手を捉えた。金属音が響き渡り、盛大に散る火花が視界を白く塗り潰す。両者は互いに抱き合うように静止した。静まる廃墟、その静寂を破ったのは無骨な騎士であった。

「くそッ、俺の負けか」

浅沼は苦々しく呟いた。視界に部位破損のアイコンが表示されている。見下ろせば、ジャステイスの左腕が肱から先より喪失していた。断割された腕からはスパークが飛び散っている。後ろに数歩後ずさり、その場に両膝をつくと天を仰いだ。間をあけて背後に重量ある物体が落下する。切断された左腕であろう。

「いい勝負だったよ。警官さん」

首筋に刀身が突きつけられる。陽光を反射して煌く刃がいやに眩

しい。完全な敗北。敗者には贖罪の機会是与えられない。強制的な退場だ。

薙ぎ払われる刃の軌道を追いながら、浅沼は呟いた。

「俺は弱い人間だ」

「――ッ!!」

いくつかのことが同時に起こった。

チークが突然、大きく後方に跳んだ。間をあげず、両者の間に金属物体が突き刺さった。まるで漏斗の形をした物体。プラズマエンジンを逆噴射して、地面から浮かび上がると高速で周囲を飛翔し始める。そして、金属物体が旋回する中央に、一体の騎士が降り立った。まるで蠅螂を想起させるような、流麗なフォームをした騎士。おそらくどこかの企業によるワンオフ、ハイエンド機であるだろう。特徴的な右腕の主兵装が威圧してくる。確か名を鎌錐であったか。

「大丈夫ですか!? 浅沼さんッ」

少年の声が目の前の騎士から発せられた。「ああ、何とかな」と短く返事を返して立ち上る。しかし、何故彼がこの場に居るのだろうか。確か彼の担当地域はここから一〇キロは離れていた。

「もしかして、みつくん？」

チークが恐る恐るといった調子で鎌錐の操者、美鶴に訊ねた。その呼びかけは、まるで久しい友に話しかけるようであった。まさか、と思った。もしか、彼がそうなのか。

「誰だよみつくんってッ!!」

『もしかして、チークかい?』

美鶴の声を遮るように、物柔らかな男性の声が鎌錐から響く。その声の主はチークと面識があるようだった。

「おひさー、ドクトール。元気にやってる？」

チークの馴れ馴れしい口調で、ほぼ確信できたといえよう。美鶴君、やはり君がアギトなのか。しかしその問いを口に出すのは憚られた。それを口にしてしまえば、彼の日常を壊してしまう気がしたのだ。

『元気にやってるよ。あ、しまった。刑事さんがいるよ。——ッ！  
美鶴君、ビンゴ！！ てか、すぐに回避行動とってッ』

男の悲鳴に近い叫び声。それに従うように鎌錐が跳んだ。メディアンに飛びついて、宙に弧を描いて大きく距離をとる。

そして、直前まで鎌錐とメディアンがいた地点をすっぽりと覆う影が出現した。上空を見上げて、絶句してしまった。飛翔する円盤五箇所に突起物があり、緩やかに回転をしていた。

『浅沼ッ！！ ついさっき本部から連絡があつた。お前が担当してる地区に巨大な機影が向かったのが確認されたそうだ』

頭に胴間声が響き、浅沼は呻き声を上げた。津野田の音が高音量で頭に響いただけでなく、既に巨大な機影の正体とエンカウント状態であつたためだ。

「先輩、もう遭遇してます」

『部隊が到達するまでこらえろ。一〇分ほどで到着するはずだ。俺も現場の監督官として、そっちに向かう』

「いや、俺が破壊します。危険なんで先輩は来ないでください。それにこの場にいるのは俺だけじゃないですよ。チークと名乗ったボレアースのメンバーもこの場にいます」

「な、何だって。それじゃ、照合不可能の騎士ってのはメディアンかよ」

ボレアース関係の事件について、詳しい人間を挙げると言われれば津野田が挙がる。それくらいに津野田はボレアースについて、個人的に調べている。その姿はまるで使命感に駆られた一人の人間だった。

「それと先輩。確か美鶴君とは、彼が小学生の頃から交流があったんですよね。前に彼と街中で逢った時に、彼のことを不幸な子供って言いましたよね。それって、彼が――」

だが、その先を続けることは出来なかった。

落下してきた金属塊が粉塵を上げ、地割れを起こした。地震かと思うような揺れにたたらを踏んだ。轟音が鳴り響き、周囲の廃墟が白煙を上げて崩れ落ちていく。

『ヒュオオオオオオオオオオオオオオオオ』

咆哮のように、空気を震わす叫び声を発したのはまるで亀のような機械。その甲羅の一部にカリカチュアライズされた図柄が描かれていた。殻を突き破って、卵から顔を覗かせる蛇の絵。創世の蛇、ボレアース。浅沼は自分が見たものを信じる事が出来なかった。あの図柄が示すのは、目の前の兵器がボレアースの所有物であったということ。しかし、その事実を肯定したくはなかった。

ボレアースが生んだ、巨大兵器《禍眼》はおもむろに周囲を見渡して、大口を開けた。咽喉の奥から伸びる砲身の口でマズルフラッシュが光り、閃光が走る。爆裂音と粉碎音。

浅沼は目の前の存在に畏怖の念を抱いた。現代において、最悪な分類に入るであろう機械兵。それをこの場で破壊することは、己の使命であり、意地でもあった。過去の束縛から逃れるためには、己が正義の代行者とならなければいけない。

残った右腕を横に伸ばした。土煙が視界を奪う。その奥にいる存在を見据え、浅沼は呐喊した。

## 禍の眼という怪物（前書き）

とりあえず、明けました。おめでとうございます。

ついに餅の季節が来ました。パチパチ……。

はい。

何だかんだで、毎日誰かが覗きにきてくれたことに感謝です。  
では、本文をどうぞ。

## 禍の眼という怪物

「先生ッ、こいつが……」

美鶴は声の震えを抑えて言うと、鎌錐の主兵装《デスサイズ》を展開した。陽光を反射する刀身に浮かぶ紋様が美しく映える。もうもうと煙る視界に朧げに現われる輪郭は放物線を描いていた。次第に巨大な機械兵の深翠に染まった装甲がはつきりしてきた。

見た目は本物の亀を思わせるフォルム。酷く金属質ではあるが、生き物めいた動きを体現している。禍眼が緩慢に動くほどにその周囲に土煙が立つ。禍の眼わざわいと書いて、禍眼というだけあり、その眼は凄まじき眼力を有している。顔の中央に位置した単眼。一つ目の邪眼、そう呼ぶに差し支えはないだろう。

「んな、何で禍眼が先行してきてんの？ ウルはどうしちゃったの」

チークの狼狽の色を濃くして言葉を発した。どうやらこの状況は予想外だったようだ。それでも両手に刀を構え、すぐさま臨戦態勢をとる。

「みつくん、禍眼の能力については把握してる？ 異能、グラビティーの対処法をうちらは知らないんだ。とりあえず、ウルと一緒に攻撃を執拗にしたから、アレはうちらを最優先に破壊しようとしてる」

チークが美鶴の横に並び、口早に告げた。誠が言っていたことは真実であつたらしい。禍眼は最優先事項として、チークのメディアン排除を遂行しようとしていた。視認出来る限りでは、武装は咽喉の奥から覗く火砲のみであるようだ。しかしその威力の確たるは、

目の当たりにして知ることができた。正面からの接近は極力避けるべきだろう。

『破壊する方法は解ってるよ。美鶴君がそれを遂行してくれる手筈になってる』

先に誠が答えた。スピーカーから飛び出す音声に誠や由佳里の慌ただしく動く雑音が紛れ込む。

「先生、鎌錐の飛行限界ってどんなもんだよ」

『大体、三〇分くらいだろうね。こちらでも随時、鎌錐の内部電源状況を把握して、限度を知らせるよ。飛行ユニットの展開方法は、自分の身体のことだから分かるよね』

「ああ、分かってる。んじゃ、他のランカーが集まってくる前に破壊しますか」

ユニットを展開させようと、禍眼から一旦距離をとった。飛行モード時には鎌錐の装甲の一部が分離するため、通常なら些細な損傷も致命的となりうるからだ。禍眼の落下によって崩落した瓦礫の山に登り、対峙した。

「ッ?!」

美鶴の視線の先、禍眼を挟んで反対側で、隻腕の騎士が果敢に呐喊していくのが見えた。無茶だと声を張り上げる前に、浅沼のジャスティスが禍眼に跳びかかった。その主兵装であるトンファーが上段より振り下ろされる。だが――

「何なんだコイツはッ」

物体同士がぶつかり合う衝突音は聞こえなかった。その代わりに浅沼の驚愕に染まった声が響いた。視線の先では、果敢に攻め込んだジャステイスの機体があさつての方角に弾き跳ばされていた。禍目まではあと一メートル程度。しかし両者の間に地面に不可視の壁、バリアーのようなものがあつた。浅沼がブースターを起動させ方向転換、再び突っ込む。

「えッ……」

ジャステイスの軌道が不自然に曲がったのが見えた。ほぼ直角に地面に落下し、粉塵を盛大に巻き上げる。薄らいた土煙の中で、浅沼のジャステイスが倒れ伏していた。不可視の何かに抑えつけられているような格好で、何とか抜け出そうともがいていた。あれらが禍眼の能力であるのか。どこか非現実的な光景だった。

『美鶴、そっちにデータを送るよ。簡単に重力場を可視化してみたものだから、正確じゃないけど。とりあえず、それを参考にしてみ  
て』

由佳里の声が聞こえると同時に、視界に禍眼を中心とした半透明橙色の円柱が出現する。何とも巨大だった。禍眼自体、高さ六メートル、横一〇メートルほどはある巨大な機械だが、重力場を含めるとまるで巨大な塔のようであつた。その主であるように悠然と構えている禍眼は、足元に倒れ伏した浅沼には目もくれず、こちらに視線を送つた。いや、あの眸に移るのはメディアンの姿のみだった。機械兵はあくまでプログラムに従順であつた。

「みつくん、それじゃあうちが君の掩護を担当するよ。ちゃっちゃんと片付けちゃおう」

「てか何でみつくん？」

「いやだつて、君はもう三ノ瀬美鶴なんですよ？　過去の名で呼ぶのは悪いし」

なるほど、チークなりにこちらに配慮してくれていたらしい。みつくんか……初めて呼ばれたあだ名だ。

「まあいいや、それで。んじゃ、やるか——」

『美鶴、注意してッ。禍眼がくるよッ！！』

由佳里の声で視線を禍眼に戻せば、丁度あの過重な機体が宙に浮くところだった。禍眼の重量を考えれば、到底不可能な所業だ。しかし禍眼は着実に音なく飛翔してくる。

「狙いはうちだから、みつくんは離れて。禍眼がうちを狙ってる間に破壊して」

「り、了解」

美鶴はチークから離れるため、大きく右斜めに跳んだ。チークはメデイアンを滑空させるように走らせ、禍眼に背を向けて離れていく。その後を追尾する巨大な機影がほんの数秒後に美鶴の視界を覆いつくした。ふいに美鶴の全身を倦怠感が襲った。ずしり、と急に重石を載せられたかのような重圧。可視化された重力場に入らないようにしたつもりだが、どうやら影響範囲はそれ以上であつたらしい。禍眼にとってはチーク以外は眼中にないらしく、目の前を素通りしていった。今が絶好の好機だろう。

——アビエーションモード  
飛行機構起動。

視界に表示されるアイコンが転瞬の間に切り替わる。風力、風向き、高度、周囲の熱源反応などが細かに表示された。同時に鎌錐の

腕部や脚部、背部の後部装甲が分離し、テールスタビライザーが展開する。冷却装置が急稼働を始め、視界の隅の推定残量電力の緑色バーが徐々に1ドットずつ減少を始める。それと同時に活動限界時間のカウンtdownも進んでいるが、減少スピードが早く、一分に對して三〇秒もかけずに減るため、あまり当てにならない状態だ。

「よし、さつさと終わりにさせる。先生、由佳里、サポートは頼んだ」

『了解だよ』

そういえばオヤっさんの出番はないな、と重いながら美鶴は飛んだ。光の翅が背部に拡がり、さんぜん燦然と輝くかりゅう顆粒を撒き散らして飛翔する。いきなりの飛翔で体勢を崩したが、安定装置スタビライザーのおかげでバランスを取り戻すと、眼下の禍眼の上空五〇〇メートル地点まで上昇を試みる。もはやブースターが稼働する振動音と空気を切り裂く音しか聞こえなかった。

「うっわ、しつこいなーもう」

チークは両手に収まった二振りの刀を舞踏の如く扱い、禍眼を牽制していた。禍眼の遠く背後で美鶴の騎士の装甲が次々と分離するのが見える。一体何をするつもりなのか気になるが、とりあえず自分のはひたすらにコイツの注意を引き付けていればいいだけだ。

足元に注意しながらバックステップをとり、禍眼との距離を一定に保つ。接近したところで攻撃を当てることは出来ず、かといって離れすぎて美鶴に注意を向けさせるわけにもいかない。そして、最

も注意せねばならないのが、禍眼の主砲である。

口径120mm、砲身長は最大55口径長に伸長する滑腔砲。それより撃ち出されるのは装弾筒付翼安定徹甲弾《APFSDS》だ。装甲を貫くに特化されたタングステン弾は初速に優れ、砲口速度は1740m/秒に達して、二キロ離れた場所から厚さ560mmの装甲板を貫通する。

APFSDSの特徴は、爆薬を内蔵せず、タングステン合金などで作られた弾芯が持つ運動エネルギーにより装甲を貫通、破壊する。撃ち出された弾丸にもグラビティの効果が現れてほしいところだが、これまでにそうした気配は見られない。ウルがレールガンを用いて攻撃を加えて判明したのは、禍眼の重力場は下部が重力、やや上部が反重力と作用が違っていた。それを知ったところで、何の意味も為さなかったのは言うまでもないだろう。どちらにしろこちらの攻撃は全く当たることがないのだから。

「おーにさん、こちら。手の鳴るほうへ」

リークは自棄になって、からかってみた。はたして理解したのか、禍眼が猛然と接近してくる。先ほども速度が数段上回っているように感じた。地面の上を滑るように飛来してくる。慌てて横に大きく跳躍して、禍眼の重力場から逃れる。だが、突如として足元の断割されたアスファルトが宙に浮いた。これも重力操作か。進路を阻まれるようにして急停止すれば、視界の隅で頭部の正面がこちらを向いていた。大口を開いて、咽喉の奥が露になる。

「ちょ、ちよつとたんまッ!!」

当然のように禍眼はチークの一時休憩の宣言を無視して、砲身を伸ばして照準を定めた。

——やっぱいつて!!

騎士が大破しても死ぬことはないだろうが、今ココで自分が離脱すれば、禍眼の破壊という目的の達成に支障は出まいか。禍眼が新たな目標に美鶴を選ぶ可能性もある。意地でもメディアンの大破は避けなければならない。

チークはメディアンの翼を正面に重ね合わせるように展開し、鉄壁の防御を造る。内部の燃料電池損傷は回避したいところだった。距離にして三〇メートル。視界で銃口炎が瞬いた。マズルフラッシュ亜音速の弾丸を視認することなど到底出来ず、ましてやこんな至近距離でなど回避さえ不可能であろう。瞬間、チークの全身を強烈な一撃が直撃した。

目の前で爆煙が上がり、視界いっぱいメディアンの装甲の一部であつた金属片が四散する。聞こえるのは緊急事態を報せるアラーム音と瓦礫が崩れる破砕音、空気が掻き乱された吹き荒む風の音。視界に表示されていたアイコンがメディアンの破損状況を報せていた。

——右腕部破損、右翼四枚破棄、左翼三枚破棄、よかったバッテリーは無事みたい。

白濁した粉塵の中から抜け出そうともがけば、脚部を何かに挟まれて身動きがとれなかった。

チークの頭が真っ白になった。このままじゃ終わる。禍眼はすでに再照準しているだろう。残り七枚の十八風切ツァディ・バインダーでは防ぎきれない。いとも容易く貫通されてしまう。

「ちよつとまずつたな。ごめん、みつくん」

「諦めるのが早いな。ボレアースの執行者はそんな軟な人間なのか？ とんだ笑い種だな」

いきなり目の前に現れたのは隻腕の騎士、警察専用の無骨なフォームをしたモデルだ。つい先ほどの戦闘でチークが降した浅沼である。何はともあれ助かった、と安堵した。

「笑止ツ！！　と言いたいけど、警官さん。足を抜くのを手伝つてよ。挟まっちゃってるんだよ」

チークは浅沼に頼み込んだ。この際、今まで築いてきた九〇%到達者という自負心を捨てることは厭いとわなかった。

浅沼は頷くと、トンファーを瓦礫とメディアンとの間に差し込んだ。残った右腕に全体重をかけ、梃子の原理を応用して何十キロあるコンクリを除けさせた。すでに白煙は薄れ、うつすらと禍眼の姿が浮かび上がって見える。

「よし、立てるか？」

「うん、問題ないみたいだよ。脚部に異常はなし、早くこの場から離れようッ」

チークは浅沼を急ぎたて、夢中で走った。瓦礫から逃れて数秒後に背後で破碎音が響き、地面が割れるのではと思うほどに揺れる。間一髪の脱出劇をみせたものの、状況は相変わらずこちらが圧倒的に不利だった。近づけば動きを封じられ、離れれば砲弾の餌食にされる。せこいと言いがけない。

あとは美鶴に頼るしかないのだが、肝心の美鶴が同調する騎士の姿はどこにも見当たらなかった。まさかの敵前逃亡、戦線離脱、かとチークは愕然としかけたが、視界に表示されたカーソルの一つが不自然に上を示していることに気付いた。見上げて、啞然とした。

「うつわー、飛んでるよ」

チークの横で浅沼も天を見上げ、「飛んでるな。見事に」その声を漏らした。

蒼穹の中を旋回する機影が黒点となつて見えた。陽光を反射して、その周囲が異様に輝きを放っている。もし万が一に妖精や天使がいればあんな感じだろうか、チークは一人そんな思考を巡らせた。にしても、空を飛ぶ騎士など初めて見た。物好きな人間もいたものだ。いやあのドクトールなら致し方ないのかもしれない。なんせ、聡慧と呼ばれ、神智を有する者として、《知の王》・《発明王》という異名ももったボレアースの創設者と双壁と言われたまでの人間だ。あのぐらいは朝飯前なのではないだろうか。

チークは振り返り、禍眼を見据える。ここから仕切りなおした。今自分がするべきことは一つ。

「逃げるーッ!!」

チークは背後から接近する禍眼の照準から上手く逃れるようにして走った。浅沼はそんなチークから離れ、反対の方角に進む。浅沼とてこのままでいるわけではない。足手まといであることは分かってきているが、自分に出来ることを探すに躍起になっていた。

早急に破壊したいと願うのは皆同じだった。それがどんな思いから来ているのかは別として。

白と蟻の二重奏（前書き）

（＊、１３・）へ ぶひん。

## 白と蟻螂の二重奏

飛ぶということ自体には大方慣れた、そう自信をもって言えるほどに美鶴は自由に空を飛翔していた。重力に逆らって大空の下を、まるで遊泳するかのように飛ぶ。初めての経験に美鶴の心は躍っていた。現在の状況はそれを楽しむ余裕を与えてはくれないのだが。眼下に広がる景色がミニチュア模型のように見える。現在の高度は地上七〇〇メートルほどだ。少々高く飛び過ぎたらしい。

『美鶴、遊んでないでさっさと仕事をする』

由佳里の叱責が耳に痛い。美鶴は「いや、だって空を飛んでるんだぞ。仕方ないだろ」と言い訳がましく呟いた。それに対しての由佳里の呆れたような溜息に多少へこまされる。

『分かってると思うけど、禍眼の真上から垂直だよ。絶対とは言わないけど、万が一に重力場に触れると平衡感覚を失って落下しかないから』

「いや、先生。垂直って、結構難しくないか？ 空から見る限り、禍眼は縦横無尽に地上を飛び回ってるんだけど」

美鶴は眼下で繰り広げられている追跡劇を見て、誠に訊ねた。先を走るメディアンとそれを追尾する禍眼。彼らを離れた場所から傍観するジャスティスの姿も見える。

『そこは気合でどうにかするしかないでしょ。美鶴ファイト』  
『ファイト、美鶴君』

「ええッ、そんな無茶苦茶な。絶対無理だろッ！」

「ねえ、お父さん。マジックペンある？　——あるけど何に使うんだい？」

「もしもし、由佳里さん？　何をするつもりですか？　まさかとは思っただけど、人の顔に落書きしようとしてないか？」

返ってきたのは無言の肯定。キュキュツと線を引く音が聞こえた。美鶴は自身の頬の上を何かが走る錯覚のようなものを感じ取った。くっそ、やられた。

「やりやいいんだろツ。てか、もとよりそのつもりだからな」

くそ、少しぐらい弱音を吐いても構わないだろうに。美鶴は内心悪態をついて、降下を始めた。眼下ではチークのメディアンが華麗に禍眼の追撃をかわす曲芸をみせていた。宙返りなどさも当たり前のように行う。……無駄だ、いや別に見事に回避しているのだが、労力的に。もっと簡単な動作でも避けられるだろうに。

まるで禍眼をおちよくるかのようなアクロバットな動きに美鶴は辟易した。

「くっそー、人が攻撃を当てられないからって調子に乗るなんて。徹甲弾の椀飯振舞いなんて遠慮したいってツ！！」

チークは爆ぜて飛び散った瓦礫を刀で薙ぎ払いつつ、進路を見つけていた。精神を集中させ、禍眼の砲口が狙いを定めてくるのを見逃さぬようにする。敵の動きは機械であるため、ある程度予測しやすい。プログラムに忠実な機械の行動パターンは単調だ。こうした傾向は一般的なランカーにも通ずるところがあるが、実に与し易い相手だった。

問題は敵に攻撃を当てることは不可能であり、近づくことすらままならず、敵は遠距離攻撃が可能であること。最悪だ。卑怯すぎる。美鶴はまだなのかと上空を見上げれば、急速に降下してくる機影が映った。なにやら見定めている様子。はたとチークは思い至った。あれが禍眼の唯一の攻略方法なのか。真上からの降下。それが重力場の突破法であるのなら、今現在の禍眼が動き回る状態は攻めにくいだろう。ならば――

「おい、まさか。チーク……」

美鶴はメディアンが禍眼に突進していくのを見て、感謝の気持ちが入み上げた。チークは身を挺してまで、禍眼の動きを封じようとしてくれているのだ。その働きは無駄にさせるわけにはいかない。落下しながら常に禍眼の真上をとるように調整を続けるのは、なかなか骨の折れることだったが、チークによってある程度禍眼の動きは治まるだろう。絶対に弱音は吐かない。絶対に仕留められると自分を励ます。

「うおおおおおおおおおおお」

急速に肉迫する禍眼の背甲目掛けて、美鶴はデスサイズを大剣状態に最大展開した。

「全く、自分を犠牲に動きを封じるなんて、損な役回りだよねー」

そんなチークの言葉に返る返事はなく、眼前の敵に一人立ちは大

かつてチークは笑った。自分は世界中から疎まれている。ボレアー  
スのランカー、それだけで世界は敵となった。もし恨みを晴らした  
いなら、このまま禍眼を放置していればいいだろう。そうすれば勝  
手に各エリアを襲撃してくれるはずだ。けれども自分にはそれが出  
来ない。世界から嫌悪されていても、自分は世界を憎みきれなかつ  
た。ほんと損な役回りだと、チークはうんざりして肩をすくめた。

「あーやだやだ」

全身にのしかかる圧力に立っていられず跪いた。刀を地面に衝き  
立て、それに縋って何とか立ち上がると真っ向から禍眼と対峙する。  
巨大な一つだけのカメラアイが吟味するかのように凝視してきたの  
にチークは一瞬、恐怖を感じた。いかなる戦場であろうともこれま  
で恐れを抱く事のなかった。その自分が機械を恐れた？ チークは  
半ば自分に問いかけ、可笑しさに笑いが込み上げてきた。久しぶり  
の恐怖を懐かしいとさえ感じた。

目の前で開く大口の奥には火砲が存在した。初速から音速に近い  
速度で撃ち出される砲弾で大破を免れることは不可能だろう。

「みつくん、いそいで」

天を仰いでチークは懇願した。これが最初で最後のチャンスだ。

残り二〇〇メートルほど。美鶴はまるで弾丸のように急降下をし  
ていた。鎌錐が過ぎたあとには光芒が線を描き、淡く消えていく。  
美鶴の視界に何かが新たに映りこむ。隻腕をした騎士だった。

「なんであんたがここに来てんの?!」

「お前をこのままリバーささせるわけにはいかない。必ず拘束して、肉体のもとに案内してもらおう。ボレアースのメンバーがそこまで消耗している機会などそうそうお目にかかれないうからな」

浅沼はチークの驚きにそう端的に説明した。そして、まるで盾にでもなるかのようにチークの前に立ちはだかり、チークの視界を遮った。浅沼の全身にも極度の倦怠感が襲っているはずだった。それなのに平然を装っている。強いとチークは目の前の操者を評価した。騎士の扱いもそうだが、なにより意思が強固だった。確固たる精神が彼を屈しさせずにいた。憧れとでも言えばいいのか、不思議と暖かな感情が心を満たす。

そう思ったもつかの間、視界が一瞬白く染め上がる。遅れて全身を叩く衝撃と爆裂音が駆け抜けた。衝撃波が瓦礫を吹き飛ばし、砂塵が乱舞する。だが不可解にもチークの視界に新たな警告表示は存在しなかった。徐々に薄れる砂埃の中、一体の騎士であつたろう残骸が存在した。上半身の右半分が消し飛び、内部が露になっっている。燃料電池は完全に碎かれ、液体が地面に黒く染みを作っていた。まるで血のように見えてしまう。

禍眼が放った砲弾は軌道を逸らされ一メートルほど離れた場所に着弾し、地面を深く抉っていた。

「さすがに痛いな……ごほお、ごほ」

目の前の騎士から発せられた声だと気付くに数秒要した。普通ではありえないことだった。浅沼はジャスティスが大破してなお、同調を維持していた。それでもあと数分もかからずに強制転送される

だろう。

「馬鹿だね、あんた」

「お互い様にな」

「違うないね」

「この一撃で終わってくれッ」

そんな二人の上空より響いた叫び声。空気を切り裂いて、一体の騎士が落下していた。

美鶴は眼下で繰り広げられた光景に戦慄し、死んでいないと分かっていながらも苦しみを味わっていた。身を挺してチークを庇った浅沼の姿が、かつて由佳里を守ろうとした自分に重なって見えてしまった。だからなのかもしれない。美鶴は怒りを覚えていた。腹の底から沸々と込み上げる熱は美鶴の同調率を底上げた。

『えッ、同調率が99.9%?!』

『美鶴君、マズイよッ!! これはマズイって。クールダウンしてッ』

二人の断末魔のような叫びは聞こえるが、酷く遠くからの声にしか思えなかった。それに加えて、世界の動きが緩やかに流れて見えた。

同調率が限りなく一〇〇%に近づくほどに、正確な認識を可能となる。だが、ある一線を超えた場合、同調時の操者の体感度速度が加速を起こす。その状態はまるで世界がゆっくりと流れているように、もしくは静止しているようにも見える。もし、一〇〇の壁を超えてしまった場合、それは完全に別次元の存在となるらしい。とい

つても人間では到達は不可能であろう。せいぜい99・999999%が限度だと理論上、計算されていた。

美鶴の肉体に施された手術は、他のボレアースメンバーとは一線を画すものである。ありとあらゆる局面で常に最高の状態を維持できるように調整され、同じ機器を使用しても他の追隨を許さない。唯一、ウルを除いてはだったが。

美鶴の存在こそ、対災厄用兵器といっても過言ではない。実際、そのように誠は美鶴の能力を設計していた。そのおかげでこれまで美鶴は生きてこれた。

やっと気が付いたらしい禍眼が上空を見上げ、迎撃の構えをとった。が、全てが遅すぎた。もはや必中の距離に美鶴は詰め寄っていた。

「眠ってるッ」

徹甲弾が撃ち出されるのを視認して避ける。亜音速の弾丸でさえ、止まって見えるほどだった。ほんの身を反らす程度の動作で難なく回避して、禍眼の背中に到達と同時にデスサイズを衝き立てた。火花が吹き上がり、真っ赤に染まった世界。しかし、禍眼の装甲は想像以上に硬かった。デスサイズの刃は半分も刺さらずに停止する。

— Last Weapon . . . open / Yes / No /

美鶴の視界に表示された文字列。美鶴は躊躇わずに最終兵装を展開した。

——《氷葬<sup>ひやうさう</sup>六花<sup>むつか</sup>》、発動。

鎌錐の全身から白光が溢れ、禍眼を呑み込んだ。まるで白紙のような世界に朱を振りまいて、デスサイズが再び沈み始める。美鶴が

感じたのは凄まじいまでの熱量だった。

氷葬六花を発動した場合、鎌錐が発した熱で装甲に使用されるマグネシウム合金《パンドラ》が燃えてる状態となる。通常の騎士であれば起こり得ない事態。もし起これば、その騎士は不良品という扱いだろう。

しかしこの状態こそが鎌錐の最終兵装であり、最強の姿だ。遠くから見れば、鎌錐の背部に生える光の翅が六枚であるのが分かるだろう。

発生した高熱をデスサイズより放出。全ては冷色の焰で沈黙する。美鶴はジリジリと精神が焼けるような錯覚を覚えつつも、右腕に体重をかけて押し込んだ。デスサイズの刃が根元まで埋まり、一瞬だけ音が止んだ。色も音も何もない世界がその場に生まれた。鎌錐の最終兵装状態が終了し、徐々に色が、喧騒が戻ってくる。美鶴の足元で禍眼がブルリと身を震わして天に咆哮した。

『ヒュオオオオオオオオオオ……ボオオゴオオオ……オオ……オオ』

断末魔の叫びは時折掠れ、空しく止んだ。

ドシャン、という重厚な金属音と共に禍眼は地面に突っ伏した。美鶴は安堵の溜息をついて、禍眼の背中で膝をついた。飛行ユニットは収納を完了し、美鶴がデスサイズを禍眼の躯体から引き抜けば、視界に表示されている活動限界時間は残り三〇分を切っていた。消費し過ぎた、と美鶴は多少後悔を募らせた。陶酔感が頭の中を巡って、時折視界にノイズが走る。無茶しすぎたなと心の中で舌打ちする。

『み……、…つる、みつる美鶴ッ』

「な、何だよ由佳里。俺だったら平気だって。別に騎士が大破しても肉体に戻るって」

『ううう、良かった。良かったよ』

由佳里の震えた声、それに続いたのは鼻をすする音。まさか泣いていたのか。美鶴はどうしてこうなったのかと焦った。

『お父さんが大慌てするから、本当に一大事だと思った……。また美鶴が目覚まさなくなるんじゃないかと不安だったんだから』

「……なあ、先生？」

『いやいやいや、だって美鶴君が無茶すぎだったからね。自動で最終兵装のロックが解除されるなんて通常はありえないから。それが起こりえるのは、同調率がある一線を超えた場合だけだよ。美鶴、覚悟していた方がいいよ。今回は揺り戻しが酷い、相当酷いと思う』

「……マジで?!」

『うん、マジ』

戻るのが恐くなった。美鶴はフラフラと立ち上がると、周囲を見渡した。どうにか他のランカー達が集まる前に破壊出来たらしい。さて、ややこしくなる前にここを離れるとしよう。

「とりあえず先生の依頼は完了ってことでいいんだよな」

『うん。禍眼の機能停止をかくに……。ん?——お父さんッ、レーダーに反応。発信源は禍眼本体からだよッ。美鶴、離れてッ!』

美鶴は咄嗟に禍眼の背中から飛び退くと、目の前の禍眼であった残骸を見た。確かに視界にカーソルが表示されていた。そして、美鶴の目の前で禍眼の甲羅が二つに割れた。中から現れたのは人型のアンドロイド。頭部から禍眼との接続コードを生やし、全身は蒼白をしている。両腕の先にあるのは巨大な鉄槍。異彩を放つその機体には禍眼と同じく一つ目があった。冷徹な眼、一瞥されるだけで背筋に悪寒が走る。

「なんだよ、これで終わりじゃなかったのかよッ」

『あれは……敵殲滅用マシナリー、ツグモカミ白神。どうして禍眼なんかから出てくるんだい！？ まさか、まだ研究員にこんな奇抜な思考をもった人物が残ってるのか……』

「ちッ、やるしかないか。先生、今の鎌錐でどこまで戦えると思う？」

『もって五分。それで鎌錐は大破させられると思う。それほど白神は危険だよ』

「今の俺じゃ勝てないか。了解」

美鶴は思わぬ強敵の出現を心のどこかで喜んでいたのかもしれない。暴食の怪人と呼ばれた頃、平和のためだと言っておきながら心のどこかでは破壊を求めていた。

久々に蘇った過去の闘争心は美鶴の心を揺さ振った。

——まるで癒えない飢えを満たそうとするかのようだ。そんな彼に人の言葉が通じるとは思いたくない。彼の心は壊れている。我々は団結し、怪物を排除すべきだ。

昔、テレビで論じられた美鶴への批判を思い出す。あれから何年も経った。幼かった自分は青年期のありふれた日常を謳歌している。平和呆けしているんじゃないかと思うたびに、義腕を眺めて過去を思い返した。悲惨な過去の出来事を振り返り、幾度も心を抉られた。それなのに自分は再び悪逆無道を極めようともいうのだろうか。じわじわと蝕む闇に囚われる。

『美鶴、頑張つて。私はサポートしか出来ないけど、いつも美鶴の味方だから』

ふいの由佳里の言葉に美鶴の心は晴れた。そうだったと自分自身をたしなめる。今の自分には帰る場所があつた。守りたいものがあった。破壊のためじゃなく、守る為に戦おう。

「ありがとう、由佳里」

美鶴は惨憺たる姿と化した鎌鎚を無理やり跳躍させ、デスサイズを佩いた。美鶴と白神の間に白く閃光が走り、火花が散つた。

## 白と蠟螂の二重奏（後書き）

…… やっちまった、自分。物語の收拾は…… つくはずです。

苦手な戦闘シーン。長いですね…… はい。

自分の文章力ってどんなもんなんですかねーと思う今日この頃。  
まあ、自由気ままに言葉を綴ります。

## 蒼白の無双と黄金の最強（前書き）

「ついに戦いのゴングが鳴り響きました。世界ライト級チャンピオンと無名の会社員とのタイトルマッチ。夢の競演です。解説は私、山田が担当させてもらいます。さて、まずは両者共に相手の出方を窺っているかのように、探りあいが続いていま——あぁと、チャンピオンの鋭い右ツ——！これを無名の会社員何とかかわすッ。目を離す暇がありません。いつ決着がつくか、無名の会社員の無謀な挑戦とも言える今試合。私は今、手に汗を握っています。まるで亀のように身を屈め、チャンピオンの拳をいなす無名の会社員。チャンスを探っているかのように、その眸には確かな闘争心が燃えています。あぁと、チャンピオン。ここで右、左と無名の会社員を両側から叩く。このまま終わってしまうのか？！おっと、無名の会社員が動いた、動いた、動いた。キタ——、一発ＫＯッ。無名の男がチャンプを降しました」

……ではどうぞ。

## 蒼白の無双と黄金の最強

目の前を擦過しては青白い軌跡を描くアンドロイド。目立った装甲は身に纏っておらず、全身瘦躯の蒼白の機械。しかし、その躯体の曲線が描くのは女性的なシルエツトだった。顔面には巨大なカメラアイがあるだけ。両腕から伸びる鉄槍は時折、プラズマを放出して青白い閃光を走らせていた。

誠曰く、あの槍が白神の主兵装であり内部に指向性のプラズマ発生装置が搭載されているという。騎士の人工筋肉はおろか装甲でさえ溶断可能らしい。また、頭部から生える髪のような接続コードを相手に突き刺すことで、相手操者の精神おも犯すという。計一〇本のケーブルが獲物を見定めるような生き物めいた動きをしているのに対し、美鶴は生理的な嫌悪感を抱いた。

戦闘開始から三分が経過。戦局は完全に白神に傾いていた。既に勝敗は決している。

美鶴は自身の周りに残り三つとなった遠隔思考操作型兵器、ファングビットを巡回させて防戦の構えをとっていた。鎌錐の両腕は既に根元から切断され、切断面は金属が溶けたように爛れている。一方的な暴力。それを前に美鶴は成す術なく、攻め立てられていた。美鶴と白神の戦闘は他者の介入を許さず、チークは事の成り行きをただ見守っていた。その傍らでは浅沼のジャステイスが機能を停止させようとしていた。

「くッ、早すぎる。それに何だよ、あの反応速度。ビットで全方位から攻めても全機墜とされるなんて」

美鶴は後方にバックステップをとりつつ、白神を視界から外さぬ

ようにしていた。鎌錐の両腕を失ったのは白神を見失い、懷にまで  
潜り込まれたためだった。注視していても、気付けば視界から消え  
ている。まるで霧のような存在に舌を巻くより他なかった。

美鶴が最後の頼みの綱としていたのは、ボレアース最強の存在だ  
った。

『美鶴、なるべくその場から離れて。そろそろ近辺のランカーが到  
達する時間だから』

「分かったッ」

同調時には肉体のような疲労感は一切無であつたが、極度の戦闘行  
為は精神を疲弊させた。熱暴走を起こしかけ、ギリギリと焦げつく  
擬似脳と空回り気味のモーター音。視界を大幅に奪うノイズに苛立  
ちが募つた。焦りが生じ、冷静さを欠いてしまう。

『キイイイイイイイイイイイイイイイ』

耳障りな不快音を上げて急接近してくる白神に対し、残った三つ  
のうち一つのビットを飛翔させて迎え撃つも瞬時に破壊される。や  
つの眼には全てが止まって見えているのではと思うような所業を何  
度も見せ付けられた。現在の鎌錐との同調率が92%の美鶴では到  
底適いそうにないと思うほどに、敵は強大だった。

眼前に迫つた蒼白のアンドロイドの酷薄な眸が美鶴を捉えていた。  
このままじゃやられる。美鶴の心は焦燥に駆られた。敏捷な動きで  
一瞬白神の輪郭がぼけた。はつとした美鶴は残りのビットを飛翔さ  
せた。だが、ほんの三〇センチも離れないうちにビットが宙で断割  
され、スパークを吐き出して墜ちた。代わりにビットがいた位置に  
立つアンドロイドの眸が嗤つたように見えた。

——くっそ、今何分経ったんだよ。絶対五分以上経過したよな。

そんな思考を巡らせた美鶴は踏み止まって慣性力を殺すと、あえて前方に跳んだ。目と鼻の距離には白神がいた。迫りくるケーブルの群れと光る鉄槍が視界いっぱい広がる。

『無茶だつて、美鶴ッ』

——無茶でもやられっぱなしは嫌なんだよ。

鎌錐の躯体を貫通する鉄槍が不協和音を響かせ、頭部に覆い被さるケーブルが美鶴の精神を削った。

「うゝ ああああああ あッ——やっど……一発目だッ！」

美鶴は思いつき右足を蹴り上げた。ドンッ、と鈍い衝撃が白神の全身を揺らし、後ろに後退させた。その機会を逃さぬように美鶴は再び突進、無防備の腹部に対して渾身のタックルを見舞った。二回目のヒットは白神を地面に擦過させながら吹き飛ばした。半壊したビルの壁に激突し、粉塵を上げて周囲を白く染めた。

「先生、今何分経った？」

『何分経ったじゃないでしょッ！！ 何でそんなに無謀な賭けに挑戦したがるの?! こっちがどんだけ心配になるか考えてよッ』

「……あ、いや……ごめん由佳里」

『美鶴が無茶するとは分かってたけど、ホントに無茶しすぎッ！！ ちよつとは弁えてよ——由佳里、落ち着いて。それで経過時間だっけ？ えーっと、丁度五分かな』

「まだ、五分かよッ。メチャクチャ永く感じたのに……うッ」

急に美鶴の全身を衝きぬけた衝撃に呻き声が漏れる。視線を落とせば、鎌錐の腹部に鉄槍の切っ先が生えていた。マジかよ、いつの間に背後に回ってたんだ。

引き抜かれる槍の感覚が美鶴に吐き気を催し、言いようのない不快感に全身を支配される。その場に崩れた美鶴の視界に映りこむ蒼白のアンドロイド。その躯体は嫌になるほど無傷だった。

——駄目だな俺は。全然駄目だった。

戦闘開始から五分経過。誠の宣言どおり、鎌錐は大破させられた。動かない身体で美鶴は敗北感に浸った。

「暴食の怪人はまだ死んでなかったっていう話は嘘だったのかな？」

剣戟の音が響き、美鶴の意識が覚醒する。白神と対峙してメディアンの姿が見えた。激しい鏝迫り合いで火花とスパークが絢い交ぜになる。

「なッ、チーク。お前まだ動けんのか？！」

「ふッ、よ・ゆ・う・だよッ！！」

チークが白神の鉄槍を押し返し、美鶴との間に立ち塞がった。既にメディアンも消耗し切っていた。翼は元の半分以下にまで短くなり、右腕は損失、装甲はいたるところでひしゃげている。よくもまだ戦えるものだと感じてしまうほどだ。

「まったく、ウルはどこで道草食ってたのかな。てか、こいつ……前に廃棄処分されてなかったっけ？」

「は、廃棄処分？」

「そう。メンテナンスが億劫だから、最近になって廃棄が決まった

はずなんだけど」

『きつとそれはフェイクだね。よく言うよね。敵を騙すにはまず味方からつて。こんなことするのは彼しかないけど……まさかね。優秀さと奇抜さを考慮したら彼しかないけど』

何か思わせぶりの口調の誠に美鶴もチークも首を傾げた。二人とも心当たりがあった。かつての日本のボレアース本拠点アンダーヘルにおいて、優れた研究者は誠を除いて二人いた。そのうちの一人はすでに故人であるため、残るはあの男しかない。

「まさか、あのエロガエル」

「生きてたのかよ、エロ爺」

『二人ともエロつて……』

「あとでとつちめてやるッ」

意気込むチークの姿が、可笑しくて美鶴は苦笑した。視線の先で白神も攻めるべきか決めあぐねている様子にも見える。

「まずはこいつを破壊しなきゃだ――」

「なんじゃこりゃッ!？」

素っ頓狂な声が響き渡り、チークの言葉を遮った。この場にいた全員が声の主を見た。

映ったのは赤い回転灯を明滅させ、低く唸るエンジン音を鳴らす車体。その運転席から飛び出した煙草を啜えた丸顔の男。何故、何故、何故、彼がここに。

美鶴は叫んだ。

『津野田さんッ、ここは危険だッ!!!』

陳腐な言葉だった。しかし咄嗟に飛び出したのはそれだった。美鶴の言葉に驚いて、津野田が「危険って、何があったんだ？」と首を捻った。その時津野田の双眸が青白いアンドロイドとメディアンを見つけた。驚きの色に染まる津野田は絶句したように固まった。

——先に動いたのは白神だった。

気付けば猛然と津野田に迫る蒼白の機影に、美鶴は戦慄した。何故、生身の人間である津野田に向かうのか。

『まずい、白神が刑事さんを敵と認識しちゃったみたいだ』

「んな、津野田さんは人だぞ！！　なんでそうなるんだよ、先生ッ」

美鶴は動かない鎌錐の軀体をどうにか動かそうともがいたが、一向に騎士の身体は動く気配がなかった。絶望的な状況。唯一の頼みは——

「って、チークはどこだよッ」

気付けば、目の前にいたはずのメディアンの姿が消失していた。まるで霧のようだと感心はしない。ただ美鶴は驚愕し、万策尽きたとばかりに恐怖した。

恩人を助けることが出来ないのか、自らの非力さに苦悶した。

『ドンッ！ー！』

衝撃波が美鶴を叩き、暗澹たる思考をも消し飛ばした。美鶴の視線の先に、白神を廃ビルに突き飛ばしてメディアンが忽然と現れた。

『あーもう、人の仕事を増やさないで欲しいよ。刑事さん、生きてる？』

「ああ、俺は全く問題ないが、おめえさんはチークだろ？」

『ピンポンピンポン、大正解』

「何だかよくわかんねえーが、礼は言っておくぜ。ありがとさん」  
『いえいえ、うちは仕事をしたまでだから』

チークは津野田に背を向けて、未だに白煙を上げているビルの一階部分を凝視した。ふいに粉塵が横に伸び、中から蒼白の機影が飛び出す。ここから見る限り、破損部は皆無のようだ。どれほど頑丈に出来ているのだろうか。

『追加報酬ってあるんかねー？ あって欲しいなあー。さすがにこれであの報酬金額じゃ割に合わないっしょ』

チークが左手を前に伸ばし、切っ先を白神に向ける。刻一刻と縮まる距離。時間が引き延ばされたかのように美鶴には永く感じた。視界で白神が地面を蹴り上げ、高々と跳躍した。両肘を肩より後ろに引いて突きの構えをとる。チークは微動だにせず、じつと堪えるかのようにしていた。

両者の距離が僅か一〇メートルを切ったとき、静かであるがよく通る声が廃墟に響いた。美鶴が心待ちにしていた存在、いやチークも待ちわびていただろう。

『待たせたな、みんな。ちょっと、爺さんを相手にしてたら禍眼を見失った。あとでのエロ爺からは報酬の上乗せを要求したほうが

いいな』

白神の周りを螺旋状のコイルが地面を穿ち、三角形を形成した。同時にそれぞれのコイルが電流を纏い、白神を囲う。全員の目の前で白神が腰を折り、地面に平伏した。どうやら強力な磁場が生成されているらしい。

美鶴はこれをやった張本人を探した。犯人はすぐさま見つかった。漆黒の外套に身を包んだ……少年が半壊したビルの縁に腰掛け、この場を見下ろしていた。

『ウル、まさかそんな趣味があつたのか……』

『最近そんな会話をした気がするな、断言させてもらうがこれは俺の趣味じゃない』

ウルは大仰に両腕を左右に広げると、やれやれと首を横に振った。

『さてと、まずはそいつを破壊しておこうか』

と言うが早いか、ウルは右腕を変形させるとレールガンを顕現させた。可変式であつたらしい腕の変形過程は目を奪われるほどに、美しさを兼ね備えていた。人はそれを無駄とも言つだらう。

『ブラドだったら何と言うんだつたか……ああそうだ。ジ・エンドだ』

空間に紫電の線が描かれる。直線は四つん這いとなった状態の白神の頭部に到達すると、爆炎と粉塵を絢い交ぜにして空気を振動させた。轟音が響き渡り、地面が大きく縦揺れを起こした。

やがて治まった揺れ。白神がいたはずの場所には小さなクレーターが残されていた。跡形もない抹消、威力過剰な一撃によって存在

が消滅していた。

『お見事』

誰かが言葉を発した。いや、美鶴自身だった。無意識のうちに発していた言葉と共にかつての施設での日々が思い出される。

「くっそー、何でウルには勝てねえんだよ」

「小学生風情がオレに勝とうなんて一〇年早い」

「んじゃ一〇年経ったら俺はウルを超えてるのか。あと一〇年ってことはー」

「いやいや、時間的な話をしてるわけじゃないぞ」

美鶴の周りには大勢の人間がいた。一〇〇メートル四方の広大な空間はまるで闘技場であるかのようなようだ。その中央に集まる視線の先で美鶴が同調する銀狼は仰向けに転がっていた。その傍らには金髪をした男が佇み、含み笑いを浮かべている。

「よわっちーな、アギトツ！！ 次は俺と代われ。お前のことは忘れねえ、俺が仇をとってやる」

「人が死んだみたいに言うなよな、ブラド」

「年上には誠意をもって対応しなきゃ駄目だよッ！！」

「チークは余計だ！！ お前はもつと痩せるッ！！」

「ひっど……。このチビッ！！ 童顔ッ！！ さみしん坊ッ！！ 甘党ッ！！」

華やぐ場に居心地の悪さなど存在しなかった。この世界が安泰の場所なのだと信じきっていた。

これは過去の輝かしき栄光の日々。いつまでも続くものだと思わなかった日常。

今では顔を覚えている人間は極端に減った。生きている仲間も極少となった。いまさら後悔したところで詮無きことだろう。

『おっそいつてウル。どこで道草喰ってたん？』

『ちよつと気になって、爺さんに問い合わせてたんだ。禍眼に手を加えてないかってね。そしたら案の定これだ。というより、チークは何も話を聞かされてなかったのか？』

『そうだね。いきなり禍眼が逃げ出したって知らされて、搜索に出るときには何もなかった筈……だと思っ』

妙に歯切れの悪い言い方をチークはした。『はぁー』とウルが溜息をついた。

『よく聞いてなかったな、チーク。まあ、オレが聞いたときも、気は抜かないほうがいいぞと言われて何が何だか分からなかったがな』

ウルは未だに半壊したビルの上から声を投げかけていた。縁に腰掛け、両足を宙に投げ出して交互に揺らしている。

「にしても豪華なメンツだなあ。ボレアースの面々が三人も揃った

あ、すげーな。他の連中に話しても眉唾物としてあしらわれるだな」

津野田が腕を組んで全員を見渡した。それで何本目なのか、啜え煙草を吸っている。その足元には踏み消された吸殻が何本も転がっていた。

『あなたは津野田警部ですね。美鶴くんがお世話になった、お礼を言わせてもらおう』

「さすが、俺の素性とかは把握ずみつてわけだ。まあ、礼には及ばねえーよ。俺は正しいと感じたことをしたまでだ」

『よッ、刑事の鑑』

「よせよせ、照れるだろーが」

何故こんなにも和んでいるんだと美鶴は判然とせず、一人首を傾げていた。

『とりあえず、依頼は完了したからな。チーク、戻るぞ』

ウルが立ち上がり、チークを催促する。

それに対して、チークはゆったりとした動作でウルと向かい合うと、大声で宣言した。

『うちはとりあえず、出頭してきますッ』

『「……………」』

一瞬で場が白けた。

『それは本気で言ってるのか、チーク』

吹きつける風に靡く金髪から覗く冷徹な眸を光らせ、ウルがそう問いかけた。チークは大様に頷いた。

『とりあえず、あのジャスティスの操者の人に礼を言いたいし』

チークが向けた視線の先には躯体の半分が消失した騎士の姿があった。すでに強制転送された後であるらしく、微動だにせず沈黙を守っていた。

『まさか、これを一発K・O・というのか』

ウルは不可解にも納得した様子で頷き返した。

——は？ 一発K・O・って、ボクシングじゃあるまいし。

『ああ、一発K・O・っていうのは、どうも一発で恋に落ちるの略らしいな。オレもブラドに聞いて初めて知った』

啞然とする全員を前に、ウルは踵を返した。去り際に一言。

『この依頼はチーク、お前の送別会だ』

事態をいまいち呑み込めていないチークを置き去りにして、ウルは廃墟の奥へと姿を消した。残された一人と二体の騎士はただ呆然と青い空の下で、他のランカー達が遅れて到着するまで、ウルが消えた方角を見ていた。

## 蒼白の無双と黄金の最強（後書き）

次話は、まさかのドタキャンをしでかした、小笠崎の話になるかもしれないです。はい。

## 鈍色の心に色を塗り重ねよう（前書き）

そういえば、他の人のアクセス数ってみられるもんなんですネ。  
昨日初めて知りました……。

すごい人達のを覗いてみて呆然としました。軽く一万超えって  
自分と較べるとあれですね、太陽とミジンコほど違うですね。

……Σ（、、；）

## 鈍色の心に色を塗り重ねよう

帰路を急ぐ人々の群れと数珠繋ぎのように絶えない交通を見下ろす機影が高層ビルの屋上にあった。まるで西洋甲冑ような見た目。頭部は爬虫類に類似されたフォルムをしている。腰に佩いた二振りの太刀が目を引き、近寄りがたい雰囲気醸しだしていた。

『小埜崎さん、うちお腹が空きました。早く帰ってきてくださいよ』

瑠璃からの通信が小埜崎の耳元で反響する。

「瑠璃、今何時？」

『えーっと、五時三〇分ですよ。三時のおやつ時間を軽くスルーしちゃてますよ。うち、糖分不足で枯れちゃいますよ』

「糖分足りなくて人がミイラになったら怖いね」

『うちもそう思います』

「……………じゃあ、あたしが戻るまで何かクイズとかで時間潰しでもしとく？」

小埜崎は龍王をフェンスから遠ざけると、非常用階段に向かって歩き始める。

『いいですね。じゃあ——力カオをかけまして、牛乳で溶きます…』

…そのココアは？』

「……………ああ、謎かけじゃないのね」

小埜崎は思わず脱力しかけて、その場に踏み止まった。何か言おうと思ったが閉口する。

『当たり前じゃないですか。うちにそんな高等テクニクが使える訳ないじゃないですか。あまり買い被らないでくださいよお』

「少しでも期待したあたしが馬鹿だった。でもね、あたしは瑠璃の責任者として将来が不安だよ」

瑠璃が毎回のように採ってくるのは赤点真際の点数が書かれたテスト用紙。それをさも自慢げに見せてくるのだから、呆れを通り越して敬服してしまう。

『将来が不安って、うちの断崖絶壁垂直急降下の胸のことですかあッ。そんなに絶望的なんですかッ!？』

「ええッ?!　なんでそんな話なんのよ。てか瑠璃、自分で言うて辛くないの?」

『人間は苦しみを乗り越えていく生き物なんですよ』

「あたしには瑠璃が困難に特攻しているようにしか見えないけどね」

小笠崎は龍王のカメラアイ、同調時には自身の眸同然となるソレを暮れなずみだした青空に走らせた。今頃は作戦は完了した頃だろう。結局こちらの依頼は一日かかってしまった。あとで詫びの一つ、いや差入れでも持つていくとしよう。

『にしても結局、エリア内で見かけられた不審な騎士は見つかりませんでしたね。下っ端みたいいな人たちは取っ捕まえましたが、全然情報を持つてなかったし。先輩たちは無事に完遂したんですかね』  
「下っ端が使いモンにならないことは初めから分かりきってたからどうせトカゲの尻尾切りにされたただけだろうし。美鶴君の方は問題ないでしょ。なんせあたしよりも序列が上で、元執行者だからね」

ボレアース所属メンバーのうち、コードネームを持った人間は特に執行者と呼ばれていた。そのどれもが最凶と恐れられ、たった一

人で世界の軍事バランスを崩す化物とまで言われていた。世に知られている名は極僅かで、その多くは既に故人となっている。

顎<sup>アギト</sup>の名をもつ彼の強さは折り紙つきであろう。たとえ扱う騎士が違くとも、その事実には遜色はなかった。先日のエリア2襲撃でまざまざと自分との歴然とした差を見せつけられ、それを確信した。

『そうなんですよー。美鶴先輩がまさかあんなに凄い人だとは思いませんでした。しかも、あんな童顔で幼くてクラスメイトから弟キャラ扱いで、無駄に口が悪い先輩が暴食の変人だったなんて』  
「美鶴君が聞いたら蒼然としそうだね……。とりあえず、暴食の変人っていうのはちよつとやめよ？ 食い意地の張ってる変態みたいだから」

『——ところで小笠崎さん。うち、面白い番組を最近見つけたんですよ』

「話題の転換が早いね……」

『タイトルが《欲望に塗れた心》って奴何ですけど——』

「何てモノ見てんのッ!？」

『ッ!! ビックリするじゃないですか。いや、単にネコとネズミが逃走劇を繰り広げるってアニメーションなんですけど』

「製作側は子供たちを混沌に突き落としたいのかな？ そのタイトルはいかんですよ」

『で、結局アニメの最後にネズミがネコに食べられちゃうんですよ』  
「結構、シビアなのね。弱肉強食の話なの？ それ」

というよりも、なぜそんなアニメを見つけたのかと、不思議に首を傾げる小笠崎だった。階段を軋ませて降っていくほどに近づいてくる街並み。心なしかいつもよりも首都圏全体が賑わいんでいるように映る。皆、今回の作戦を厚意をもって迎えているようだ。このまま一気に、デッドゾーンが消滅してくれればいいと願わずにはられない。

『今日の夕飯は何にするんですか？　　うちはシチューかホワイトカレーがいいです』

「カレーとシチューの違いってなんなのかね。とりあえずホワイトカレーはカレーよね」

小埜崎は苦笑を洩らした。

瑠璃と出会ってかれこれ何年経ったのだろうか。初対面した時の瑠璃は、例えるならば死んだ魚の目をしていて。白濁として何の光も宿していない眸は虚空を見つめ、統合失調症のような障害を患っていた。相良瑠璃（さかぐらひ るり）という名を知ったのは出会ってから一ヶ月経った頃で、今のように明るさを取り戻すにはさらに一年も費やした。

「こんな人形のような自分に名前はいらない。あるだけで使い道がないし、商品名のようなだと思う」

名前を訊ねた時にそう返事が返ってきて驚愕させられた。まるで泥沼に足を取られたようにもがく感情が心を締めつけ、齒がゆい思いがじれったかった。手を伸ばせば届く距離であったのに、声にすれば届く距離だったのに、その心には届くことを許さない虚無があった。

瑠璃の過去に何があったのか、それを彼女自身は覚えていない。心的外傷後ストレス障害《PTSD》によって、過去を忘れてしまっていた。だが、それでもいいと小埜崎は思う。

思いだせば壊れてしまうような過去ならば、思い出す必要はないと。小埜崎はそんな瑠璃の過去については調べてあった。それを知るのは文蔵と幾人かの警察関係者ぐらいだろう。いや、まだいる。正確には、まだいただろうか。まあいい、と小埜崎は首を緩く振って靄を掃った。

今の彼女には心安らぐ場所があり、それには小埜崎や美鶴や由佳里の存在が欠かせない。彼女にとっての平和はこの世界に存在しているのだ。

『早く戻って来てくださいよー。お腹がグーグー、自己主張してるんですよ』

通信越しでも分かる腹の音が瑠璃の空腹状態を如実に小埜崎に伝えた。失笑した小埜崎は堪え切れない様子で腹を揺すった。失笑を買った瑠璃は『笑わなくてもいいじゃないですかッ』と抗議の声を上げる。

「分かったから。すぐに戻るよ——ッ!？」

何気なく、景色に視線を送った小埜崎の視界に映りこんだ機影。朱い帯状のモノが揺らめき、その後方に流れていた。遠目からでも分かる瘦躯の騎士はまるで龍のような強靱な尻尾を持ち、それを左右に振りながら外周区の方へ消えていく。

まさか、本当にアレがこの世に存在して——

そこではっと気付いた小埜崎は瑠璃に訊ねた。その声は小埜崎自身も驚くほど、切羽詰っているように聞こえた。

「瑠璃ッ、大丈夫？ 気分が悪いとかない？」

『はい？ 全然問題ないですけど』

「そう……よかった。悪いけど、周辺に騎士の反応があるか探れる

？」

『えーっと、うーんと……。全く反応は無いですよ』

「ありがと。んじゃ、即行で帰るから。首を洗って待ってなよ」

『ええッ、首を洗うって……。うち、小埜崎さんに何されるんですかあ！？』

「いや、そんな大袈裟に驚かれても。料理の手伝いをしてもらいたいってだけで」

小埜崎は既に姿を見失った機影を思い返す。まさかアレがまだあるわけがない。ただの目の錯覚だと納得したい自分がいる。しかし、あれほど特徴的なフォルムをした騎士がこの世に二つとあるだろうか。

小埜崎は一人、静かに外周区の方角を睨んだ。その胸に決意を固め、今まで築き上げてきた日常を守ることを誓った。

賽は既に投げられ、彼らは訪れるであろう未来をただ、待つよりほかなかった。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿」

どれほど自分は馬鹿なのだろうか、などと美鶴は逆に不思議に思ってしまった。目の前には目元を赤く腫らした由佳里の姿があった。その後方には、何故か思案顔の文蔵と暖かい目を向けている誠がい

る。

「いや、ほんとにゴメン。でもちゃんと戻ってきただろ。この通り異常なしだ」

「それは結果論でしょッ。あの時は保障がなかったんだよ。私は何のためのサポーターなの？ 美鶴を守るのも私の役目なんだよ」

胸を反らした由佳里は左手を腰に当て、指を立てて右手を美鶴に向けた。ゆったりとした作業着でも分かる胸のふくらみが強調されて美鶴は慌てて視線を外した。

「なんで目を逸らすの？ ちゃんと人の目を見てよ」  
「いや、そうしたいのは山々なんだけどさ——」っッ

美鶴の視界が一瞬暗転して、足元がふらついた。何とか踏み止まろうとしたが、耐え切れず後ろ向きに倒れかける。慌てて由佳里が美鶴に駆け寄って背後から抱き止めた。

「全然駄目じゃん……。無理しすぎだよ」

今にも消え入りそうな声に美鶴は、今更ながら白神との戦闘で自分が採った行動の愚かさを気付かされた。由佳里は酷く心痛であったのだ。美鶴のサポーターでありながら、再び美鶴を危険に晒し、またも死の際に立たせてしまうのではないかと。

「格好悪いよな、俺。由佳里を悲しませてばっかだし」  
「そうだよ。すんごく心配だったんだがらあ」

由佳里の言葉の語尾は震えて不鮮明となった。再び頬を伝いだした雫を隠すように由佳里は美鶴の背中に顔を押し付けた。

「美鶴君、あとで診療室にいこつか。今回の白神との戦闘は想定外だったからね。美鶴君はまともに精神汚染をくらっちゃったし。まあ、命に別状はなし程度だとは思うけど……由佳里が落ち着くまで待つてようか」

誠の言葉より、約五分後。

由佳里から解放された美鶴は重い足取りで、誠の背中を追った。

フラッシュバック

「あまり無茶すると、自然再燃を起こすよ。君は自分の力を過信し過ぎだよ。確かに僕は美鶴君を最強となるようにしたつもりだ。だけど、その代償はあまりに大きかった。今の日常を失いたくなければ、99%以上の同調率は今後出さないで欲しい」

「悪い、先生。俺は……」

「君の性格だと、手を抜いて後悔はしたくないんだよね。はあ……僕も精一杯努力してみるよ。かつてのアギトを、暴食の怪人と呼び覚まさないように最善を尽くすから」

「ありがとな、先生」

「感謝は僕だけじゃなくて、由佳里にも言つてあげて」

優しく微笑を浮かべた誠に美鶴は感謝の気持ちで胸が一杯に満たされていた。

「ありがとう」と声に出さずにもう一度感謝すると、誠の後を追って診療室の入り口をくぐった。

## やっと届いた距離（前書き）

そろそろ第二章？ も終わりになりますね。  
ではー、どうぞ。

## やっと届いた距離

夢も希望も取り上げられたボクらの声は響かず地に落ちて、やがて錆びついた。

この世界に信頼できる人間など存在しない。この世は既に錆びて、褪めた思想をもつ者しかいない。無垢な子供も、純粋な感情を奪われている。

信頼できる人間は存在してはいけない。ボクらは孤独の群衆であらねばならなかった。

決して他人を信用せず、己の力だけを信頼し、戦うことを強制されたボくらには仲間はいたが、友はいなかった。同類であっても決して相容れぬ仲であった。

施設、機械、薬、血、暴力、怒声、吐気、反吐、泪、唾液――

思いだせるのは痛みと恐怖だけだった。周りにいた人間の顔は不鮮明に歪んでいた。

「うちには全てが色褪せて見えはしないけどな――」

留置所の居室でチークは暇を持て余し、小部屋を仕切る柵にしがみついてグダグダとしていた。午前六時三〇分に起床であるらしいが、慣れない場所での生活のためか随分と早くに目が覚めていた。チークが割り当てられたのは雑居房の一室。他に同じ部屋の人間はいない。

チークは深閑とした留置所に居ずらさを覚え、所在なさげに視線を周囲に走らせた。暇潰しというよりも、思い出してしまった過去を振り払いたかった。かつての仲間の語らいが頭を過ぎり、苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。居室には個室のトイレがあるだけ

で、娯楽の類はなかった。

「うーん、この格好は何だかなー」

チークは自身の姿を見下ろして、笑みをこぼした。サイズは丁度、いや少し小さめのジャージに身を包んだ自分は酷く冴えない人間に見えることだろう。

白神との戦いを終えた後、警察にメディアンを拘束されたチークは、抵抗せずに自分がトランスしている場所へと案内した。そして手錠を嵌められ、連行されていく最中に浅沼と名乗った男性に声をかけられた。その場面を思い出して、自然と口元が緩んだ。

「何故、お前が捕まっているんだ？」

「……もしかして、警官さん？ あのジャスティスの操者だった」

「ああ、そうだ」

チークの目の前に現れた男は若かった。見た目は二〇歳過ぎぐらい。清潔さを訴える短めの髪と誠実そうな眸、線の細い顔立ちをしている。想像していたよりも、一〇倍イケメンだった。さすがに美男子はこないだろうと低く見積もっていたのだ。まさかの不意打ちに何を言えいいのか困窮してしまった。

チークの傍らで付き添う刑事が足を止め、浅沼に対し敬礼した。浅沼もそれに答えると、チークに視線を戻した。

「うん？ 何か言いたいことがあるのか」

「いや、えーっと、あるよ、いやありますよッ。でも、まさかー、こんなドッキリがあるとは思わなくてー」

「はつきりしないな。別に私……俺は機嫌を悪くしたりもしないぞ。

それに無理に敬語にする必要もない」

「ええっと、何で私を俺に言い換えたの？」

「ッー！　そこか。はつきりさせたいのはそこなのか？　まあ、なんだ。初対面の相手には私という一人称を使うことを決めているんだ。別に深い意味はないぞ。俺の気分の問題であるだけだ」

浅沼は頬を掻き、咳払いを一つすると質問を重ねた。

「でだ。他に言いたいことがあるんじゃないのか？　俺もお前に聞きたいことがあるんだが」

「うちに訊きたいことがあるの？　きゃあ、どうしょ」

「何でそこで顔を赤くするんだ？」

浅沼は困惑した表情を浮かべた。チークは慌てて取り繕うように首を左右に振った。チークの隣に控えていた見知らぬ壮齢の刑事が眉を寄せたのも意に返さず、意気込んで言葉を発した。

「恋人になることを前提に、うちの友人になってくださいッー！」  
「ええッー！？」

何故か隣の壮齢の刑事が驚愕し、チークと浅沼を見比べて意味深に頷いた。

その後、結局浅沼はチークに質問をすることなく、チークは護送車で首都圏内の留置所に連れて行かれた。向かった先で待っていたのは、津野田と呼ばれた丸っこい顔をした刑事であった。少しばかり疲れた顔をしていた彼は苦笑いして手短かに説明をしてきた。

どうもウルが一役買ったらしく、チークの処遇は組合連合側に委任されることとなったらしいのだ。数日間の留置期間を経て、しかるべき施設の方へと移送される手筈だと伝えられた。そこで何が待っているのかまでは教えられず、仕方なくチークは寡黙に従ったのだ。

「まあ、なるようになるさね。にしてもウルが既に手配済みとか。もしかして最初から、うちを抜けさせるつもりだったのかな」

憶測で物を言うつもりはないが、そう思いたくなるほど手際が良かった。チークが連行されてきた時には着替えとして、この赤ジャージが用意され、身柄は数日後に組合へと引き渡される予定となっていたのだ。

「うーん。ウルのことだから、無きにしも非ずなんだよね。まさか、あのエロガエルが……」

一人悶々とするチークの耳に誰かが近づく足音が聞こえた。見回りだろうか。

チークはひとまず、狸寝入りをする事として壁にもたれて膝を抱えて目を閉じた。不可解にその足音はすぐ近くで止まった。耳を澄まして気付いたことだったが、どうやら複数の人間がいるようだった。

「寝たふりをしているとこ悪いが、お前さんに面会希望が来てる。本来であれば、まだ許可が下りない時間帯なんだが、今回は特別処置だそうだ」

目を開ければ、目の前にいたのは老齢な見た目の警察官がおり、その隣には津野田が執拗に頭を掻いていた。寝不足なのか目元に隈

がくつきりと痕を残している。

「おはようございます。津野田警部？」

「何で疑問符つけたんだよ。ほれチーク——じゃねえな、ほおざわ ゆずき朴澤悠月。ついてこい」

素直に従って、悠月は突然の面会者への憶測を巡らせた。

「うつわー、みつくん。おひさーッ」

まさかとは思ったが、本当にそのまさかとは。悠月は驚愕と喜びが緋い交ぜになった感情に笑みを浮かべた。ガラス越しに微笑する少年の姿は昔とあまり変化がないように見えた。身長が幾分か伸びて、いるだけだ。変化に乏しかったからこそ、一目で彼が美鶴だと分かった。

「……もしかして、チークか？」

「そうだよ。ああ、でも本名はほおざわ ゆずき朴澤悠月って名前だからね」

「お前……変わり過ぎじゃね？ 別人なんだけど。昔はもっとう、風船みたいだったのに」

「風船って……失礼っしょ。まあ、確かに肥満体型だったのは否定しないけど。そういうみつくんはー、どんまい」

「おいッ。ドンマイって何だよ。仕方ないだろ。どうしようもないんだよ、この童顔は」

肩を落とす美鶴の姿がか弱な小動物のように見えてしまい、母性

本能をくすぐられる。その隣に並ぶ容姿端麗の少女に視線をズラし、悠月は確信した。彼女が美鶴の幼馴染であり、恋人なのだろう。それにしても――

「あんだ、めっちゃ美人じゃん。スタイルいいし、いいなあーうちもそれぐらい欲しいなあー」

ジーっと、目の前の少女を凝視する。特に胸の辺りを……。

「朴澤さんだっけ？ あ、私にかしたかな？」

「由佳里、こいつの目を見る。加齢臭を漂わせるオッサンと同じ眼つきをしてるからな。おい、チーク。そんなやましい目で由佳里を見んな」

「いいじゃん、別に。見て減るもんじゃあるまいし。もしかして、みつくんは由佳里さんのモノを独占したいわけ？ いやー、男の子だねーやっぱ」

「いやいやいや、その流れはおかしいだろッ」

「そうなの？ 美鶴。そうしたいなら私だって別に」

「由佳里も乗ってくんなッ」

美鶴は耳まで真っ赤にした顔を余所に向けた。そんな美鶴の挙動に笑い声上がる。

「にしてもな」美鶴。俺の苦労も考えてくれよな。おめえのことを上の連中に言えてねえから、苦労して朴澤との面会の立会い人になつてやつたんだからな」

壁の花と化していた津野田がうなじに手を当て、首を左右に傾げた。ポキ、ポキと小気味のいい音が鳴る。

「すみません、津野田さん。無理を言いました」

「いや、いいんだ。俺はおめえの手助け出来て、嬉しかったとも言えいいか。なんつーかな……」

「不純同性愛はいかんと思います」

「さっきの会話からどう解釈したらそうなったんだよ」

悠月の発言に異を唱える美鶴。津野田は思案顔になり「そうなのか、俺は」とブツブツ呟いている。と、津野田が思い出したように顔を上げた。

「そうだった。監獄法施行規則で面会時間は三〇分までと決まっていた。さっさと話を終えてくれ。じゃなきゃ、他の職員が来ちゃう」

悠月は津野田に急かされるように、背中を押されるようにして口を開いた。今までの思いに踏ん切りをつける言葉を頭に描いて、一瞬ちくりと痛んだ胸を気にせず、言った。

「みつくん。絶対に彼女を、由佳里さんを幸せにしてあげるんだよ。うちから見ても、ベストカップルなんだから」

視線の先で美鶴が頷いて、由佳里の肩を抱き寄せた。焼きもちを焼きたくなるほどだ。寂しくあったが、嬉しくも感じた。未練がましい行為はしないでいよう。それに自分にも新しい出会いがあった。浅沼の姿を思い浮かべ、したり顔になる悠月に不思議そうな顔を浮かべる一同だった。

「ああゝあ。これでチークもいなくなつて、いよいよ果汁分が枯渇してしまつたの」

「俺を見ながらそんなことを言われても」

美麗な金髪を生やした少年は机に腰掛け、目の前の書類の高峰に埋まっている老人を眺めた。老人は短軀であり、ずんぐりとした体型をしていた。特徴的なその顔はあえて言わせてもらえば、ヒキガエルに近似していた。両生綱無尾目に属するヒキガエル科の蛙だ。

「どうせ、あんたのことだ。チークをいい加減、呪縛から解放してやろうっていう魂胆だったんだろ？　じゃなきゃ、エロでスケベで鬼畜なあんたがチークを手放す訳がない」

「おい、ウルのほかでワシの人物像はどんなことになってるじゃない？　——まあ、日本のボレアース支部は現在、あつて無いようなもんじゃからの。別に組織に留まっている必要はないじやろうしな」  
「エロいくせして、そういう紳士な態度をとってると、キモいですよ」

「さっきから罵詈雑言にしか聞こえないぞい」

老人は弾かれるように書類の山から飛び出すと、床の上を転がって停止した。

「つぶ、ワシの華麗なジャンプをみたか」

「単に、書類に埋もれてやっとこ這い出したようにしか見えないですけど」

少年は失笑して、老人に背を向けて部屋の唯一の扉に向かって歩き出した。

「——浪瀬」

「今の俺は創世者の涙、ウルですよ」

ひらひらと手を振って扉の向こうに姿を消すウルの背中、哀愁を背負っていた。気の知れた仲間の巣立ちなのだ。悲しみは当然であらう。

老人はヒキガエルのような顔についたギョ口目を細め、「まだまだ青いな、ウルも」と漏らした。老人は一人になった部屋で、山崩れを起こした書類の山を見て溜息をついた。

その老人の両足は金属光沢を放っていた。痛々しいと感じさせるそれを意のままに動かし、老人は散乱した書類を拾い集めだした。

## 砕け散った心の行き先（前書き）

いつきにドバーと投稿しようとしたら、目がシバシバしました。はい。諦めて、少しずつの投稿です。

とりあえず、次話は「多少めんどくさいことになりそうです。

文字がいつぱい……はあたりまえで、会話というか、説明が沢山になりそう。

あれです。あれ。災厄のことについての話です。

まあ、それは置いていて。本文をどうぞ。

ここまで永かったなーと思う今日。ここまで読んでくれた人に、とりあえず感謝。

## 砕け散った心の行き先

留置所から出ると早朝の冷気が肌を突き刺し、美鶴は首を竦めた。隣では由佳里が急いで手袋を嵌めていた。美鶴は防寒具が欲しいなと思いながら、白い息を吐いてそれを目で追った。

正直に言ってしまうえば、驚きだった。チークがあればどこまでに瘦せていた、ということではなく、罵倒されなかったことにだ。かつて、美鶴がボレアースに叛旗を翻す形で施設を破壊し尽した。その過程で多くの命を奪った。そのことを怨んでいまいかと、不安であった。だが、チークの態度はそんなことを微塵も感じさせないものだった。

肩透かしを喰らった美鶴は、不謹慎にも安堵していた。自分の居場所を否定されなくて良かったと思っていた。

「良かったね、美鶴。悠月さん、全然怒った様子じゃなかったし、いい人そうだったじゃん。結構美人だったしね。ふぁーねむ、それじゃあ美鶴。今日は学校もあるし、早く帰ろっか」

由佳里が伸ばした右手を取ろうとした美鶴を制して、男の声が背後から響いた。

「君が美鶴君か。……まだまだ、若いな」

脊髄反射で振り返ってみれば、はっとするほどの美青年がそこにいた。身につけた制服の襟に留まったピンバッチが警察関係者であることを美鶴に知らせた。

「もしかして、浅沼さんですか？」

「ああ、そうだ。こうして人間の身体で逢うのは今回が初めてだっ

たな」

浅沼は美鶴を頭の先からつま先まで見ると、「若い」と再び声を発した。

「そりゃ、若いですよ。まだ俺は高校生ですから」

「そうだったな。いや、俺の中ではアギトという人間はもっと、大人の容姿かと勝手に想像してたんだ」

突然アギトの名が浅沼の口から飛び出したことに、美鶴と由佳里は身を寄せ合い硬くした。美鶴は由佳里と触れ合っているにも関わらず、身体の芯が冷えるのを感じた。

「そう警戒しないでくれ。別に俺は君を逮捕しようなど考えていない。もし考えていたとしても、現状では無理な話だ。どつかのヘビースモーカーが匿ってくれたおかげで、アギトが施設を破壊し大勢の仲間を手にかけたという事実はあるけど、証拠がないんだ」

「そういうことだ。良かったなあ〜美鶴」

別の方向から胴間声が聞こえた。こちらは見ずとも誰なのか分かった。

「津野田さんは知ってたんだよな。だったら、俺に事情を説明してくれたってよかったじゃん」

「悪いいな、刑事にも守秘義務があんだよ。それと、おめえに朗報だ。朴澤の方も、組合連合が保護することになってる。安心したか？ おっと、これも秘密だったな」

くつくつ、と不敵に笑う津野田に美鶴は嘆息した。浅沼もやれやれと首を振ると、最後に一つと言って口を開いた。

「――君は今、幸せか？」

「はい。俺は自分の罪を忘れたつもりはないですけど、それでも今の日常は本当に幸福な日々だと感じてます」

ここで躊躇する様子を見せるのは駄目だと直感が伝え、美鶴は即答していた。実際、今の日常は幸福なものだと断言出来るものだった。

「そうか。手間をかけさせた、悪かったな。ああ、それと美鶴君」「なんですか？」

「君の目は死んじやいないな。ちゃんと明日を見れる目をしてる。人の死を知っていたとしても、君は光を見ることが出来ている」

そう言う満足そうに頷いて、浅沼は踵を返した。道の角を折れ、隘路へとその姿が消えると津野田が美鶴に近づいてきた。相変わらず、その口に煙草を啜っていた。

「気分を悪くしたか、美鶴？」

「いいえ、別に不快感はないですよ」

「そうか。それならいいんだが。……あいつは今まで、自分を理解してくれる存在を欲していたんだ」

あいつというのは浅沼のことだろう。美鶴は津野田が何を言おうとしているのか、首を傾げつつ待った。

「昔な、あいつが俺と同じ捜査課にいた頃の話だ。強盗事件が多発した時期があつてな、ああとあれだ。大崩壊後の混乱で生活必需品が不足していた頃だが、その事件の犯人を浅沼は追ってたんだ。……んで、あいつは丁度、犯行現場に遭遇しちゃってたな。やむなく、

その場で撃つちまったんだ。んで、別の部署に左遷されてからも色々後悔しちまってな、自分みたいな過去をもつ人間を求めてたんだ」

一息つくように津野田が吐き出した白煙は、棚引いて消えていった。

「守秘義務があるんじゃないんですか」

「そうだ。だが、あいつの過去を知つといた方が、理解してもらいやすいだろ。アギトさん？」

最初から浅沼の理解者になつてもらいたいという魂胆だった、とても意いたげな口調に美鶴は「解つたよ。解つたから」と二つ返事で答えた。

それから時間がないということで、津野田と別れた美鶴と由佳里は口々に「学校に行きたくない」と言つて道を急いだ。

その後ろ姿を見送つた津野田はその顔に暗い翳<sup>かげ</sup>りを見せた。口から煙草を抜くと、空を見上げてその蒼をぼかすように煙を吐いた。

事件には後味の悪いオチが続いた。

浅沼がやむなく射殺してしまったのは、一八歳の少年二人。被害者は父、母、兄妹の一家四人でその内、父親が腹部を刺され重傷、あとの三人には怪我はなかった。ここまでは浅沼の刑事責任を含めた強盗事件として片付けられた。ここまではだ。

被害者の四人は一旦、病院へと搬送されたが、搬送先の病院が騎士による襲撃を受けた。医師や患者を含め、一〇〇人近くが犠牲になった。現場はまさに死屍累々の惨状であった。その事件で唯一、

一命を取り留めたのは強盗事件の被害者だった兄妹の妹で、兄の方はホトケの身元が特定出来ない状態が多く搜索は難航し、結局見つかることはなかった。

ただ、その妹が茫然自失の状態で「兄さん、兄さん、何故、何故、何故」と呟いていたのが印象的だったのを津野田は覚えている。

「兄さん、兄さん、何故、何故、何故。——溜衣兄さん、どうしてですか」

## 災厄のラゲナロク（前書き）

読みづらいと思います。

これを書くのに、目がシバシバです。いや、パサパサ？  
まあ、どうぞ。

# 災厄のラゲナロク

由佳里のマンションの前にまで辿り着いた美鶴は、懷から取り出した茶封筒を由佳里に手渡した。どちらかと言えば押し付けた。

「俺のことをわすれないでくれ。こいつは形見として渡しておく」

口早に告げると、急いで踵を返そうとした。そんな美鶴のパーカ  
ーのフードを由佳里が捕まえた。一瞬のことで美鶴の首が絞まり、  
息が詰まった。

「ッ！！」

しぬッ！！  
マジでしぬッ！！

そんな美鶴の様子を全く気にせず、由佳里は手元の封筒を裏返し

「欠席届け！？もしかして、学校をサボるの？」

由佳里がパーカーから手を離し、美鶴は解放される。空咳きを続けた美鶴は落ち着きを取り戻した。

「サボるんじゃない。それは戦略的欠席だ」

「戦略なんて微塵もないよね。単に休みたいだけでしょ。てか、準備いいね？」

由佳里が呆れた様子でこめかみに手を当てる。美鶴は自分がすごく悪いことをしたかのような居たたまれなさを感じた。いや、実際いけないことだとは思う。そろそろ単位が足りなくなりそうな危機

感を感じてはいる。

「何はともあれ、俺はこれから先生のところに用事があるから。じゃあな」

「あッ、ちよつと、美鶴！？ 逃げないでよおッ」

由佳里の声が追い縋ってきても動じず、美鶴は誠のいる柴川重工の研究所へと走った。その足取りは軽くはあったが、心は重く沈んでいた。これから誠に聞くことは、明るい話ではないだろうからだ。美鶴は駅へと向かい、電車を乗り継いで工業区画へと急いだ。スマートフォンで時刻を確認すれば午前七時。電車は通勤ラッシュと鉢合わせ大混雑、美鶴は雑踏の中に紛れこみ、誠のいる施設までが遠いことを嘆いた。

約三〇分後、美鶴は騎士機器研究棟の地下三階に設けられた特別研究・開発棟にいた。今ではすっかり通い慣れたその施設に入ると視界に飛び込んできたのは恰幅のいいメタボ。至福のひとときを過ごしている様子で右手にマグカップを持っていた。どうせ飲めやしないだろうに。

「なあ、先生。そのアンドロイドって消化機能が付いてんのか？」

「いいや、付いてないよ。だからはい」

誠メタボバージョンが差し出してきたカップを覗いて、美鶴は表情を歪めた。口元を押さえて、首を全力で振る。

「ブラック無理だから。そんな毒々しい黒を俺に見せんなッ」

「まだ甘党なのか、美鶴君は」

誠メタボバージョンが大福のような頬を吊り上げて笑った。腹を揺する度に波打つ頬がリアルだった。

「この前の話の続きを聞きに来たぞ。組織がボレアースの存在を認めていた理由について、先生は知ってるんだよね」

美鶴がここに来た理由はまさにそれだった。自分が知らない所で、何かが起きていたという事実に不安を抱えていた。

「美鶴君は、人が空想できるすべての出来事は起こりうる現実である、という言葉を知ってるかい？ この言葉を言った学者はー、とある物理学者なんだけど。まさかこんなことまで人間が想像するとは思ってもよらなかっただろうね。——美鶴君、君に僕が知っている限りの事は教えてあげるよ」

そう言つてやおらと立ち上がった誠は美鶴を手招いて奥へと進んでいく。案内されたのはいつもの診察室で、美鶴は誠が用意した丸椅子に腰掛けた。

誠は向かい合うように座り、話の口火を切った。

「まずは順を追つて、ボレアースという組織の始まりから話そう。そもそも、ボレアースは大崩壊後に設立されたものじゃない。それ以前から創られていたんだ。設立当初の目的は災厄に対する矛と盾になることだったんだ」

「最初っから、災厄を信じてたのか。いや、災厄が存在したから組織された？」

「そうだよ。災厄、人々は多くが覚えていないだろうけど、かつて米国と欧州国家が来たるべき戦争への抑止力として進めた計画、そ

の産物が災厄と呼ばれるものだよ。美鶴君も話には聞いたよ、プロジェクト・ラグナロクという言葉を」

「聞いたことはある。内容まではよく覚えてないけど、確か機械を戦争の抑止力にしようってもんじゃなかったか？」

「そうだよ。それが計画だった。当時、異議を唱える国は多かったけど、米国が主体となっていたために思い切った対策を講じることが出来なかったんだ。その頃にドイツの研究者であったカースベルト卿が計画の阻止のために創設したのがボレアースの始まりだったんだ。カースベルト・ブリュッセル、恥ずかしながら僕が双璧と呼ばれた人物だ。彼は九〇%到達のための土台を作った人物でもある。僕は彼の理論を基に提唱したんだけどね」

「肝心の災厄はそれからどうなったんだよ」

誠は目をしばたかせ、話が脱線しかけていたことに気付くと、額を押さえた。

「そうだった。それでプロジェクト・ラグナロクは、いつ起きるかも知れない戦争に備える力を抑止力としよう、という思想から始まったんだ」

「戦争のための戦力を戦争の抑止力にするのは、どこか矛盾してないか？」

「そうだね。だけど計画推奨国の間ではこの考えは支持されたんだ。まあ、彼らも莫迦だったわけじゃない。戦力の所持は戦争を根絶させることにはならないことは解り切ってた。だからこそ、彼らは考えた。そして結論を出したんだ。——人間が干渉出来ない抑止力を生むことを。」

そして、定まった計画が——限りなく人間に近づけたアンドロイドを造り、それを人間の社会に紛れ込ませて観察者の役目を負わせようとするものだったんだ。

人間の社会に紛れ、与えられた命令に従うのではなく、人類にと

つて危機と判断した場合に戦闘行為を行い、無差別な殺しをしない存在をだよ」

「そんな都合のいい機械が造れるわけがない」

「いや、造れるよ。今の世の中を見れば分かんと思うけど、既にこの世には人間らしい機械が溢れてる」

美鶴はその言葉にはっとして、目の前のアンドロイドを凝視した。誠が同調しているソレは食い入るように観察したとしても、それが機械であることが嘘であるかのように精巧な作りをしている。まさに人間らしい機械。いや、人間そのものにしか見えない。

「——といっても、人間の脳の役割を果たすパーツの製造が難航したみたいだけどね。その失敗作とでも言うべきが、今の擬似脳だよ。現在のアンドロイドが生まれた経歴を調べれば、この計画へと辿り着く。大崩壊の後、一年以内にアンドロイド技術が発達し、隔離壁が建造されたのも、既に大まかな基盤があったからなんだ。」

さて、話を少し戻すけど、カースベルト卿は、機械による抑制は今後の世界の発展をも抑止するとして、ボレアースを用いて抵抗活動を行った。そして、その頃だよ。プレデターによる破壊行動、大崩壊が起きたのは。大崩壊の中でカースベルト卿は命を落とし、これを契機にボレアースはその性質を大きく変えることになった」

誠はここで息をつき、間を置いた。美鶴は黙ってその大福顔を正面から見据えた。

「大崩壊。世間一般にはプレデターの一斉暴走として知られているけど、実際は違うとボレアースは考えた。プレデター自体もプロジエクトの産物だったんだ。自律という面だね。つまりは、機械が抑止力となりうるか、人間の恐怖の対象たるものか、それを示すために故意に大崩壊は引き起こされたと考えられたんだよ。だからこそ、

ボレアースは世界のために騎士という新たな力を得て、活動を本格化させたんだ」

「でも、その存在は世界から淘汰された。それに組織がやったことは、人に誇れるものじゃない」

「そうだね。ボレアースは世界にとって、悪の根源となった。実際、美鶴君は研究者の多くを手にかけるよう命を下されただろうけど、それはボレアースが自分達の力は災厄のためと決め、他の企業に利用されることを好しとしなかったからだ。それに、なにも彼らが悪事に手を染めたせいでそうなった訳じゃない。彼らは強過ぎたんだよ、人々にとって脅威でしかなかったんだ。美鶴君を含め、ボレアースの執行者は皆、力を持ちすぎてたんだよ。過ぎた力は、脅威でしかなく、恐怖心を生んだんだ」

「そんなの詭弁だ」

美鶴は吐き捨てるようにして言った。誠が何と言おうとも、ボレアースがしたことは変えられない事実だ。血塗れた道を歩んできたのが、ボレアースなのだ。

「かもね。けど、その存在が定かでない脅威と見える脅威じゃ、存在が知れた方が恐れられるだろ？ 災厄は事実、その存在が確認出来てはいない。証拠があっても、実際に見た人間はいないんだ」

「結局、災厄つてのは何なんだよ」

「災厄つてのはね。組織の研究者達の間では『終焉の大蛇』と呼ばれていた。かつて世界を震撼させていた三大組織の一つだよ」

「それじゃあ、存在が確認されてんじゃ——」

「噂の一人歩きって奴だよ。ヨルムガンドは実際には存在していなかった組織だ。便宜上、災厄はそう呼ばれた」

ボレアース  
『創世の蛇』 ニーズヘッグ  
嘲笑する虐殺者』 ヨルムガンド  
『終焉の大蛇』

確かにこの組織が世界を恐怖させたのは事実だ。しかし、そうだとヨルムガンドの拠点が発見されたという話はいづれ聞いた事がない。――いや待てよ。もしヨルムガンドが災厄の正体なら、ニーズヘッグも何らかの形で関係してはいないか？ ボレアースが災厄に対する矛と盾なんだぞ。

「先生はニーズヘッグについても何か知ってるか？　もしかして、邪龍も災厄に関係してたりすんじゃないのか？」

「鋭いね、美鶴君。僕たちもそれを考えていた。ラグナロクとは北欧神話の神々と巨人族との間の最終戦争の名だ。その戦いでニーズヘッグは生き残るんだよ。だから、もしかすれば彼らもまた、災厄という存在のために生まれたのかもしれないね。まあ、僕は彼らに良い感情を抱かないけどね。ボレアースの立場を加速度的に悪化させる触媒となったのが彼らだ。化学兵器のオンパレードだった彼らのおかげで、ボレアースも同様に極悪とされたからね」

誠は腕の時計を覗き込み、「そろそろ時間だね」と言った。  
はて、何のことだ？　美鶴は釈然としない顔で首を捻った。そんな美鶴の身体が急に宙に浮いた。いつの間にか居たのか、ペロツキーさんに抱きかかえられていた。

「由佳里から連絡があったんだよね。美鶴君をサボらせないようにってね。よっし、ペロツキー。美鶴君を無事、学校にまで送り届けてくれ」

「了解でありますッ」

ペロツキーは猛然と研究施設を美鶴を抱えたまま走りぬけ、自家

用の軽自動車に乗り込み、西徳大学付属高等学校へと飛ばした。

あれは一言に地獄だった。

小埜崎の運転並か、それ以上だった。美鶴にとってのトラウマが増えた記念日となった。

——あの日から、二週間近く経過した。

どうやら寝ていたらしい。目が覚めれば目の前に広がるのは黒板とその前に立つ担任女子教師だった。

あれから冬休みを経て、年も明けた。もう少し休みが長くてもいい気がする。

美鶴は大きく欠伸をして、背筋を伸ばした。深く息を吐き出せば、クラス全体が色めきだっている様子なのに気が付いた。今日からまた学校だったが、それほど嬉しいことなのだろうか。サボり癖が身に付きそうな美鶴は到底理解出来ないとはいたげに溜息を漏らした。早く帰りたいな。

「皆さん、明けましておめでとうございます。早速ですが、皆さんに転校生の紹介があります」

途端にクラス中が沸いた。担任も一瞬気圧されたように戸惑いの表情を浮かべた。

「ぜってー美人だろ、女子だよ、女子ッ」

「いいな、ソレ。俺も女子が来てほしいぞ」

「男子は黙っててよ。せんせー、早く紹介お願いします」

お気楽な男子陣が女子の叱責で沈黙する中、教室の扉が開いた。美鶴は思わず立ち上がって啞然としてしまった。言葉が咽喉に詰まり、パクパクと開閉するだけだった。

「朴澤悠月です。残り一年ほどの短い時間ですが、よろしく願います」

ペコリと一礼する悠月にクラスの男子は雄叫びを上げた。

「『『『『『キタ——ッ！』『』『』『×4

だがそれも女子の鋭い視線で沈静化される。

「なんで、お前が転校？ は？ 転校って」

クラス中の視線が一身に集まるが気にしてられない。どういふつもりなのかはつきりさせなかった。

悠月は満面の笑みで美鶴に応じ、ついでに手を振った。クラスの男子が獲物を見つけたハイエナのように目を光らせる。美鶴の背筋を脂汗がだらりと流れた。

「ヤッホーみつくん。久しぶりー、ほらほら見てよ」

悠月が自身の首筋を指さした。その場所には、金属製の首輪が…なかった。傷一つ無い真っ白な肌だった。

「女性の玉の肌に傷がつかないようにしてもらえたんだー。どう？すごいっしょ」

お前じゃなく、手術した人がな。

「おい、三ノ瀬ッ。悠月さんと知り合いなのかよ」  
どさくさに名前を呼ぶクラスの男子A。

「羽城さんがいながら、お前って奴は。けしからん」  
鼻息が荒いクラスの男子B。

「——みつくんもいいけど、うちには既に想い人がいるんです」

まさかの爆弾発言にクラスの男子が沈黙、撃沈した。対照的に女子が黄色い悲鳴を上げて悠月の周りに群がる。

「どんな人？ カッコイイの？」  
少しオサレなクラスの女子Z。

「かつこいい人だね。例えるなら、うんとーそうだね。みつくんの  
一〇倍くらいイケメンかな」

「……………それじゃあ、負けたな」

「三ノ瀬の一〇倍じゃ、さすがの俺達でも勝てねえな」

「おい、ちょっと待て」

「何だよ美鶴。もしかしてお前、俺達よりもイケメンだっていい  
いのかよ」

危うく「お前らよりは可愛いぞ」と漏らしそうになり泣きそうになった。最近毒されてる気がする。

そんな美鶴の心境を察してか、教室の扉が再びスライドされた。それもかなりの勢いで。バンッ、と大音響が響く。廊下に立っていたのは右手に特大ハリセンを握りしめた少女。黒板の前にいた悠月を見て何を理解したか、大声を出した。

「先輩はハーレムを作りたいんですかあ!？」  
「ええッ!？」

美鶴は驚くしかなかった。クラスメイトも呆然とした表情で廊下に立つ後輩に注目した。

瑠璃は「失礼しますッ」と言つて、臆面もなく入室してくると真っ直ぐ美鶴の方へと向かつてくる。悠月の横を通り過ぎる時にその表情が愕然としたものに変わったが、すぐさま取り繕うと悠月に会釈した。悠月の方は笑みを浮かべて返した。

「どうしたんだよ、瑠璃？」

「先輩……覚悟ッ!!」

何も構えていない無防備な美鶴のこめかみを瑠璃の得物『ハリセッ』が強打した。ゴキッ、という気味の悪い音が鳴り、美鶴の頭部があらぬ方向へ曲がりかけた。

「ッ!! いつてえなッ。何だよッ、俺が何かしたのかッ?！」

「何となくです。転校生が先輩のクラスにくると聞いたんで、その人が女性なら叩こうと決めてただけです」

「最悪だな。人としてどうかと思う」

「可愛い正義なんですよ?」

「だ・ま・れッ、このゴボウッ!！」

一瞬、教室が静まり返った。その瞬間、美鶴は地雷を踏んだのに気付いた。

「ゴ……ゴボウ、ゴボウですか。ボン、キュッ、ボンならともかく、ゴボウですか、そうですか。ゴボウなんて、シュッ……。シュッ……じゃないですかッ!! 先輩はどこに目を付けてるんですか!？」

そんな瑠璃の剣幕に対して、

「え？ お前のどこに凹凸が？」と漏らしそうになり、慌てて美鶴は口を塞いだ。

「てか、ホームルームはどうしたんだよ。サボってていいのか？」  
「郷田先生に『萌え萌えキュン』ってしたら即OKが出ました」

お前の無い色気に魅了される人間がいて良かったな。

ちなみに郷田という名の教師は、かの体育系国語教師その人だ。

「みつくん、その子は誰？ 知り合いなの？」

悠月が近づいてくると、首を傾げた。

「ああ、こいつは相良瑠璃さがら るじっていう名前の後輩」

「朴澤悠月ほおさわ ゆずきだよ。よろしくね、るりっち」

「るりっちですか。いいですね！！」

和気藹々とし始めたクラスを眺め、美鶴は今日もまた平和であることに感謝した。

狂い始めた歯車は全てを砕いて赤く染まる（前書き）

とりあえず、今話で二章終了ってことで。

あ、でも、extra話を追加するかもです。

とりあえず、1ヶ月くらい充電期間をもらうかもです。次に書く内容は決まってるんで、はい。そのうちにでも、アップ再開します。

## 狂い始めた齒車は全てを砕いて赤く染まる

外部居住区は閑散としていた。先月のプレデター殲滅作戦が無事に完了した証なのだろうが、不気味さを覚えさせる。物音一つない世界で矮躯の少女は一人、コンクリ壁に押しつぶされた車両の上に座り込んでいた。何もすることがないというより、何かが起きるのを待っているかのようであった。

少女は眠たげに欠伸をすると、曇りがちの空を見上げた。しばらくそうしていると、少女の視線は空に黒点を捉えた。まるで遊泳するように緩慢な動作で影は次第に迫り、その姿を克明にする。まるで壮麗な龍を模った騎士は全身を純白に染めていた。唯一、両腕の先に手の変わりに存在する帯状の部位だけが赤々と揺らめいていた。少女の目の前に降り立った機影が纏った風が、少女の薄い茶髪の髪をなびかせた。少女はうなじを掻き上げてその能面の表情に呆れの感情を掃いた。

「相良少年、まさかカグツチでここまで来たのかしら？　もしそうなら、どれほど人目を引いたと思う？」

「ごめんなさい、リーダー。ボクは遅れちゃ駄目だと思って」「遅れるも何も、待ち合わせの時間は決めてなかったわね」

淡々と語る少女の態度に、まるで龍のような騎士は気圧されたように黙り込んだ。

「まあいいわ。私の方も時間を決めなかったのが悪いし、あら？　ちよつとごめんなさい」

そう断って、少女は懷からスマートフォンを取り出すと耳に当てた。そうして口を開いた少女は聞き慣れない異国の言語を流暢に発

し始めた。龍似の騎士は寡黙でその傍らに控えていた。会話を終えた少女が携帯をしまうと、騎士は少女に問いかけた。

「本当に始めるんですか？　それで何か変わるんですか」

少女は極々僅かに口端を吊り上げて、立ち上がった。

「変わるかもしれないし、変わらないかもしれない。悪化するかもしれないし、改善するかもしれない。それでも実行は確定したわ。世界各国の居住区において活動を開始するのよ」

「世界規模で……本当に」

「臆したのかしら？」

「そんなわけじゃないですか」

少し焦りの色を窺わせる少年の声に少女は苦笑を漏らした。

「誰だ！　お前らッ」

突然と怒声が廃墟に反響して消えた。少女の気怠そうな視線の先には三体の騎士がいた。モノクロの塗装が特徴的なそれらは、警察の所有する騎士であることは明白だった。少女とその傍らの騎士が不審な人間かを推し計った彼らは、やがて結論付けた様子で各々の兵装を展開した。が、彼らは少女らに一步でも近づくことは叶わなかった。

「ヘッ？」

素っ頓狂な声と共に彼ら騎士の胴体が斜めにズレ、地面に転がっ

た。切断された周囲は赤く変色して熱を発していた。

「警察の狗どもが、目障りだ」

嘲笑を続ける龍似の騎士は、まるでつい先ほどとは別人格だった。騎士は両腕の先で波打つ帯状の刃でひとしきり周囲の廃墟を刻むと冷静さを取り戻したように静かになった。

「落ち着いたかしら」

「ええ、すみません」

「感情の制御が不安定になってるわね。あとでドクターにでも診察をお願いしましょ」

年相応に見えないほど小さな少女は身軽そうに車両の上から飛び降りる。フワリと広がったスカートは蒼色のチェック柄をしていた。際どい部分まで露わになった太股にはシミ一つ無く、白い肌の上に牙を剥き出しにした蛇の図柄が浮かんでいた。

人々はそれを見て口々に言うことだろう。

『邪龍』そして『嘲笑する虐殺者』<sup>ニースヘッグ</sup>であると。

世界は未だ知らなかった。この世界の嘘を。——災厄の存在を。

## リア充抹消計画（前書き）

結構、駆け足で書いたんで内容は変かもしれないです。

言葉遣いやら、文章に変な部分があったら……目を瞑ってください。

## リア充抹消計画

『我々は今まで圧政に苦しめられてきた。リア充、それは存在するだけで我々の精神を削り、苦い後悔の味を思い出させる。我々は立ち上がり、その忌むべき存在を根絶しなければならないのだ。今こそ同志、立ち上がり、恋人同士でイチヤつく不埒な輩を根絶やしにしようぞ』

とある工業区画の廃業して放置され、壁は色が剥離したうらぶれた倉庫にいるのは三人の青年だった。二人を前に熱弁をふるっているのは落ち窪んだ三白眼をした長髪の男、名を谷山克己たにやま かつきといい、仲間内では『かつちゃん』の渾名で親しまれている。

克己の前に何故か正座させられて、とうとうと語られるしようもない話を聞かされている二人は呆れ顔を浮かべていた。短髪に肥満体型のどちらかと言えば、大関タイプの青年は眠たそうに欠伸を漏らした。現在時刻は午前五時。冬休みであるにもかかわらず、こんな早朝に呼び出されて傍迷惑だと苦情を呟く。

「山田ッ、お前はいい歳して彼女の一人もいなくていいのか?!」

克己が恰幅のいい青年、山田を指差した。山田は身体を仰け反らせ、「よくはないけどお、一人で十分じゃね?」と言った。

「そんな甘い考えだからこれ二〇年にもなる人生において、出会いが一つもなかったんだ」

「というよりも、ぼくの見た目に問題ありかと――」

「そして、成治せいじッ。お前もどうなんだ。この世界の不条理に反感を覚えないのか?!」

「おれは、かつちゃんのその口調に反感を覚えます」

成治と呼ばれた中肉中背の極々普通の一般ピープルという立場にいそうな青年は拳手と共に口答えした。

「右に同じッ」

ここぞとばかりに、山田も拳手。克己は齒軋りを続けたあと、溜息をついた。

「分かった。分かったから。これでいいんだろ？ いいじゃん別に、さっきの方が雰囲気出てただろ」

全く理解出来ない者たちには肩が凝る、とでも言いたげに自身の肩を解す克己。それに対して、山田と成治はここに呼び出された理由を訊ねた。こんな早朝から何用なのかと。

「んなの決まってるじゃん。今日はクリスマス・イブツ。恋人という桃色フィーバー能天気野郎たちがデートする計画を立てている。それを妨害するための準備に呼んだんだよ」

ふははははははははははは、と盛大に笑う克己に多少引き気味の山田と成治は互いに顔を見合わせた。この時の克己は何があっても計画を実行し、決まってロクでもないことをしでかすのだ。腐れ縁の二人にとっていい迷惑なのだが、不思議と憎めないのが克己の人間性でもあった。

「それでどうするの？ ばくらに手伝わせるって何を？」

山田に不敵な笑みを送った克己は身を翻すと、背後に安置されていた物体にかけられたシートを一思いに取り払った。三人の目の前

に露わにされたのは一体のアンドロイドであつた。

「どうしたんだよ、かつちゃん。これ私有じゃないよな」

「ふはははっはは、大学から拝借した」

「もう既にかつちゃんが罪を犯していたッ!?」

額に手を当てて嘆息する二人を余所に、克己は一人ほくそ笑むのだった。

こうして世にも恐ろしき『リア充抹消計画』がスタートした。

「美鶴、ちよつと待っててね」

由佳里の声が奥から響いて聞こえる。美鶴は玄関で壁にもたれて、由佳里を待った。

美鶴は現在、由佳里の住むマンションに来ていた。所用は明日のクリスマス会への買出しらしい。参加者は小埜崎・瑠璃ペアと文蔵と美鶴・由佳里ペアで、場所は広いところということで由佳里の部屋が宛がわれることになっている。

記憶する限り、こんなことをするのは初めてではないだろうか。今までなら、オンボロアパートで三人して卓袱台を囲っていた気がする。そして、美鶴の心をドキドキさせていることがそれ以外にもあった。その最大の理由は、今日が恋人同士になった由佳里と過ごす初めてのクリスマス・イブとなることだ。買出しという理由ではあるが、二人で一緒に行動する「デート」という思考しか美鶴には出来ない。

「おまたせ。それじゃ、いこっか」

由佳里が姿を現した。アーミーグリーンのモッズコートを羽織り、スリムジーンズとモノクロボーダーという出で立ちだった。カジユアルなスタイルのそれらに身を包んだ由佳里は不思議そうに首を捻った。そこで美鶴は自分が由佳里を凝視していたことに気付き、慌てて視線を背けた。

「あ、照れたね。別に視線を逸らさなくたっていいのに」

「いや、……………ああもう、言い訳はしない。ほら行くぞ由佳里。もう五時だ」

「まだ五時だよ。それじゃあゆつくり行きますか。ショッピングモールに行つて、美味しいもの沢山食べて、それから」

「あれ？ 買出しなんだよな」

「そうだけどさ。せつかく二人つきりでショッピングに出かけるんだからさ。デートでもいいじゃん」

この瞬間、美鶴の心の中で歓喜が湧いたことを美鶴以外知らない。

「駅前にすごいイルミネーションがあるんだよ」

由佳里が首に巻いたマフラーを揺らして、美鶴を振り返った。

「由佳里は元気だな。俺は疲れた」

午後七過ぎ。買い物を持ちなく終わらせた二人はお互いに一つずつ戦利品を手にはら提げ、ショッピングモールから最寄の駅前の方角へと向かっていた。どうやら毎年そこでイルミネーションをやっているらしいのだ。エリア2内ではかなり有名であるらしく、冬の

風物詩として知られているらしい。と、美鶴は由佳里から聞かされた。

既に周囲にはカップルらしきペアが散見できている。周囲から見れば、自分達も同じように見えるのだろつかと美鶴は疑問に思った。そうであることを願う。しかし、今のところ、美鶴の願望は儚く散っていた。

「にしても、さっきのお店の店員さんは何て言っただけ？」

「——思い出さなくていい」

「『ご姉弟きょうだいで仲がいいですね』だっけ。まさか美鶴があそこまで歳相応に見られないとは思わなかったなあ」

と言いながら、堪えきれなそうに失笑を漏らす由佳里。美鶴は対照的にうんざりした表情で苦情を呟いた。

一方、そのころ三馬鹿トリオの一人、克己はアンドロイドに同調し、カップルが最も集まるという駅前のイルミネーション付近を闊歩していた。その出で立ちは冬であるにも関わらず、半そでのポロシャツにハーフパンツ。防寒対策というものを度外視した服装であった。

「居よるぞ、いよる。恋人同士でイチャつくバカどもが。くつくつく、これから自分たちの身に何が起こるかも知らず、暢気なもんだ」

『やべーかつちゃん完全、悪役だ』と山田。

『てか疑問なんだけどさ。周りの人が小さくない？ 頭頂部しか映

像に映らんけど』と成治。

「そつだな。まるで人がゴミのようだなあッ」

『『ヤバイだろ、それ』』

克己が愉悦に浸るように高笑いするその横を多くの人間が、訝しげな視線を送りつつ通り過ぎていく。克己が同調するアンドロイドが2メートルを超す巨軀なのだから目立って仕方が無い。それを意に返さず、克己はとうとう色鮮やかな電飾で満たされた空間へと足を踏み入れた。植木から建造物まで、余すところ無く装飾された世界。一言に幻想的であった。――が、

「たつくん。はい、あーん」「すきだよ――」「わたしだって」

「うふふふ、きゃははは」

幻想的な世界を満たす桃色。怖気を催すほどの恋人たちの世界が克己の眼前に突如として現れた。ここに来て、克己は計画を取りやめ、今すぐ家に帰りたくなった。

「な、何なんだあッ、この空間は」

『『ヤバイ、かつちゃんが気圧されてる。場に吞まれてるよ』』

通信越しで山田と成治が小馬鹿にしたように笑うのが分かった。むっとした克己は己を奮い立たせ、勇んで一步を踏み出した。

『てか、何をするんだよ、かつちゃん。リア充抹消って物騒な名前だけど、実際に何するつもり？』

『おれらに周辺に警察の騎士がいないか探索させてるのはいいけど

さ。かつちゃんの方はどうすんだよ」

山田と成治からの通信が入り、克己は「恋人たちがイチャつけな  
いよう、この場を占拠するのだあッ」と言ってせせら笑った。それ  
を遠巻きに見ていた人々は、携帯を取り出すと110番をプッシュ  
した。

そうとは知らず、克己は堂々とした態度で電飾に着飾られた特大  
ツリーの方角へと、突き進んでいく。周囲の人々は左右に分かれる  
と、道を開ける。そんな態度に何を勘違いしたか、克己は愉悦と共  
に威張り散らす。

「見る、皆が俺に恐怖しているぞッ」

『『単に避けられてるだけだろ』』

『かつちゃん。そろそろ警察が来そうじゃないかな。もう既に通報  
されててもいい気がするんだけど』

山田の心底心配そうな声に克己は喝を飛ばした。

「ここで臆しては、われわれの計画が成就しないぞッ」

『どっちかっていうと、かつちゃん一人の願望だよな』

山田の呟きには反応せず、克己は駅前の中央へと到達した。目の  
前には巨大なクリスマスツリーが電飾に飾られて煌びやかに光を纏  
っている。その周囲ではベンチに腰かける不特定多数のカップルの  
姿。いよいよここから本番だ。

一人、感慨に浸るその姿は日頃の会社残業に明け暮れた中年会社  
員のようだった。半袖短パンというのはおかしいが、身動きせず佇  
むそれがアンドロイドだと気付かず、傍に近づいてしまった少女が  
いた。

それを知らず、克己は大様に振り返ると、両腕を大きく横に拡げ

ようとした。

「きゃッ」

ふいに克己の全身を駆ける衝撃。視線を落とせばすぐ目の前に美しい少女がいた。容姿端麗の少女だった。どうやら振り返った時にぶつかってしまったらしい。少女の転ばず怪我もしていない様子にほっと安堵したもつかの間、克己の心で葛藤が生まれた。激しくうねるような感情の波。そうか……これが恋なのか。

「由佳理、何してんだよ。……その人は？」

少女の後を追って現れたのは目にかかる栗色の髪をした、少女パ  
ート？

右手に買い物袋を持ち、克己を見上げるようにしている。

「そ、そちらは妹さんですか？」

咄嗟に克己の口から飛び出したのはそんな言葉。

『「いや、弟だろ」』

克己の言葉に反対する山田と成治。

克己の目の前で少年は絶望した表情を見せた。一ヶ月地道に進めてきたRPGのSAVE DATAを消された瞬間の山田のような顔だった。あの時は悪かった、山田。

「お……」

「お？」

「俺は男だぁーッ」

「付け足すと、私の恋人だよね」  
と少女が言っではにかんだ。

『『「彼氏……だとお!?」』』

三馬鹿トリオの驚愕に染まりきった声がシンクロした。  
克己のガラスのハートは音も無く木っ端微塵となった。さらば初恋の人。

「ふっふっふっふ、思わぬところで敵と遭遇したものだなあッ。我が力を思い知れッ!!」

克己は酷く童顔の少年へと突進した。

美鶴はとりあえず見た目からして常人じゃないどころか、アンドロイドであるエラの張った男と由佳理の間に割って入った。一目見て、相手がズブの素人だと知れた。同調率が低いためか、相手の動きに多少のラグが発生しているのを見て取った。

だがそんなことは今の美鶴には関係がなかった。

「人の連れに手を出してんじゃねえッ。てか、それよりも俺を妹呼ばわりした罪を知れッ」

右手に持った買い物袋を地面に下ろすと、右の義腕に収納された兵装ソニックブレイドを急速展開し、肉迫したアンドロイドの太い腰回りに対して、薙ぎ払った。問答無用の先制攻撃。非情な一撃に

よって火花が美しく散り、夜に輝いて淡く消える。

「ええーッ!!」

男の驚愕のあまりの絶叫が響き、アンドロイドは仰向けに転がった。それを視認すると美鶴は由佳里の手を引いて、人込みの中へと急いだ。二人の姿は瞬く間に雑踏の中に紛れた。

「はあああああ……。悪い、何か厄介ごとに巻き込まれて」

現場から離れた美鶴は重く沈んでいた。ずうううん、と憂愁を背負い込み、ベンチに腰掛けていた。その隣には由佳理があり、目の前で幻想的な世界を創造するイルミネーションのアートやツリィを見て嬌声を上げている。触れ合っている肩が心地よく暖かった。

「すんごく綺麗だね。ほらそんな沈んだ顔してないでよ。別に私は落ち込んでないけど？ どっちかって言うと、妹呼ばわりされた美鶴のメンタルが心配だよ」

由佳理が美鶴の肩に頭を乗せるように身を預けてきた。その重さが心地よさを覚えさせた。美鶴はつい先ほどの一件について悩むのを止めて、由佳里に寄り添った。

「俺は言われ慣れてるから……」

美鶴は自分の隣をお気に入り場所であるかのようにする少女との日常を守り続けることを固く心に誓った。願わくば、自分が彼女

の居場所であり続けるように。  
クリスマス・イブの夜。一組の恋人は光の幻想世界で静かに想いを重ねた。

その頃、放置された形の克己アンドロイドバージョンは、その後に駆けつけた津野田警部によって、あえなく身柄を拘束された。後日、山田と成治も警察署に連行され、アンドロイドの許可証なしでの使用の罪に問われることとなった。その際、犯行動機について三人は口を揃えて「リア充抹消計画のためです」と言った。

津野田は思わず口を閉じるのを忘れ、「しょーもなッ」と言っただけで呆れたらしい。

次の日、クリスマスの夜。マンションの由佳里の一室にて。

「ネタは拳がつてるんですよッ」

「んじゃ、中トロで」

「新鮮なのが揚がつてるんですよ、昨日捕れたばかりの奴ですよ」

「それじゃあ大将、大トロも追加で」

「はいよッ。——へい、お待ちッ……じゃないですよッ!」

美鶴の目の前で瑠璃が瑠璃が茶封筒をテーブルに叩きつけた。その衝撃で中身が飛び出す。美鶴はそれを見て、度肝を抜かれた。飛び出したのは写真で、美鶴と由佳里の姿が写されている。盗撮かよ。

「肖像権で訴えるぞッ」

「今はそんなことはどうでもいいんですよ」

「いや、重要だろ。俺の人権をそんなふうにあしらうなよ」

美鶴は溜息をつく、自分に用意されたショートケーキを咀嚼する。お、美味しい。

「お二人はどこまでいったんですかあ?!」

結局はそれが気になるらしい。が、美鶴も由佳里もそれに応じず、ケーキの味を愉しんでいる。それでも瑠璃は諦めることを知らず、美鶴に詰め寄ってきていた。その度に美鶴はうまくはぐらかしていた。実際のところ、隠したくなるような、やましいところは一切ないのだが、この後輩に素直に話すべきか思いあぐねていたのだった。

「むう、なかなか手ごわい。ならば強行手段にでるしかないですね」

そう言うのが早いか、瑠璃はフォークで美鶴のショートケーキの上に鎮座していたイチゴを奪取した。そして、それを見せびらかすようにして「これを返して欲しければ、洗いざらい自供してください」と言う。自供も何も、罪は犯していない。

「どうぞ、お納めください」

美鶴は平伏した。

「……………（パクッ）」

瑠璃はジト目を美鶴に向けたまま、イチゴを口に頬張った。

## 瑠璃色の世界

「さて、そろそろクリスマス会も終盤戦へと突入してしまいました。誰に話してんだよ」美鶴先輩は童顔で弟キャラ……一事はどうなることかとホントに心配でした。「散々な言い様だな」いちいち合の手は要らないですよ。「何度も言うが、俺にも人権がある」へえーそうですか。まあ、話は続けます。「だから俺の人権を軽く扱うなよ。何だそのコイツめんどくせーみたいな態度はッ」さてここはうちの舞台です。うちの独壇場です、他者の介入は微塵も許さないです。たとえミジンコであってもですよ。「その例えはどうかと思う」というわけでもずは自己紹介をしてみたいと思います。「どいう訳だよ」まいねーむいず山田ウィリアム太郎。「初っ端から嘘つきやがった。性別ちげーし」はい。嘘です。本名は相良瑠璃です。美鶴先輩の後輩でラブリーな女子高生です。「ここぞとばかりに自己アピールすんなッ」この場を借りて言わせてもらいます、童顔は絶滅危惧種です。手厚く保護するべきです。「俺、手厚く保護されたくねえ」半泣きの先輩は放っておいて……何故うちがこうして話をしているかと言いますと、「あ、やっとその話になんの？」うちが大事に保存していた赤い宝石が何者かによって奪われたからに他なりません。「この大ホラ吹きッ！！ さっきから嘘のオンパレードじゃん。赤い宝石って何だよ、ショートケーキのイチゴだろっ」いいえ、宝石です。「……そうか。てか俺が見ていた限り、犯人も瑠璃、お前だ」またまたご冗談がお上手ですね先輩。「現実逃避すんなよ。俺はお前が俺の分まで苺を喰ったのをはつきりくつきり両目で見たからなッ」先輩の人でなしッ！！ ヒトデになって海中を漂っちゃってください。「って瑠璃押すなよッ。てか、何で俺はさっきから一方的にやられ役になってんだよ」それが先輩の役だからです。「サイテーだ。人としてどうかと思うぞ」先輩のしみつたれた哀愁はストックヤードに投げ捨てるとして、今日はいい天気

ですね。惚れ惚れとする晴天です。「転換がはえーな。ちなみに時計を見るよ。てか外見てみるよ。夜だぞ、八時過ぎてるからな。それに苺の件はいいのかよ」最近うちは思っんですよ。青春したいって。「十分すぎるくらい堪能してるだろ」甘酸っぱい果汁たっぷりの恋もしてみたいです。「まあ、うん。頑張れ」そんなうちをこの非情な日常はまるで嘲笑うかのように見下すんですよ、ε - (、ω、\* ) フツ、おめーじゃむりやって言うんです。おめーさんは可愛すぎて恐れ多いからな、誰もよってこれんのやって笑っんです。

「自意識過剰なだけじゃん」笑う門には福来るとは言うものの、笑っても笑っても惨めになるんです。どうすればいいんですかあ。「押すな押すな」こうなったら八つ当たりです。先輩なんて年が一つ上なだけなんです。基本的にバカでドジでアホの子なんです。「ここぞとばかりに俺を侮辱するよな。俺の寛大な良心があと僅かで底を尽きそうになってんだけど」この童顔野郎、リア充は爆発しろ。海のもズクとなれ「モズク! ? Σ (、 ; ) 」そんな顔で驚愕されても何も出ないですよ。はい、パツシャ (ノ、\* ) 「撮りやがった……」良い顔してますよ。「消せッ。今すぐに」そろそろメイイベントに突入してもいい頃かと思うんですよ。というわけで先輩、ちよつと来てください「その前に俺を縛ってる縄を解けよ。オヤっさんも笑ってないで助けるッ。おい、由佳里まで」

由佳里が提供した一室へと美鶴は頭に疑問符を浮かべたまま連行された。瑠璃と一緒に運んできた紙袋の中身に不穏な気配を感じ取り、身を振って逃れようとしたものの、無意味であった。

何故、美鶴が縄で捕らえられているかと言えば、皆で始めたババ抜きのパナルティーらしい。美鶴自身、何故これをする意味があるのか判別しなかった。しかし、ついさきほどの全員の顔を見て確信した。全員グルだ。

「あの……瑠璃さん? 何するつもりですか。その右手に持ってる

ウィッグはなんですか？ いやいやいや、そんな笑みを浮かべられたまま近づかれても恐いだけだから。ストップ、ストップ。早まるなッー！！」

「自白しなかった先輩が悪いんですよ？ これは言わば、罰ゲームって奴ですよ」

「盗撮してた方が十分ワルだろ。それに由佳里は無罪なのか？！てか、何でお前はあんな写真を撮れたんだよ」

「由佳里先輩は特別待遇ですよ。撮れたのは、追跡したからに決まってるじゃないですか」

「うわー、ストーカーだったのか」

そんな会話をしてる最中でも瑠璃の作業の手は休まるところを知らないらしい。次々と美鶴の形質が消えていく。

「待った、待て待て待て。さすがにそれはやらなくてもいいんじゃないね」

「妥協は許すなといわれてるんです」

「誰にだよッ」

この瞬間、美鶴の黒歴史に新たなページが追加されることとなった。美鶴はこれは悪い夢なのだと、心頭滅却によって現実逃避した。これは悪夢なのだ。そのうちに目が覚めるはずだと。

「じゃじゃーん。それでは入場お願いします」

瑠璃が心底嬉しそうな嬌声を上げる。美鶴は深く深く溜息をつくと、リビングへと足を踏み入れた。

「じゃーん……………」  
「……………」

美鶴？ の登場に啞然とした顔で硬直する由佳里と文蔵と小埜崎。瑠璃はそんな彼らの様子に満足げに頷いた。

「誰でもいいから、何か言ってくれ」  
「どちらさまですか？」

由佳里が恐る恐るといった口調で訊ねてきた。その反応は無理もないだろう。

文蔵にいたっては「まさか、いや。しかし、まさかな」と呟くだけだ。

小埜崎はしたたかに、懷からデジカメを取り出してシャッターを切った。あとであのフィルムは回収せねばなるまい。

「いやあのさ。美鶴ですが何か？」  
「……………」

またも訪れる沈黙に居たたまれなさを覚える。美鶴は自分自身の服装を見下ろして泣きそうになった。

エレガントな黒のワンピースを着込んだ自分はさぞ滑稽に見える筈だ、というのが最初的美鶴の見解だった。が、瑠璃によって用意された手鏡の向こうに映るのがまさか――

「すごく、可愛いんだけど。ほんとに美鶴なの？」

由佳里が近づいて美鶴を凝視した。すごく顔が近くなり、美鶴の心臓は激しく暴れた。

由佳里に続いて、小埜崎も傍に近寄ると、至近距離からフラッシ

コをたいた。

「すごくないですかあ？　うちの自信作ですよ」

瑠璃が残念すぎて目も当てられない胸を張って、ふふんと鼻を鳴らした。

「いやー眼福、眼福。瑠璃、でかしたよ」

小埜崎が満面の笑みを浮かべて瑠璃を賞賛する。

それほどまでに現在の美鶴は完璧な女の子へと変貌を遂げていた。元々、端正な顔立ちをしており童顔であったために、瑠璃にとっては造作もないことだったらしい。

美鶴は苦笑いを浮かべて、されるがままに観察された。

これはとある冬の無駄話。ノエコノミ

近い将来、こんなふうに皆で笑いあうことの出来ない日々が来る前の皆での最後の晚餐。なんてことにはならないはずだ。

クリスマスの夜。一人の少年は禁断の美女へと変貌を遂げた。それを知る者は極僅かの筈だった。

しかし、冬休みが明け、学校が始まった頃に、学校に美しい少女の写真が流通することとなる。この時の美鶴はそんなことを知る由もなかった。

## 瑠璃色の世界（後書き）

稔と美鶴のクッキングみたいなのも書きたいなと思ったんですけど、諦めました。たぶん。

というわけで、第三章の執筆も進めておきます。  
以上でextraパート1でした。はい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1713y/>

---

イロナキシ-Discolored death-

2012年1月13日20時45分発行